
魔王陛下の観光旅行

尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王陛下の観光旅行

【Nコード】

N4396L

【作者名】

尋

【あらすじ】

GWの最中、突如として目の前に現れた玲瓏たる美貌の魔王デユラン。

その魔王へオレは手を伸ばし、告げる　その目的の場所にオレも連れてけ、と。

こつちの世界に遊びに来た「存在が迷惑」な美貌の魔王デユランと、「美形の男は滅べばいいのに」な一般人ナカバ、その他新メンバーを加えての珍道中。

大幅改定して再開しました。

金色週間とオレ（前書き）

お騒がせしました。

戻ってまいりましたので、宜しければお付き合ってください。

金色週間とオレ

みんなー！ ゴールデンウィークは好きかー！
大好きだー、いえー！

ってことで本日ゴールデンウィーク二日目。

とっても自由です。無責任な自由……素敵だ。

未だに「らっらっらっ」「らしいウチの両親は昨日から二人きりでデートとやらで旅行に出かけ、愚弟は部活の強化合宿とやらで存在しない。狭い我が家はオレだけのもの。使い放題。

昨日の夜はとりあえず自由を満喫すべく、冷凍庫をあさってアイスをひっぱりだし（ダッツ抹茶味らぶ）、風呂に一番気に入ってる入浴剤を投入し（普段は風呂釜掃除が大変だからとやらせてもらえない）、ついでに一曲フルコーラスで歌い、うっかり調子にのって残り湯を手で洗濯機に移す作業に熱中したりしてみた。軽く湯冷めしたのはご愛嬌って奴。

似非一人暮らしばんざーい。

まあ、親に「あんたが料理をするとは思えないから」と大量の冷凍食品の買い置きを見せられた時は若干微妙な気分になったけどさ。うんまあ、ありがたく親の愛を受け取かねつとくよ。実際料理する気ないし。

って事でどうもどうも、ナカバです。

テレビのコメンテーターのおっさんが何か騒いでるのをぼーっと見るともなしに見ながら、窓辺で腹ばいになって日向ぼっこしてます。

さつきからニマニマが止まりません。

今オレを見た奴が居たら確実に不審者として通報するだろうな…

…うん、良い。どうせ今一人だし。

ま、何でこんな状態かと言うとですわー……実は！ 今日のリムりん達とのデートなのだ。

彼女達は明日の昼から南諸島群へ出発するらしいんで、休み明け前に彼女たちに出会えるのは今日がラストチャンスなのですよ。

ちなみにリムりんは「ナカちゃんも一緒に旅行おいでよ」とか誘ってくれたけど、オレはそれは丁重にお断りしておいた。

何でかって？

だって、パスポートが無いし。

世の中誰もがパスポートを持つてると思ったら大間違い。

ウチにパスポートなんていう高級なもんはありません。

ってことで、リムりん達との旅行とかかなり魅力満載な提案だったけど、無理だったので断つといた。

……うん、別に良いんだ。

リムりんとかヴィーたんがお土産買ってきてくれるらしいし。良い子たちだ。

オレなんかこの前出かけた時に何も持って帰れなかったのになあ……。

うん、まああれは不可抗力だし、さすがにヴィーたんが刃物好きでも万能包丁プレゼントする訳にはいかないし、服は全部オレサイズであの二人には似合わないし着れないし……。

うーん、今度何か埋め合わせせんとなー。

貰いっぱなしってのは気分良くないし。

何か上げると三倍返しになって戻ってくるのが難点だけども。そんなことしなくて良いのに……ホワイトデーですかっての。

と、主な用途が目覚し機能的なオレの携帯（現在八歳）が床の上で
ヴヴヴヴと震えだした。

あつ、そろそろ着替えんと。

時間的には余裕ありまくりなんだけど、デートの前に借りてたメ
ディアを返してついでに新曲物色してこようと思ってるし。偶には
ちょこつとぶらぶらしてみるのも悪くない。

オレは布団の上から立ち上がって、自分の部屋に戻る。

……あ、ちなみにさっきまで居た場所はウチのちっさなりビング
です。だって日当たり良いんだもん。

あー、部屋戻るのやだな。寒いんだもんよ。北側だから。

着替えだけ持って引き返そうかなー、とか考えながらドアを開け
る。

「うあつ！ やっぱ寒っ！」

「軟弱だな」

「うっさい」

そんな事より服、服……うん、ジーンズにフリースパーカーで良
いよな。

またリムりんが何か言いそうだけど。

動きやすいのに……。

後財布でしょ？ 家の鍵でしょ？ あと返却期限が来たメディア

……何か他に要るもんあったかな。

「てか財布何処にやったっけ……さすがにないと拙いよな」

一昨日学校から戻って、どっかにほっぴり出したような気がする
んだけどなあ……。

どこやったっけ？ ベッドの下とかに落ち込んでないよな？

「ちょっと邪魔」

「ああ、すまん」

「んー？ 無いな……どこだっけ？」

「財布か？」

「うん。あれないとどうしようもないし……」

リムりん達なら奢ってくれそうだけど、ちょっとそれは嫌だし。考えてると、オレの目の前にニユツと財布が突き出された。

「これか？」

「おお！ これだよこれ！ この味だよー！」

「齧かじったのか？」

「いや、気分。さんくーデュラン」

「どういたしまして」

よし、後はさくつと着替えて……。

「……ん？」

何か今変じゃなかったか？

オレは首を捻る。そんなオレを見てデュランも真似して首を捻る。

「何か、大事なこと忘れてる気が？」

「さあ……携帯ではないか？」

「あ、そっか……また忘れる所だった」

後で拾っとかないとなー。床の上に放置プレイしちゃったし。

……。

うん？ デュラン？

「……デュラン、質問があるんだけどさ」

「何だ」

「殴っていい？」

「何故？」

「何故？ じゃねえっ！ 何勝手にオレの部屋に出現してるんだ、この阿呆がつ！！ あんまりナチュラルに溶け込んでるからうっかり見逃しただろうが！」

不法侵入をやらかした魔王デュランの頭をどついて、オレは叫んだ。

あと、オレのベッドに勝手に座るんじゃねえよ。変態。

金色週間とオレ（後書き）

【作者後記】

前回の不祥事より大体一週間ほどでしょうか。

ご無沙汰しております尋です。

停止中も訪れて下さっていた方がいらっしやるようで、ただ頭が下がる思いでいっぱいです。ありがとうございます。

どうか、またナカバ達が動きまわる様子が皆様の気持ちに何らかの楽しみをもたらしますように。

とりあえず彼らは今日も無駄に元気に始まります。

作者拝

不法侵入とオレ

えーと、まあ事情知らん人が大半だと思っので先に言っとく。

オレは実はついこの間まで異世界トリップと言っヤツをやった。

そこのお前、失笑するな。

オレだって、自分で言っててすっごい恥ずかしいんだからな。

分かつてる分かつてる。その気持ちはよおおく分かりますとも。

オレだっつて「自分、この前まで異世界行っつてさー」とか言っ奴が居たら、お前の頭が異世界だろ、とか思っ。

思っけど、この頭が可哀そうな感じのイタイ発言、さらに痛々しい事に事実だったりする。

んで、そんな痛々しい話をオレにさせる原因になったのがさっきからそこでオレのノートパソコンをせつせと解体しやがっつる駄々っ子魔王様ことデュランだ。

正式名称、ディアヴォロス・デュラン。

見た目はさらつやストリートな黒髪に紫の目、女顔で吐き気がするほどの美形なにーちゃんだが、中身は好き嫌い言いたい放題の五歳児。

あっちにいた苦労性のワンコ執事セシエン君の証言によれば実は何気に凄い奴らしいのだが、コーヒー中毒だわマゾだわ年齢詐欺するわ、拳句の果てに暇つぶしの為だけにオレの事を魔界に呼び出すわ……ぶっちゃけ何が凄いのかさっぱり分からん。

感動とか尊敬、畏敬よりもむしろ重い殺意を覚えました。軽くないよ？ 重い殺意です。

まーっただけ認めるっつてなら、ある意味凄い根性してるとは思っけどね？

てかさあ、暇つぶしだけで異世界に呼び込むとかするなよな。オレはピザ屋の出前か。

オレは元々険しい目つきをさらに悪くして、パソを黙々と分解してるデュランを睨ん

「つて何やってんだ貴様あつ！」

「ん？ ああ……静かにしろ。今良いところだ」

「何が今良いところ、だ。ドラマ見てるみたいに言うな！」

何か物体の最小単位みたいな勢いでバラバラ死体にされてるオレのパソコンを見下ろし、オレは目頭を押さえる。

「ああ、可哀そうなオレのパソコン。こんな姿になってしまつて……」

「一体誰がこんな酷い事を……」

「犯人はお前だ！」

一瞬で終わる謎解きだった。

てか、高かつたんだぞ！

「まあ、落ちつけ」

「上から視線で喋るな」

取り合えず蹴飛ばしておいた。

相変わらず涼しい顔で笑われた……ちくしょう。

「で、コレ本気でどうする気さ？ 賠償してくれるんだろうなあ当然」

「元通りに組み立てるくらいは造作も無いがな、賠償か」

思案するように唇に手を添えるデュラン。

例によって無駄に色気満載だな……いいよ、もうだいたい慣れたから我慢する。

「使いやすいように調整しておこうか？」

「いや、良い。あんまりハイテクにされても機械オレ苦手だし、使い難くなるし」

「ふむ？」

首を捻るデュラン。

「使い難くなるようでは、それはハイテクとは呼べないのではないか？」

「ごもつとも。」

だが現実はその上手くは行かない。世界は優しくない。故に美しいとまでは言わないけど。

「まあ、では適当に作っておこう」

「どうあっても改造する気なんだな、お前は」

「あまりに無駄が多い」

「気に入らん、と眉を顰める我がままつこ。」

「強度も足りないな……物質構成に問題がある」

「いや、ちょ……ちょっと待って。普通のパソコンで良いからね？ふつーのだよ？ふつー」

「そうだな。最低水準すら達していないこの状態は問題がある。」

普通を強調してみたが、意味が無かったようだ。

てか、あんたの最低基準ってどこよ？

オレは溜息を吐きつつ諦めて自分の椅子に座ろうとし……何か勝手に置いてある(多分)デュランの私物を発見する。

あの一……ここ、オレの部屋なんですけど。

相変わらず白が好きなのか、今勝手にオレのベッドに座ってるデュランの姿も上から下まで白づくめ。

さらにアレの上にこの白いトレンチコートを羽織って来たらしい。嫌みなぐらいに似合いそうだ。

どうせならポケットの中に小銭とか入ってないかなー。がさがさ。

「何だ、これだけか……」

胸ポケットに白いライターとグラスが一個ずつ入ってるだけだった。

てか、お前は一万マイナスーな名前のあの人ですか。グラスンかけてないと美しさのあまりに他の人が失神する、こうですね。分かりません。

あ、しかもさりげなくこれブランド物だ……ちくしょう、相変わらず金持ちだな。魔王の癖に。

「ナカバ」

「はいはい何でございませよーか」

「お手」

差し出された手をぴしゃりと叩き落としてやった。

「良し」

「今の何処が良しなんだ」

「今のでお前の力は大体把握した」

「スカウター?!」

「戦闘能力四〇〇〇と言ったところだな」
「オレ一人で軍隊せん滅可能っ?!」

何処の菜っ葉ですか、オレは。

人を勝手にそんなバケモノにしないで欲しい。農耕民族ですから。

「まあ、要は手の力を測ってみただけだ。軽過ぎても重過ぎても使い難いからな」

本来は全てこうして個人の規格に合わせて作るべきだ、とのたまうデュラン。

指先はさつきから忙しく動いて、どうやらうちのパソ子を蘇生させている最中のようなだった。

ああ、そう言えばこの人日曜大工、もとい自分でも何でも作っちゃう人だっけか。魔王よりも技術やで研究者なのが本分だとか何か……。

オレはグラサンを置いて、デュランの作業を見に近くに寄ってみる。

「って、妙に薄くなって無い?」

「スペースの無駄を省いただけだ……まったく、何を考えての設計だったのやら、理解し難いな」

「オレにはアンタが理解し難いよ」

「試しに少し動かしてみてくれ」

「えー……今から? てかさ、オレそもそも着替えに来ただけど」

「そうなのか?」

「そーです。なんでさっさと出てって下さい」

さすがにオレも男の前ちゆうで着替える勇氣は無いぞ。

一応これでも女だし。花は恥じらわないけど十四歳ですし。

「てかさー、本当に前どっから入ったんだか……何か馴染んでるけど犯罪だかね？」

ぶちぶち言いつつオレは椅子を引っ張り寄せて、腰を下ろして、

バリン。

……あり？

今何かいやーな音がケツの下でしたような。

そーっと立ち上がってみると、オレが座った座席の上で何か黒っぽい物が砕けてひしゃげて歪んでねじれてた。

……そう言えば、オレあの時デュランのグラスン何処においたっけ。あれー？

「……」

「……えーっと。ぐしゃーってか、クラッシャーな感じかも？」

これも蘇生……出来ないよね。うん、ゴメン。

不法侵入とオレ（後書き）

【作者後記】

暫く説明調になりますがお承りください、こんばんは尋です。
ご来訪ありがとうございます。

留守の間にもお気に入りに入れて下さった方々がいらっしやるよう
で……すみません、こんな形になってしまっていて。
そしてありがとうございます、此方にいらして気に入っていただけ
て。

前作ヒマ潰しを読んでなくてもキャラクターが見えるようにしてみ
てますけれど、大丈夫でしょうか？

分かり難いところら、とかあればなるべくフォローしますので遠慮な
く拍手で呟いてみて下さい。

匿名でも結構ですので感想ご指摘等お待ちしております。

作者拝

目的意識とオレ

ま、でもこれはこれ、それはそれなのでデュランを廊下に追い出して（帰れつつたけど、素直に帰りそうにないのでそこは諦めた）オレは急いで着替えを終わらせた。

てか邪魔が入ったせいでデートの前に色々ぶらぶらする予定が無理になった。

おのれ魔王デュランめ、どこまで私の邪魔をしたら気が済むと言うのだ！ とか、白ひげにローブの謎の爺さんっぽい感じで叫びたくなるぐらい、思い切り邪魔な魔王だった。

オレの時間を返せ。

その魔王は、^{デュラン}ドアを開けて部屋を出たところで、何故かオレを出待ちしてた。

お前まだ居たのかよ。

しかも何かこっちジーツと何か期待してるっぽい目で見てるし。

……えーつと。

「ごめーん、ハニー待ったあ？」

顎の下に手をやって、オクターブ高い声で言ってみた。

それにデュランは思わず殴りたくなるほど整ってる顔でにっこり笑って、

「いや、今来たところだよダーリン」

「嘘吐けえっ！」

腹に蹴り入れといた。

ついでにその勢いで後ろにこけそうになった。

デュランが引き戻してくれた。
屈辱だった。

しかも自分でやって物凄く後悔した……二度とやるもんか。

てな感じで、

「何か出かける前なのに無駄に疲れた……」

「体力が無いな」

「うっさい」

取り合えず時間が惜しいのでちやきちやき出発です。

エレベーターに掛け込んで、二階のボタンを押す。ついでのっかかけ履きしてたランニングシューズを履きなおす。一応紐もしっかりと結んどかないとなあ……。

あ、デュランは当然連れてきてます。こいつに留守番何かさせられねえし。

てことで、オレの後ろには白い壁ことデュランが何やらぼけーっと突っ立ってさっきから「コーヒー」とか呟いてやがります。

ちなみに例の白いトレンチコート装備済み。お前喧嘩売ってるだろってなぐらいにピタッと似合ってる。

ついでに胸元には真っ赤なバラではなく黒い元サンガラスだった物体が下がってる。

さっきオレがケツの下に敷いて圧縮プレスで割った奴だ。

「あ、えーと……そうだ、そのグラスンごめん」

レンズは完璧に割れてしまっただけで修復不能。フレームも歪んでしまっただけで使えない感じになってた。

「で、何でそのままの状態？ この前の時みたいに魔法でちゃちゃっと直せば良いじゃん」

デュランはこれでも一応魔王なので、チート能力満載なのだ。

指パッチンで森が復活したり、コーヒーマルが出現したり、人の手を勝手に下ろさせちゃったりできるのだ。

……あれ？ 何かこうやって並べてみるとどれも微妙だな。

うん、でもまあこいつならドラえもんなんてメじゃない。このグーラサンだってパシッと直せるはず！

「無理だ」

「だよな……ってオイ、何でだ。気分が乗らないとか、雰囲気足りないとかまた抜かしたらクロスからな」

「今の俺の魔力はお前と大して変わらん。大半の魔法が使用不可能と言っ事だ」

……ナンデスト？

って、今更だけどそう言えばデュランの姿形も前に魔界に呼ばれた時に見た状態と違う。

殺意を抱きそうなくらい端正な顔とか、劣等感バリバリ刺激されそうな長い足とか、お前縮めよ邪魔だよってな具合に高い背とか、黒髪に紫の目は変わってない。

でも耳がエルフ耳じゃなくて普通に人間っぽい。お前何時かそれ踏むぞ、な長さだった髪も今はうなじまでの長さのショートになっている。爪だって黒くないし長くも無い。きちんと切りそろえてある桜色。

何ていうか……。

「全体的に人間っぽいね」

「そのように作ってあるからな」

「作って……ってことは、その体また人形？」
オートマタ

「そう言う事だ」

微笑むデュラン。

技術屋なこの魔王様は自分で人形オートマタも作ってる人で、これがまた市販の作業用とか介護用のあんな奴とは月とスッポン、弘法と筆な感じでグレードが違うのだ。

まあ、ぶっちゃけマジな人間との見分けが付きません。

ちなみにそう言うリアルオートマタすぎ人形の作成は法律で禁止されてるので、良い子の皆は真似しちゃダメだぞっ！ これ、オレとの約束。

うん、でもまあ取り合えずデュランは何でだか知らんけど形の体に乗る……要は呪われた市松人形、動く人体模型な感じでこっちの世界に割り込んできてて、その副作用かなんかで魔法が全く使えない弱っちい奴になってるってことが。

うわー、魔王の癖に役たたねー！

「まあ、よってこれは後で修理に出すしかないな……」

「相当高いよね、多分……」

「ああ、別にお前に請求はしないから安心しろ」

良かった。破産する所だった。

じゃあ、いい加減確認したくないけど確認しないとなあ。

「で？」

「で、とは？」

「何でオレの部屋に不法侵入してたわけさ？ 警察呼ぶよ？」

いや、魔王に警察がどれだけ太刀打ちできるか分かりませんが。

「ああ、それはだな……約束の物を受け取りに来た」
「約束？」

『一階です』と電子音声が喋ってエレベーターのドアが開く。
外に出る。うーん、良い天気だ。

本当なら色々ぐるぐるする予定だったけど、こいつのせいであいぶ時間潰れたしなあ……バス使うか。

バス代払わせよう。

「インスタントコーヒーはどこだ？」

「は？」

ごめん、考え事してて聞いてなかった。

「インスタントコーヒーだ。くれるのだろう？」

「魔界へお帰り。この先はお前の世界では無いのよ」

コーヒーに我を忘れてる。鎮めないと。

「ライ麦畑で捕まえればいいのか？」

「いや、確かに金色だけどそれやったらお百姓さんに絞め殺されま
すから」

「で、コーヒーの件だが」

「スーパー、コンビニ、薬局でご購入ください」

「くれないのか？ 約束しただろう」

はい、しましたね。覚えてますとも。

この重度のコーヒー中毒者の魔王様にすっかりインスタントコーヒーの話を使ったオレが悪いんだけどさ。

この前別れ際にそんな約束をさせられたような、そうでもないよ
うな。

「約束しただろう」

誤魔化し切れなかった。

「でもさあ、考えてみたらアンタの方がオレの何十倍、何百倍も金持ちじゃん。しかもこの前はホイホイ世界観移動したらやばい見たいな事言っただけじゃなかったっけか？ コーヒーの為に来ちゃまずくね？ さっさと帰った方がよくね？」

「だから負担を減らす為にこの体を使っている……それで、コーヒーの件だが」

「しつこい。帰れ」

「……」

何だよ。何でそんなすごいがつかりプラスすごい悲しいみたいな、捨てられた子犬っぽい目をするんだよ。

「だって、金余ってるじゃねえの？ 苦学生にたからなくて自分で買えよ」

「……ナカバは買ってくれないのか？」

「だから、オレが買う意味ないし。その辺のコンビニでも普通に売ってるから買ってくれば？ そして帰れ」

「……」

「……」

「……」

……はあ。

まったく、しょうがねえなこの野郎。

「分かった。買う」

渋々頷くと、途端に顔をほころばせるデュラン。

お前、そんなにオレの財布にダメージ与えたのが嬉しいか。そーかそーか、このまま無事で済むと思うなよ。

「ただし、条件」

「条件？」

「一つ目、今は無理。この後デートだし……だから文句を言わずに待て」

「ふむ」

「二つ目、受け取ったら即行帰れ」

「……」

「か、え、れ。迷惑です」

につこりするオレ。

えー、見たいな顔で沈黙するデュラン。

「俺とて、一応やるべき用事があって来ているのだが……」

「新しい豆の購入とか？」

「無論それもある」

堂々と頷いてんじゃねえ。

バス停まで歩きつつ、オレは無言でデュランの胸に突っ込みを入れる。拳を入れる、とも言っつ。

押されたデュランが数歩つんのめったのを見てちょっとだけすつとした。

「いきなり何をする」

「いや、むかついたから……」

「……。まあ、用が済めば直ぐにこちらからは消えるぞ」

「そうして下さい」

「その前に「コーヒー」を……」

「あーもー！ うっさい！ 分かってるから！！」

ぎゃーぎゃー騒ぎながら、オレと魔王は馬鹿みたいに晴れた空の下で並んでバス停までてくてく歩いて行ったのだった。

はー……こいつの相手って疲れる。

目的意識とオレ（後書き）

【作者後記】

書きためつつ、投入しつつ、書きためつつしていると何処まで書いたか分からなくなるダメな作者ですこんばんは。

自分で読み返しつつ、書きつつ、話を書いていたらすっかり入れざるの要素をすっ飛ばしてたりします。

それもこれもナカバとデュランが元気良すぎるから……（と責任転嫁してみる）

前置きが長くなりましたが、ご来訪の皆様ありがとうございます。

お気に入り新規登録して下さった方ありがとうございます。

評価して下さい、励みになります。

すっかり来ちゃった方、……何かの縁と思って諦めて下さい。

大丈夫です、幸福はプラスマイナス1で釣り合い取ってるどんぶり勘定なので次は良い事があります、きつと。

幸運の女神はどんぶり勘定ってこの考え、気に入るんですけどいかがでしょうか？

作者拝

変装道具とオレ

「ナカバ」

「何さ」

「視界があまり良くないのだが」

「我慢しろ」

魔王だろうが。

そう思いつつオレは後ろにいるデュランの方へ振り返り、

「ぶはっ！ あっはははははー！」

「楽しそうだな」

楽しいと言うより無茶苦茶面白い。ダメだ、涙滲みそう。

やばい、似合いすぎだよデュラン。

その 鼻眼鏡。

まあ、何でこんなことになったかと言うと戦略兵器級の被害をもたらすデュランの顔を隠ぺいする為に、さっき f t のパーティグッズコーナーで購入したからだ。

や、だって本当にコイツ迷惑なんだもん。

だってさー、まずバス停に立ってたらこいつの顔に見とれたらしき車が目の前でガードレールにそのまま突っ込んで事故った。

ついでにバスのアンちゃんもブレーキ踏むのを忘れてバス停に突っ込んできやがった。危なくシリーズ終了になるところでしたよ。

ついでに座ったら何故か大して多くも無い乗客全員が同じ側に座り替えて寄ってきて、バスが傾き走行になった。

ついでにデュランが「外が見たい」とか言うので窓際に座らせて

おいたら、バイク便のおっさんが並走を始め、拳句の果てにバスの中に向かって「好きです、愛してます、結婚して下さい」と叫び始めた。そして最終的に「僕はしにましええん！」とか叫んで踏切の方へバイクごと走って行った。

あのままバスはルート通りに曲がってしまったのでどうなったか結末は知らないけど……大丈夫かよ？

まあそんな調子だったんで本当は駅前まで乗って行く予定だったんだけど、諦めて二つ手前のバス停で降りて駅前まで歩く事にした。心臓に悪すぎる。

ちなみに「何故か」同じ場所でぞろぞろ他の人達も降りてきたけど……そこは撒きま^ました。

ふっ、オレの鍛えられた尾行回避の技術をなめんなよっ！

でもまあ、降りてからもデュランの被害はひどかった。ティッシュ配りが何故か段ボール一箱にみっちり詰まったティッシュを差し出して来る（いらねえよ）。

いちゃついていたカップルが突如としてデュランに告りだし、拳句の果てに左右でデュランを挟んで血みどろの喧嘩を始めそうになる（オレが何とか治めました……）。

まあ、他にもいわゆる見惚れてショーウィンドに激突する人（歩く時は前見て歩け）。

途中で台詞を忘れる選挙演説の人（落選決定だな）。

くらあつ、みたいなポーズで失神するうら若き女性の皆さま、あーんど白髪のおばあちゃま（何か汚染物質にでも当てられたのか？）。

唐突に告白してくる老若男女の皆さま（無差別にも程がある）。
ちなみに勝手にシャメってる奴らはさらに多い（肖像権ぐらい頭にいれとけ）。

後ろに出来る行列……オレ達は人気ラーメン店か、カルガモの親

ですかつての！

ま、そんなこんなで何か段々、普通に横に居ても何も感じない（いや、殺意は覚えるけどね？）オレの方がどっか変何じゃないかと悲しくなってきた訳ですよ。

そんなに良いかあ？ こいつが？ ただのアホ魔王だよ？

「どうにかなんないの？ これ。まともに歩けないんですけど」

幸い、隣にいるオレは皆さんの脳には認識されてないらしく、特に絡まれてはいないけど居心地悪いつたら。

「やっぱ世間の迷惑さておいて置き去りにするべきだったかなあ…」

「一応対策はして来ていたのだがな」

「全然効果が見えません」

「ああ、さっきお前が割ったからな」

ギクツ。

「……えーっと、やっぱあのサングラス特注の何か変な効果がついてたってこと？ 掛けるとアンタが鹿の角生やした謎の坊さんに見えるみたいな」

「いや、こちらで市販しているものだ。別に兜をかぶったネコに見える事も無い」

なーんだ、つまらん。

「じゃあ、何でグラスサンが対策になるのさ」

「目を隠せるからな」

デュランはオレの方を紫色の目で見下ろす。

……いや、色はすごくきれいだし珍しいとは思っけど、その目が何？ 車輪眼とか白眼とかのほうがおレは良いなあ。次点で黒龍の魔眼。サンバルカン。

「取り合えず眼を見せなきゃ良いのか……分かった。しゃがめ。お座り。お手。お周り」

「俺はセシエンか？」

言いつつ、道の端によって屈むデュラン。相変わらず変なところで素直な奴である。

オレはそのデュランの頭に、脱いだジージャンを被せて、頭を隠す。

よし、デュラン被告逮捕の瞬間、みたいな感じになったぞ。ものすごい怪しいが、さっきまでのアレに比べたらマシだろう。

「これでオツケー」

「いや、前が殆ど見えないのだが」

「別に見えなくても良いじゃん。むしろ転べば良いのに……そして縮めば良いのに……」

「縮まないぞ、そんな事では」

分かってらい。

「とにかく、サングラスっぽい物で眼が隠せればこの状態はどうにかなるんだな？」

「多分な。今のところ効果が確認されている」

「じゃあ買うから来い」

ってことでデュランを店へ連行してコイツを購入し、話は冒頭に

戻る。

でもさあ、この鼻眼鏡を思いつくなんてオレってばなかなか冴えてねえ？

これなら奴の目が隠れる上に、注目が鼻に集まる。これぞ一石二刀ってやつだね。何で石が刀になるのかはよく知らんけど。

にしてもここまで鼻眼鏡が似合う奴が今までに存在しただろうか？ いや無い、何て反語使っちゃうぐらいの面白びったりつぶりだった。

「はー、笑いすぎた」

「お前が時折言っている『絞めて良い？』の意味が分かったような気がするな」

「絞めたら犯罪だかな？」

「絞めないさ」

微笑してこっちを見下ろすデュラン。鼻眼鏡状態で。

「……ぶはっ」

「まあ、吊り下げるがな」

「にぎやー！ー！」

笑わせて油断した所を襲うとは卑怯なり！ ブシの風上にも置けない奴めー！

「何しやがる、このヒゲっ！」

「髭は違っ」

「ぎやーすぎやーすぎやあーすっ！」

「ふむ、珍妙な鳴き声だな」

「鳴き声言っな！」

オレを珍獣扱いしおつてからにー！！

しおつてからにー、つてのはじいちゃんが偶に言つてた言い回しだ。意味はよく分からんけど響きが良い。しおつてからにー。

つて思いだして和んでる場合じゃなくつて。

「離せー、離さんかー、あ、でも投げ落とすの禁止……で、離さんかー！！」

「強気なのか、弱気なのか分からんな、お前は……」

笑つてないで良いから下ろせつてば！

ちなみにこの騒動のせいでオレは結局レンタルショップに寄る時間が無くなり、駅前の待ち合わせ場所まで直行する羽目になったのだった。

注目されるわ、出費はあるは、予定は潰れるわ……本当に碌な事が無いよ。

オレはもう疲れたよ、とっても帰りたんだ……パトラッシュ。

変装道具とオレ（後書き）

【作者後記】

メモに下書きしているとうっかり分量が多くなります。
読み難くて食傷起こしている方がいらっしやる気がしてます……す
みません。

それはさておきご来訪ありがとうございます。

お気に入り登録62人の方に頂きました。ありがとうございます。

お陰様であと少しで総合pt200です。

何だか現実味がないのですけど……。

宜しければ今後とも応援、ご指導のほど頂ければ幸いです。

作者拝

全面禁煙とオレ

「リムリーん、ヴィーたん」

駅前。東口を出て階段降りたところを右に曲がって二軒先。

ここがオレのお気に入りに終日禁煙、全席禁煙のドーナツ販売の某チェーン店さんです。

全面禁煙。

これ大事なポイント、テストに出る。オレの一番好きな四文字熟語は全面禁煙ですから。

偶に分煙とか言つて一階が喫煙、二階が禁煙とかになつてる店あるけど、あれつて意味なくねえ？ つまり煙ん中通つて行けつてことでしょ？ しかも煙つて上に上がるもんだよね？

ここはそんな事は無いので、安心してポンデをゆっくり食べられるのだ。

つて事で、やってきましたよー。

店の入り口くぐつてみると、いつものテーブルに愛しのリムリーんとヴィーたんが座つて待つてくれてた。

「あ。ナカちゃん、こっちこっちー」

「ゴメン、待つた？」

「ううん、そんなに待つてないから大丈夫」

につこり笑つて答えた蜂蜜色の髪のこちらの可愛いお嬢さんがリムりん。

「ナカ吉……後ろのその人はどなたですか？」

丁寧な口調にびしつと背を伸ばした姿勢が凛々しいこちらの綺麗なお姉さんがヴィーたん。
どうだ、凄いだろ。

「初めまして」

そんな二人に笑顔（ただし鼻眼鏡）で挨拶するデュラン。
怪しさ爆発である。また店中の注目集めちゃってるし……。
ま、オーバーーハの白ずくめだからほつといっても目立つしね。
リアル白い巨。中身は黒いけど。

「えーっと、デュランもうそれ外して良いよ。てかオレが恥はずいから止める」

「もう良いのか？」

「良いんじゃない？　ここなら変な事起こらんだろうし」
「ふむ」

言つて鼻眼鏡を外すデュラン。

何か店中に今度は別な感じの沈黙が下りた。

視線が矢印マークになってグサグサアツと刺さってくる感じ。実物なら流血の事態だな。

こそつとデュランの陰に隠れてみたり。

こう言う時オレみたいなコンパクトサイズは便利なのさつ……自分
分で考えてみて凹んだ。

なので奴の背中にこそつと八つ当たりしてみたが、例によってデュランはスルーしつつ、暢気に「やっと見やすくなった、目が少々
疲れたな」とか呟いて瞬きを繰り返している。

マイペースな奴である。

「……あの、ナカちゃんのお知り合いですか？」

「ああ……失礼」

リムリんの控え目な問い掛けに目頭を押さえていた指を外し、微笑みを浮かべるデュラン。

キラキラツと背景に薔薇が飛んだ気がした。

「私はデュラン・ケヒト。ナカバに先日私の友人の件でナカバに世話になってな。その縁で今日こちらに伺って……先約があるとの事だったので無理を言って同伴した次第だ」

誰オマエ？

「ナカちゃん……」

本当かよ、みたいな疑いの視線でリムリンがこつち見てる。

「うん、名前以外嘘は言っていないんだけどね。さすがにここで魔王です、エヘ」とか言うのが拙いのは分かるし。

「まあ、うん。そんな感じ？」

「あなた貴女達がリムリンさんと、ヴィーたんさん？ ナカバから何度か話は聞いているが」

曖昧に答えたオレの隣で、胡散臭さ百パーセントな煌びやかな笑顔でデュランが似非じえんとるめんつぱく尋ねる。

それにリムリンとヴィーたんは顔を見合わせ、

「ええ……リミュリシエル・ミルフィリア魔法技官候補生です」

「ヴィクトリア・ミシディア刀指揮官候補生です」

「ああ、マスター候補生か」

納得したと言うように頷くデュラン。

そのあっさりした反応にリムりん達が意外そうな顔をする。

ま、普通驚くもんね、こんな美少女達がマスター候補生だもん。でも昔の百科事典並みに分厚い面の皮と、ダイヤモンドカッターでも切れない程頑丈で太い神経をしたデュランはにこやかな表情を保ったままだ。

「差し支えなければご一緒しても？」

「……………どうしますか？」

「構わないんじゃない？　こんな綺麗な方とご一緒できる機会とか貴重だと思うし」

にっこり笑うリムりん。

この愛想の良さとかちょっと見習いたいと思う。ま、オレがにっこりしてもキモイだけですけど。

「あそうだ。食べる奴もう決めた？　リムりん達まだ食べてないよね？」

「先に席を確保してました……………あなたの気に入りはここ、ですから」「ヴィーたん気が利く！　嫁に来てくれっ！」

感激してぎゅっと抱きついてみたが、ヴィーたんは「いえ、それは法律上無理ですから」とか冷静に突っ込みを入れてくれた。うん、そういうクールなところも大好きだ。

「あたしも確保してたんだけどなあ？」

「あ、ごめん。リムりんもモチロン愛してます」

ぎゅっとハグして、その格好のままオレは「あ、そうそう」とデュランを振り返る。

「デュラン、おじつて」

「何？」

「同席代」

「有料なのか」

「だって美少女二人侍らすんだぜ？ 安いもんじゃん。あんた金持ちだし」

「……」

「コーヒーだけオレがおこつたげる」

「分かった」

よし、釣れた。

ちなみに此処のコーヒーは一杯二六二、ついでにお代わりし放題。それで釣れちゃう魔王……うむ、人類の未来は明るそうである。

料金は後でデュランに請求することにして、荷物の見張りと席の確保を奴に任せてオレ達三人で列に並ぶ。

「ポンデー、ポンデー、ポポポンデー」

「ナカちゃんポンデ好きだねえ」

「うん。リムりんはどれにする？」

「うーん……ひしお醤油のみたらしゴマ団子風味、あとマルゲリータ・ハンバーグ、それからラタトゥイユとクリームコロッケミックス、玄米たっぷりタコライスの四つにしようかなあ」

相変わらずディーブなチョイスで素敵だぞリムりん。

と言うか、制作側も何考えてこのドーナツ作ったんだろう。あくまでドーナツである辺りが結構シユールだ。

「グイーたんはいつものか」

「はい」

そう言うヴィーたんはエンジェルピンクとか、ピュアバナナとか、スイートスイートミルクとか可愛い感じの奴が好きなのだ。他の人の前だところ言うのが選べないらしくて、オレら三人の時にはこそとばかりに注文してる。何か決まりが悪そうな顔してるけど、別に気にしなくて良いのに。

可愛いぞ、ヴィーたん。このこのっ。

ちなみに、デュラン用にコーヒーパーンズって名前の奴と、オレのオススメな抹茶ポンデを選んでおいた。

ま、コーヒー与えておけば問題ないだろうって判断。

あ、そうだ……どうせだからこの機会に全種類ポンデ制覇でもしようかな。

考えながらトレイを持ってたらクイクイと袖を横から引っ張られた。

「ナカちゃん」

「ん？」

「あの人一体何者なの？」

リムりんが席の方をちらっと目で指して小声で聞いてくる。

あー、まあやっぱデュラン怪しいよなあ。

白づくめだし、顔はアレだし、鼻眼鏡だったし……最後のはオレのせいだけだ。

オレの美形アレルギーを知ってるリムりんやヴィーたんからしたら違和感ありまくりだろうな。

「知り合っただのはきっかけとか、何処で知り合っただとか」

「うーん……きっかけはまあ、偶々目を付けられたと言うか」

ポンデのクルミ味をトレイに追加しながらオレは曖昧に笑う。

さすがに「異世界の魔王城に召喚されました」とか言えない……
ああ、言えねえよなあ。

「えーっと、この前通りすがりに捕まってさ。『長期自宅療養にな
ってる友人と喧嘩っぽい雰囲気になって気まずいから付き合え』つ
て」

「随分勝手な言い草ね。それで、付き合っちゃったんだ」

「うん、まあ成り行きで」

「ナカ吉はお人好しですね」

「えー……それはどうだろう」

オレ基本的には冷たいと思うけど。偶に自分が嫌になるぐらいに。

「うん、まあ断つても人の話聞く奴じゃなかったし、暇だったから
取り合えず。あ、あと和食ごちそうしてもらった！」

「……餌付けされたのね」

「食べ物で釣られたんですね」

何だよ。

……まあ、ちよっぴり釣られなかったかと言えばアレだけど。で
も、二人して生温い視線向けなくなっただって良いじゃないか。拗ね
るぞ。

「和食、美味しかったですか？」

「うん、旨^{うま}しだった」

「よかったですね」

控え目に笑むヴィーたん。

こんなんだから彼女には「おねー様」と呼んで慕う後輩の女子皆

さんが絶えない。男のファンも多いけど。

「知り合った時の事情は大まかには分かったけど……それで、結局何者なの？」

「リムりん、何かものすごい警戒モードになってない？」

「ナカちゃんの人を見る目は信じてるけど……何だか、そうね、正直体が知れない人、って言うか」

「そうですね……」

……うーん、何か二人して心配してるようだ。まあ、見た目アレだしなあ。

しかしどう説明したもんだらう？

友達だから余計な嘘は吐きたくないし、かと言って正直に話せる内容には限度があるし。

オレはちよつと考えて口を開く。

「詳しい事はオレも聞いてないけど、自称魔王。仕事は一応あるけどさぼって遊びまわってるみたい。

性悪じゃないけど性格は悪いな。うん、悪意は無いけど悪気あり。その気は無くとも邪魔で、その気があっても邪魔。

後はうーん……ああ、意外と天然入ってるな、アレは。

特に顔関係。ほら、アイツ不気味なぐらい美形じゃん。顔とかマジ死ねよだよな？ なのに本人普通とか言い張るしさ。

結局見た目デカイけど、中身はガキなんだよね。五歳児五歳児」

「……」

「……」

あれ？ 沈黙？

何か気まずい空気が……えーっと、ここはフォロー入れるべきデスカ？

「でも、まあ……迷惑だけど害は無い、と、思う」

「えーっと……そう。とりあえず、変な事されたりとかは無いのね？」

「ああ……うん、別にアイツはストーカーとかじゃないから。オレ完璧珍獣扱いだし、コーヒーの方がむしろ価値的に上っつーか。顔に慣れれば割と面白い奴だよ」

だから心配ご無用、とレジにドーナツ山盛りになったトレイを置いて笑うとリムリンとヴィーたんは顔を見合わせて何故か一緒に肩を落とした。

「そっか……何か嫌な事されたら直ぐに言ってね。私達でやっつけちゃうから」

「うん、ありがと」

心配してくれる人が居るっていうのは良いもんだ。

全面禁煙とオレ（後書き）

【作者後記】

こんばんは、尋です。

ご来訪の皆様には深い感謝を。

新キャラやっとな追加できました。

女の子成分が欲しかったので。美少女リムリンと美女ヴィーたんです。

とは言え、もっとも小柄なのはナカバですけれど。

女子同士の会話はちょっと想像がつかないので妄想で補ってますが、ナカバのネーミングセンスの微妙さも一緒に感じ取って頂ければ幸いです。

作者拝

言葉遊びとオレ

飲み物も選んで（リムリンのホットメロンスープは止めさせました。あれヤバイ気がする）、トレイに山盛りのつけて席に戻るとデュランが暇そうにライターを弄ってた。

「禁煙だから」

「ん？ ああ、お帰り」

ライターを胸ポケットにしまうデュラン。よろしい。

ご褒美に目の前に真っ赤なマグカップを置いてやると、妙に嬉しそうに顔をした。安い男め。

オレ達もトレイを並べてご飯です。いただきまーす。

デュランは珍しそうにドーナツを眺めて、でもやっぱりコーヒーから先に口をつけていた。どうやら気に入ったみたいだった。てか、ポンデ食べないのかな……。

じーつと見てると目が合った。あ、気付かれた。

「……これが好きなのか？」

「うーん、けっこう。もっちりウマウマですよ」

「ふむ」

デュランはオレの返事に少し考え、それから何か納得したのか一つ頷いてから抹茶ポンデをちぎった。そして大きい方をオレに差し出す。

「ほら」

「良いの？」

やったー。貰ったこう。

デュランは残った欠片を口にして、「ふむ」とか何とか言ってる。

「うまい？」

「ああ、良いな。ありがとう、気に入りを勧めてくれたのだから？」

「まあ気に入らんの押し付ける事はしないしね」

「ふむ……」

オレの言葉にデュランは少し考え、

「コー「要りません」

あんな苦いもん飲むか。

デュランが「これは苦味が美味だというのに」とかブツブツ言ってるけど無視してオレンジジュースを飲む。

お子様味覚だろうがほっといてくれ。

「それにしても、デュランさんって美人ですよね」

リムりんがにっこりエンジェルスマイルを浮かべる。

その手に持っているのが赤と緑と茶色が入り混ざった玄米たっぷりタコライスドーナツでも絵になるのが美少女補正って奴だろう。

その言葉にデュランがこれまたキラキラ背景効果がつきそうないや、ついてないけど、上品な笑顔で「ありがとう」と卒のない言葉を返す。

ま、かるーく口の端がひきつってたのは見逃しませんでしたけど。アンタ、自分の顔とか見た目誉められるの大っきらいだもんね。ザマーミロ。良い気味だ。

「お仕事は何をされているんですか？」

「ん？ 私に興味でも？」

キラキラ成分さっきの二割増しで女神さまの微笑みを浮かべて首を傾げたデュランにリムりんが「うっ」と呻いて顔を赤くして目を逸らす。

ああ、分かるよ。殺意沸くもんね、あの美形っぷりは。

「手強い……っ」とか小声で呟いてるリムりんにおれは「がんばって」と視線のエールを送る。

バトンタッチ、代打ヴィーたん。

「その服、素敵ですね」

「ああ、ありがとう」

「『SENSES』ですか？」

「良くご存じで」

クス、と艶めかしく笑むデュラン。

手に持ったオレンジジュースをぶっかけるのを我慢したのは、お店の人に迷惑だからだ。

「お好き、ですか」

「ああ……実は友人がここのデザイナーでな。新しく作るたびにお前が着ると宣伝になるから着ろ、と送りつけて来るのでな。一種のモデルのバイトのようなものだよ」

「……筋は通りますね」

「筋を通すのが付き合い方の基本だろうからな」

「てか、デュランバイトなんてするんだ」

「するぞ」

おれを見て「何を言ってるのやらこのチビは」と言う感じで肩を竦めるデュラン。あ、殺意が……。

「今何か脳内補完しなかったか？」

「いーえ、別に。小さくて悪かったな……」

「ああ、背が高くて足が長くて悪かったな」

言っただけにサッとマグカップを後ろへ避難させるデュラン。空を切るオレの手。

チツと舌打ちするとデュランが勝ち誇ったような顔でニヤツとした。

ぎにゃー！ 腹立つーっ！！

「このやるー、お前なんてポンデだー！！」

「全く……ナカバは意味不明だな。理解不能だな。人事不省だな」

「勝手に人をこん睡状態にしないでもらおうか、この年齢不詳」

「だから二十四歳だと言っているだろう、永遠の」

「嫌い黙れこのアイドルシエイク」

「何味だそれは？」

フェイクの言い間違いだっけ分かってるくせに突っ込むか、この性悪め。

テーブルの下で足を伸ばし、けつとばしてやったら逆に何が受けたのか笑われた。こんちくしょー。身を乗り出してぐいぐいっつとデュランの耳を引っ張る。デュランは逆に大受けして笑っている。くそう……。

疲れたので椅子に座り直し、口直しにオレンジジュースを飲む。

と、オレ達のおバカなやりとりに呆れたのか、リムりんがふうと溜息を吐いた。

「仲が良いのね、ナカちゃんとデュランさん」

ぶぺつ。

「ナカバ、汚い」

「ナカちゃん……そんなに嘔き出すくらい慌てなくても」

「ナカ吉、お手拭き使いますか？」

マジごめん。拭きますよ自分で。

「で、え？ 何だつて？」

「うっん、仲良になつて思ったの。ナカがそれだけ人に打ち解けるところ見るの久しぶりだもん」

ちよつと妬いちゃうなあとか可愛い事をリムりんが言ってるけどちよつと待つて、打ち解けるつて何さ。

ああ、今の遠慮のない地金剥き出しサビでもカビでもどんと来い状態の事デスカ？

うーん、まあ確かにオレがこんな風に他人に接するのは珍しいかもしれない。かもしれないけど、これは不可抗力だ。

何せ魔界に行つてた時はオレの思考は基本デュランに駄々もれ、プライバシー保護ゼロ、ネコなんか被るだけムダな感じだったのだ。

まあ、それなので開き直つて口なり手なり足なり出してたノリがまだ残つてるだけであつて、けつしてこれを「打ち解けてる」とは呼ばないと思う。

「もしかしてデュランさんつてナカちゃんの彼氏？」

「げふっ……リムりんはオレをコロス気デスカ？」

「ごめんごめん」

「コレがそんなモンになつた日には人類滅ぶからね？ マジで、冗談抜きで！」

「分かつてるつて。ナカちゃん美形アレルギーだもんね」

「いや、確かにこの手の顔見ると寒気に鳥肌、頭痛、吐き気、動悸、息切れ」

「気づけに 心」

「お前はちよつと黙ってる」

立ち上がった襟首掴んだオレにデュランは愉快そうに笑うばかりでまるで取り合う気配が無い。

「ねえ、リムりん。仲良く見える？ これが見える？ ねえ？」

「うーん……お兄さんと妹みたいには見えるけど」

「兄弟げんかのようにですね」

実態は生ける古代のミイラと、生後数秒のヒヨコみたいな関係です。こいつ数千歳だし。

「仲良いとかがあり得ないから」

「あり得ないのですか？」

「らしいな」

「ライ当事者。何他人事っぽく言ってるんですくあ」

「私はナカバを気に入っているからな」

ぶ。べ。つ。

あ、これはオレじゃないです。周りの気毒なお客さん達、あと従業員さん達が噎せた音だ。

そんな爆弾発言を落としておいて、デュランは優雅に微笑んで足を組み替える。

「この珍妙な言動が見ていて見飽きないからな。とても面白い」

「やっぱりオシツオサレツ扱いか！」

「あ、ちよつと気持ち分かるかも……」

「ブルータスお前もか！」

「うわーん、ヴィーたんを取り合えずヴィーたんに抱きついておいた。」

「律儀なヴィーたんは困ってたみたいだけど、ぎこちなく「大丈夫です、ナカ吉は人間ですよ」とずれた慰めを言ってくれた。……微妙に喜んで良いのか微妙だな、コレ。」

「じゃあ、恋愛感情はお互い無いのね」

「……はい？」

「レンアイコンジョー……？」

「勘定奉行」

「……奉行所」

「所得格差」

「……格差社会？」

「社会貢献」

「えーっと、貢献……貢献……ってしりとり違っ」

「びしっとデュランの後頭部に一撃入れて置いて、オレは「うーん」と唸る。」

「や、ムリ」

「そうなの？」

「うん、ムリ。生理的に無理」

「てか、魔族ですから。見た目こんなんでも「真の姿」とやらは別ですから。」

「デュランさんも？」
「年下には興味が無いな」

アンタより年上って幾つだよ。一万と四十二歳の閣下ぐらいしか
思いつかないよ。

「ふうん……」

何を納得したの Римりん？ 聞くのがすっごい怖いんですけど。
そしてさりげなく完食してる ヴィーたん。

「他にご質問は？」

マグカップの中のコーヒーを飲み干し、デュランは振り返り硬直
してる店員さんに「お代わりをお願いできるか？」と笑みを向ける。
三人ぐらいすっ飛んできた。

しかも、先陣争いしたせいでマグカップが傾いて、うん、まああ
る意味お約束な感じに。

「あちっ！」

「ナカちゃん！」

「ナカ吉！」

「申し訳ございません！」

「あー、いや良いです……」

店員さんが真っ青になるけど、まあしょうがない。デュランだし。
厚手の生地だったから火傷するような事は無いし……ただ、色つ
いちゃったな。

「ナカ吉、大丈夫ですか？」

「んー……ちょっとお手洗いで洗ってくる」

落ちない気がひしひしとしますけど。

くそう、デュランの疫病神め。今日は碌な事無いな。

オレはぶちぶち言いながら、大きく茶色の染みがついてしまった
パーカーの端っこをひっぱりつつトイレへ向かった。

言葉遊びとオレ（後書き）

【作者後記】

遅くなりましたがどうも、作者です。

ご来訪ありがとうございます。

ちょっと明日は更新できないかもしれません。

取り急ぎUPとお礼とご報告まで。

作者拝

北限結界とオレ（前書き）

ヒマ潰し読了済みの方の為の話です
読み飛ばしても本筋には関係しません

（後書きに少し付け加えました）

北限結界とオレ

傍若無人という小麦粉に気分屋、好奇心、マイペースなどを足してチート能力という水で捏ねあげるとデュランと言う名前のパンになる。

そんな愛にも勇氣にも友達拒否られたデュランにも、実は友人（ただしデュランが勝手に認定）がいる。

長^{おさ}さんの事だ。

ま、つつても色々事情があつて普段はなんつーか……第三者のオレが見てても「ぎゃーす！ じれつてー！！」みたいな、何かお互い遠慮してるみたいなお互い関係なんだけど。

オレがそもそも魔界に呼び出されたのもその気まずい状態をどうにかしようとしてつー、しょーもない理由だったあたり、まあ詳しく知らん人でも彼らの関係性について想像がつくだろう。

お前ら……良い歳してもうちよつと自分達でどうにかしろよつてな話だ。

でもまあ、長さんはすつご良い人だったし、それはそれでまあ過去の話なんだけど。

それより、あの時あの言葉を聞いてからずっと気になっていた事があつて

「ただいまー……つて、あれ？ リムりんとヴィーたんは？」
「帰ったぞ」

テーブルに独り残っていた余計なのが軽く手を挙げてそんな事をほざきやがった。

「……」

「絞めるな、苦しい」

「このまま落とせるものなら落したい……」

オレの和みを返せこの野郎。オレの癒し成分が！

「ところでナカバ」

「何だよ」

「食べるか？」

あ、ポンデは食います。いったきまーす。

うむ、良い感じに外の糖衣がシャリシャリ、中はしっとりもちもちでありますなあ。

「お前は簡単な奴だな」

「うるさい、アンタだって似たようなもんじゃんかよ」

お代わりし放題コーヒーに釣られた癖に。

「ナカバ、黒糖味もあるぞ」

「いただきます」

ま、食べ物前にしてカリカリしても仕方ない。

ここは落ち着いて、ゆったりまったりともっちり堪能する場面だろう。

「で、リムりん達何か言ってた？」

「旅行の準備があるから先に帰る。ごめんね。それと……」
「それと？」

「お前に万一何かあったらタダではおかない、と俺に釘を刺していったな」

クスクスと笑うデュラン。

「良い子たち何だけどねえ……………」

ちょっと心配しすぎやしないだろうか。

「そうか？」

「そうだよ。オレも十四ですよ？」

「まあ、一応お前は人間としては年頃の女性と言う訳だ。その割には大事なものが少々足りんが」

「……………」

「頭を押さえつけても俺は縮まんぞ……………そしてせめて手を拭いてからやってくれ」

うつさい。砂糖まみれになるが良い。ベタベタになれ。ついでに縮め。

「別段身長のことを指したつもりでは無かったのだがな」

「じゃあ何だよ」

「落ちつきと思慮と分別と品性だな」

デュランは微笑む。オレも微笑みを返し

「そんな事を言うのはこの口かああああ」

「なひやは、はひたなひほ（ナカバ、はしたないぞ）」

ぐいぐいぐいと三回程横に引っ張ってやって気が済んだのでオ

レは席に戻る。

まったく、落ちついてポンデも食えん。

デュランを見ると知らん顔をして口の周りをハンカチで拭いて、コーヒーを飲んでいた。まるで貴族の優雅なアフタヌーンティって感じ。

これで魔王だって言われても、やっぱりイメージ違うよな。
イメージ。

「あ、そうだ。質問」

「何だ？」

「デュランってさ、この前異世界にオレを誘拐しやがった時にデュランの世界は三つの世界で出来てるつってたよね」

オレの言葉にデュランが紫色の目を向ける。

「そうだな」

「確か……魔族が統べる魔界、人間が統べる物質界、それから天使が統べる天界、だっけ」

「良く覚えていたな」

「ま、魔界以外聞き覚えなかったしね。で、さ」

もちつ、とドーナツを齧ってオレはデュランの紫色の目を見る。

「その【物質界】って……「じ」？」

「そうだな」

「じゃあ、デュランの魔界は……オレの知ってる魔界と同じものか」「同じとは？」

「オレ達の……人間の言うところの『魔界』」

オレの言葉にデュランはクス、と小さく笑った。

「……その通りだ」

うーん。やっぱりそうなのか。

オレ達はわざわざ自分達の世界を「物質界」なんて呼ばないからあの時は流してたけど。

あっち側から帰って来てから色々考えてみた結果オレが出した結論がそれだった。

つまり、あの魔界はオレ達の知ってる魔界とイコールで、魔界へ侵略していった人間がオレ達だって事。

デュラン達、お隣さんだったのか。

ま、でもオレが今まで習った知識によれば魔族ってのは世界の全てに憎悪を抱き、破壊大好き、口を開けば「ですとろーい！」しか言わないバケモノで、知性は勿論ゼロ。コミュニケーション？ それ美味しいの？ みたいな奴だって話だったし。

ドラマとか映画に出て来る魔界ってのは地面が黒でマグマがあちこちから噴き出して、紫の謎ガスが漂ってて、空は黄色と緑のぐちゃぐちゃ模様。まー、あそこにいたらそりゃあぐれて世界征服したくもなるわな、性格悪くもなるわな、みたいなイメージ映像だった。

魔族は絶対悪。邪悪さしかない。魔王は若い女誘拐しては謎の儀式の生贄にしてる。

これ常識。

なんて思ってたからさ。

まさかあんな緑あふれる森林浴地帯と蒼い空、手入れされた庭園には花が咲いてて、そこでコーヒー命な魔王がだっ子ぶり発揮してるのを見て「あー、これお隣さんか」とか思わんで。

ま、一応若い女を誘拐オレはしてくれやがりましたけど。

学校教育もマスコミも当てにならねえな……。

「別に間違っではないと思うぞ」

「あんたがそれ言う？」

「俺だからそう言えるのかもな」

オレの感想を聞いてデュランはひとしきり笑った後、腕を組んでそう言った。

「普通は【蝕】……お前達からすれば魔界からの侵略か。それが起こらん限り接点はまず無い。そして接触した時はお互いに敵同士だ。冷静に観察できるものなどごくわずかだろうよ」

俺が例外と言うだけだ。

デュランは淡々と言う。

「しかし……意外だな」

「ん？」

「何処で気づいた」

どこ？ あー、はいはい。そう言う意味か。

「長さんトコだな」

「あれの？」

「ほら……何か白黒の変なの通ったら雪国でさ。あの時」

『ここ、北の大門……？』

『そうだ。ノーストリア北端、レト山脈の更に向こう側。狂戦士達の守護する土地だ』

ヘルセルク
狂戦士

「オレが思わず連想した『北の大門』って言葉をアンタが肯定した」
「ああ、そう言えばそうだったな」

そ、デュランに説明される前にオレが考えた物をデュランが正解として肯定した。

これが根拠の一つ目。

「あとはご飯が普通だった」

「普通？」

「うん、普通。でも、あの場合普通の方が妙なんだよな」

普通の食材。

ナスのお新香。岩海苔、ネギ、それからキンメとかお揚げとか里芋とかカボチャとか……馴染みのある食材ばかり。

でも考えてみればそれは自然だったから不自然だった。

だって、異世界なのに食材が全部知ってる物、普通の物ばかりかって可笑しくないか？

実際デュランのトコに居た時に出てきた食材は「似てるけど何か違う」もんばかりだった。

水色にピンクの水玉模様のサラダ菜もどきとか、一口サイズの皮つきで食えるキウイ、蛍光黄緑のチーズ、白身が赤い卵。

セシエン君が気づいっかけてなるべくオレの普段の食事に近いもん集めてくれてたけどそんなんばかりか。

でもそれが本来は自然なんだ。

デュランの言葉を借りるなら、世界が違う、風土が違う、水が違う、ええ出来るものは別なも物。

逆説。

世界が同じなら、食材が一緒でも別にそれが自然。

なら、長さんの居た場所は……オレ達の世界だったんだ。

ノーストリア北端。

魔界への門を守る、ヘルセルク人柱の一族。

「まー、偶然とかパラレルワールドってな事も考えたんだけどさ。帰って来てから色々考えてみた結果、物質界ってのがオレの住んでる世界だつてのが一番無理のない説明だな、と」

「やれやれ……お前は相変わらず勘が良い」

少々想定外だな、とかぼやいてるデュラン。

ふん、人間を甘く見んなってんだ。

でも。

「ま、長さん本当にもう会えないんだな……」

違う世界だから会えないんじゃない、同じ世界だから。

同じ場所に居るから、あの優しくって、穏やかで、ちよつとじじくさくつて、オレのじいちゃんみたいなごつごつした大きなての長さんにはもう、会う事が出来ない。

それは、ちよつと寂しくて、少しだけ悲しくて、とても……せつない事だ。

何も知らなかったオレがご飯にはしゃいでるのを、長さんはどんな気分で見てたんだろう。

「……」

デュランがぼんぼんとオレの頭を触れるか触れないかの強さで撫

でる。

「すまん」

「別に。アンタが謝ることじゃねえし」

良いんだ。オレはちょっとは嬉しかったんだからさ。

長さんは……長さんも、少しは嬉しかったんだろうか。
ずっとあそこに居なきゃいけない長さんは。

北限結界とオレ（後書き）

【作者後記】

伏線も一つ回収です。

前作読んでない人にはなんのこっちゃでしょうが、まあ観光旅行の大筋には影響しないので大丈夫……な、はず。

以前、改訂前にこんなクイズを、前作「ヒマ潰し」をご覧の方向けに出していたのですが、ここで一応正解発表です。

- 1 . ナカバは実は「女（女性、女の子）」である。
- 2 . この世界は実は「物質界」である。

ナカバが魔法の属性をスラスラ当てて見せてたり、上で彼女が言うように食材が一致していたり、事前知識があつたりしているのがヒントでした。

私達の世界から魔界へ呼ばれた、とみせてナカバも言ってみれば「異世界の存在」だったんですよ……と。

……石投げられそうな気がひしひしとします。

少しは意外感を持っていたただけたならばありがたい事です。

次続きます。

団子兄弟とオレ（前書き）

本筋、しかし殆ど説明に終始しています

団子兄弟とオレ

「ここには三つの世界がある。魔界、物質界、天界……そしてそれらが離れないようにつなぐ楔が世界樹ユルグシラドルだ」

店を出て表を歩きながらデュランが説明する。

オレは食いきれなかったポンデを鞆にしまいながら「ふーん」と適当に相槌を打つ。

いや、食い過ぎてちよつと胃が苦しい。

調子に乗って全種類頼むんじゃない。まあ、でもポンデ嫌いにならないあたりオレ相当好きだよな。

「ユルグシラドルって……中央大陸セントラにあるアレ？」

「そうだな」

「じゃあ、魔界にもあれがあるんだ」

「あるぞ」

「ふーん……つまり、串に刺さった団子みたいな関係なのか」

「そうだな、三つ並んで団子、と言つような関係だな」

醤油は塗らないで欲しいな。

「でもさ、何でわざわざ繋いでるのさ？」

「離れれば崩れるからな」

あっさり世界崩壊ですか。

「物質界も天界もユルグシラドルを起点に構築するはずだったものだからな。もつとも」

歩きながらニヤリ、と笑うデュラン。

「今でも各界のバランスを崩せばどうなるか保障の限りではないが」

「そんな簡単に崩れる訳？」

「いいや」

何だよ、意味ありげに言うから一瞬ドキつとしたじゃねえか。

「まあ、もつとも俺ぐらいの存在が此方側にでも来ればあっさり崩れるが」

「それは自慢か」

「まあな」

「てか、何でアンタが移動すると崩れる訳さ」

「俺の魔力が少々問題でな」

苦笑するデュラン。

「魔力の定義は世界に干渉し、世界を書き変える為の根源の力だ。

俺の持つその量は少々重いのでな」

「重い？ 多いんじゃないか？」

「重い事がこの場合問題でな。ブラックホールは分かるか」

「分かるよ」

超重力空間だったか。

自己重力によって極限まで収縮した存在。光すらそれに引っ張られて抜け出せなくなるらしい。

つつてもまあ、理論上の仮説だけだね。

ゲームとかでは設定がかっこ良いからって理由でポンポン打ちまわってるけど、実際に本物が作れる奴は殆ど歴史上にも存在しないんだそう。有名どころだと大魔女バーバラがこれの使い手だった

とか。

「で、そのブラックホールがどうしたわけ？」

「俺の魔力が重いと言うのは似たような状況でな。その場に存在するだけで周囲の存在が歪む。引つ張られると言うべきか……」

「……ごめん、さっぱり分かんない」

「まあ、本体は向こう側にあるからこうしている限りそうそう目に見える影響は出ないがな」

苦笑するデュランは、そうだな、と顎に手を添える。

「例えば、バスの騒ぎを覚えているか？」

「あー、アンタがちょーもてもてだったあれか」

「あれも俺の魔力が原因でな」

「はい？」

「この目」

あれから本人が買い直した百均の安っぽい白縁のサングラスを少しだけずらし、デュランは笑う。

「^{オートマタ}人形とは言え若干ながら俺の力の影響をこれも受けている。主に目の色がそうだ」

「変えれば？ ドドメ色とか ウン…ウコン色とか」

「今何か言おうとしたらどう？」

「気のせい」

気のせいだったら気のせい。うっかり言い間違えそうになったけど。

「まあ、正直変えたいがこれはどうしようもなくてな……」

「あんたでも？」

「多分これはタグなのだろうがな……まあ、取り合えず目を介して微量の力が流出してしまっている。それが人間に影響するとああなる」

「……美形補正？」

「いや、それは何かが違うと思うんだが……大体これを隠せば影響が消える時点でおかしいだろう」

「消える、ねえ……」

あんなに酷い状態じゃないけど、今でも完璧にあんたストーキングされてたり、あっちこつちから熱視線浴びてますけど。全然影響消えてねえじゃん。

……もしかして気付いてないんだろうか。

「回路……パスが繋がっているから多少の流出は仕方ないんだがな」

「でもさあ、デュランがこつちにきたら終わりじゃね？」

「ストップパーは持ってきている」

「ストップパー？」

「緊急避難装置、と言つべきか」

デュランはコートの内側から何か取り出し、オレの手に乗せる。
ん？ これは……、

「万能包丁」

「目を洗って出直してこい」

「いや、ごめん冗談。ってかマジでナニコレ。黒い……ナイフ？」
リディル
「神の心臓決りだ」

デュランが白以外の持ち物もってるなんて珍しい。

しかし、これ切れるのか？

自分の掌に試しにちよつと当ててみる。チクツともしねえし。な

「んだ、全然利かないじゃん。」

「俺に向けるなよ」

「え？ 何で？ ほれほれ」

「オイ……」

「うりうり」

「……さすがに俺でも怒るぞ？」

「いや、アンタが逃げるから面白くっ……あ」

チャリーン。

「ゴメン、落とした」

「……」

「にぎちゃー！ もちあげるな！ 揺らすな！ ぎちゃーすっ！」

「……」

「ぎちゃー……」

下ろされた後、こっぴどく叱られたのは言いつまでも無い。

団子兄弟とオレ（後書き）

【作者後記】

タンゴと言えば黒猫ですが何か。どうも、尋です。

ご来訪、誠にありがとうございます。

そしてご感想ありがとうございます。

拍手どうもです。

そして……こんなですみませんorz

その内用語の説明なり人物紹介なりすべきでしょうか……。

ご意見等あれば拍手でばちっと呟いていただくとありがたいです。

（無記名で出来るので言いやすいかな程度ですが）

作者拝

概念殺しとオレ(前書き)

引き続き説明パート

概念殺しとオレ

「良いか、ナカバ」

「はい」

「それはオモチャでは無い」

「はい」

「分かったか？」

「分かったからそろそろ正坐止めて良い？」

ざらざらタイルの上で正坐って軽く拷問だろ。

「……反省は？」

にっにっ。

「いや、だって……」

「……」

にっにっにっ。

「……スミマセンデシタ」

そんなこんながあったり無かったりしたりして。

「で、このリディルって何なんだよ」

柄から刃まで黒一色。装飾もなにも無い。どこから柄で何処から刃が良く分からん。つばも無い。片刃のナイフ。

んー、何だっけ。アダチ？　って誰だ。　ワダチ、マブダチ、スダチ……今ー巢立ちの日ー。

「あ、思い出した。小太刀だ」

「リデルは俺の為の武器の……まあ、簡易版コピーだ」

「何で白くないの？」

「元の武器が黒いからな……これはお前達のような存在には基本的に殆ど害は無い」

「ちよつとはあるんだ」

「まあ、これで叩けば痛いだろうな」

かたいもんね。

「で、それが何でデュランに向けちゃいけないのさ」

「言っただろう。神の心臓^{リデル}決りという名前だと。或いは……そうだな、概念殺しと言うべきか。存在という情報そのものを世界から削除する」

「んー？　ちよつとまって。頭ん中整理する」

「どござ」

歩きながらオレは唸る。

前見てねえで歩くのは本当は危ねえんだけど、デュランの後ろくつついてればま、平気だろうし。

んー、しかし、概念殺しつつわれてもなあ。

リムりんやヴィーたんみたいにオレは戦闘の訓練とか教育は受けてねえから、完全に自分で読んだりした知識とか、ゲームの話から考えるしかないんだが。

概念殺し。

存在しているという事象自体を世界から削除する。

でも、それなら何でデュランには影響して、オレは平気なんだろう。

神の心臓抉り。

デュランは神だって事か？

顔を上げて前を歩くデュランを見る。

……。

「疫病神」

「呼んだか？」

「…… イイエ」

キラキラした笑顔がマジで怖いです先生。 いや先生って誰だ。

「まあ、種を明かせばそれは俺が作っている。あくまでレプリカだ」

「ふむ？」

「つまり、殺傷対象を絞る事も出来る訳だ。お前に害が無いのはそのせいだ。一定条件以下の者には一切、物理的なもの以上の影響を及ぼさないように作ってある。

逆に今の俺のような存在には致命傷になる。例えば中央十騎士、双神子、阿修羅王、それから……」

「あー!!」

「いきなりど……」

げしいっ！

「おしっ！」

決まった。いえい。

「な、に、が」

「にぎやー！ 高いー！！」

「よし、なんだ？ 人を後ろから蹴飛ばすとは」

オレを頭上に吊り上げて、デュランが唇の端を歪める。
グラスンの奥の目が物凄い勢いで恐ろしいです。

「何が不満だ。俺がわざわざ説明してやったと言っのに」

「それ！」

「……何？」

「オレが考えてたのにあっさりばらしやがってーっ！ どうぞとか
言っただじゃんか嘔吐き。変態。犯罪者。痴漢」

「……」

オレの襟首掴んでプラインとぶら下げたまま、デュランは「ふむ」
と顎に手を添え、

「ああ、そう言えばそうだったな」

「……てめえ、クロス。むしろ泣かす」

「ふむ。意気込みとその度胸は買おう。だが……」

ぶらーんぶらーん。ぐるーん。正真正銘、宙返りー……って。

「ひぎやー！！」

「もう少し自分の状況を正しく理解するところから始めるべきだっ
たな、ナカバ」

デュラン
魔王なんか嫌いだー！！

概念殺しとオレ（後書き）

【作者後記】

ナカバを（文字通り）吊るし上げてるデュランは多分満面の笑みを浮かべていると思います。

今晚は、尋です。

お気に入り登録66件目ありがとうございます。

拍手で反応してくださってる方ありがとうございます。

取り敢えず読んでみたその貴方の優しさ感謝します……良かったらまた来てください（あ）。

こそこそ仕込みをしつつまだまだ続きます。

作者拝

大人二枚とオレ

何で街中でいたいけな子供が振り回されても誰も助けしてくれなかった。

ま、世の中そんなもんだろう。
ってことでオレは、

「ここはどこ？」

「……振り回しすぎて頭に何か影響でも出てしまったか。すまない、ただでさえ貧しいお前の頭が」

「貧しい言うな！」

いや、文字ぐらい読めますよ。

チケットセンターでしょ、ここ。そこに堂々とチケットセンターって書いてあるし。

問題は何故に、何時、ここに来たんだって話だ。さっぱり記憶にないんだが。

「まあ、お前は先刻から「クロス、いつかクロス」と俺の背中ばかり睨んでいたからな。気付かなかったのも仕方ない事だ」

「あー、はいはい。アンタの無駄に高い身長のせいか。で、何故にここに？」

「俺にも用事があると言っただろう」

そうだったか。興味ねえから聞き流してたけど。

デュランは券売機の前に立って、慣れた仕草で操作する。

ふむふむ、明日八時発のアサギ二号か。

ん？ って事は行き先は中央セントラル？

「禁煙、席はこの辺りでは良いか。後は大人……」

ていつ。

「……おい」

大人二枚。

「……。さて、キャンセルしてやり直すか」

「ちっ、その手に気付いたか」

「ナカバ」

「オレも行きたい」

オレが見上げると珍しくデュランがたじろぐ。

「……お前、俺とはさっさと別れる予定では無かったのか？」

「だって、アサギ乗るんだろ？」

「まあ、そうだな」

「って事はセントラルまで行くんだよな？」

「……まあ、そうだな」

「行きたいです」

「……そうか。さてキャンセルするか」

「泣くぞ」

「何？」

「そして心の中で長さんに訴える。デュランがオレを散々利用した拳句、言葉も聞かずに捨てたって」

「何だと？」

オレはじーっと後は黙って目で訴えてみる。

リムりん曰く、女の子が男に頼みごとをする時は目で訴えるのが

一番らしい。

ま、デュラン相手なら問答無用で上目遣いになるし。

言葉は要らない。

後はひたすら黙って目で決りこむように訴えるべし。訴えるべし。訴えるべし。

「
……」
「
……」
「
……」
「
……」
「
……」

デュランが先に目を逸らした。

うし、勝った。

はー、と大きく溜息を吐いて、デュランは前髪をかき上げ、腕を組む。

「……お前がそこまで何かに執着するのも珍しいな」
「だってセントラルだし」

天壇。ノーディアス陸橋。あと双子の空中庭園にベルディアン寺院。忘れちゃいけないセントラルステーション。

ミレイ式建築でおなじみ、ジャン・ジャック・ミレイの作品だ。

カッコ良いよな、アレ。

映像でしか見た事無いけど。

「生で見たいです。だから行きたいです」

「だが……」

「家族は休みの間帰ってこないし、戻っても家に一人だし」

「しかし……」

「休み中の課題は終わってるし、やる事も無いし。期待されてないし」

「いや……」

「よって、いきなり決めても他に影響は出ないし」

「……つまり、俺への影響は最初から考慮の外と言う事が」

「あんたは自力でどうにでもなるじゃん」

「……」

正論。

人間が一人二人加わった程度でアンタの負担なんて微々たるもんじゃん。

魔王だし。

デュランだし。

「オレ一人じゃ絶対、行けないし。連れてけ」

重ねて言ったオレにデュランがふーっと大きく溜息を吐きだした。

「……分かった。ただし」

「ただし？」

「お前の保護者気どりのあの二人には報告しておけ。後で色々邪魔をされるのは迷惑だ」

「邪魔なんかしねえよ。あの二人良い子だもん」

「どうだか」

「良い子なんです」

「まあ、お前にはそうなのかもな。ともかく報告しておけ。良いな？」

「ういっい」

まあ、それぐらいは構わんし。

「後は？」

「……そうだな」

デュランは手を出す。

「ん？」

「リディルを返せ」

……そうでした。

大人二枚とオレ（後書き）

【作者後記】

別作業していたらいつの間にかこんな時間！
どうも、尋です。

ストックがそろそろ尽きそうです。

そして、閑話を仕上げたいので明日の更新は多分おやすみです。

ご来訪いつもありがとうございます。

どうぞよろしければこの先もお付き合いくださいます。

作者拝

家出青年とオレ

「おお」

「ばーん、でーん、どーん、じゃじゃーん。」

「そんな効果音がつきそうな料理がオレの目の前に！」

「ってか、デュランって料理出来たんだ」

「当然だろう」

「へえー、と眺めてるオレにデュランがエプロンを外しながら苦笑する。」

「当然なのか。」

「魔王なのに。専用執事セシェン君が居るのに。普段欠食児童なのに。」

「とにかく、本日の晩ご飯は冷凍食品の盛り合わせから変更して謎の麺と謎のスープと温野菜のサラダです。」

「おい」

「だって名称不明じゃん」

「お前が知らないだけだ」

「え？ 何か魔界風謎肉と謎野菜の謎料理みたいな……」

「食材も調味料も道具も、全て元々お前の家にあったものだろうが」

「あ、そっか」

「お前は俺に喧嘩を売っているのか？」

「……ちよつとだけ」

「いい度胸だな、ナカバ……」

「ぎゃー」

いや、段々吊り上げられるのが楽しくなってきたじゃないよ？

そりゃあオレ高い所好きだし？ ふわふわってな重力の感じが楽しいとか、おー、今視点が高いぜオレ！ とか思ってたとかするけど。

オレが手足をバタバタさせてると、デュランが何と無く疲れた感じの溜息を吐いて下ろしてくれた。

仕切り直し。

「なにこれー！」

「……どこの珍百 だ、それは」

相変わらず無駄にこっちの番組に詳しいデュランはほっとくとして。

うーん、強いて言うなら……冷たいうどんの上に肉味噌、ササミ、カシューナッツの砕いた奴、もやし、ニンジンやら大根やらキュウリの千切り。あとはレタスやら大葉やらミントやら……えーっと、親が買ってきたつきり放置されてたフライドオニオンとやら何やら色々。うん、これは。

「うどんのごちやごちや乗っけ盛り？」

「……まあ、そんな所だ」

ある程度アレンジしているから、その表現が一番適切かもしれんなとデュラン。

アレンジねえ。

そう言えばえらく手際良く作ってたもんな、こいつ。むしろ、手際良すぎて軽く退いた。

だってさあ。何で魔族がこっちの調理方法とか、調理器具とか、食材とか何でそんなに詳しいんだって話だよ。

ヒヨコ柄エプロンが似合っちゃう人類の敵ってどうよ？

……ちなみに、デュランは最後まで往生際悪く、「白いエプロンが良い」とか抜かして探してた。ねえよ。

まあ、出来上がったなら食事です。

チケツトセンターから腹ごなしに歩いて帰って来たんで、今は結構空腹だしね。

ぐるぐるぎゅーがー。

「……」
「……」

何故かデュランが憐れむような目をして、オレの皿にササミを追加してくれた。

何か釈然としねえなあおい。

「でさ、さっきの話だけど」

「ん？」

「あんたの家出の話」

オレの言葉にデュランが微妙な顔をする。

そ、家出。

チケツトセンターからの帰り道。そもそも何でオレの家に転がり込んできたのか、渋るデュランを脅して聞きだした結果がそれだった。

魔王が家出。人類の敵で、ウン千歳の癖に家出。

何でも本来の宿泊先だと「悪気は無いのだろうが、押し倒されて服を剥がれる」らしくて、それが嫌で逃げ出したんだそうなので、

ホテルにも入れず、行く場がなくてふらふらーっとしてたらオレの所に転がり込んできちゃったらしい。

ダメなヒモ男みたいな話だった。

「ウチ泊ってって良いよ」

ジャックジャックと口の中でぶっかけ麵を噛みながらオレは言う。それにデュランがきよとんと、スープを掬った姿勢のまま瞬く。

「いや、だつてさ。アンタが外で寝ててみるよ。大パニックだろ…」

…昼間のバスの比じゃねえだろ」

「ん、まあ…かもしれないな」

「大体、明日同じ車両に乗る奴が風呂入ってないってありえねえし」

そこですよ、そこ。

せっかくの観光旅行だつてのに、お隣は野宿してました、風呂も入ってないです着の身着のままです。

いや、これダメだろ。

「つて事で、うちの風呂使っていいから。寝るなら弟の部屋あつち

だから向こう行け。俺はリビングで寝る」

「自室で寝ないのか？」

「や、寒いし」

リビングが特等席なんです。

「……お前の部屋の情報を少し変えておいてやるから、自分の部屋で寝ろ」

「ん？」

「今日一日ぐらいは構わないだろう……宿泊の礼だ」

「ふむ？」

床暖房でも入れてくれるんだろうか。ま、ぬくぬくな感じで寝られるなら良いけどさ。

「服は自前な。あんたサイズの服なんて此処ないし、どうせ白いのしか着たくないんだろ？」

「そうだな」

少しは否定しろよ我がまま魔王め。

「あ、宿泊代ってならついでに皿洗いと掃除と風呂の準備とよろし

く」

「……………」

がんばれ！。

二人一組とオレ

引き続きご飯タイム。

食事中は会話禁止、なんて家もあるらしいがウチはそう言う方針では無かった。

お残し厳禁、背中を背もたれに着けない、肘を食卓に着けない、音を立てて食べない、箸はちゃんと持つ。

大方こんな感じで、普通に食事マナーを守ってれば問題ない。

ま、やったら即座に怒鳴られるし、箸の持ち方が悪いので叩かれたりもしたし、椅子から蹴落とされもしたけど、せいぜいそんな程度で喋る分には構わない家だった。ま、その辺わりとゆるーい家だったんだわな。

なんで、食事中でもデュランとは何となくおしゃべりをする感じになった。

「今日は少々意外だったな」

「いや、むしろそれオレの台詞だし」

意外で済む話じゃねえけどな。

「で、何が意外だった？」

「いや……お前でも何か熱心になる事があるのだな、と」

そりゃオレだってありますよ。てかオレを何だと思ってんだろコイツ。

「だって中央セントラルだぜ？ 四陸一群の文字通り中心だぜ？」

「四陸一群……ああ、成程。そのように覚えるのか」

「おう。えーっと、北大陸ノースリア、東大陸イステイア、南諸島群シザリオン、西大陸ウェスハシア。あと中央セン

大陸。あつてる?」

「あつているな」

「北大陸のレト山脈以北以外は全部セントラの永久時計のエネルギーで動いてるってんだから凄い話だよな」

つつてもレト山脈以北つてのは基本的に人が住んでいないって事になってるし、北限結界でエネルギーを送ろうとしても無理なんだけどさ。

「永久時計……」

「あ、そつか。デュランは知らんわな。……オレも良く知らねえんだけどさ。えーっと、エネルギー発生機関で、あ、そつだ! すつげー美人の神子さんが管理してる」

「お前……美人は嫌いじゃなかったのか?」

「美形の男は死ねばいいと思う。むしろ滅べばいいと思う。呪われる」

「……」

「デュラン、呪われてくんない?」

「お前な……大体、あの神子達は別に女ではないぞ」

「うえっ?! マジで?」

出回つてる情報だと美女だつて噂だつたのにしょつくだー!!

「……オレの楽しみが」

「意外とその手の情報は出回っていないのだな……まあ、それも仕方ないか」

「てか何でデュラン知ってるのさ」

「古い知り合いだからな……まあ、個々への面識は無いんだが」

あんだどんだけ顔広いんだ。

てか、良いのか？ 魔族の王と、人間の守護者の神子様相知り合
いでき。何？ 運命の敵同士？

「そっかー、神子様男なのか……」

「いや、別にそうも言っていないのだが」

「はい？」

「そもそもお前の認識はどうなっているんだ？」

「え？ えーっと……何か体が弱くて、美人で、朝は起きられない
低血圧で、一人称があてくし？」

「……」

違っらしい。

「まったく……情報統制が妙な方向に向かっているようだな」

「あ、えーっとでもほら、別にその辺は雑誌とかの情報だし。教科
書レベルなら人類の守護者にして聖剣の担い手、えーっと、後は永
久時計の管理者の双神子……ってな話だから」

この前テストでやったばっかです。点数？ なにそれ美味しいの？

「てか、何で双の字がつくんたる？」

「それは二人いるからに決まってるだろう」

「ええっ?!」

マジデスカ？

「美女のダブルセット!!」

「女ではないがな」

……そうでした。

「でも男じゃねえんだよな。ならいいや。左右に侍らせたらハーレムっぽくなりそうだし」

「……時々お前の趣味を疑うのだが、まさかそういうのが好きなのか？」

「や、別に」

女の子は可愛いとは思いつし、見てたら「かわいいなー、きれいだなー」と和むけど。

それは多分美術品とか、可愛いグッズとか、小動物を見てる気持ちに近い気もするし。

「てか、男でも女でも無いってどういう事？ 二人とも？」

「ああ、二人ともそうだな……そもそもあの双子は二つ揃って一人前、一人で二人、二人で一人だからな」

「あー、二人はプリキ アみたいだな」

「もしくは匂宮 妹みたいなものだな。もっとも、あの双子は片方が死ねばもう一方も死ぬがな」

「へー」

絶対運命黙示録……じゃなくて運命共同体みたいな。問おう、貴方が私のマスターか、みたいな。

それって結構不自由そうだけど。

少なくともオレは弟とそんな関係になるのはごめんだぞ。

「んー、でも今時計塔に居るのは一人だけだって話だったような……」

「まあ、もう一人は方々ほつつき歩いているようだがな」

ほつつき歩く？ どんな歩行方法ですかそれは。

「まあ、仕方のない奴でな……」
「ふーん……」

お偉いさんなのに、デュランにかかると放蕩息子扱いですか。娘
かもしれんけど。

「てか、デュランにくつついてたらその美人神子さん会えたりす
る？」

「片方だけなら可能かもな」
「マジでっ?!」

オレ、生まれて初めてデュランと知り合いで良かったと思ってる。
偶には迷惑だけじゃなくて役にたつんだな、お前でも。

「会っのか？」

「んー、遠くから覗き見るだけでも良いや。偉い人と会うマナーと
か知らんし……」

「まあ、そういったものをあれは気にしないとは思っが……お前、
建築に興味があるのではないか？」

「え？」

いや、まあ……そうなんだけど、そんな話した覚えは無いけど。

「建築っつーより……うーん、まあ嫌いじゃないけどさ」

割と理由があればだから、あんまり喋りたくないんだけど。
オレは適当にごまかしつつ言っ。

「衣食住に良い感じのが揃って楽しい生活になるじゃん。旨いもん

食って、着心地良い服着て、で帰れる家があつてさ。ま、そんな感じ」
「そうか」

クルクルツとうどんを上手にフォークで巻いてデュランが笑う。

「なら、ユルグシラドルもまた一つの住居だという認識はあるか？」
「ん？」

「向こうに行ったら案内してやろう。お前はきつと気に入る」

いやいや、別にアンタに行き先決められても困るし。

そう思ったけど、デュランが妙に楽しそうな、何か悪戯考えてるワルガキみたいな顔で笑ってたから、オレは断るのも気が引けて「ふーん」と適当に相槌を打つだけにしておいた。

オレってば基本、遠慮深い性格なのである。

二人一組とオレ（後書き）

【作者後記】

セントラルとセントラ、どっちがどっちだか偶に自分でも分からなくなります。

（ちなみにセントラルが地区名、セントラが大陸名称です）
と言う事でどうも、尋です。

ここ数日またしてもネットに接続できませんでした。

忙しいとかそれ以前に、繋いでるのに反応しませんでした。

おまけに、某登録先からのメールがどうやら一切届いてない事が分かりました。

プロバイダー変えようか……（遠視

それはさておき、ご来訪ありがとうございます。

いつのまにやらユニーク5500越え、PV24,000越え、お気に入り登録73名となりました。

ありがたい事です。

変わり映えしない拍手なのにポチポチして下さってる方もいらっしゃるようで、ありがとうございます。

その内、更新しないと飽きそうですな……。

退屈されないような話を書けるように気をつけますので、もし宜しかったら引き続きお越しく下さいませ。

作者拝

敵性対象とオレ（前書き）

PV25、000突破しました。ありがとうございます
お礼といつちやあなんです、読みたい知りたいリクエストを水曜
まで募集してます。
宜しければどうぞ。

敵性対象とオレ

オレの皿もからっぽになって、お代わりしたスープもすっからか
んになったところでデュランが冷蔵庫から何か出してきた。

聞いてみたら戸棚になったほうじ茶を拝借して、ブラ……、

「ブラジャーだっけ？」

「ブラマンジエ」

「そうそう、それ。で、これプリンと何が違うんだ？」

「……まあ、材料がまず違うな」

へー。ま、良いや。せつかくなんで貰つとく事にした。

「そう言えばさあ、デュランは何で中央入れセントラルんだっけ？ あそこっ
て許可制だる基本」

例外はDDD本社の勤務員か、最高裁判所の職員、中央十騎士、
研究機関の職員、他一部の特級階級……特権階級の奴らだけ。あと
は観光客が審査を受けて年間二百人だけ受け入れられる。

オレなんかはそもそも対象外だから保護監督者抜きじゃ絶対に入
れない。

デュランも普通なら入れないはずんだけど……戸籍無いだろ
うし、じゃあ「魔王です」とか言ったら絶対に入れないだろうし。
そもそもアサギの予約出来るはずがねえし。

「一番手っ取り早い方法をとったのでな。基本あそこには好きに出
入りができる」

「手っ取り早い……」

デュランがニヤツと悪役スマイルを浮かべる。
あー、はいはい。偽造か。成程ね。

「さっすが人類の敵」
「誉めるな」

誉めてねえよ。

「まあ、俺のレベルになると人類の敵程度の粋では収まらんがな」
「ふむ？ じゃあ何さ」
「世界の敵だ」

何そのマイスタージンガーを口笛で吹いてる人に殺されそうな設定。

ん？ でも偽造って事は犯罪だよな。バレたらオレまでやばいんじゃないかね？

……ま、いつか。その時はデュランを差し出してオレは許して貰う事にしよう。オレは一般人だし？ デュランならとっつかまっても某怪盗の孫みたいにあっさり脱獄できるだろうし。
じゃあなー、とっつあーんってなもんですよ。

「世界の敵ねえ……あんたって魔王の仕事さぼりまくってんな事してんのかよ」
「いや、してない」
「ライ」

話が違っじゃねえかよ。どう言う事だ説明して見やがれこの野郎。
食卓越しに奴の胸倉をひつつかみ、ついでに殆ど手つかずのデザー
ートの皿を反対の手で取る。

そのオレにデュランはクスツと笑って、

「甘いな」

「このムースが？」

「ブラマンジェ……欲しいならやるぞ」

「あ、どうも」

やрийい。

「で？」

「ん？」

「甘いとかどうとか」

「ん？ 砂糖は足してるが甘くないか？」

「お茶の良い香りするし、さっぱり甘さで旨いよ」

「そうか、良かった」

……うわー、間近で見ちゃった。アンタの笑顔程甘ったるいもんは無いですよ。

口ん中にかき氷シロップと蜂蜜と水飴と砂糖とありったけ詰め込んだみたいなの甘ったるさですよ。

ぺっぺっ。

「顔が悪いな」

「うっさい」

「失礼、顔が面白いな」

「だ、ま、れ」

笑顔でギリギリギリー、と奴の両耳を掴んで引っ張っておいた。

「ボケにボケで返してんじゃねえ……きりきり白状しやがね。ペーシ数が限られてんだよ」

「そう怒るな」
「むぐっ」

スプーンで口にプラマンドをつっこまれてオレは強制的に黙らされる。

「まあ、俺の場合は何をしなくても敵たりえるのでな。何もする必要が無い」
「ふーん」

口に啜えさせられたスプーンをびこびこ上下させつつオレは何と無く相槌を打つ。

「まあ、何をしなくても俺の在り様は変わらんからな。やりたくない事はしないと決めている」

「お前どんだけわがままなんですか」

「おや、知らなかったのか？」

「……知ってるけどさ」

「別段お前の希望もある程度は考慮してやっても良いぞ。感謝しろよ」

偉そうだな、オイ。

んーでもまあ、希望聞いてくれるっつーんなら取り合えずめいっばい注文だしとくか。

「じゃあさ、オレ行きたい場所あるんだけどさ……」

切り出したオレに、デュランは至極楽しそうに、愉快そうに、そしてむかつくほどに綺麗に笑った。

敵性対象とオレ（後書き）

【作者後記】

デザートまで作っちゃうデュランですが、あくまで執事……ではなく魔王で世界の敵です。

今晚は、尋です。

ご来訪ありがとうございます。皆様に心からの感謝を。

拍手と活動報告では既に告知済みだったのですが、現在25 / 00突破（予定）記念として皆様よりリクエストをお待ちしております。

「こんな話を読みたい」「誰々が主役な話が良い」「この設定もつと詳しく」等、何でも結構です、リクエスト方法は拍手でも感想でもメール活動報告へでも何でも結構です。

無論、匿名でも問題ありません。

お名前を出される場合は、作成の際「様よりリクエスト」と書いて拙い場合は一言添えて下さい。

なお、まずないとは思いますが……リクエスト数が多い場合は投票等で絞る場合もありますのでご了承ください。

では、どうぞ良い夜を。

作者拝

浅葱二号とオレ（前書き）

リクエストありがとうございます。
今回は切れ目上少し短めで。

浅葱二号とオレ

ゴールデンウィーク三日目。

八時丁度のアサギ二号でオレは旅立ちます。って事で。

「デュランおはよー」

「おはようございます、デュランさん」

「おはようございます」

「おはよう……。で、ナカバ」

「何」

「増えてないか？」

「増えてるけど」

それが何か。

何か文句あんのかよ。

やる気か？

そんな思いを込めて見上げると、デュランは「ふう」と悩ましげな溜息を吐いて、

「やはり昨日コーヒーがかかったから分裂したのだな。まあ、取り合えず深夜過ぎに食事を与えない項目だけは守るとしよう」

「や、オレあんなにちっさくねえし」

誰がクリームゾンですか。

「それは色だ」

「あれ？」

って今、思考が筒抜けだった気がするんだが。まさかまた読まれてるんだろっか。

「ま、ある程度想像がつくのでな……本当に間違えたのか」

「うっさい」

「デュランさん、急に押しかける形となった事、お詫びします」

旅行鞆を持ったヴィーたんが頭を下げる。その隣で同じようにリムりんも。

うん、何か昨日報告がてら電話したら、何故か朝には一緒に来ることになったんだよね、二人とも。

南行きの予定はキャンセルしたらしい。

「増えるならもう少し早く言って貰いたいものだな」

「や、オレも今朝になって初めて知ったしなあ……」

オレの言葉にデュランは溜息を吐くデュラン。

それにリムりんが申し訳なさそうに身を縮める。

「席は自分達で用意するし、デュランさんに迷惑は……」

「近くでなければ意味が無いだろうっ？」

仕方ない。

リムりん達を見返ることもしないで、デュランは携帯（やっぱり白だった）を取り出してコードを指に繋ぐ。

「……ああ、俺だ。すまん、寝ていたか」

誰かといきなり通話中状態ですか。

ま、アンタがマイペースなのは知ってるから良いけどさ。

「具合はどうだ？……そうか。しかしあまり無理をするなよ。……
ああ、そうだ。しかし少し変更が入った。……いや、違う。そう心配するな」

「ねえ、ナカちゃん。誰と話してるのかな？」
「さあ？」

デュランの行動は疑問を抱くだけムダだし。

あいつの知り合いなんて想像つくはずが無い。魔王の知り合いなんてシューベル ぐらいしか思いつかん。

パパ、魔王が来るよ。

どうでも良いけど、デュラン随分親しげな感じで喋ってるけど……

…セシエン君相手の会話、つまり魔王ばーじょんな口調とか雰囲気じゃない。これは、長さんおさ相手の感じた。

誰だろう？

「……そうだ。すまん……ああ、ゆっくり休め」

蕩けるような極上の笑みを浮かべて通話を切り、デュランは「さてと」と此方に顔を向ける。

「行くぞ」

「は？」

「まったく……」

「あ、おいデュラン、コーヒー馬鹿、変態、痴漢、待てっば」

あ、Uターンして戻ってきた。

「誰が痴漢だった？」

「……え？ いやノリ？」

「……。さて、行くぞ」
「ぎゃー」

襟首掴まれてズルズルズルーっと引きずられる。
相変わらずオレの意志は無視ですか。

そうですか。

扱いこなですか。

あ、でもこれ楽ちんだ。しかも結構楽しい。しかも自分で歩くより速そうだ。

よしよし、苦しゅうない。存分にひっぱって連れてゆくが良い。

「ナカちゃん！」

「やっほー」

あれ、何かリムリンに手振ったら変な顔をされてしまった。
交替したかったんだろうか。

いや、オレは良いけどリムリンにこれは拙いだろ。
うん。

「出発まで時間が無い。来るなら早く来る事だ」

「だってさー。こいつ幼子おさなこだろうが老人だろうが、自分の邪魔になるなら本気で置き去りにする奴だから急いだ方が良いと思うよ」

「……何の根拠があつてその表現になるのかな？」

「ぎゃあああつ！ スピードアップすなっ！」

リムリンとヴィーたんはオレとデュランのやりとりを見て無言で顔を見合わせ、それから荷物を抱えて走り出した。

うん、ごめんね引率者がこんな奴で。

浅葱二号とオレ（後書き）

【作者後記】

狩人の名曲（デビュー曲）をこれを読んでる人の内どれだけが知っているのか不安です。

どうも、古い時代を生きる尋です。

お越しいただきありがとうございます。

ご感想ありがとうございます。

お気に入り登録75人目様ありがとうございます。

そしてリクエスト、拍手、ありがとうございます……後で活動報告にてご挨拶しますね。

現在「こんな話を読みたい」というリクエスト受付中です。

明日いっぱいまでお待ちしておりますので、メール、拍手、ご感想、活動報告への一言などどこからでも結構ですもしあれば仰って下さい。

なお、拍手でも三人娘（娘ですよ、一応）がリクエスト企画の宣伝をやっていますので、良かったら見てみてください。

作者拝

戦力確認とオレ

ひとまずアサギの出発には間に合いました。

二両編成のちっさい列車なんだけど、なかなかおしゃれなデザインでマニアの間だけじゃなくてもこのロイヤルブルーの列車はわりと有名だ。

焦げ茶色の木版張りの車内はちよつとした高級ホテルっぽい雰囲気になってる。

マットレス、カーテン、それから廊下のカーペットは外側と同じロイヤルブルーで、ユリの形を模したランプはアールなんちゃらつてなデザインらしい。クリーム色のガラスシェードがなかなか綺麗だ。

前に雑誌の特集で見た事あったけど、マジで凝ってるなあ。

金かかってんだろなあ。

ずるずるーっと通路を引き摺ってオレを運んできたデュランが無造作にコンパートメントの扉を開き、中の座席の上にオレをペイッと投げ落とす。

ぼよーん。

おお、座席がふつかふか、あんどスプリングが利いててトランポリンみてえだ。

「おおおお、楽しい！」

べよん、べよんと上で何度か座りジャンプしてると、デュランが小さく苦笑した。

む。

「気に入ったか」

「うん、すげえな。やっぱ金持ち列車違うなー。てか、これ本当に

車内？」

「そつだぞ」

何かホテルの一室ってな感じ。

お、天井の板パネルにユリの花が彫つてある。芸が細かいな。

「荷物、上の棚に置いておくぞ」

「ういうい」

「ナカちゃん、大丈夫？」

「あ、リムりんやつほー」

「……これは、凄いですね」

遅れてコンパートメント内に入ってきたリムりんの後ろでヴィーたんも室内の装飾にびつくりしてる。

うんうん、だよ。驚くのオレだけじゃないよね。

オレがきよろきよろしてると、リムりんがやってきてオレに視線を合わせるようにしゃがんで肩に手を置いてきた。

「何かされてない？ 大丈夫？」

「んー、多分服がちょっと伸びてるかもしれないくらいかな。てかさ、てかさ、この座席楽しい」

「そ、良かったね」

べいんべいんと跳ねてみせたオレにリムりんがにっこり笑う。

「荷物はどちらに置けば良いでしょうか」

「そこにクローゼットがある。そこに入れておくと良いだろう」
「分かりました」

ヴィーたんが頷いて壁際に一体化してたクローゼットを開いて、

グローブトロッタ ・ サファリのスニーカーを入れる。

あれカッコ良いよな、デザイン。ちょっとシックで、んでもって古い感じで。

柔らかいクリーム色が上品で、ヴィーたんの仕事できるぜってな雰囲気ピッタリだと思う。

リムりんも同じようにメタルピンクのスニーカーを中に入れる。リムりんはどっちかつーとまあ言うシンプルかつ機能的みたいなデザインが好きなんだよな。オレはヴィーたんのアンティーク系のアイテムの方が好きなんだけど。

「さてと」

デュランは手荷物ゼロだったんで一番早く寛くわいだ状態になって、例によって優雅に足を組んで腕組みした姿勢で椅子に座っていた。

ん？ オレの方が早くリラクスムードだったって？

細かい事は気にすんなー、それわかちこわかちこー……ちっちゃいとか口が裂けても言わんもん。

「では、まず戦力の確認をしておこうか」

え？ そこ？

朝飯は？ まず朝飯じゃねえの？ 腹が減ったら力が出ないっていうじゃん。

オレの心の訴えを無視して、デュランは無駄に長い足を組み替え、グラサンの向こうの紫の眼を細める。

「私もナカバも所有魔力はゼロだと思ってくれて良い。よって不慮の事態の際、ナカバの護衛に回れるとすれば貴女達だけと言う事になる」

「……」

「まるで不慮の事態が起こる事が決まっているかのよう、ですね」

ヴィーさんの言葉にデュランは小さく、しかし不敵に笑う。

「貴女達は彼女の為に来たのではないのか？」

「……。良いわ、話を続けて」

「ありがとう」

リムりんの言葉を受けてデュランが頷き、座席の背もたれに背中を預ける。

余裕ってか？

「単独襲撃はこの列車の構造及び特性上考えにくい。よって複数での行動となるはずだ：まあ、単独の場合の対応は貴女達にとっては対複数よりはやりやすいだろう」

「……。それで、複数の場合はどうしろと言いたいのかしら？」

「ナカバを守れ」

何言っただこいつ、ってな顔をリムりんがする。

そこにデュランはすぐにもう一つ言葉を重ねる。

「私の事は放置する事」

「……。大した自信ですね」

「自信など無いさ」

苦笑するデュランにヴィーさんが微かに赤面して視線を逸らす。こら、オレのヴィーさんに何しやがる。色目使っんじゃねえよ。こそつと足で横からキックしといた。

デュランは例によって顔色一つ変えず、眉一つ動かさないでさらっと流しやがったけど。

案外こいつ、本当の意味で無神経なのかもしれない。
人形オートマトンだし。

「魔法技官」

「候補生だけど」

「この車両ぐらいいは捕捉範囲に入っているな？」

「……ええ」

「戦力剥奪は？」

「……」

「使えないのならば後方から出るな。幸い剣技官が居るようだしな。獲物は何だ」

さつきからオレには意味不明の会話が続いています。

それよりご飯……あ、そうだ。鞆ん中にお菓子詰めて来たんだっ
た。源氏パ。あれ食ってよ。

そう思ったが考えてみればさつきリュックはデュランによってオ
レの手の届かない所に置かれたんだった。

えーい、嫌がらせか、くそつ。

オレは仕方ないので靴を脱いで座席に上り、上の棚めがけて手を
伸ばす。

おのれー、微妙に届かねー。

「大体分かった」

オレの努力を嘲笑うかの如く鮮やかな手つきで、横から伸びたデ
ュランの手が目の前でオレのリュックをかつさらつ。

「返せ」

蹴飛ばして、奪い返しておいた。

お帰りマイリュック。魔王に変な事されなかったか？

デュランは何故かかるーくこつちを睨んでるようだったけど、当然のように無視だ無視。

それより愛しの源　パイですよ。

はー、空腹で死ぬかと思った。

ピリピリと袋を破って先に食べてると、何故かリムりんがにこにこしながらデュランを見てた。

何？　恋の芽生え？　止めた方が良くぞそいつだけは。

リムりんがその気ならオレは一生涯かけて止めるぞ。やめとけ、そいつだけは相手にしちゃいけない、と。

「私の手持ちの武器はこれだけだ」

ん？　例のまっくろくろす……じゃない、上から下まで真黒な小太刀もどきリデイルの登場か？

そう思ってオレは視線だけデュランの手元に動かしてみたが、そこにあったのは手のひらサイズの銃だった。

「デンジャー」

「それはお前だ」

すかさず返ってくる冷ややかな一言。

あれ？　デンジャーってなんだっけ……おお、あれか。デンジャー危険。

……。

「デリンジャー、ですか。変わっていますね」

後ろからドスドスと無言で背中に拳を打ち込まれてるデュランに
グイーたんが戸惑うように呟く。

てか誰がデンジャーだ、誰が。

……まあオレだらうけど。

セシエン君とか絶対にこいつに手え挙げないもん。多分。

「ナカ、バ。喋りにくい」

ひょいっと首根っこを摘ままれて座席へリターンさせられた。
くそう。

気が済まないの下でベシベシと奴の足を踏んでおく。

「まあ、携帯に便利なので……それに反動の問題もある」
「魔弾の射手。本物ね」

ごく気軽に銃を渡したデュランからそれを受け取って、調べ終わったリムリンが「大体貴方のやり方は分かったわ」と頷く。そしてデュランにサリンジャーを返す。

「それはライ麦畑だ……どうやらお前にも捕獲役が必要らしいな」
デュランに思考トレースされてしまった。

「何だ、凶星か」

「うっさい。てかマジでアンタの頭はどうなってんだ」

ここまで見抜かれるとむしろ怖いっての。本当に読んでるんじゃないだらうな？

戦力確認とオレ（後書き）

【作者後記】

前の話が短くなったのは、この話があまりに長いから……うん、し
ょうもない理由だ。

どうも、しょうもない尋ですこんばんは。

予約投稿なので、ちょっと掲載時点の状況は分からないのですが…
…ご来訪ありがとうございます。（と見栄を張ってみる）
拍手ありがとうございます（と希望的観測を述べてみる）
リクエストありがとうございます……あつたら良いな（と目をそらしてみる）

本日いっぱいまで受け付けておりますので、宜しければどうぞ。
では、どうぞ皆様良い夜を。

作者拝

行動予定とオレ

やっとこさで朝飯が届けられた。

スコーン、トースト、クロワッサン、ポリッジ、目玉焼き、ふわふわのオムレツ、ベーコンエッグ、スクランブルエッグ、ポーチドエッグ、豚腎臓のマスタード炒め、茹でたソーセージ、厚切りベーコン、燻製の鱈^{たら}、牡蠣^{かき}、トマト、マッシュルーム、チーズ三種類、乾燥プラムの蜜煮、ラズベリー、桃、グレープフルーツ、メロン、他マーマレード等のジャム。

おー、選びたい放題だ。

取り合えずオレはカリッカリのサクサク、ふんわり小麦の香りの薄切りトーストを取って、バターをたっぷり塗って、上にポーチドエッグをちょこんと落した。
うまうま。

お醤油欲しいな……ま、無いだろうけど。

「それで、どこ行く？」

行儀悪いとは分かってるけど、ついでに食卓に地図を広げて作戦会議中である。

つつても中央の内部情報^{セントラル}についてちやものすつごい規制が敷かれて、今見てる観光マップだって殆どの部分が白紙状態なんだけどさ。白い部分の真ん中に「研究学区」だとか「観測所」とか書いてあるだけ。

ま、興味無いからどうでも良いですけど。

「DDD、ここにもあるのよね……」

地図上の空白地域の中でも結構広い部類に入る地点を指さしてリ

ムりんが呟く。

「あー、だね。何？ 興味あるの？」

「うーん、ちよつとだけ」

「推薦枠ですからね……私達は」

ヴィーたんがオレの皿にベーコンを乗せてくれながら言う。

「そっか。ある意味ライバルだもんね」

「本当は一企業と国家が並立するのは変なだけだね……」

オムレツをスプーンで切って上品に食べながら、リムりんが悩ましげな溜息を吐く。

うーん、そういうもんなんだろうか。

まあ、自分の国内に一大武装勢力が居るってのは気分良くないのかもしれないけど、実際DDDを使って国家間で抗争もどきをしてるのも事実なんだし……うーん、良く分からん。

リムりんもヴィーたんも、将来的には国家登録の武装官になるんだろうから意識するのはまあ分かるんだけど。

……。

オレみたいな奴が気軽に「大変だね」とか言って良い話じゃないんだけど。

でも、やっぱり楽じゃあ無いよな、うん。

「ヴィーたんは何か行きたいところある？」

「そうですね……」

ん？

「買い物したい？」

ヴィーさんの視線の先にあるのはDDD傍のいわゆる商業区画だった。

まあ、殆ど外界から隔絶……とまでは言わんけど結構な入場制限が敷かれてるセントラルの中で、一番開放的な区画がここだ。

ま、DDDのおひざ元ってな場所なんで、武器とか防具とかそういう軍事目的の店だとか病院だとかそういう治療系だとか、冷静に考えてみるとなかなかぶっそうなカテゴリーにカテゴライズされる店が多いんだけどさ。

ちなみに、それらに混ぜって何故だか知らんけど高級ブティックだとか、五つ星レストランだとかまで出店してるらしい。

DDDの給料ってそんなに良いんだろうか？

てか、普通にボーリングとかするんだろうか。

オレは大手複合エンターテイメント店の名前が入ってるのを見つけてそう思う。

「新しい武器を」

さすが刃物好き。

「じゃ、オレも一緒に行く」

告げたオレにヴィーさんはちょっと驚いた顔をして、「では一緒に行きましょう」と微笑んだ。

「リムりんはどうする？」

「……そうね」

首を傾げて、リムりんは意味ありげな視線をオレの隣に向ける。

その方向には某コーヒー中毒者しかおりませんが。

例によって奴は飲み物でコーヒーを選んで、アーモンドビスケットをつまみにぼーっと外を眺めながらコーヒーを飲んでいる。てか、昨日と言いつつ言い今と言いつつ、普通に食事してんなら向こうでセシエン君の料理も食べてあげなよ。

言つちやなんだけど、この料理よりセシエン君お手製の朝食の方が美味しかったんだよ？

「デュランさん」

「ん？」

「少し向こうに着いたら付き合ってもらえますか？」

にっこりと天使のような微笑みを浮かべるリムりん。

おおっ！ これは噂に聞く告白というやつか！

うわー、しかも目の前、リムりんだし。すげー。

……ま、成立しそうなら全力で阻止しますが。

「ん？ そうだな、別段今日は急ぐ用事も無いし構わんぞ」

こら何冷静に対応してるんだデュラン。喜べよ。

美少女に告白されたんだから、普通光荣ですって言う場面だろ。これ。

でも言ったら全力で阻止しますが。

お前にリムりんは渡さん。

「まあ」

カップを置いて、デュランはふっと口元を緩める。

「先にやるべき事を片付けてから、そのお誘いは受けるとしよう」

「先にやるべき事って……デザート？」

「ふふ、それも良いがな」

違っらしい。

何だろ？

そう思った所でドオンと列車が横に揺れた。うおっとお！

ササツとバランスを取るヴィーたんとりムりん。さすがプロ。

ま、インドアごろごろ派のオレにやそんな芸当は無理な訳で、あやうく座席から水平方向に飛びそうになったが、デュランが無造作にオレの襟を掴んで引っ張り戻す。ぐええ。

あ、オレのウィンナーが床に紐なしバンジーをつっ！ 楽しみにとっついたのに！

「来たぞ」

何が？

「敵ね」

はいっ？

行動予定とオレ（後書き）

【作者後記】

英国風朝食のつもりです。

話を書くにあたって、ちまちま調べ事をするのが好きです。

ただし調べた事の大半が生かされません……うん、分かってる。力不足。

今夜は、現在ターシャ・テューダーについて調べている尋です。

ご来訪ありがとうございます。

いつもご愛顧ありがとうございます。

拍手どうもです。

リクエストありがとうございます。

募集期間も終わったので、一両日中には拍手内容を変更しようと思っております。

意外と三日経つのも早いものですね。

……とか言いつつ現在がまだ月曜日なのは秘密です。

まだ続きますので、宜しければお付き合ってくださいませ。

作者拝

戦闘準備とオレ

「戦闘準備」

リムりんとヴィーたんが直ぐに立ち上がって、クローゼットのスーツケースからそれぞれ武器を引き抜く。

デュランも落ち着いた動作でデ……何だっけ。もう良いよ、デンジャーで。

「この車両に他に人は？」

「部外者は居ない。買い占めた」

何かさらつと言いやがったこのセレブ。

「座席全部？」

「そうだ」

「大人二枚じゃなくて？」

「あれは俺の名前で予約した席の話だ」

「うわー……」

「……凄いですね」

「……身も蓋も無いわね」

「……何故その反応になる」

いや、なるってば。

「とにかく、この車両は抑えてある。侵入は一両目からになるだろうから連結部を抑えてくれ」

「……そうね、行くわよヴィクトリア」

「了解です」

「ナカちゃん、大人しくしててね」
「らじゃー」

ビシッと片手にスコーンを掴んで敬礼したオレにリムりんがにこっと笑う。

オレのウィンナーの仇は任せた。

さてと……オレは隅っこで大人しくしてるとするか。
何か食い物先に確保しとかないとなあ。これとこれとこれと……
ん？

「デュラン、あんたは行かないのか？」

「ん？ ああ……行かないな」

「へー。じゃ、そのチーズとって」

「どうぞ」

立ってる物は魔王でも使え。

あ、トマトも一緒に乗っかってきた。なかなか気がきく奴だな。
後でパンで挟んで食おつと。

皿を抱えてコンパートメントの隅っこに座り、上に乗った朝飯をちまちま齧る。

「で、何で残ってるの？」

「俺は餌だ」

餌？ 何の？

「俺が動いては奴らも襲撃しづらいだろうからな」

「あ、成程。敵をおびき寄せといてパクっといく訳か。チヨウチン
アンコウみてえだな」

「……。まあな」

ふーん、まあごくろーさんってなもんですよ。

「ん？ てことはここ一番危険なんじゃ」

「そうだな」

「だせー！ ここからだせー！」

死ぬー！

「まあ待て勝手に外に出るな。危ないから」

「ぎゃー、無理心中ー！ 無理矢理おそわれるー！ 乱暴されるー！」

「人聞きの悪い事を」

苦い顔でオレの首根っこを捕まえてひよいと元の位置に戻し、デユランは「それ以上騒ぐと俺が襲うぞ」とそれはそれは美しい笑顔を浮かべやがりました。

くそう……暴力反対。脅しに屈してなるもんか。

オレは隅っこで膝を抱えてギツと睨む。

「詐欺師、強姦魔、痴漢、変態、誘拐犯、鬼、悪魔、鬼畜、お前なんか魔王だ」

「……。ナカバ、最後まで黙って話を聞け」

「ハイ」

「良いか、ここが一番安全だ。何故ならこの周囲にはDDDDの5thを配置してあるからだ」

「……さつき他に誰も居ないつつたじゃん」

「部外者は居ないと言ったんだ」

……そうだったかも。

「それと、少し襲ってくる連中にはフォローが必要なので……ここで待ち伏せている」

「フォロー？」

「洗淨作業だ」

お前の言う事は分からん。

あんたが驚きの白さなのは良く知ってるけどさ。

「取り合えず俺の傍が一番安全だ。分かったらそこに居ろ。離れてはこの体のスペックではカバーしきれん」

「リムリンとヴィーたんは危険ってこと？」

「連結部分は一番防衛が厚い。DDDの戦いぶりを見ておくのも彼女たちには悪くないだろう……特に、あのヴィクトリアという少女の方はな」

「そんなにDDDって凄いわけ？」

「まあな」

まあ、実際被害を受けてる魔族のデュランがそう言っならそんなんだろう。

ヴィーたん行き詰ってたからなあ。

少し学校の外の出来る人ってのを見る方が良いのかも知らない。

「ありがとう」

「何？」

「ヴィーたんの事考えてくれてさ」

「ついでだ。……お前、自分の事で無ければ意外に素直に礼が言えるのだな」

何故か苦笑された。

なんだよ。友達に良い事あったら一緒に喜んで、相手にこっちもお礼言うのが当然だろ。

友達だもんよ。

「さて、そろそろ俺の匂いに惹かれて愚か者が寄ってくるぞ」

「フェロモン？」

「……まあ、そうかもな」

え？ あってるよね？ そういつのフェロモンっつーんだよね？

「ナカバ」

「何さ」

「朝食がこれ以上床に落ちないようにキープしておけ」

「あいあいさー」

そう言う事なら任せとけ。

オレは口いっぱいチーズを頬張ったままびしっと敬礼した。

戦闘準備とオレ（後書き）

【作者後記】

さーで、ナカバが居る状態でどこまで戦闘書くかなあ……。うっかりすると即座に残酷シーンに行きそうになる問題児の尋です、どうも。

暑い日が続くなかご来訪ありがとうございます。拍手感謝です。久々のリアルタイム投稿です。

お気に入り登録79まで増えました。ありがとうございます。

それと、リクエストありがとうございます。

出来あがった順にUP予定です。雑談に上げる方が良いのかな……。

まあ、まだ続きます。

引き続きお付き合下さいませ。

作者拝

閃光火花とオレ

コンパートメントのドアの外で爆発が起きた。

音がものすごいうっさいけど、オレ自身思ったより冷静だったのは多分魔界まじでさらに凄いストーカー放火魔見てきたおかげだろう。

や、そんな事で度胸ついてもちっともさっぱりうれしかねえけどな。

「ごわーん、と部屋が揺れてちよつと食べにくい。」

「デュラン、うっさい」

「俺に言うな。今は音響遮断をかけるだけの余裕はこの体には無い。遠隔射撃か……考えたな」

「考えた？ 何が？ 遠くからだとか何か良い事あんの？」

「俺の姿を見ると暗示が解けるからだ」

「あー、アンタの姿って悪夢に出そうだもんね」

見たら一生忘れられなくなりそう。

目をうがい薬でごしごし洗いたくなりそう。てかだったし。

今のデュランは色気が本体より減ってて、デュランの二割引きみたいな状態だけどそれでも相当酷いもんよ。

トラウマもんの美貌ですよ。

「つて、ん？ 暗示ってどういう事？」

「洗脳と言えればいいのか？」

「や、どっちもびみよー」

「まっただ」

カシャンとデジャンジャーに銃弾を装填してデュランがクスと笑う。

前から思ってたけどこいつ、こつ言う場面で妙に楽しそうに笑うよなあ。いや、普段から楽しそうに頭足りん感じのへらへらした笑い方してるんだけどさ。

何かこつ……うーん、上手く言えない。」

普段がフフ、みたいな含み笑いなんだけどこつ言う時はニヤリつてな悪い感じのスマイルになる。

オラわくわくしてっぞ！ みたいな悪ガキの笑み。

デュランってこんな顔して、落ちついたような雰囲気出しておきながら実際かなり好戦的だよな。

魔族だからなんだろうか。

「しかし、出てこないなら引き摺りだすまでだ」

おお、魔王モードに。

「コーヒー好きの五歳児くせに。婦女誘拐犯のくせに。欠食児童の癖に。身分詐称の年齢詐欺の癖に」

「……ナカバ、小声で背中に向かって悪口を言うのは止める。集中が乱れる」

言いながらデュランは扉を開けて無造作に通路に出て、そこに転がってる何かを拾い上げる。

おい、三秒ルールはそれには適用されんぞ多分。

「ふむ……安い手だ。悪くは無いが」

「何それ。安いの？」

「値段も手段もな。これは轢弾……魔力を充填して目標に向かって射出する。既に中身が出切って今は空だ」

ほら、と投げられた物をキャッチ……出来なかった。

「……」
「うっさい黙れ」
「何も言つて無いだろう」
「目が語る。目が煩い。黙ってる」
「はいはい」
「ハイは三回」
「はいはいはい」

「よし。」

オレは満足して落っこちたレキダンとやらを拾い上げる。うわー、重い。良くこんなポンポン撃てるな。

考えてたらパシユという気の抜けたサイダーみたいな音の後に、デュランの居る通路を暴風が駆け抜け、遅れてドオンと二回目の揺れが来た。

「今度は何？」

「飛んできた奴を撃ち落とす」

乱れて目にかかった髪を手で払いつつ、デュランが何か非常識な事を言った。

今の奴の後ろに立っちゃいけない気がする。

「向こうの射撃の正確性が上がったな」

「へー」

「分かって言ってるか？」

「や、全然」

「正確性を上げた先に何かがあると思う」

「すあおきすあ？」

「暗号遊びをしると何時言った……良いか、奴らの狙いはここだ。」

多分あと二発も撃てばここに命中させられるようになるな」

「ピンチじゃん」

「そう言う事だ」

そう言う事だ、って……お前落ちついてる場合かよ。

「問題無い」

ガシャン、とデデンジャーを構えるデュラン。

パシュツとさっきの音。

デュランの体が宙を舞うようにしてコンパートメントの中に戻り、ピシヤリとドアを閉じる。

次の瞬間、ドアにつけられたガラス窓の向こうを轟音を伴った真っ白な閃光が埋め尽くした。

うわー、まぶしー。

「……何今の。目えチカチカすんだけど」

「まともに見たのか？ 仕方のない奴だな……」

「そう言うのは先に言え」

うがー、目がー、目がー。

某大佐の気分をリアルで味わってたら、デュランが目の上から手を当ててきた。

お、つめてー。

「で、今の何さ……」

「無力化した」

「はい？」

「あの手の魔力の注入が必要な物は作業途中でその器となる物を完全に破壊すると、方向を失った術者の魔力が暴走して一気に流れ出

す

オレの瞼の上に手を乗せたままだったけど、デュランが小さく笑ったのが何と無く分かった。

「結果として大半の魔力を外に放出した術者は無力化される」

「へー、何か複雑っぽい」

「少しでも術者と器の間に回路が繋がっているのならばこの程度簡単な事だ」

「そりゃ普通簡単で済む話かあ？」

一瞬自分のセリフかと思ったが、オレここまで柄悪くないと少し遅れて気がつく。

オレはもうちょっとお上品だ。

デュランの手が瞼の上から離れたんで、オレは声のした方向を振り返る。

「ちーっす」

何か、湧いて出てきてた。

閃光火花とオレ（後書き）

【作者後記】

戦闘書くのは好きですが、好きなのと上手なものとは全く話が別です。どうも、下手の横好きの集合体の尋です。

ご来訪ありがとうございます。

拍手ありがとうございます。

うっかり来ちゃった方、次のうっかり期待しています（待て）。

あとまだ出さなきゃならん奴らが三人いて、気分でまた増やす事もしそうな気がするのですが取り敢えず一人追加です。
まだ続きます。

作者拝

傭兵登場とオレ

「どーも、まいどDDDっす」

「どっから、でてきた、ドミノ（ピー）ザ？」

「や、そのDじゃないからな」

はたはたと手を振ったそいつは窓枠に乗っかっていた。

えーと、多分人間だよな。うん。オレらと年齢そんなに変わらん気がする。

腰に水色の剣差してるし、あの腕章からするとDDDの社員か。ぼさつとしたかんじの莓ピンクの髪、茶色い肌。どっかで見たような外見だな。

えーと、これは……そう、アポロチヨだ。

そんな事を考えてたオレ達が何時までもノーリアクションで居たので、向こうは暫くして気まり悪げに、

「……あれ？ 部屋間違えたか？」

「いや、あっている」

言っただれの傍に膝を着いていたデュランが立ちあがり、振り返る。

その顔を見てアポ チヨコ（仮名）が目を思いつき見開いて呻く。

「うお、超ド級の美人」

あ、デュランの笑みが微妙にひきつった。

「何？ アンタが今回の依頼主か？ うっわー、噂にや聞いてたがすごい美人だな」

「誰がそんな事を……」

小声でぼそつと呟くデュラン。

オレが続くセリフをアテレコしてやるう。『言った奴、後でコロス』。

「で、隣のはその弟……」

オレを見て暫く黙るアポ チョコ。

「じゃないな、貧相だし」

「うっせえ」

何見比べてんだよ。

てか兄弟じゃねえよ。ありえねえから。世界が終わるから。

「てか今の魔力暴走、そつちのお姉様の仕業か？」

「お姉様じゃねえし……男だし」

「何っ?!」

目を剥いたア ロチチョコに苦笑いするデュラン。

「なんてこった……もろ好みの直球ど真ん中に炸裂する炎の魔球だ
と思っただのに」

「消える魔球の方だった、と」

「うるせえ！」

窓枠で頭を抱えていた姿勢からガバツと顔を上げて叫ぶアポ チ

ヨコ。

「だって詐欺だろ！ あの顔で、あの色気で男なんて！」

あ、詐欺呼ばわりされてデュランがちよつとイラつとしてる。

くどいようだが、デュランはあんな姿形しといて自分の容姿の事でほめられたりするのが大嫌いという偏屈者だ。

魔界に居た時は「美しい」とか叫んで飛びついてくるストーカーを半殺し……や、九割がた死亡状態に追い込んでたしな。うん。

「それで、仕事をしに来たのではないのか？ それとも解雇されに来たのかな？」

につこりと。冷気を纏って微笑む氷の女王様 ならぬ魔王様。

それに嘆いていたアホがビシツと姿勢を正し、表情をカチツと切り替える。器用だなこいつ。

「お待ちせしました、DDD第二二八班の班長アドルフ、ご注文にオーダー従い参上しました」

「遅い」

「ありや……」

「遅れた分、働いてもらうぞ」

クスと笑って声をかけたデュランに ロルチョコ改めアドルフは一瞬ポカンとし、それから顔を赤くして「はいっ！」とか敬礼をとっていた。

おーい、大丈夫かー？

うん、まあ気持ちは分からんでも無いけど……デュラン滅多に仕事期待してるぞ、つばいこと言わんもん。

ああ言うのを上に立つ貫禄っつーんだらうか。

あんな風に言われて働くなら気分良いだろうなあ……オレにはありえませんが。

「で、パトロンさん。話仕切り直すがさっきの魔力暴走はあんたか？」

「そうだ」

淡々と答えたデュランにヒュウと口笛を吹くアドルフ。

「すごい度胸だな」

「あいにく度胸だけは持っているのにな」

「……クール過ぎだろ、マジ惚れる」

男だぞ。くどいようだが。

「仕事の中身は分かってるな」

「全員生かして捕獲」

「宜しい。では来い……さっさと終わらせるぞ」

ふわりと白衣を翻したデュランにアドルフが「一生ついて行く」とか何とかほざきやがった。

重症だな、うん。

傭兵登場とオレ（後書き）

【作者後記】

意味のない伏字が好きです。（ピー）ザハット、とか。どうも、人生の無駄に力を注ぐ尋です。

さて、DDD登場です。

アポロチヨコのアドルフ君。

アドルフとは高貴な狼という意味だそうで、軽くセシエン君（前作参照、デュランの執事兼弄られ役）にひっかけている部分もあります。ただし脇役。

何せ当初の予定に無い奴なので……。

まあ、人間同士の問題に介入するのを嫌うデュランが居る時点でこうなる事はある程度約束されてたとも言えますけどね。

さて、最後になりましたがご来訪の皆様へ感謝を。

拍手をして下さる皆様へ親愛を。

まだ続きますので宜しければお付き合ってくださいませ……ってかまだ目的地着いてないのかorz

作者拝

事後処理とオレ

見た目は某チヨコレートでも、アドルフの腕は確かだった。

てか、初対面なのに何あの共同作業の息の合いつぶり。

二人揃って廊下に背中合わせに立って、遠くの敵はデュランが銃で撃つ。近寄ってきた奴はアドルフが剣で切り捨てる。んでもって同時に氷像へと姿を変える。

その二つを掻い潜って突入してきた奴はデュランが無造作に手首を掴んだかと思うと壁に向かって叩きつけるように投げ飛ばし、その横ではアドルフの回転蹴りが腹に決まった奴が吹っ飛ばされる。あつという間に死屍累々。

や、何て言うか……一方的過ぎてこっちはポカーンてなもんですよ。

ま、良いや。

バトリ事はまかせてオレはオレの仕事をしよう……つまり、部屋の隅っこで残った朝飯を胃の中に片付けるってことなだけだよ。うーん冷めるとやっぱ味が微妙だな。

そうこうしてるうちにだんだん周りが静かになってきて、暫くしてガシャガシャとサイバト ンみたいな音を立ててどっかから完全武装の若い奴らが集まってきた。

そして通路の中央の陣取ってるアドルフに向かって声をかける。

「班長！ 終わりました」

「あと民間人保護しときました」

「おーう、ご苦労。全員そろってるな？」

「みりゃ分かるでしょ」

「良いんだよ。確認するのが俺の仕事なんだから……で、どうしますボス？」

いつの間にかデュランの呼び名がボスになってる。

ぶふっ、似合わねえ。

思わず爆笑してしまった。

「……」

なんだあれは、見たいな目で見られてしまった。

てか、デュランの苦笑いが一番心理的ダメージ大だった。

そんなオレから夏場に暫く水を出して無かった外の水道、みたいな温度の視線を逸らしデュランはDDDの皆さんらしき少年少女合唱団の方へ振り返る。

「お疲れ様」

デュランがにっこりと微笑みを彼らに向ける。DDDの皆さんが動揺した。

お前の笑顔は毎度そんなリアクションばかりだな。

「民間人は……ああ、その二人は大丈夫だ。お疲れ様リミュリシエルさん、ヴィクトリアさん」

「あ、リムりん。ヴィーたん」

保護された民間人ってのはリムりんとヴィーたんだった。

「おかえり」

「ただいま……ごめん、大丈夫だった？」

「うん、平気平気。割と腹いっぱい」

両手を上げてヒラヒラさせてみる。いや、自分でも意味分からんぞこのポーズ。

そう思ったけどリムリンとヴィーたんは疲れた顔からちょっとだけ笑顔になった。うん、なら良いや。

オレは戦うとか無理だし。

だから、こうやって出迎えるのがオレの大事な仕事で役目なんだ良かった。

左右からぎゅっとリムリンとヴィーたんとはグされる。

……ちよ、ちよっと苦しいけどガ、マ、ン。

「おい、ポーズ。この捕虜の山どうするんだ？」

「五人ずつの組にして進行方向右手側の各コンパートメントに入れておけ。見張りは各二名で充分だろう。けっして自殺はさせるな。抵抗が激しい者がいるなら私に言え」

「何か対処法でも？」

「麻酔針を打つ」

「うわー、さらっと鬼畜発言。」

「へえ、そんな技術もあるなんて東の研究員ってのはよっぽどのハードワークなんだな」

「容易い仕事なら私がやる必要は無い」

言って、デュランは振り返ってアドルフに流し眼を送る。

「お前もそう思っているのだろう？」

「う……まあ……」

「分けたら順に一名ずつ隣のコンパートメントへ連れてこい。洗脳を解く。終わった者から左手側コンパートメントへ移動。眠らせて

おけ」

「アイアイサー」

ビシツと敬礼して、アドルフはちらつとオレの方を見る。

何だよつ、とガン飛ばし返したら笑われた。

ついでにスツと近寄ってきて、口に手を当ててひそひそと何か言ってくる。

「威勢の良いチビ助だな」

「……これが地なんだ」

「そりゃ結構だな。なあ、ところであの別嬪さんえらくオトコマエすぎねえ？」

「オトコマエ……どうだろ」

「黙ってりゃ絶世の美女なのによ。ガンスキルは俺ら顔負け、おまけに白兵戦も相当なレベルで麻酔針に洗脳解除だあ？ とんでもねえ人だな」

「そこで黙って無いからデュランなんじゃないんですか」
「なーる」

何を納得したんだろう。

「ちよつと、ナカちゃんに何してるの」

ぐいーつと腕を引っ張ってリムりんがオレを引っ張り込んだ。

ついでにむにん、とリムりんの胸に後ろ向きに倒れ込んでしまった。

……。

「えーつと、ごめん？」

リムりんの胸を後頭部のクッションにしたまま顔を見上げ、オレは取り合えず謝ってみる。

「ナカちゃんは良いの」

につこり笑うリムりん。美少女は心が広がった。

「そっちのケダモノはダメ」

……リムりん、男嫌いだもんね。

「ふーん、何だ。こいつはあんたの弟か？ それにしちゃ似てないな」

「弟じゃないわ。手出したら許さないから」

「はいはい、過保護なこつて」

「他人にとやかく言われる覚えは無いわ」

「俺も同じさ」

「アドルフ、何をしている。来い」

デュランの声が響いた瞬間、二人の表情が変わる。

アドルフは仕事の顔に、リムりんは……何だろっ。怯えてる？
まさかね。

「お、ボスがお呼びだ。はいはい、ただいまー」

「あ、待って。オレも行く」

「あぁっ？」「ええっ？」

え？ 驚く事か？

オレは出口のところで扉の枠に寄りかかって腕組みして待ってる
デュランを見る。

「良いよな？ つーか問答無用で良いって言え」

「ん？ 別段構わないが……見てもさして面白くも無いぞ」

「や、別にそう言う意味じゃねえし」

「なら好きにしる」

「ういっい」

「……ま、雇い主の意向ならしょうがないか。おい、ボウズ」

「何ですか」

「追加しとく。お前も相当オトコマエだな」

「そりやどーも。あんたも悪かねえんじやねえの」

「一応誉めてくれたようなので、オレも同じように誉め返しておいた。」

「円滑なコミュニケーションってのはこういうのの積み重ねが大事なのだ。」

事後処理とオレ（後書き）

【作者後記】

はい、ましてもナカバが用語の間違いをやったのけてます。見つけた方には金一封差し上げ……る事は出来ませんが、どうも尋です。

戦闘シーンは結局さらっと流しました。

この後またあるし……。

ご来訪ありがとうございます。

拍手感謝です。

いつもいつもありがとうございます。

宜しければ今しばしお付き合いくださいます。

作者拝

人間電池とオレ

デュランにアドルフ、オレ、それから捕虜になった襲撃者。その襲撃者を連れて来るDDDの人。それから心配だからとついてきたリムりん、ヴィーたん。総勢七名。

「狭っ……」

「これだけ居ればな」

思わず突っ込んだオレにデュランが苦笑いしながら答える。

場所はオレらが朝食つてたコンパートメントの隣。

まあ、広さは変わらん訳でして……四人用のところに七人詰め込んだらそりゃ狭いわな。しかも一人は気絶中なんでやたら広い面積取ってるし。

「ボス、これで良いのか？」

「ああ、上出来だ」

クスと微笑みを向けられて赤面するDDDの皆さん。

口元が「平常心、平常心」と唱えてるような気がするのはオレの思いつきだろうか？

デュランはそのまま慣れた手つきで捕虜を椅子に座らせる。

おお、さすがデュラン。誘拐のプロ。

「ナカバ……」

「冗談だつてば。じょーだん。重い冗談」

てかオレの思考を読むなよ。

「さて……誰か手を」

デュランが「お手」ってな感じで手を出す。
とりあえずオレがはたき落としておいた。

ふう、良い仕事したぜつ。

「おい」

「何さ」

「遊ぶな。まったくお前は子供だな」

お前にだけは言われたくねえ……。
てか、

「や、意味他の人に通じてねえぞ。ほら、オレ以外ポカーンじゃん」

言われてデュランは振り返り、「ああ」と小さく呟く。

な、オレの言った通りだろ？ オレ正しい。

ふふんと笑ったオレにデュランは微苦笑して、言い直す。

「すまないが、誰か魔力の提供を頼む」

「魔力の提供？」

「今の状態では魔法が使えないのでな。端的に言えば魔力貸与……
魔力の外部供給の源を人間に求めると言う事だ」

あ、成程。魔力が自分に無いなら外から手に入れればいいのか。

考えてみれば魔術書なんかは本自体に魔力が込められてるタイプ
もあるしな。魔力が中に無いなら外から取るってな考えもあるのか。

えーと、つまり……人間電池。

「……………」

え？ 何で沈黙？

「分かった」

沈黙を破ったのはアドルフだった。

「俺がやろう」

「出来るの？」

疑問を投げかけたのはリムりん。ヴィーたんがその隣で頷く。それに対してアドルフの答えは気が抜ける感じの奴だった。

「さあ？」

「さあ、って」

「やってみれば分かるだろ。おい、お前らも待機しておけ。俺が取り合えず消耗具合を測る。それを基準にローテ組むぞ」

「了解」

「民間人のお嬢さん方は下がってってくれ。万一暴走した場合に備えて彼女たちにシールド展開を」

「了解」

「ときはきと指示を出すアドルフ。さすが班長。所属は神南署ですか？」

「ふふ、なかなか良い思い切りだな」

「ま、実際見てみたい興味半分……あとは追加報酬よろしく頼むぜ、ボス」

「成程。では、貰うぞ……お前の力を」

こら、手を取って妖艶に微笑むな。

そして皆さん、一斉に顔を赤らめて視線を逸らさないように。

大して意味ねえんだから、あの動作。何も考えちゃねえんだからあの五歳児。

ふえるもんまおつじじゅーせよ。

口パクでやるとデュランが苦笑いした。いや、本当に自重しろよ。

「それを言うなら自重だ」

「へ？」

「いや、良い……始めよう。手を」

きよとんと聞き返したアドルフに緩く首を振って、デュランはさっきのように手を差し出す。

その手の上にフォークダンスっぽくアドルフが手を重ねる。

「やてと……」

目を閉じるデュラン。すっ、と小さく息を吸って口を開く。

「『巡りて来たれ 来たりて集え 集いて従い 従いて成せ 二重の螺旋 弛む事無き流転 終わりに始まり 始まりに終わる』」

ん？ 急にどうしたデュラン。ついに可笑しくなったか？ ……

って可笑しいのは前からか。

「詠唱……」

「あ、あれ詠唱なんだ」

「聞いた事の無いフレーズですが……恐らく」

「大体魔力の外部供給と魔法行使と同時に出来る物なのかしら……」
「出来ないの？」

「成功したと言う話は聞いたことがありますね。理論上は可能なのですが……人から人というのは」

「ふーん。でもまあ何とかなるんじゃないかね？」

「信頼しているのですね、随分」

「や、別にそう言う訳じゃあ……」

何と無く声を潜めてひそひそと囁き交わしながらオレは呟く。

いや、デュランが珍しく見た目真剣モードだし。

や、こつち背中向いてるから顔は見えんけど、何か雰囲気か「邪魔するなよ。したらどうなるか分かってるだろうなあ？ ああつ？ 命が惜しけりやその口しっかり噤んでろやコラ」みたいな感じだし。

意識ですが何か。

「でもデュランなら何とかするだろ」

魔王だし。

「『集いたる者の宴 原初の渦 混沌の襦わすし 汝は我を知り 我は汝を知る 今一度空ひとたひからの座に宿れ、最小の単位にして最大の欠片よ』」

それにしても何も知らんで見てたらイタイ感じのポエマーだな、これは。

しかも白ずくめ。

……。

「ナカちゃん、何か目に入ったの？」

「いや、痛々しさに思わず涙が出そうな気がして……」

や、実際には出ないけど。

「うわ、すごい……」

アドルフが何か言ってる。

リムりん達を見ると何か信じられない物を見たような顔をしている。

え？ 何？ 見えねー！！

ビヨンビヨンとジャンプを繰り返し、オレはようやく見る事が出来た。

デュランの手に淡い白の光が宿っていた。

……え？ それだけ？

人間電池とオレ（後書き）

【作者後記】

久々のリアルタイム投稿です。

気分的にはお久しぶりです、尋です。

毎度ご来訪ありがとうございます。

お気に入り登録81人目、ありがとうございます。

拍手ありがとうございます。

今回ばれない程度に魔力の正体をデュランの詠唱に混ぜてみました。詠唱の辺りは説明の下書きは出来あがっているので、その内魔女編で書きたいと思ってます……。

まだ列車から降りられません……続きます。

作者拝

閑話説明とオレ（前書き）

一 身上の都合により短めで二連続

閑話説明とオレ

今から遡る事しばらく前。

オレは魔界でデュランの専属執事にして玩具にされてるワンコのセシエン君に魔力の塊ってやつを見せてもらった事がある。白くてピカピカしてたので、普通にパルツ ぽかった。

ちなみにセシエン君というのは喋れる賢いワンコで、ついでに料理も洗濯も掃除もこなしちゃう、まさしく一家に一匹欲しい万能ワンコなのだ。……魔族だけだ。

それはさておいて、魔力っていう奴はデュランによれば魔族の生命源で、普通は無色、でもって魔法を使う時のエネルギー……えーと、魔法が豆電球に灯りをとす事なら、魔力は電気。そういう関係らしい。

なんでオレのように先天的に魔力が体内に無い人とか、今のデュランのような魔力ゼロの人は魔法が使えない。

まあ、でも電池が無いなら諦めれば良いじゃない！ がオレだとすると、今デュランがやった事は、「電気が止められたら、隣の家から引いてくればいいじゃない！」というような事だ。

つまり、他人からの魔力借り受け。

無断でやったら犯罪である。

……ま、元から奴の行動は殆ど犯罪まがいだが。顔も含めて。

「へー、やっぱり普通はあの色なんだ」

アドルフの体の周りにオーラ 泉っぽく帯びている白色の光を見ながらオレはそんなところに感心してた。

その白いオーラは今ゆっくりと水みたいの流れで、繋いでるデュランの手の方へ降りていつてる。

ただしその流れがデュランの方に溜まる事は無いのは、デュランが片っ端からそれを使ってるからだ。指先から捕虜の人の方に向かって何かやってるっぽい。

もうエセポエマー、つーか詠唱はしてねえけどさ。

「……………なあ、ヴィーたん」

「はい、どうしましたか？」

「何やってんのアレ？」

「おそらく……………何らかの施術なのでしょうけれど」

よく、分かりませんねと呟くヴィーたん。

「干渉系のようにも見えませんが、詠唱が無いと言っ事はそもそも魔法では無い可能性もあります」

「ふーん」

じゃあ魔術かな。

「何か……………思ってたより面白くねえな。帰ろっかなー」

「え？」

「ん？」

「え、ええ……………そうですね。戻りますか？」

「うん」

さくつと戻って計画の続きでも立てるか。

「リムりん？」

「え？」

「どうした？ 何かぼーっとしてるけど大丈夫か？ 具合悪い？ さっきの戦闘で何かあったか？」

怪我してねえだろうな。

「あ、うん。ありがとう」

「ホントに平気か？」

「心配してくれるの？」

「当たり前だろ」

「……。もー、何て可愛いのっ！ ナカちゃんてばっ！」

むぎゅー。息、息っ！

「窒息しかかっていますよ」

「あら、ごめんね」

リムりんの胸は凶器になる。

うん。まあ死に方的に本望かもしれんけど？

「……………」

ぐったり。

「ナ、ナカちゃん、ごめんね？ 大丈夫？」

「お……………」

「……………やすませましょう」

「そうね」

「ごめんよ、オレこんなんです。

閑話説明とオレ（後書き）

【作者後記】

ご無沙汰しております、尋です。

ここ数日更新をさぼっておりますでしたが、理由と言つのがまあアレでして……。

貧しさに負けたー、いいえ、眠気に負けたー。

帰って来るなりベッドにダイブしておりました。起きてられなかったです。

昨日も一昨日帰って来てから夕方六時まで寝ておりました。

起きてからも口から出る言葉は「眠いー……」ばかりで……書いてる途中にねておりました。

コアラですか？（と自分に問いかけてみる）

まあ、そんなんでご無沙汰しておりました。

今日中にもう一本書きます……でもまだ眠いってどんだけでしょうな。

自然には勝てません。

作者拝

野菜飲料とオレ

「なっさけねー……」

ダウンしたせいでオレは現在コンパートメントでお休み中です。つまらねーし、なっさけねーし、マジでブルーだ。

ゴロゴロと一人で占領してる二人掛けの座席の上でオレは転がる。デュラン達は隣でまだ作業中らしいし、リムリンとヴィーたんはオレが具合が悪いからって何か探してきてくれるんだそう。

鍵かけてまで行くこともねえ気がすんだけど、ま、あの二人過保護だしなあ。

簡単な事でダウンするオレがいけないんだけどさ。

ま、向こうに着いた時にぶっ倒れてるってのも意味ねえから、今休む事にや賛成なんだけどさ。

あー、暇だ。

ひまー、ひまーと座席の上でゴロゴロしていると、ガチャンと唐突にドアの方で音がした。
へ？

「何でカギ閉めてるんだ、お前？」

ガラガラーっとドアが開いてアドルフが何故か入ってきた。

「ってカギ意味ねえっ！」

思わず起き上がって突っ込んでしまった。

ついでにタチクラミ。へにゃーっと逆戻り。

「お、おい……大丈夫か？」

「うあー……」

「寝てたのか。悪かったな」

「てか、今カギぶつ壊しちゃねえだろうなデメエ……」

「いや、ピンで解錠しただけだって。勝手に壊したりなんかしないぞ」

それはそれで大問題のような。

「とにかく寝てる。何か飲むか？」

「うーん……や、良い。てか何しに来たんだ？ えーと……」

ピンクの頭を見てオレは「あ、そうそう」と寝っ転がったまま手を打つ。

「DDDのアポ」

「アドルフ。俺は明 製菓の定番チョコレートじゃない」

それぐらい知ってるに決まってるだろう。

だけどその反応からすると他からも言われた事があると見た。

キラーン、とオレは目を光らせる。

「な、何だよ……」

「や、別に」

けっしてからかいポイント発見とか思ってませんよ？ 嘘だけど。

「で、何しに来たんだよアポロ」

「アドルフ。俺も休憩しに来たんだよ」

ちらっと隣のコンパートメントの方にピンク色の眼を向けるアド

ルフ。

デュランがまだ戻ってこないって事は作業中なんだろう。多分。まあ、向こうでゆっくりコーヒーで一杯、とかやってるのかもしれないが。……あり得る。

「魔力がそろそろ半分になるからな。回復回復……何か食べるもん余ってないか？」

「んー？」

あらかたオレが食いつくしてますけど。

オレはリュックをさがさやって、源氏パ を取りだす。

「ほい」

「お、お前甘党か」

「要らんやつたら食うな」

「いや、俺も甘党だからさ。助かる」

「ちっ……」

「……何故そこで舌打ちが来る」

「分け前が減る」

「あー、じゃあ今度何か奢るから今は勘弁してくれ」

やりい。じゃ、分けてやろう。

オレから源 パイを受け取って、アドルフは一口で「あーん」と食いやがった。

うわ、でっけえ口してんなあオイ。

「どうしてアドルフの口はそんなにでっかいんだ？」

「赤ずきんを食べる為、じゃないな」

なかなかグッドな切り返しだ。

オレは親指をグツと立てる。奴もグツと立てる。
友情（仮）が成立した。

「でー、デュランまだあの変なのやってんのか？」

「ああ、休まずやってる。凄い精神力だよな」

向かいの椅子にどっかと腰をおろして、アドルフがふーと溜息を吐く。

「魔法つてやつぱり精神力とか集中力要るんだ」

「お前やったことないか？」

「ないない。あり得ない」

「へー……便利だぞ？」

「なくても生きてけるし」

「ま、そりゃそうだ」

ハハツと笑って、「確かになあ」と妙に感心した風に頷くアドルフ。
フ。

そんなに感心する事だろうか？

「あー、だる。やつぱ一気に消耗するとくるな……」

「魔力つて抜けると疲れる？」

「疲れる疲れる。大量出血したみたいなき感じになるな」

「いやいや、そんな経験ねえから」

「あ、そうか。どう説明したもんかな……」

「まあ、抜けると疲れるんだな」

「そうそう。俺なんかは回復特化だから割と楽なんだけどな」

「おお、生白魔術師」

「そりゃゲームだろ。大体治癒魔術と回復特化は別物なんだよ」

苦笑いするアドルフ。

「何が違っつて？」

「俺は自然回復能力が高いんだよ。へばってもすぐ直るって奴。便利だぞ」

「うわー、良いなー。八割よこせ」

「渡しすぎだろ」

「ですよー」。

「ま、こればかりは生まれつきだからな」

「ま、オレのも生まれつきだしなー」

「ボスのあれも生まれつきだとしたら大したもんだな」

「何が？」

「魔法の行使だよ。足が無い魚が二足歩行を覚えようとするみたいなもんだからな。生まれつき無いはずの物を使って、流れを制御して、利用する。相当訓練しないと出来ない事だぞ」

「やっぱあの人ただモンじゃないな、とかアドルフは言ってるけどオレにはちんぷんかんぷんだった。」

「要は、デュランは存在が反則だと」

「ま、まあそう言う表現も間違いないけどさ。何者なんだろうな」

「魔王だろ」

「ははっ、そりゃ行き過ぎだろ。あの顔だとどっちかつーとニケだな」

「ミケ？」

「それじゃ猫だろ。ニケ。勝利の女神だ」

「はあ……」

実物は魔界の暴君、帝王ですが。
お前デュランに夢見過ぎてねえか？

「ま、自分で考えれば？ オレに鎌かけてもオレも何も知らんし」
「……………ばれてたか」
「ばれらいでか」

バラライカ。いや関係ねえな。

「休憩なら他でも出来るだろうし、カギかかってんのにわざわざ入って来たって事は他に目的考えらんねえじゃん」

「あ……………」
「本当は留守中にゴミあさりしたかったんだろうけど、オレの前じや無理だから雑談……………な感じか？」
「降参」

ホールドアップするアドルフ。

「お前もそこまで分かってて良く相手するな」

「え？ だって隣デュランだぜ？ 雇い主にクビつつわれたらあんたら一巻の終わりだろ？」

「……………それにしても度胸あるな。声も上がらないうちに終わるとか、人には言えない事で口割らされるとか考えなかったのか？」

「その時はその時で反撃する」
「は……………お前小さ」

ていつ。

「ぐあ、オレのシャツがトマトジュース色に！」

「し、か、え、し」

「しかも何か台詞が軽くむかつくっ?!」

ニヤリッ。

「お前、調子に乗ってると後で痛い目見るぞ……」

「後でおごつてくれるんだよな?」

「……」

「良いぞ、好きなだけーんと奢りたまえ。許してつかわそつでは
ないか」

「数秒前の俺を止めてやりたい」

「何だよ、食の恩人に対して」

てか既に数秒以上経過してるからな。

「ちょっと来い」

「ん?」

呼ばれたので近寄ってみた。

わしっ。

頭を掴まれた。

「お前はちょっとは反省しろー」

ぎゃー、こめかみー!

なんのっ、くらえトマトジュース!

「おまつ!」

「ぎゃーすぎゃーす! トマト色に染まれアポロ!」

「アドルフだつってんだろ! このこのこのっ!」

「……何やってるのかしら？」

ん？

吹雪のような声に振り返ると、リムりん達が入口のところ立っ
てた。

それを見てオレはアドルフを指し、

「こいつが襲ってきた」

「なっ、それはお前も」

「……この、ケダモノ！！」

「馬鹿、こんな所で剣抜くなー！ 話を聞け！ 話をっ！ うわあ
っ！」

ざまあみる。

野菜飲料とオレ（後書き）

【作者後記】

書きたい事があるのに、キャラ同士の会話があっさりわき道にそれてなかなか本題に入らないというこの現状。

しかし掛け合いやってる時がナカバが一番楽しそうなので「まあ良いか」と放置してます。

どうも、放任主義の尋です。

ご来訪ありがとうございます。

拍手ありがとうございます。

お気に入り登録84人目ありがとうございます。

皆様のお陰で何とかやっています。

まだ前半すら終わってない状況ですが、宜しければお付き合いくださいませ。

作者拝

趣味其々とオレ

「何だこの惨状は」

「話すと長いんだけど、まあぶっちゃけはしゃぎすぎっ。」

「お前も当事者だろうがちびっ」

「ちび言っな」

「やれやれ」

ま、確かに「やれやれ」な状況になってるけどね。

床は赤い液体でびしゃびしゃだし、物は飛び散ってるし、オレのこめかみはグリグリされたし。

ん？ 最後のだけ私情が混ざってるって？ 気のせい気のせい。

その無残な車内をデュランはぐるっと紫の目で見回して、ふうと肩を竦め、

「仕方のない……貰うぞ」

「へっ」

ポン、とアドルフの肩に手を置いた。

瞬間。チカツと接触面が白くフラッシュして、混沌としていた室内が一気に元通りに戻った。

アドルフのシャツもついでにトマト色から元の白に戻っていた。

ちっ、余計な真似を。

「今一気に半分持って行かれた……」

「この程度平気だろう。先刻確かめたからな……プロならば仕事にはあまり枷を外すな。これはそのペナルティだ。分かるな」

「はい、ボス」

デュランの言葉に神妙な顔になるアドルフ。

「今の魔法は一体……」

「詠唱破棄、でしたよね」

何かヴィーたんとりムりんが凍ってる。

何？ 何かあったのか？

……うん、分からんからほっとこう。

そんな二人が冷凍パスタになってる間にデュランはアドルフの方に指示を出しているようだった。

「向こうは終わったからな。後は纏めてそちらで引き払ってくれ」
「了解」

「追加報酬は今日中にDDDを経由して振り込んでおく。御苦労」
「毎度」

「ん？ あいつらの仕事ってこれで終わり？」
「そうだな……」

戻ってきて向かいの席にスツと座るデュラン。
ついでに足を組むのはもうオプシオンだろう……そんなに足が長いのが自慢か。そうか。

「少々長引いたが、もう少しで終点だ。契約は車内での護衛……到着すればそこで終わりだ」

「ふーん……あ、って事はついに駅に着くのか？」

「他のところに着いたのならば、それはりっぱな事故だな」
「うっさい」

でも、駅楽しみだなー。

ふんふふーん。

あ、写メの準備しねえとな。

「何か楽しそうだなちみつ子」

「何だまだ居たのかアポロ。後ちみつ子言っな」

「アドルフ。そろそろ覚えるよ」

「や、覚えても無駄な物は頭に入れない主義なんだ、オレ」

「……」

「覚えなければならぬ事も頭に入らない奴だがな」

「デュランっさい。てかうざい」

DDD(どっかの、ダメな、誰か)のアポロチヨ　より今は駅の時代ですよ。

「駅ー、駅ー。生足、生駅、生なまごー」

「どんな早口言葉だそりゃ……」

「私としては『なまご』の原型が気になる所だな」

「黙れ。ちよっと噛んだだけだろうが」

「そんな良いか、あの駅？　お前駅マニアなのかちみつ子」

「駅マニアじゃねえよアポロ。あれが」ハウスだっるのが大事なんだ」

「……」ハウスって何だ？」

「……え？」

「だから、」ハウスって何だ？」

「はあっ?!」

思わず耳に手を当てて聞き返してしまった。

「アンタ、」ハウスも知らんのか！　」ハウスというのは……、」
ハウスと言うのは……っ！」

D和ハウスの賃貸住宅の事じゃろうが！

……と言う訳では決していない。

ジャン・ジャック・ミレイ設計の建築群の名称である。

「誰だそれ。聞いた事も無いぞ。もしかしてすごいマイナーな奴じゃないのか？」

「みぎやー！！」

げーし！！

「どわっ！」

「分かった、喧嘩だな。むしろ戦争だな。よし、買ってやるうじやねえか」

レッドスネーク・カモン、とファイティングポーズを取ったオレの首根っこを誰かがひよいと掴まんだ。

こんな事をやる奴は世界広しと言ってもこの世界には多分存在しない。

異世界には一匹居るが。

「大人しく座って居ろ」

「だってアイツ！」

「また倒れるぞ。観光中、常にこの状態で巡りたいのならばそれも吝かではないが……」

ぶらーん、ぶらーん。

珍獣モード。

「……席に戻る」

「宜しい」

ぺいつと座席に落とされた。

くそう……。

オレはこそつと振り返って、アドルフに向かって親指で首を掻く切るジエスチャーをやっておく。

何故か苦笑いされた。ううー。

ま、確かにジャン・ジャック・ミレイはマイナーだけどさ……うん、それは認めよう。

現実を認める。

これ、先へ進む為の大事な一歩だ。

人類にとっては小さな一歩かもしれないが、一人の人間には大きな一歩だつてな感じ。

でもさー、ミレイはすつげーカッコ良い建物作つてんだよ。

セントラル

中央のただ一つの駅の設計者に選ばれてるぐらいだし、実力だつて世間にそれなりに認められてたはずなんだぜ？

セントラルステーションだつて、設計されてこの方一度も改装を必要とされてないんだぞ。すごくない？

……ま、それはセントラルの天候が完全制御の元にあるせいもあるんだけど。

ユルグシラトル

世界樹自体が世界全体の天候制御を兼ねてるんだから、お膝元なら当たり前だよな。

うん……オレは好きなんだけどな、ミレイ式建築。

マイナーすぎて話が合う人が居ないのがちょっとさみしい。

「……ナカバの相手をしなくて良いのか？」

オレがかかるーくブチブチ言いながら（ついでにアドルフに向かつてありったけのガンを飛ばしながら）座席に座って足をぶらぶらさせてると、デュランがちらっとまだ凍っているヴィーたんとりムりに目を向けて笑む。

それに二人して凍ってる状態が解ける。
レンジでチーン、解凍。ってな感じだ。

「そうですね」

「貴方に言われるまでも無いわ」

お、駅見えた！！

くるつと方向転換したオレの上をリムりんのだきゅ攻撃がヒュッと通過してった。

……あれ？ 今オレ回避しちゃった？

趣味其々とオレ（後書き）

【作者後記】

マイナーどころを好きになってしまふ人間と、マイナーだから好きになる人間。

同じ対象を好きと言ってるにも関わらず大分差があるような気がするのは何故でしょう……。

どうも、とりあえずマイナーであるかどうかすら良く分かってない好みの持ち主尋です。

ご来訪ありがとうございます。

拍手ありがとうございます。

メッセージ感謝です。

お気に入り登録サバ読んでゴメンナサイ（嗚呼）……いや、普通に記憶領域が狭い上にボロいんで……。

と言う事で83人目の登録者様いらっしやいませ。

どうぞずずいーつと奥まで……ささ、遠慮せずに。ああ、逃げないで！（嗚呼）

とか馬鹿やってますが、本当に皆様ありがとうございます。

やっとこさで主要舞台に到着いたしました。

こっから先にまたあのえらく書き難い奴が出て来るので腹くくって行こうと思います。

まだまだ続きますので、宜しければお付き合ってくださいませ。

作者拝

中央到着とオレ

青い空をカッターナイフで縦半分に取り取って鈍色に着色した、そんな感じの巨大な金属っぽい壁。

そこから四方八方に複雑に伸びる同じ色の「枝」。

文字通りこの木なんの木巨大な木、な形をした世界最古の建造物

世界樹、ユルグシラドルの内側が世界の中心、セントラルだ。

最高裁判所とかDDD本社とか、そういう司法・武力の最高峰だけじゃなくて、世界共通貨幣を生み出すドラウプニル中央造幣局や、世界中のありとあらゆるものを動かしたり動かさなかったりやりたりやらなかったりする為のエネルギーのほぼ百パーセントを生み出している古代遺産【永久時計】がある世界経済の中心でもある。

以上、パンフレットより。ただし一部表現改変済み。

「でも駅の事載って無い……」

「ナカちゃん落ち込まないで……」

「穴場スポットと言う事で良いのではありませんか？」

「穴でスポットだと穴ばこだらけっぽくねえ？」

「穴だらけというのはお前の知識の話か？」

最後のセリフが誰かは一々説明するまい。当然ヤツだ。

「ちなみに、この場合のスポットは場所……穴場スポットという名称で重なっているのは場の方だ」

「あ、そうなんだ」

「そうだ」

でも、穴スポットっていうと落とし穴っぽい響きになるよな。

そんな話をしながらオレ達はアサギを降りて、プラットホームに立つ。

普通の駅とは雰囲気が違うなーと思うのは、継ぎ目のない足元のせいかもしれない。

今の空模様がダイレクトに出るって話は聞いてたけど、マジで宙に浮いてるみたいに見えるな、この床。

高所恐怖症の奴が来たらこの場で泣きだすんじゃないかなろうか？

オレは高いところ好きだから良いけどさ。むしろ鼻歌とか歌っちゃいそうだけ。ふふん。

……や、歌わねえよ？ さすがに。

……ホントだってば。ホント。

上を見上げると足元と鏡映しに青空が透けて見える。

空が半球になって、その下に星が配置されてるってのは今更言うまでも無い話だが、本当にこうやってここから見上げると空が弧を描いてるのが良く分かる。

五月初旬の空は優しい色をしていて、そこに水をたっぷり含ませた絵筆ですーっと引いたみたいな白い雲があっちからこっちへかかっている。

その手前に更に雲があって、その手前がこの駅の天井だ。

ラグビーボールかレモンをスパツと横に切ったみたいな楕円形の天井は透明で、紫外線バツチコイ！ な勢いで光を通過させてる。

ま、実際紫外線は透過してねえんだけどさ。

その間に細く細く白い線が見える。

あれが屋根の骨組。

肋骨みたいな構造が天井とその下で向かい合ってる。

屋根の表面に沿って円弧を描く骨と、その反射みたいに内側に向かって円弧を描く骨。

天上の空と足元の空と。

二重、三重の水鏡。

足元からふわーっと浮かびあがって、空でも飛べそうな、重量が揺らいでいきそうな感覚。

ま、オレのような素人のガキがこれを表現しきるなんて、それこそ役不足だろうけど。

「うお……すっげー……」

や、何かやっぱテレビで見るのと違うなあ……。

「オレ、この旅が終わったらここに住むんだ……」

「どんなフラグか少々判断に迷うが、結論から言えば無理だ」

子供の夢ってのはこうやって無神経な大人によって破壊されるものである。

良いよ、無理って知ってるし。

ミレイ最高。

「本当に綺麗ね……」

「綺麗だけじゃねえってのがミレイ式って感じだよなあ……あんなに光が入る作りなのにすっげー頑丈らしいぜ。どんな計算したらあんなもん思いつくんだろ」

屋根があって壁があるって事は、世界よりはずっと狭い空間のはずだろ？

でも、狭いのには息苦しくない。

ふわーってしてるのに、広がりすぎて怖いって感じもしない。

丁度良いサイズ、初めての場所なのに昼寝したくなるような場所。それを作っちゃうミレイはやっぱすげえよ。

クールだ。

駅のホームっていうより、これだけで一つの家ホームって感じ。

「ホーム、ホーマイ、ホームエスト」

「それは、何かの詠唱ですか？」

「早口言葉かしら？」

「どっちもハズレです。残念、ボツシユート。ちやらっ、ちやら、らーん。」

「そんなに騒ぐようなもんか？」

あ、耳鳴りが。

「耳鳴りじゃねえ……おい、お前年上に対する礼儀ってのがジパング人はしっかりしてるんじゃないのか？」

「格上に払う敬意なら用意してますが」

「……一瞬ちよつとカツコ良いとか思っちゃったじゃないか」

え？ どこが？

「しかし、今時こんな合成画像ぐらいで騒ぐなんて天然記念物並みの存在だな」

「合成画像が珍しいんじゃないやありませんー」

あ、でも歩くたびに足元にウォータークラウンが出来るのは結構楽しい。

そっか、これ水面のつもりなんだ。

だから、上の荷物運搬用通路を通じてゆく荷物からの影が泳ぐ魚の形になるようにしてるのかあ……成程。

「……」

手を伸ばしてみたなら波紋が広がって、魚型の影は揺らいで消えてしまった。

「おおー」

「……何やってんだ？」

「アポロ黙れ、邪魔」

「アドルフだって言ってるだろ……お前、意地でも最後まで覚えな
い気だろ」

や、覚えてるけどこの良さが分からない奴の名前を呼ぶ気は無い。
お前なんてアポロで充分だ。

こういう演出とか端々まで気配って、しかもお掃除メンテナン
スまでばっちりフォーローしながらきちつと建物の中に一つの世界を
作っちゃうミレイのセンスが良いんであって、別に「映像技術スゲ
エ！」みたいな話はしてねえんだよ。

「おい、チビ。チビスケ。ちみっ子。おいって」

オレの名前もチビでもちみっこでもねえよ。ましてオイじゃねえ。
テメエ、人に言うなら自分がまずまともに呼びやがれ。
ってことで、三百六十度で無視対象決定。

「……」

「なあ、オイってば」

「……」

「……アドルフ」

オレの態度に見かねたのか、デュランがアドルフを呼びつけてオレから引きはがしてくれた。

うん、今だけはお前にちょっとぐらい感謝してやっても良いと思うぞ、デュラン。

偶には役に立つじゃないか、残念美形の分際で。

はー、これでやっとミレイに浸れる。

体はミレイで出来ている、ってな感じ。

ちなみに血潮は多分牛乳で、心は防弾チョッキだと思う。

もしくは銅四十グラム、亜鉛二十五グラム、ニッケル十五グラム、照れ隠し五グラムに意地九十七キロ。

勿論、照れ隠しと言うのはウソだ。これお約束。

……あれ、ミレイ成分が消えている。

カリウムの取り過ぎだろうか。

そんな事を考えながらしゃがみこんで、空色の波紋疾走オーバードライブ（つつてもただの映像効果だけ）で遊んでたオレの肩をヴィーたんがポンと優しく叩いた。

何？

首を捻って見上げたオレにヴィーたんが静かに時計の文字盤を指す。

大分時間が経過してた。

「……」

「……」

「……ここに住んじゃダメ？」

「ダメです」

笑顔で宣言したヴィーさんに、未練がましく床に張り付いてた才
しは泣く泣く諦めた。

さよなら、ミレイ。感動をありがとう！　そして、また会おう！

中央到着とオレ（後書き）

【作者後記】

やっとここさ目的地にたどり着きました。長かった……。
どうも、今晚は。尋です。

ご来訪ありがとうございます。

拍手ありがとうございます。

いつも訪れて下さってる皆様に感謝を。

うっかり迷い込んだ貴方に幸運がありますように……あと、できればここに迷い込んだ事を幸運と思って貰えますように（後半が自
用になっているぞ……）。

時間的に滑り込みセーフなので、さくつと後記を切り上げます。
まだまだ、これからです。

作者拝

買物難民とオレ

セントラルステーションで悲劇の（駅との）別れを経験したオレは、リムりん達と一緒にセントラルへと出た。

こつから先は当初の予定通り、オレあんどヴィータンの組、それとリムりんとついでにデュランの組の二手に分かれて行動だ。

待ち合わせは三時間後。

集合場所はセントラルのランドマークの一つ、「ベルディアン寺院」前。

それまでは自由行動だ。

って事で。

「レッツゴー、武器屋ー」

ヴィーたんと一緒に刃物デートに出発です。

ヴィーたんは三度の飯より刃物が好き、な素敵な女の子なので、さつきから目がキラキラしてる。

可愛いなー。

この輝きっぷりは、前にオレがゲーセンのクレインキャッチャーで入手した「ねねねこたん」ぬいぐるみに、ガムテで「凶悪な切れ味」「一撃必殺」が売り文句のナイターの果物ナイフを手にくっつけた奴を誕生日プレゼントにあげた時以来かもしれない。

ちなみに、ヴィーたんはああいう予算不足で手作りになっちゃいましたー的物体は受け取った事が無いらしく、半分以上社交辞令だとしても、それでも妙に喜んでくれた。

逆に何か申し訳なかった。

ごめんよ、ヴィーたん。もうちょっと裁縫練習するよ。

ま、そんな昔の話は置いて。武器店やっぱ多いな。ここ。噂にや聞いてたけどよ。

「セントラル中央つて武力を持たないって言うてるわりに何か物騒だな」

「固有軍隊を保有していないから、ですよ」

「んー？ よう分からん」

「セントラルは文字通り世界の中枢です。永世中立でなければならぬセントラルだからこそ、どこよりも強大な軍事力が必要なのです」

わりと有名メーカーのはずの店の前で立ち止まって、ヴィーたんがオレに説明してくれる。

「どこの国にも属さず、どこの国からも侵略されない為の軍事力が」

「自分で軍隊作れば良いじゃん」

「それはセントラルを攻める口実になってしまいますからね」

「んー？ でも実際DDDが専属契約結んでるんだろ？ だからこ

うゆう「その兄ちゃん、良い武器そろってまっせー」的な店がずらーっと

ずらーっと、とオレは奥の方まで指し示すように手を振る。

マジで武器関係の店しかねえし。

オーダーメイドから既製品、修理、パーツ、材料系。

ここ乗っ取ったらちよつとした戦争できるんじゃないだろうか。

「DDDがあくまで無国籍企業であることが大事なのですよ」

「うーん？ ああ、言い訳が効くのか」

「それと、所属国家の利益によって裏切る心配がありません」

「ふむー、利用するには都合が良いのか」

「そして、残念なことに彼らの実力は各大陸の軍事力に匹敵します」

ちょっと悔しそうなヴィーたん。
うーん、まあヴィーたんもリムりんもそついう教育受けてっから
な。

正義とか、常識なんてそんなもんだ。

世界がすり変えられたらあつさり変わる。デュラン達魔族の正義
が、オレ達の正義じゃないのと一緒に。

どっちが正しいとか良いとか優れてるとかの問題じゃねえし。

「ま、いいや。何かあつても結論として勝ちや良いんだし」

「いえ、ですから」

「武力だけで決まんなら魔王が世界征服してるだろうし」

「……」

「ヴィーたん達は別にDDDと戦う為に公務員になる訳じゃねえん
だろ？ なら良いんじゃないね？」

今の魔王はデュランだし。

あの腑抜けが即座に攻め込んでくる事はないだろう。

……いや、案外「コーヒー農園が欲しい」とか言つて攻めて来る
かもしれねえな。あのアホ。

いや、でもそつすると仕事さぼつて遊びに行く先が無くなるから
ねえか。

うむ、平和だ。

「ナカ吉？」

「あー、うん。どこに入る？」

「そうですね。では、ここから見て行きましょつか」

「うい、了解」

カツツと格好よく、颯爽と踵を返したヴィーたんの後をオレは小

走りに追っかけた。

……歩幅が違っただよ、ほっとけや。
って事で。

「ここにする？」

がっちりした、いかにも「老舗でございます。文句あつかコラ」という構えの店の前でオレは立ち止り、ヴィータンの方を振り返った。

確かここで既に六件目。

今までダメ、ダメ、ダメ、無い、ダメと来てそろそろオレの体力も限界。

足が棒のようになって来てるっつーか、そろそろ擦り減り……いや減ったらだめだ。

ただでさえ低い身長がさらに悲しい事になったらオレ立ち直れないかもしれないし。

や、別にヴィータンが意地悪してる訳じゃねえぞ？

ただちよつとヴィータンの武器が特殊なだけでさ。

ヴィータンの武器はえーと……あれだ、なんちゃらナイフの二刀流。

その辺じゃ売ってないマイナー武器で、しかも手入れが大変で、扱いも難むずいってなマゾい武器。

ヴィータンによれば玄人好みの武器らしい。

お陰で扱ってる店も少なくて、専門店を探して三千里状態。戦争難民じゃなくて武器屋難民になってます。

そろそろ安住の地なり、約束の地にたどりついても良いと思うんだよセフィス。

「そうですね」

ショーケースに並んだ武器を見て、ヴィーたんがやっとOK出した時は正直ホツとした。

そうと決まれば善は急げ。

早くイスのある場所……じゃなかった、武器のある場所へ！

「おじゃましまーす」

「いらっしやいませ」

「……お邪魔します、ではないのではありませんか？」

「じゃあ、たのもー！ とか？」

「いえ、それも何か違うと思いますよ」

「うーん」

挨拶って難しい。

店の中はピツカピカつてな感じじゃなかったが、薄暗い照明の下に鞘におさめられた物とか剥き出しの柄も無い刃とかが順々に陳列されてて、なかなか期待出来そうな感じだった。

ふむ、ここならセントラルに来た目的の一つも果たせそうか……。よし。

オレは隠し持っていた刃を引き抜く。

「ナカ吉？」

ヴィーたんが戸惑いの声を上げるのを無視してオレはカウンターに歩み寄る。

そして、人が良さそうなおっちゃんの顔の前にそれをぐいっと付きつけた。

それから言う。

「おっちゃん。オレ、金が欲しいんだけど」

買物難民とオレ（後書き）

【作者後記】

ご無沙汰しております、尋です。

こんだけの場面を何度書きなおしたか……

猛烈に眠いです……冬眠期だろうか。皆さん大丈夫ですか？

それはさておき、ご来訪ありがとうございます。

お気に入り登録89名の皆様、恐れ入ります。

拍手ばちばちどもです。

身分証明とオレ（前書き）

8 / 20 誤字修正と一部分かりにくい部分を補完、変更

身分証明とオレ

キラリと光る研ぎ澄まされた刃。
それを目にして、カウンター向こうのおっちゃんがゴクリと唾を
呑んだ。

オレはそれを付きつけたまま、じっと時を待つ。

一秒、二秒、三秒……以下略。

「つまり……」

おっちゃんがオレを見下ろして、言う。

「買い取りご希望ですか？」

「うん。見積もりお願いします」

え？ 誰が強盗だつて？ なんかことする訳ねえじゃん。

オレはただ、この刃物 包丁を武器屋で高く買い取ってもらおうとしてるだけである。

この「包丁買い取らせ大作戦、セントラルより愛をこめて」は今回のセントラル観光の目的の一つで、それもあってヴィーたんに乗して刃物屋を回ってたのですよ。

だってコレ、うっかり衝動買いしちゃったけど使わないかし。

オレ料理とかしないし。

ただ実演販売のキノコのおばさん（だと思っ。性別不明）の腕があまりにすごくて、ついうっかりノリで買ったんだよな、コレ。

いや、マジであればすごかった。

もっかい見てえな。あの空中にポーンって投げて、落ちてくる前に花型に切れる奴。

ま、とにかくコレ使わないまま眠らせといても意味ねえし、こっちは一つ貧乏学生の金になってもらおう。
良い人に貰われるんだぞ。

「うーむ……おい、スターク」

「はい」

「こっちのお客さんの相手してくれ」

おっちゃんに呼ばれて奥から出てきたのはエプロン姿の若い兄ちゃんだった。

……よし、このレベルなら平気だ。

どれかってと体操のお兄さん、セシエン君タイプだけどあそこまで顔が人外じゃねえなこいつは。

オレが頭ん中でんな事考えてるなんてまるで知らんだろうそいつはスマイル（商売の基本だ）を浮かべてすぐにこっちの方まで来てくれた。

それは良い。

良くなかったのはその後、

「やあ、どうしたんだいボク？ 探し物かな？」

しゃがんで視線を合せやがりました。

……うん、でも八つ当たり良くない。分かってる。

「鑑定をお願いしたいんです。費用がかかりますか？」

「そっかー、大丈夫だよ、初回の鑑定はお金かからないからね。お使いかな？ 偉いね」

「はあ……あの、一応初等教育は終えてる身ですからあまりお気遣いなく……」

「え？ あ、それはごめん。悪かったね」
「いえ、良いです。慣れてますから……」

不本意だな！

「いやいや、申し訳なかったね。そうだよな、君はもう立派な紳士だ」

「いえ、紳士とまではいかないと思いますけど……」

ちよつと心惹かれるがな！

「それで、見て欲しいって言うのは……」
「これ、お願いします」

オレは例の万能包丁を兄ちゃんの方に突き出す。
ただし、今度はケースに入れて出した。
一緒に買い取られた方が値段が高くなるならつけるし、そうじゃないなら外しておく予定。

「へえ、変わったケースだね。何の革かな？」
「……さあ？」

「何処の製品だろう。銘も社名も入ってないようだけど」
「多分手作りだと思います。そう言うのって買い取り対象外ですか？ それなら余所行きますけど」
「うーん、ちよつと待ってね」

言つて兄ちゃんはケースを開いて中身を確認し、急に表情を険しくした。

何だ？ 包丁ってやっぱダメなのか？

「君、身分証は？」

「あ、持ってます」

「ちよつと見せて」

「売買の際に身分証が必要なのはオレもちゃんと心得てたんで、オレは腕に嵌めてた身分証を照合機の上にかざす。

ぴろりーん、という音。

それを見て兄ちゃんの顔が何か更に険しくなった。

うーん……嫌な予感。

オレがじつと待つてると、やがて兄ちゃんはそつと声を潜めてオレの方に顔を寄せた……って、近い近い。

「……君、これ本当にお家の人に許可とって持ってきてるのかい？」

あー、そう来たか。やつぱり。

オレは表面上は特に表さないまま、内心で苦笑いする。

うん、ま、だよなあ。うんうん。

『馬鹿』で『貧乏』で『犯罪者が多い』マナレスがこんな高価っぽい包丁、一人で持って売り払いに来たらそりゃ怪しいよなあ。

どうやらこの対応から推測するに、オレが家から勝手に小遣いが欲しくて盗み出した、みたいなストーリーが兄ちゃんの頭の中では出来上がったらしい。

「悪い事は言わないから、もし勝手に持ってきたならちゃんと返してきなさい」

それでも、更生の機会を与えようってなこの兄ちゃんはまだ良心的つつーか、甘い方だ。

問答無用で警察呼ばれるとか、店の奥に引きずりこまれるとか、結構珍しい話じゃねえもんよ。

うーん。しっかし、どうすつかなあ……。

この分だと買い取ってもらうのは無理か。

何言ってもマナレスの言葉なんか信じないだろうし、本当の話したら黄色い救急車が来ること間違いなしだ。

……うん、あきらめるか。

そうすると予算がだいぶ減るけど、まあ、それならそれなりの所で手を打てば良いだけだし。

「ナカ吉、どうしましたか」

オレがうーん、と考えてるとヴィーたんがいつの間にか後ろにいた。

う、まずい……マナレスだからって断られそうとか知ったら、絶対ヴィーたん怒る。

ここは一つごまかそう。

「あ、ヴィーたん。いや、ちょっと買い取り対象外っぽいです。そんだけ」

「……」

うあ、バレた気がする……ちょっと後半が早口すぎたか？

ヴィーたんの仕事のできるお姉様風の顔が怖い感じになってる。

……バレたな、これは。

「いや、うん。ほら、縁が無いだけってゆうか……」

「失礼。私が変わります」

あああああ、ヴィーたん怒ってるよ。

やっべえ、どうする？ どうすんだよオレ。ライフカドはどー？

「何か、問題でもありましたか？」

「え、いえ……あの、どう言ったご関係で？」

「親戚です」

堂々と嘘を吐くヴィーたん。

ま、そこまでは身分証からは読めないから証明しようがねえけどさあ。

「この子に売却を任せていたのですが、何か品に問題でもありませんか？」

「あ、いえ……高額な物なので学生から買い取る場合は保護者の許可が……」

嘘吐け。

「ならば私になります。これで問題はありませんね」

「失礼ですがチェッカーを」

ぴろりーん。

「はい、問題ありません。すぐに金額のご相談を……」

速効成分、ヴィーたん。みたいな。

さっすがB種公務員の候補生って立場は強えな。楽々つてもんである。

慌てた様子でバタバタした兄ちゃんがカウンターの奥に消えてゆくを見ながら、ヴィーたんがオレの方を見下ろしてにっこりと迫力のある笑顔を浮かべた。

「ナカ吉。少しこの人と話しておきます」

「うん、分かった」

グイーたんちよつと怒っちゃってるし、この場なら彼女に任せた方が良いやな、相手の今の心情的にも。

オレは頷いて「店ん中見て来る」とその場を預けて身を引いた。

こんなことぐらい、別に大した事でもなんでもねえし。こう言う時に怒ってくれるグイーたんが居る。

これって充分ちよつと贅沢なビルの気分だろ？

身分証明とオレ（後書き）

【作者後記】

異世界に飛ばされるっていうのも理不尽ですが、現実だからこそそのしかかって来る理不尽もあると思います。

どちらの方がより厳しいかなんて、そもそも比較できない話なんですけど。

どうも、理不尽をマダム・リーと表現する事が妙に気に入っている尋です。こんばんは。

ご来訪の皆様、ありがとうございます。
拍手感謝です。

お気に入り登録90人目様、ようこそいらっしゃいました。

そして、万能包丁のくだりに「ああ、あの時の」と思っ下さった
その貴方、握手して下さい。（待）

そうです、あの時のあの万能包丁ですよー、気付いた方はニヤニヤ
して頂けると嬉しいなあ。

今回は土曜日更新の予定です。

またその時にお会いしましょう。

作者拝

不倶戴天とオレ

暇な時間は店内をぶらぶらして見て回って時間を潰した。

オレはヴィーたんみたいに刃物に詳しくかねえが、それでもこう言うのが嫌いってわけでもない。

別にナイフみたいに尖って、触る連中を傷つける程ギザギザでもねえが、心にナイフをちよいと忍ばせておくのが少年ってもんだ。カッコ良いしな、アレ。

オレだって子供の頃は戦隊物の何とかソードとかにあこがれたもんだ。

マジでビームが出るもんだと思って買ったあの頃のオレは、その時CMと現実の差を学習したんだっけか。

懐かしいなあ。

まあ、そんな古い話は置いてくにしたって結構面白かったのはマジな話だ。

あ、これドラマで見た感じのだ、とかあいつが持つてる奴そっくりじゃねえかとか、他にも有名どころの武器とか。

中には嘘か本当かエクスカ パーまで置いてあった。

その前で合掌して「頑張れギルギル」と唱えておいた。アイツ良いよな。

「この扉の裏でずっと待っていたぞ！ 来なかつたらどうしようかと不安になっていたところだ！」だぜ？ 可愛すぎる。

でもあの剣で—以上のダメージ出せるって意外と最強フラグ……？

「ナカ吉？ あの、何故剣を拝んでいるのですか？」

「あ、ヴィーたんお帰り。どうだった？ 買い取りOKっぽい？」

「問題なく終わりましたよ。他に何かありますか？」

「ん、まだちよっと。ヴィーたんは？」

「私は調整の完了待ちです。料金は既に支払っていますからその時間はかかりませんよ、恐らく」

「そっか、了解」

オレは頷いて、ついでにさっき見てた剣をお土産代わりに買って帰ることにした。

まだヴィーたんは時間がかかりそうなので先にカウンターで会計を済ませておく。

それからまた店の中を一周すると、そのころにはヴィーたんの方も終わったらしくて、奥の工房の方から出てきたおっちゃんにナイフを受け取っていた。満足そうだ。

「こんなもん？」

「そうですね……時間も良い頃合いです。行きましようか」

「ういいういー」

って事でオレとヴィーたんはちよつと早いガベルディアン寺院の前まで移動した。

ちよつと早かったせいか、リムリンとそのおまけはまだ来てないっぽい。

ヴィーたんが携帯を確認して「少し遅れるようですね」と呟いた。

「うーん、じゃあオレちよつとその辺見て来る」

「気を付けてくださいね」

「平気平気」

オレ言つとくけど十四だからな？

手を振ってヴィーたんとは別れ、寺院の横の道に入る。

や、だって中に入ると有料だしさ……なんで、外からぐるっと回って眺めてみる事にしようと思って。

寺院らしくでつかい窓とかあって、昔ここに感染症の患者を隔離してたつてのは本当なんだなーとオレはぼんやり思う。

オレみたいなマナレスもこの手の寺院に入れられてた時代があるんだそうな。

回復魔法が効かねえ奴が戦時中にうるちよろされたら邪魔だからしゃあねえわな。うん。

あ、あそこの石像、うちの教師に似てる。

あやうく吹きかけたじゃねえか、おのれドスコイめ……あ、ドスコイっつーのは綽名あだなだからな？

「？」

ぼけーつと上の方を首が痛くなるまで見上げてたオレの内臓に悪寒が走つたのはその時だった。

ぎゅっとネイルアート満載の手で胃をぐわしつとされたような感じ。

気道がぎゅつと極細ダイエット成功になった感覚。

普段意識しない心臓が急に激しく自己主張を初めて非常にウザイ。ウザイけど……これは危険信号だ。

オレの毛の生えた蚤の心臓なんか目じゃないぐらいウザイ奴が、居る気がする。

オレはなるべく表情を変えないようにしながら顔の角度を元に戻して、なるべく自然にさっさと立ち去れるように足の向きを変えるけど、遅かった。

この世で一番、デュラン以上に見たくない、気色悪さ二万倍の顔がそこに存在してた。

「マサキさん」

……。

うわー、うぜー……。

その猫撫で声どうにかならんのかよ貴様は。

てかその笑顔もキモイです。近寄らないで下さい。生理的に無理です。何ていうか気色悪くて気持ち悪い。

仮にオレが炎をによりて世界を更新するなら、コイツが理由になるだろう。

まあ、更新した所でコイツに対する耐性がつくかつつわれたら絶対無理ですが。

……なんて、この馬鹿に言えば良いんだがそれも出来ないんで、オレは「はー」と顔を逸らして溜息をつき、横を向いたままぼそぼそと言う。

「こんにちは先輩。じゃあ失礼します」

「照れなくて良いよ、マサキさん」

照れてねえよ、このド低能が。パープルヘイ 発動すつぞコラ。

「まさか君が僕を追いかけてここまで来るなんて思わなかったよ」

チガイマス。

てか貴様が居るなら来なかったし。

「それに比べてうちのクラスの連中ときたら……」

はい、以下聞き苦しいのでカットー！ CM入りまーす。

てかさあ、貴様このセントラルに来て、それで話す内容がまた他人の悪口ですか……そーですか、最悪ですね。

オレはそっぽを向いて話を聞き流す。

相槌もこの相手の場合うつかり打てやしねえんだよな。

挨拶すれば自分の事が好きだからだと舞い上がるし、挨拶しなけりゃ自分に気があるから照れてると都合よく解釈する。

ダメだ……こいつ早く何とかしないと……。

いや、実際関わりになりたくないんで何もしねえけどさ。混ぜるな危険。

あんましオレ、他人を嫌うとかは苦手だからやりたくねえんだけどな……。

先輩は未だにべらべらと何か喋ってる。

ま、どうせ自分サイコーか、自分否定する奴は皆クズみたいな事しか言ってるねえだろう。

本当にどうしようもなく、みっともなく、見苦しくて、情けない。

こいつのお陰でオレは美形アレルギーにかかって、お陰さまでデュランのキラッキラした見た目と見る度に思わず手が出る足が出る体質になったんだが……こうしてるとはつきり分かる。

デュランは美形過ぎてむかつく。

こいつは、ただキモチワルイ。

キモチワルイ、キモチワルイ、キモチワルイ、ウスキミワルイ、キシヨクワルイ、キモチワルイ、キモチワルイ、キモチワルイ

「……っ」

足が竦む。

体が震えそうになる。

嫌だ、意地でもそんな事は見せねえ。見せてたまるか。

こんなきつしよいやツの為に、オレがどうしてそんな状態になら

なきやならないんだ。

こんな奴なんか無視すりゃ良い。

オレの世界から消えたと思えばいい。居ないと思えば良い。存在しない。存在しない。存在なんかしない。存在

だけど、
×××。

×××から、
×ないで。

「そこで何やってる」

後ろから声がした。

不倶戴天とオレ（後書き）

【作者後記】

お久しゅうございます。

暑い中皆様いかがお過ごしでしょうか。未だにクーラーが動かない尋です、どうも。

ご来訪ありがとうございます。

拍手ありがとうございます。

ご感想ありがとうございます。

お気に入り登録91、92、93、94番目の方いらっしゃいませ。

今回は「敵」を目の前にピンチなナカバです。これぞ王道ヒロイン……まあ、本人はあんまりヒロイン、ヒロインしない子ですが。

ナカバの美形アレルギーの元凶も出てきました。

ピンチに現れたヒーロー（？）は次回明らかになります。まあ、多分「予測の範囲内」でしょうけど。

余談ですが、 xxx に入る言葉は決まっていますが、ご想像にお任せします。

「分かった！」てな方は拍手で呟いてみると、正解かどうかだけちらつとお返します。

ヒントとしては、一番目と二番目の xxx は同じもの、最後の x だけ別ですね。

x の数はイコール音の数（平仮名一文字、と考えれば良いです。「あ」「か」＝1音）。

漢字にすると xxx は漢字1+送り仮名1。 x はそのまま漢字一文字です。

相手は年上、権力的にも上、面と向かって文句も言えない相手で、

おまけにストーカーと言う辺りが最大のヒントかもですね。

では、また明日。

作者拝

逃走成功とオレ

「なあ」

「……」

「おいってば」

「……」

「おいこら、痛えんだよ!!」

「ぐあつ?!」

後ろから頭突きをかました。

やっどこさ止まった。

「な、何しやがる」

「こつちの台詞だ。人の手えぐいぐい引っ張りやがって。ゴムゴム
実食ってたら確実に伸びてたぞ。つーか、引きずられかけてたし、
握られ過ぎてアザなっつし、この落とし前どうしてくれんじやワ
レ」

「あ、ああ……悪い」

「よし」

何とか振りほどいた手をさすりながら、オレはさっきの場所から
オレを引っ張りだしたそいつを見上げる。

ピンクの髪、ピンクの眼、チョコレート色の肌。

「サンクス、えーっと……アポロ」

「アドルフ。アしかあつてない」

「ああ、そうそう。アドルフだった」

さっき駅で別れたはずのDDDの班長だった。

「強く掴み過ぎたか……すまん、だいじょうぶか？」

「いや、まあ良いけどさ」

さわんなっ！

また触ろうとしてきたんで手を奪い返しておく。ついでにパンパンと払うと、「その反応はさすがに無いだろ」と低い声が聞こえた。

それにオレは視線を手に落としたまま、「痛いのか好きじゃねえし」と呟く。

痛いのは嫌いだ。

痛い思いをするのも、させるのも嫌いだ。

でももう平気。平気、平気、平気。

目を閉じてオレは心の中で繰り返す。

そのオレの様子に何を勘違いしたのか、アドルフが困ったように眉を下げる。

「その……だから悪かったって。ちょっと力入りすぎてた」

ピンクの髪をガシガシと搔いて、「大丈夫だったか？」とか聞いてくる。

「何がさ」

「さっきの奴。事情確認しないでお前引張ってきちゃったけど良かったんだよな？」

「あー……」「アレ」ね……うん。うん、むしろなんつーか、助かった」

「知り合いか？」

「残念ながら」

「そんな感じだったよな」

苦笑したアドルフにオレも苦笑いを返し、あざが出来てる手首を体の後ろに隠す。

上手く笑えてっかね、オレ。

ま、リムりんやヴィーたんならまだしも、オレがニヤニヤしても不気味なだけだよ。

「ちょっと、まあ、目えつけられててさ。何かと絡んでくる奴だったからさ」

「お前、困ってる雰囲気すっごい出てたもんな」

「ふーん、そっか」

あっけらかんと笑うアドルフにオレは曖昧に頷く。
表に出てたか。

オレもまだまだ修行が足りんぜよ。どげんかせんといかんぜよ。

「で、あんたがどっから湧いて出たかは興味ねえけどさ」

「湧いて出た事決定済み?!」

「箱詰めになされて出荷されると途中でか」

「チヨコじゃないって」

「うん、知ってる。知らん訳ねえじゃん」

「お前……」

「……ごめん、八つ当たりした」

「お、おい……」

「ちょっとタイム」

オレはその場にしゃがみこんで膝を抱える。

「大丈夫か？」

「出来れば話しけねえでくんねえ？」

「あ、ああ……お前の知り合い探してこようか？」

だから、話しかけんなつってんじゃんか。
オレはギンツとアドルフにガン飛ばす。

あーもー、これも八つ当たりだ。

こんな事したかねえんだって。頼むからそつとしといてくれよ。
八つ当たりなんて最低だ。カツコ悪い。ダメだ、鬱だ、死のう。

「いや、死なんけど……」

「……何か良く分からないが……取り合えず良く頑張ったな」

頭わしわしされた。

グーをかましておいた。

「何故につ?!」

「揺すられたら酔うだろうが、こんのアホんだらあつ!!」

「逆ギレされたつ?!」

「正当な怒りじゃボケえつ!!」

ぎゃーぎゃーやってると、後ろからむんずつ、と襟首を掴んで摘
まみ上げられた。

ぶらーん。

「何をしている」

この魅惑の腰砕けボイスの持ち主をオレは一人しか知らん。

すーつと頭から血が引いて、急激に冷静になったのを感じながら
オレは首を捻ってあんまり確認したくない顔を確認する。

……うん、やっぱり見るんじゃなかった。

「よー、デュラン」

「俺はその方向には存在しないがな」
「知ってる」

わざとに決まってるんだろうが。

「あ、ボス……」
「アドルフか、奇遇だな。何か問題でもあったか？」
「いや、そう言う訳じゃないんですけど……仕事終わったんでちょっと休暇もらっただんです」
「そうか、お疲れ様」

優雅に微笑むデュランに、気まり悪そうに視線を逸らすアドルフ。

「じゃあ、俺はこれで……仲間待たせてるんで」
「ああああー!!」
「どうしたナカバ」「ど、どうした？」
「アポロ!」
「アドルフ。俺がどうしたって？」
「奢れ」

オレの言葉にアドルフが「はあ?」みたいな顔をする。
それにつりさげられたままオレはバタバタと手足を振り、

「奢れ。約束。金入っただろ?」
「あ、ああ……」
「なら奢れ」
「今から?」
「今を逃せば次は無い」

と、思う。基本的に奴は必殺仕事人だから。

オレの言葉にデュランも「ふむ」とか頷いて、

「そうだな……お前が戻ったらアイスクリームでも食べようか、とあの二人も言っていた所だ。丁度良い」

「おお、アイス！」

食いたい！ 食いたい！ 食わせろ！

「どうする？ アドルフ」

「……構いません、けど。ちょっと仲間に断りだけ入れて来ます」
「だそうだ」

いいい、やりー！

テンションが上がったオレをみて、アドルフが何か笑った。

お前、人を笑うのは良いけど財布はお前持ちだって事忘れんなよ？

逃走成功とオレ（後書き）

【作者後記】

立ち直るや否や、おこれと強請る。それがナカバのくおりていー。どうも、衣食住なら一位は食と迷いなく答える尋です、今晚は。

ご来訪下さったその貴方、ありがとうございます。

拍手下さったその貴方、どうもです。

デュランだと思ったのに！と言うその貴方、……ニヤリ（あ）。

その辺は次回で。

と言う事で、ヒーロー（？）はアドルフでした。

正解者の皆様、おめでとございます。

正解賞品として、えーと……画面の向こうの尋の拍手をお贈りしましょう！

え？ 要らない？ そうですか……レア度は高めなんですけど（知らんわそんな事）。

まだまだ続きます。

次はデュランのターンです。宜しければまた土曜日にUP予定です
なので待ち下さい。

作者拝

誘惑魔王とオレ

傷心の後は旨いもんを食うに限る。

お陰でここ二年間、オレのポンド購入率はアップしてるんだが…
…偶にはアイスつてのも良いな。

そんな事を考えながらオレは、「あ、そつだ」と呟く。
アドルフはえーつと……携帯で話し中か。丁度良いや。

「なあ、おい」

ぐいぐいっとデュランの袖を引っ張ると、「どうした？」とオレ
の方を紫色の瞳が見下ろした。

その双眸そくまが面白そうに笑ってるのを見て、疑問が確信に変わる。

「詐欺師かてめえは。ハンマ セッションするぞコラ」

「くっ……ふふふ、お前はだから面白い」

「こちとらちつとも面白かねえんだよ、この大嘘吐き。何が奇遇だ
な、だ。お前の舌はミルフィーユか」

「甘言を弄したつもりはないのだがな」

「お前みたいなのをスイーツ（笑）っつーんだよ」

んにやるつめ。

前に何処かで言った気がするが、オレは非力な美少女が襲われて
る所にカツコ良く登場するキザな美形つて奴が一番嫌いだつた。い
かにもテメエ、出番待つて何処かで隠れてただろつこのストーリーカー
野郎、つて感じがウザさ倍増でさあ……。

が、上には上がった。や、この場合下か？

つまり、見て見ぬふりしたうえで、美味しい場面だけかつさらい

やがったんだよこの魔王様。

奇遇？

待っていたぞ勇者よ、の間違いだろ。

肘鉄しようとしたオレをあっさり回避しつつ、デュランは肩を竦める。

「何だ、どうにかして欲しかったのか？」

「え？ うーん……いや、微妙」

助けて欲しいとかは別に思ってた。てか、期待してなかった。

だってデュラン関係ねえもんよ。

アレはオレのプライベートな問題。

解決しない事で不利益を被るのはオレだけ。

だから他人の助けは当てにしてないし、当てにしちゃならんと思う。

デュランの力なんてそれこそ、論外だ。

本当は、あつちのイチゴ頭に助けられた時だってオレは感謝はしてたけど……けど、半分不思議と言うか落ちつかなかった。

何で余計な事に首突っ込んでんだ、って。

何でアンタがオレを助けるんだ、って。

意味が、分からない。

彼らは意味も無く他人を助ける。助けられる。気まぐれで出来る。それが、手を差し伸べられた相手にどんな気持ちを抱かせるかなんて考えもしないで。

オレは前の方で携帯で何か話してるアドルフの背中を見る。

助かった。助けられた。その事が少しだけ、苦しい。

自分の非力さなんて、この十四年で嫌ってほど思い知ったけど、さ。

「まあ、そうだな……お前が望むなら手を貸さんでもないぞ」

デュランがこともなげに言っつて、紫の眼でオレを見下ろす。

デュランの眼は冷たい宝石みたいだ。

奴の顔はどれもこれも整い過ぎてて、オレにとっちや納豆レベルで苦手の塊なんだがこの目だけは不思議とそんなに苦手意識を刺激されない。

ま、紫の眼なんてどこの漫画だよとは思っけどな。

「手つて？」

「例えば、あの男の存在を削る、とか」

デュランの唇が三日月の形に歪む。魔王スマイル。

「え？ 言ってる意味が分からん」

「もしくは、あの男の中からお前の存在を削り取る、とか」

「んん？」

えーっと、翻訳こんにゃ プリーズ。

「つまり、あの男からお前への興味が一切消えると言っ事だ……関心も、存在も、一切がゼロになる」

私ならば 構造ごとき、その程度の事は容易い。

デュランの声が静かに凄みを帯びる。

うん、それは……何と言うか、ちょっと、いや、けっこう、かなり、助かる、心動かされる誘惑だった。

確かに魅力的な提案だ。

あのうつつとうしいストーカー・ベすと・おぶ・情けない馬鹿王子がオレに無関心になる。

随分理想的だ。

とっても良い話だ。

や、別に最初はオレだって先輩の事は別に嫌いとかでは無かったんだ。

てかどうでも良かった。興味ナツシング。好悪の対象外。まあ、どうしようもねえ奴だなこいつ最悪ぐらいは思ってたけどさ。

まあ、そんなんで話を適当に相槌打って聞き流したら、気が付いたらストーカーになってた。

いや、オレだって訳分からんって。何でそうなるってオレが言いたい。

けど、そっからがさらに笑い話。

一日に十通以上意味不明で、しかも変態なメールが来る毎日。

例を上げると「その服胸見えそうだね（制服ですが何か）」「君の体をマッサージしたい（テメエの脳みそでも揉んでろ）」「僕の背後霊について（って知るかあっ！！）」。

そんな奴が食堂にまでくっついてきてじーっとひたすらいやんな目つきでこっちを見てくる。

そのせいで碌に落ちついて食事もできやしねえ。

行きに待ち伏せられ、帰りに待ち受けられ、周りからのガビガビ視線の中あの馬鹿王子と喋らにゃならん毎日。

何この笑えないコメディ。

ま、お陰さまでオレの体重はガクツと減ってスリムになれたけどさ。絶対に一緒に身長に回るはずだった栄養も消えてる。

ちくしょう。返せオレの身長。

うん、まあ身長の話は取り返しがつかないから一先ず置いて……奴の迷惑行動。それが一瞬で無くなるかもしれないってのは良い話だ。

奴らがオレに絡んでくるのは、しつこくストーキングしてくるのは興味故なんだから。

「どうする、ナカバ」

デュランの目が俺を見てる。

笑っているような声が、この距離にいるオレだけに聞こえるように囁かれている。

デュランは頼み相手としては都合が良い。

能力はチートだし、人間じゃないから変なしがらみも無い。

何より動機がシンプルだから見返りが軽い。

デュランは面白くなってな理由だけでそれをやってのける。それ以上にも求めない。多くを持ちすぎて、欲しいものがない。

だから、力を借りる相手としてこんだけ都合が良い奴はいない。

居ない、んだけど……。

「や、良い」

「ふむ、そうか？」

「うん」

何か、利用するっぽくて、卑怯な気がする。

それに、我がまま大魔王のアンタがそんな苦しいのに無理矢理笑
ってるみたいな顔して言うような事、オレさせらんねえよ。
そんなのどっちにしたって苦しいだけだ。そんなら。

「ま、うん、要らん要らん」

「ふふ、そうか」

しっしつと手を振って前を向いたオレに、デュランは「そうか」
といつもみたいに愉快そうに、楽しそうに笑った。

オレの意地の張りっぷりに呆れただけかもしれないなかった。

誘惑魔王とオレ（後書き）

【作者後記】

手紙の下りは某方の体験談よりお借りしてます（掲載許可取り付け済み）。

どうも、話より実物の方が酷いってどんなオチですかと思う尋です
今晚は。

ご来訪下さった皆様、ありがとうございます。

拍手ポチポチして下さいませ皆様、恐れ入ります。

リクエストマダー？と思ってるその貴方……え、えーと、もう少しお待ち下さい（滝汗）

取り敢えず土日1本ずつのペースで本編上げていきますので、また明日お会いしましょう。

作者拝

急所一蹴とオレ

「おー」

アイスクリームがいっぱいある。

さすがどんな注文でも引き受けます、三百六十日違う種類が食べられますってのがウリなだけあるな。

「てか、大理石でどーこーの方じゃなくて良かった訳？」

「トッピングは邪道です」

「……ってこの子が言うから」

「そ、そか」

ヴィーたん、偶に変なこだわりあるからなあ。そこが可愛いんだけどさ。

ま、オレはこっちで大満足だから良いんですけど。

「折角だからダブルで頼もうぜ、サイフはあいつだし」

「おい」

「何だよ、踏み倒し」

「まだ踏み倒して無いだろ」

「まだって事はその予定ありってことか？」

「いやそう言う訳じゃ……」

「お前さあ、折角美少女二人に感謝される場面なんだから、ここはどーんと構えてババーンと奢っとけよ」

大体アイスの単価なんざたかがしれてんじやん。

後ろでぶつぶついつてるアドルフを黙らせて、オレ達はメニュー表を見る。

「私、このマルガリータにしようかしら」

トマトにチーズピースいりのアイスクリームですか。さすがリムりん。

「ナカちゃんは？」

「んー、ラムレーズンのレーズン抜きで」

後ろで盛大に嘔き出す音がした。

じろつと振り返って睨むとアドルフがさつと視線を逸らした。…

…ほほう。やる気か teme 。

良いだろう、私に刃向った事を地獄で後悔するが良い。

オレはつかつかと歩み寄り、奴の急所へ一撃くれてやった。

「!!!!!!!!!!!!!!」

ふっ、ざまあみる。

ん？

何で他の男性店員と顧客が青ざめた顔でオレを見ているんだ？

前屈みだし……アドルフに同情的視線を送ってる人も居る。

「酷い事を」

デュランまで苦笑いしている。

え？ 普通に有効打じゃね？ ちょっと足にぐにや、見たいな感じ

がしてキモイが。

オレは玄関の泥拭きマットで足の裏をゴシゴシしながら首を傾げる。

「確かに有効だが、有効すぎるのも考えものだぞ？」

「えー？ 何でさ」

「内臓を直に傷つけられたも同然の痛みだからな」

うーん、予想以上に痛そうな感じだった。

向こうの方で静かに悶絶しているアドルフを見てオレは三ミクロンほど反省する。

後でお詫びしにいつとこつと。

その前に一発殴るけど。

「ま、奴の事はひとまずほっとくとして……デュラン、お前何か食べねえの？」

「俺か？ そうだな」

アイスもとろけるような熱視線を送ってきてる店員の皆さんの方を見ないようにしながら、デュランが顎に手を添えて呟く。

「お前を見習ってミントアイスのミント抜きでも頼むか……」

「いや物理的に無理だから」

お前のそれはただのいじめだろ。やるならセシエン君だけにしなさい。

「真面目にやりなさい」

ちなみにオレの注文は大マジに大真面目だ。

レーズンあんまり好きじゃないんだ。ラムレーズン味は好きなんだけど。

「ではコーヒーで」

「やっぱりか」

「別段構わんだろっ?」

「構わないけどさ。お前徹底してるよなー」

店員さんがレーズンの入ってない所だけせつせとくりぬいてくれる間に、オレはもう一つ別で注文を済ませ、先に出来上がったそれを持って未だ蹲すくまってるアドルフの所に行った。

ぺしぺしと肩を叩いたら、振り返った奴が涙目で睨んできた。

えー、そんなに酷い事したのかオレ?

「よお、アポロ。無事じゃないよね?」

「アドルフだ……無事に見えるかコレが……」

「や、ちつとも」

何故が目つきが更に険しくなった。

いや、まあ分かってやってるんだけどさ。

「うん、半分くらいはオレが悪かったからはい、お詫び」

「はあ?」

「ほれ、アイス」

苺とチョコレートのダブルを差し出してオレは言う。

「ちゃんと上が苺で下がチョコ。ほら、ばっちりアポロな組み合わせ」

「……。ま、貰っとく」

オレからコーンを受け取って、アドルフは「はー」と溜息を吐く。

「お前って変な奴だな」

「まじで？　ありがとう！」

やった。

「……って今の会話の何処に喜ぶ要素があったんだ？」

「え？　だって変わり者って面白いじゃん」

変わり者って言葉はオレには誉め言葉です。

「……。そうか」

「うん。アポロも割と面白い感じ。ぐっじよぶ」

「アドルフだっつーの……まったく。お前はいつ」

「あ、オレのアイス出来たっばい」

「……分かった、取って来いよ」

言われんでも行きますよ。

オレは綺麗なお姉さんからアイスを受け取り、戻ってくる。

店員さんの努力の結晶は微妙に不格好だったが、それでもここま
でやってのけたプロ根性には拍手を送りたい。

えらいぞ、店員。これぞカスタマーズサ……何だっけ。カスタマ
ーズサクリアイス？　まあいいや。

オレはラムレーズン（レーズン抜き）の二段重ねをさっそくいた
だく。

うーん、幸せだー！

「……。お前、本当に美味そうに食べるよな」

「だって美味しいもん」

「ふーん……」

「まあ、そのこだわりをどっかの誰かは鼻で笑い飛ばしやがりました
が」

「うっ」

「オレの味の好みと店員さんのプロ根性をどっかの誰かは鼻で笑い飛ばしやがりましたが」

「い、いや……」

「大事な事なので二度言いました」

「……その、すまん」

分かればよろしい。

「しかし、それで蹴るか？」

「蹴ったら痛そうじゃん」

「……確かに痛かったけどな」

死ぬかと、いや死んだ方がマシかと思ったと顔を青ざめさせるアドルフ。

うーん、そこまで痛いのか。

「ちびっこは元気なのが一番だけど、良く考えて行動しろよ」

「はあ……」

「後もうちよつと素直な方が可愛いぞ」

「や、可愛さは自分に求めてないんで」

「変に大人になろうとなんてまだしなくて良いんだぞ。そのうち嫌でもなるんだからな。子供のうちは俺とか、一緒に来てるお姉さん達とか、年上に素直に甘えておけよ」

「うーん……」

「それとも、もう誰か守ってあげたい女の子でも居るのか？」

ニヤリ、と笑うアドルフにオレはちよつと考えてから頷く。

まあ、リムりんもヴィーたんも、オレなんかよりずっと強いんだけどさ。人間的にも、実力的にも。

でも、だからって弱い事に甘えてちゃいかんと思うのですよ。特に、長く一緒に居たいなら。重石でばっかりは居られない。

「あの子たちが」

オレの視線の先を見てアドルフが呟く。

「ま、大事な人とか守りたい人が沢山居るってのは悪くはないよな。俺もファミリーの連中は大事だしさ……って、まだこの話はお前には早いかな。もうちょっと大きくなってからだな」

……。

いったい何歳だと思われてるんですかね、オレ。

えーと、身長一四一センチメートルってどの年代の平均身長なんだろうか？

確かこの前、十一歳男子の平均で一四五くらいあるって話を聞いたよな。

……。

「オレ、一応十四歳なんですけどね」

「ぶはっ」

コラ。

「あー、そっか。そりゃ悪かったな。ま、もうちょっとしたらぐつと伸び出すんじゃないか？ 百八十ぐらい直ぐに届くさ」

母アイスを齧りながら、何故か慰める風で言うアドルフ。

嫌でもさすがに百八十は無いと思う……それってデュランの高さだろ？

「そっかあ、十四か。てつきりうちのチビどもぐらいの年かと思っ
てただけだな……ん、って事はあのお嬢さん方とも同じくらいか」
「うん、クラスメイト」
「ふーん……で、どっちが本命だ？」

はい？

「ん？ そつ言う旅行じゃないのか？」

あー……まあ、同級生だって事が分かったらそつ言う方向の発想
はまあ無くはねえよな。
ある意味自然だ。

「や、別にどつちがどつつてわけじゃねえんだけどさ……」
「ん？」

「今回のデュランがメインでさ。で、オレとデュランが知り合い
だから一緒に行くって話になったら、あの二人も行きたいって言い
出してさ……」

嘘は言って無い。

「はー……ま、ボスはアレだもんな」
「アレだよなあ」

向こうでコーヒー味のアイスを受け取ると同時に何やら囲まれて
凄い事になってるデュランを見つめ、オレとアドルフは同時に溜息
をついたのだった。

急所一蹴とオレ（後書き）

【作者後記】

おそくなりやしたー！

あと、皆さんナカバのように冗談で急所蹴っちゃだめですよ。

それと護身術としては足の甲でもヒールで踏み抜く方がよいです。

実際急所を狙うと太ももが邪魔になりますし、相当しっかり足上げないとだめですから。

どうも、尋です。

ご来訪ありがとうございます。

拍手ありがとうございます。

お気に入り登録95人目様いらっしやいませ。

ご感想ありがとうございます。

あっつい日が続いておりますが、皆様くれぐれも水分補給だけには気を付けてお過ごしくださいませ。

作者拜

兄的指導とオレ（前書き）

更新案内は役目を終えましたので、上書きしております。
では、久し振りのナカバ達をお楽しみください。

兄的指導とオレ

現状報告。

とりあえずあつちの方でにわか崇拜者に囲まれて、微妙に営業スマイルがひきつりだしてるデュランを肴にレーズン抜きラムレーズンアイスを食ってます。

それってただのラムアイスじゃないかって？ いや違うんだなあこれが。仄かに残るレーズンフレーバーがあるか無いかで全く違うんです。てか、ラムアイスって酒のアイスじゃん。

あ、デュランが壁際に追い詰められてる。

平和やなあ。

アレ見てると魔王を倒すのに勇者は要らん。

ファンクラブでも作って皆で押しかけたら、多分魔王の方から勝手に逃げてくぞ。うん。

うつとりした顔で詰め寄る店員さん達によって、「壁際・追いつめ・キス寸前(?)」と言うどっかのラブコメの王道を堪能してるデュランを微笑ましく傍観していると、急に近くから話しかけられた。

「それでさ……」

「ぐおおっ?!」

「うわ、何だよ?!」

「あ、何だアポロか。びっくりした、忘れてた、まだ居たんだけ」

「……」

アドルフだった。

はー、びっくりした。死ぬかと思った。

「お前なあ、どう言う驚き方してんだよ……こっちが驚いたぞ」

「あー、や……何かごめん？ っていやいや、今のはそっちが悪い

だろ」

「あー、すまん」

「まあ良いけどさ」

本気でどうでも良い話だった。

オレはカリカリとコーンの縁を齧る。

まずこっやってカリカリな部分を少し食べて、次にアイスが染みてふにふにした部分をコーンの縁を食べる。そしてまた少しカリカリ、また次にふにふにを順に食べる。こっやって交互に食べることで双方の感触が楽しめる。これが正しいコーンの食べ方である。

もちろん、コーンにココア味とかついているのは邪道。

アイスの風味が楽しめない。

はー、うまー。

「おい、聞いてるか？」

「いや、オレはあんたの甥じゃねえし、聞いてもねえですが」

「……」

「で、何かオレに用か？」

「……真面目に聞けよ。お前の話なんだから」

はい？

「さっきの事だ」

重ねて言われてオレは急に食欲がなくなった気分になって、アイスを口から離す。

いや、食事中にそんなえぐい話するんじゃないよ。

じーっと食べたいけど食べる気を無くしたアイスを睨んでたら、アドルフもさすがに空気を読んだのか「ごめんな」と謝って来た。

いや、謝られても出てっっちゃった食欲は戻ってこないけどさ。

「ここは定番のあれか。「オレが悪かった、帰って来てくれ」って奥さんに逃げられたダメ夫みたく土下座するしかないのか。」

「そんなことをぐだぐだ考えてたら、アイスを食い終わってたアドルフが隣にドスンと座って来た。」

「うわーい、邪魔だ。」

「……お前さ、さっきの話あの子達にちゃんと話して無いだろ」

「話してねえけどさ」

「今回かぎりのトラブルだってならそれも良いさ。けど、今後も続く問題なんだろ？ あれ」

「終わって下さい」

「いや俺に言われてもな……」

「妥当な返しだな。うん。」

「あ、そうだ。お前ちよつと行ってあいつの頭殴って中身かっとなしてくれよ」

「アホか！ 堂々と犯罪依頼するんじゃないやねえよ！」

「やっぱり駄目でした。」

「さっきのデュランの取引、もっかいやり直せないかな……」。

「こら、現実逃避するな」

「痛ったあつ?!」

「おのれ、デコピンとは古典的な手を使いおつて！」

「お前が真面目に話聞かないからだろ」

「えー……てかさあ、何でお前がそこまで口つつこんでくるわけ？ 仕事関係ねえじゃん」

「あるんだよ。俺、引き続きあの人の護衛請け負ったからな」
「……」

その護衛対象なら今丁度向こうの方で崇拜者の群れに襲われてますが。

守れよ。

「で？」

「オマケでくつついてるお前らが妙なトラブルに巻き込まれて、仕事に支障が出ちゃ迷惑だからな」

うお、意外と身も蓋も無い言い方するんだな。

でもオマケなめんじゃねえぞ。

ビックリ　ンチヨコの騒ぎをオレ知ってるからな。

あ、デュランが笑顔で取り巻きを無力化した。

相手するのが嫌になったんだな、きつと……しかし、あの死屍累々の皆さんを誰が片付けるんだろう？

……よし、アドルフ行け。お前の出番だ。

「おい、また聞いてないだろ」

「あだっ！」

お、おのれっ！一度ならず二度までもこの私に傷をつけるとは！

許さん、許さんぞおっ！

……微妙にセリフが混ざってるが気にしないように。

「お前さあ……何かオレの扱いひどくね？」

「お前がちゃんとしなないからだ。人の話聞く時は背を伸ばして、ちゃんと聞く。良いな」

ひしひしとお兄ちゃん系オーラを感じます。
うん、でもまあ言ってる事はまともだし、こんなとこじいちゃんに見られたら確実に叱られること間違いなしなので、オレは嫌々背を伸ばして……あ、その前にアイス。
はぐつ。

「……お前な」

「むっめ、むーみむむむ……」

「あー、分かん分かん。良いからさっさと飲み込め」

アイアイサー。

オレは一口で口の中に押し込んだアイスをがしゅがしゅかじって、グイツと飲みこむ。

あー、勿体ない……。

でもしょうがねえじゃん。話してる最中に確実に溶けて崩れるもん。

……オレのレーズン抜きラムレーズン。

「……後でもう一個ぐらいはおごってやるよ」

「マジで！ お前意外と安い感じで良い奴！」

「……誉めてるんだよな？」

誉めてますよ。一応。それだけじゃないが。

それはさあ、お前
閑話休題。

「良いか、今後も続くトラブルに関してはきちんと周囲と情報を共有して対策をたてるべきだ。一人で対処できる物でもそうだ。まして、お前の力じゃ対応できないことなんだろう？」

出来ます、何て言ってみても説得力ねえだろうなあ。

実際、こいつに引きずり出されるまでオレはあの場に居るしかなかった訳ですし。

オレがだんまりを貫いてると、アドルフの方が先に折れてくれた。うん、そう言う所もとことんお兄ちゃんキャラですな。

……そう言えばこいつもデュラン見慣れたせいで忘れてたが、それなりに美形だっけか。うん、今思い出した。

「蹴って良い？」

「今の話の流れでなんでそうなる?!」

あ、確かに丸っと無視してた。

えーっと。

「うん、正論だけどオレ言う気ねえから」

「おい」

だからオレはお前の甥じゃねえですよ？

何て軽いボケを心の中で挟みつつ、オレはアドルフの目を見上げる。こつ言う時は目をそらしちゃならない。心の中で一步でも引けば、即座に相手にそれが伝わるから。

冷静に、激せずに、退かずに、オレの言いたい事を相手の目を見て告げる。

「コレはオレの個人的問題プライベートだから。リスクを受けるのはオレだけだし、リムりん達には迷惑かかるだけで何のメリットもねえトラブルだろ。その、オレがケリをつけなきゃならねえ話で、折角旅行楽しみに来てるあの子達に迷惑はかけらんねえよ」

「お前、間違ってるだろ」

正面からばっさり言われました。

「大体さっきのだって、俺がいなかったらあのままずっと捕まっていただろ。その間あの子達は待たせっぱなしだったこと、分かっているよな」

「う、うん」

「心配だって掛けるし、探しに行く事だってする。それはデメリツトじゃないのか？」

「お、おう……」

「黙ってたら迷惑かけないで済むとか思うな。あの二人だけじゃ無い、ボスだってそうだぞ」

「いや、デュランは面白がってほっとくような」

「あのな……一応、保護者責任つてのがあの人にだってあるんだぞ」

……、保護者。

オレは向こうの方で一人優雅に珈琲を飲んでるデュランを……って何時の間に。アイツ本当に珈琲好きだな。

そしていつの間にか倒れてた取り巻きさん達が綺麗に片づけられて……あ、救急車が、なんだ。

いや、でも保護者、ねえ？

まあ確かに保護というより庇護ぐらいはしてくれそうだ。生命の危険に陥れば、だけど。

命綱だけはつけとくから、それ以外は自分で頑張れ、があいつの主義だろう。

オレにとっちゃそれは有り難いんだけど。

「おい」

ふっ、今回は来る事を予想していたぜそのデコピンー！

ベチイ！

「……………」

「……いや、涙目になるなよ。悪かったから」

分かってても避けられんもんはしょうがないのです。偉い人にはそれが分からんのです。

いや無理だよ。

分かってたら出来るんなら野球なんざホームラン打ちまくりますよ。

「てかこれで死んだら恨んで祟ってやる……額の左上という中途半端な位置からまだらハゲになって、ついでに痔で苦しんで椅子に座る時にふかふかクツションが必要な呪いをかけてやる……」

「呪いの内容がくだらない割に具体的に微妙に嫌な感じなのがものすごく怖いんだが」

ふっ、恨みの呪いに恐れ戦け。

我を称えよ。

……なんちゃって。

「赤くなってるな」

「誰かさんが弾いてくれたせいで細胞が幾らか死んでるだろうしな」

「恨みがましく言う前に治せば良いだろ」

「あー……や、オレそついうのほっとく派なんで」

「ああ？ ああ、回復魔法が苦手だからってほっといたら何時までも上手くならないぞ」

「ほっとけ、余計な御世話だ」

「またああいう奴に絡まれたらどうするんだ？ 怪我するかもしれないんだぞ」

「うつさいなあ。回避するし、回避できなかつたらさつき見たいに一人で愚痴らせとけば勝手に満足するから良いんだよ」

「お前、そう言う態度良くないぞ」

「あのさ、それも仕事？」

「言っただろ、不確定要素はなるべく排除する。お前みたいな体力も力も無い、おまけに人の話を聞かない態度の子供が、護衛対象の周りをうるつかれるのは迷惑なんだよ」

「……さいですか」

うん、プロの意見でした。

対抗しようとしたオレが馬鹿だった。

でも、こればかりはなあ。うーん、方針少し変えるか。

つまりこいつが気にしてるのは仕事に響くんじゃねえかって点だしな。そこに問題が無いように持ってけばいい。

「じゃあ、この仕事にああいうトラブルにオレが巻き込まれなければ問題ないよな」

「へ？」

「あいつ、前にリムリンとヴィーたんには叩きのめされてるから、彼女達が居れば絡んでこない。彼女達が居なくても、デュランが傍に居れば問題ないのも止そうとしちゃ妥当だよな。だって、あいつオレ一人抱えたぐらいじゃビクともしねえだろうし、当然デュランの傍には護衛のお前とか他のDDDも居るはずだもんな」

「お、おう。まあそうかもしれないけどな」

「つまり、こつちにデュランが居てお前らが仕事請け負ってる間オレが単独行動しなければさつきみたいな問題を起こすリスクはほぼゼロだし、起きたとしても即時に対応可能ってことだよな？」

「いや、まあそりゃそうだがよ。俺が言いたいのはだな」

「じゃ、こつち居る間は控える。必ず誰かと行動する。これでオッケ？」

「……本当に話さなくて良いんだな？」

念押しされてしまった。

が、オレは迷わず頷いた。

それにアドルフが呆れたっばく溜息をついて、明後日の方向を向く。

「しゃーねえなー……その代わり、厄介事引き込んでくるなよ」

「平気平気」

そう言うトラブルメイカーの役割はおもにあっちで珈琲タイムしてる魔王様の役目ですから。

かるーく請け負ったオレに、アドルフがしばらく疑いの目で見たことは猫の額より狭い心で許してやった。

ああいう世話焼きキャラはあまり関わらないのが吉なのである。

兄的指導とオレ（後書き）

【作者後記】

子供の理屈VS大人の理由、というところでしょうか。

でも、子供には子供なりの理由や事情があつて、一概に大人の理由が一般的で常識的であることが分かつていても言う事を聞けない事もあるんですよ。

どちらが正しいとか、簡単には言えないのかな、と。

勿論見守っている大人としては当然注意しなければならぬのですけれど……。

まあそんな真剣な話ではありませんが皆様お久しゅうございます。

久しく無い方、再びのご来訪に感謝を。

初めての方、幸か不幸か、袖すりあうも多生の縁。お気に召せば望外の幸い。

ナカバ達の珍道中は暫く続きますので、宜しければまたお付き合ってくださいませ。

作者拝

猛者襲来とオレ（前書き）

出したかったキャラの一人を追加です。
どんな人かは読んで想像してみてください。

猛者襲来とオレ

「終わったか」

「ぎゃー！」

どうしてどいつもこいつも不意打ちみたいに話しかけて来るんだ！
反射的に振り回したオレの手をひょいと例によって軽く避けて、
ニヤリと笑ったのは うん、説明するまでも無い某若づくり様で
ございました。

あ、アドルフまでポカンとしてる。

こいつも気付かなかったとか？ まっさかねー。

「ボス……」

「お前達のボスになった覚えは無いのだが……ナカバ、そろそろ
チエックインの時間だ。行くぞ」

「あ、うん」

とりあえず素直に立ち上がるオレ。

急に加わったオレ達の泊る場所何か当然用意してなかったハズな
ので、多分デュランが何とか抑えてくれたんだろうってことぐらい
は予測つくし。

屋根の無い所で一晩過ごすとかリムりん達女の子にはさせられん
し、オレがやればもれなく風邪をひくこと間違いなしだ。

セントラルに来てそれはねえよな。うん。

ということで大人数くデュランの後ろにくっついてくことにしま
した。

当然のようにアドルフもついて来る。

リムりん達が何か言いたげな目で奴を見てたけど、オレは手をは
たはた振って丸をつくってみせた。

問題ないからな、ってこと。
リムりんがツボに入っただのか笑いを堪えてたのはまあ、うん、割
愛で。

で、

「意外と……うん、いやでも何か高級だ」

もっと成金趣味のワクテカ……じゃなかった、ピカテカした所に
連れてかれたらどうしようかと思ってたが、意外にもデュランの選
んだ先はさしてデカくもなく、キンキラでもなく、えーと……古風
な感じのお宿でした。

ロビーのふんわかソファアに座って、オレは足をぶらぶらさせる。
落ちついたオレンジとか茶色とか、象牙色で統一された内装は温
かみがあつてオレは嫌いじゃない。

全体的に西大陸様式だな。

「どござ」

おお！ メイドさんだ！ 生メイド！

につこり笑顔が上品で素敵なメイドさんがお茶出してくれました。

「ありがとうございます」

お礼を言ったらにつこり微笑まりました。

うん、癒される。可愛いなあ。綺麗だなあ。良いなあ、素敵なメ

イドさん。

変にデコしてないメイド服がまた好感度アップですな。

向こうで空気を読まないデュランが珈琲を頼んでるのをさらっとスルーして、お茶を頂く。

本当は玄米茶か梅こぶ茶が一番好きですが、紅茶だって美味しいと思う。

どこかの珈琲しか飲まない偏食家とは違うんです。

オレがぼけーっとしてる間にリムリンとヴィーたんは何やらパンフを広げてきやいきやいしてる。エステのサービスがあるから、それにどうも興味があるらしい。

こっちも可愛いなあ。

と、その時。

「いやあああああっ!」

絹……いや、何だろうえーと、ダンボールを裂くような悲鳴が上がった。

何事かと思って声の方向を見たその瞬間、

「っ」

だーん、とデュランが押し倒された。

……えー。

お前仮にも魔王何だからそりゃ拙いだろ。
てか護衛どうした。

いや、それより前に。

「誰?」

「陛下、私の気持ちをこんな風に酷く扱うなんて酷いのですのーっ!」

「いやいや、と首を振りながらポカポカと乙女ちつくな仕草でデュランの胸を叩く何処かの誰か。ってかマジで誰だ。

真っ黒な髪を赤いリボンでポニテに結んで、赤い目に白い肌。

真っ赤な口紅^{ルージュ}。真っ赤なネイル。

真っ赤なミニスカのスーツにフリルのついたドレスシャツ、赤いハイヒールに黒の網タイツ。

それがデュランの上にとーんと馬乗りになっている。

むっちりな鍛えられた太腿が眩しいっす。

「いや、私は」

「言い訳なんてききたくございませぬのー!」

両手で耳を塞いでいやいやー、と首を振る謎の襲撃者。

「あんなに色々尽くして参りましたのに、酷いのです、あんまりですのー」

「いや、それについては」

「今の私のじゃ満足できませんの? 他のが良いんですの?」

そんなのあんまりですのおっ、とデュランの胸の上に泣き伏す誰かさん。

てか、護衛どうした。

あ、フリーズしてる。役たたねー。

てか、

「あー、どう言う関係ですか?」

「どちらさまですのー?」

ポリポリとクツキーを齧りながら聞いたオレに、可愛らしい仕草で首を傾げる誰かさん。

答えを出したのは組み敷かれてぐったりしているデュランだった。

「あちらはナカバ、私の連れだ。こちらはこの服の制作者のデ」

「陛下専属スタイリスト、デイジーですの」

唇に指を当ててにつこりほほ笑むデイジーさん。

デュランに跨ったままだけど、非常にプリティーな仕草でござい
ました。

てか、スタイリストですか。

「居たんだ、そんなの」

「おりますのー。昔から陛下とは浅からぬお付き合いをしておりますの。きゅっ」

へー。そりゃ苦労してるだろうな。

……どっちがと言わんけど。

「浅からぬ、ですか」

「ですのー。私、一目見た時から陛下の体が忘れられなくて……ポ
ッ」

デイジーさんの発言に周囲がどよめく。

「あ、ご安心くださいの。私、陛下の体にしか興味ございませんの」

どよどよっ、と再びざわめくギャラリ。

それに構わず、デイジーさんはうっとり両手を組み合わせ、

「陛下のお体の良い所も当然知り尽くしておりますの。もう隠す物
のない関係ですの」

「私は少しは隠しておきたいのだが……」

「駄目ですのー！ デザイナーとボディーは一心同体の関係じゃなくちゃメツですのー！」

「そう言うもんなんですか」

「そう言うもんなんですの。な、の、にっ」

「落ちつけデデ」

「陛下つたらひどいんですのー！ 私の愛の結晶をこんな風に！
こんな風にー！」

言いながらデュランの胸倉を掴んでグラグラ揺さぶるデイジーさん。

「折角新作をご用意していましたが、前々回の作品を着てるなんて酷いですのー！！」

「……。はあ？」

「……」

思わずまの抜けた声をあげてオレはデュランを見る。

あ、あきらめの表情だ。

「私が色々着せかえするのを楽しみにしておりましたのにー！」

「……私は遠慮すると言ったはずだが」

「なりませんのー！」

力無く反論したデュランの言葉をピシヤリと遮って、デイジーさんは胸の前で指を汲んで瞳をきらきらと乙女チックに輝かせる。

ついでに大盛り、いや特盛り？ メガ盛り？ ギガ盛り？ ごん太盛り？ 銀河へ届けカールアップ彗星巻きすじかぶせ滝流しメガシャワー勝負盛りな？ な勢いの睫毛をバシバシと音がする勢いで瞬かせる。

盛りすぎじゃね？

「私が陛下のご衣裳をご用意するのは感謝の気持ちの表れですの！
一片の妥協も許しませんの！」

「私の意志はどうなる」

「聞いてませんの」

「……」

「陛下の素敵なお体に着せつける事を考えて夜も眠らずに働いた私の純情をおかえし下さいの！」

「返せるものならさっさと返済したいのだがな」

「でも、色々想像しながら待つ時間も嫌いじゃございませんの……

ぼっ

「……」

両手を頬に当てて、デュランに跨ったまま「もぢもぢ、もぢもぢ」と身悶えるデイジーさん。

未だに硬直状態から戻れないDDDの役立たずども。

おーい、仕事しろよ。

「この絶妙なバランスの筋肉、滑らかな首のラインから始まる均整のとれた体格線、少し細身の骨格、布の色調を最大限に引き立てるお肌、これを飾ると思うだけで私ご飯三杯は軽くいけますわー！」

「……はあ、さいですか」

「あーん、もう、頬ずりしちゃいたいですわー！」

「やめてくれ。強度は人並みに設定してあるのだぞ」

「いやですわー、陛下。私だってこんな理想的なマネキ……ゴフゴフツ、くそっ畜生が……大事な陛下のお体を乱暴に扱ったりなんかしませんわー」

今何か言いかけた。ってか確実に言っていたな。

おほほほ、と誤魔化すように高笑いして、デイジーさんはキラ
ンと目を光らせる。

「ともかく、このような姿を何時までも陛下させておくわけには参
りませんの。という事で、黒服カモンですよ！」

「はっ、お呼びですか社長！」

うわ！ どうか現れたメン ンブラック！

「新作を持って来なさいですよ」

「はっ」

「さー、陛下、覚悟なさってお着替えですよー！」

「くっ」

おー、デュランが焦ってる焦ってる。良い気味だ。

……。

ん？

着替え？ どこで？

嫌な予感がして見ると、デュランが抑えつけられたままはがされ
ようとする服を必死で押さえていた。

てかそれでも身ぐるみはぎ取りそうなデイジーさん強ええ！

っていやいや、ここは拙いだろ。誰か止めるよ。って誰も止める
気配なしですか！ そうですか！

てか何で皆さんそんな熱い目で見てるんですか。

黒服も何気に足抑えたりとか加勢してるし！

そののDDD、生唾飲み込んでる場合じゃねえよ！

そのの従業員も何映像記録してんだ！

皆止めるよ！ 公然わいせつ罪まつしぐらの状況だろうが！

とか思っても誰も止めそうに無いので、しょうがないから動く

事にしました。

紅茶飲み終わったし、クッキーのお皿もからっぽだし、やることねえもんな。他に。

「……あの一」

傍によって、トントンとデイジーさんの肩をつつく。

あ、ちゃんと手は拭いてからやってますよ？

「なんですのっ?」

「あ、いや……着替えるにしてもここ拙くないですか？ ほら、ロビーだし」

「え？ ああ……でしたわね。忘れてましたの」

忘れないで欲しかったなあ。それ。

そして何故か残念そうな溜息を吐く他の皆さん。

いや、そこ残念違うだろ。安心しろよ。お前ら美形男のストリッ
プショー見て楽しいか？

「ナカバ」

「何だよ」

「助かった」

胸元を掻き合わせてぐったりした様子で言ったデュランにオレは重々しく頷いた。

はい、是非恩に着て下さい。

猛者襲来とオレ（後書き）

【作者後記】

はい、デイジーさん登場でございます。

この人書いてて非常に楽しいです。

以前デュランが言っていた「悪気はないだろうけれど押し倒されて服を剥がれる」という知り合いはこの方です。

さて、一応仕掛けは設置しましたけれど本筋には関係ないので、次の回でさくつと回収しようと思います。

もうその貴方はお気づきですね。その通りです。

それでは、また次回お会いしましょう。

作者拝

敏腕社長とオレ（前書き）

前回の簡単な種明かしです。

敏腕社長とオレ

「お騒がせしてすみませんのー」

デイジーさんが抑えてある部屋とやらに黒服の皆さんに御神輿よろしく担ぎ込まれ、現在、オレ達はちよーんと豪勢な応接セットの片隅に座っております。

目の前には先程デュランをひん剥きかけた猛者、デイジーさんが小指を立てて上品な仕草でカップのお茶を飲んでる。

背景にはさっきのゴツイ黒服さん達があつちり控えている。空間面積に占める容量が大きい何のって、威圧感満点である。

うん、まあこの人の場合しようがないのかも知らないけどね。

この自称デュラン専属スタイリストのデイジーさんこと、デイジー・イーニングウッドさん。だいたい想像してたけどデュランの着てる服のブランド、セン……なんちゃらの代表取締役社長さんだった。

社長だけど、デザインから縫製まで何でもこなす人で、今は経営主体だけどデュランの服だけは必ず自分でデザインから布選びから最後までやってるんだそうなの。

ちなみに結構な敏腕社長らしい。

人は見た目によらない……ん？ いや、この場合多分ちと違うのか。

「私、昔から仕事の話になると余所の事がパツて頭から飛んじやいますのー」

「お前のその見境なさが無ければな……」

「ごめんなさいですのー、陛下」

「そう言いながらまた脱がそうとするな……」

ぐったりテンションでデイジーさんの手を逸らすデュラン。
めげずにチャレンジしているデイジーさん。その指にキラんと光るは幾つもの指輪。

右手の小指にはでっかい赤い石がついた奴があるし、左の人差し指にはハート型にピンクの石がくっついてるのが嵌ってる。あと薬指には装飾の無い銀色のリング、右の小指には華奢なデザインの金色のリング。

きつと全部、相当たっかいんだろうなあ。総額幾らするんだろ？

「もう分かったから、せめて自分で着替えさせてくれ」

「本当に反省なさってますのー？」

ぶくーと頬を膨らませるデイジーさん。
とつてもキュートな仕草でした。
恋に落ちるかもしれないや無理だ。

「……まあ」

嘘がつけない美形、デュラン。締めて良いかな。

それにデイジーさんは「むー」と唇を尖らせて、溜息をついた。

「仕方ないですのー。私の大事なマネキンですから特別に許して差し上げますの」

マネキンってついに言っちゃったよ。

「陛下を更衣室にご案内なさいの」

「ハッ」

言ってデュランをひょいと神輿担ぎにしようとし、

「……」

持ちだそうとした黒服さん達を見上げるデュラン。

「「「……」」」

面白いように固まってる黒服ズ。

「?」

「ああ、駄目ですわね。陛下、お手数ですけれどもご自身で歩いて行
つて下さいのー」

「ん？ それは構わんが彼らは……」

「ただの修行不足ですの。後でみっちり鍛え直しますのー」

赤だった黒服さん達の顔色が青に変わった。

歩行者用信号機みてえだな。

「さて」

デュランを追い払い、気の毒な黒服さん達を隅に纏めて片付け（
どうやって片付けたのかは御想像にお任せしますガクブル）、デイ
ジーさんは笑顔でオレ達の方へ振り向いた。

あ、ちなみにオレ達と言うのはオレとリムリンとヴィーたんです。
DDDの皆さんは「これ以上はわが社の機密にもかかわるので立
ち入り禁止ですの」とデイジーさんの特大ウイंकを貰って追い出
されていた。

本気で役たたねえな……どうしたアドルフよ。

「こちらの可愛い皆さまは陛下のお連れさんですの？」

「あー……はい、まあ」

「貴方、さつき陛下が仰つてたナカバちゃんですのね」

「ふうふ！」

「チャンハヤメテクダサイ……」

「あら、どうしてですのー？ その方が可愛いですのー」

「ナカちゃんにちゃん付けして良いのは私だけよー！」

リムりん、熱く語つてる所悪いけど、そんな約束した覚えはねえよ？

「では、ナカ吉に吉をつける権利は私が頂きます」

いや、それもおかしいから。

てか、ヴィーたん居ないとオレ、凶だらけになるっぼくて微妙にその言い回し嫌なんですけど。

「そうでしたのー。ではナカバたんとお呼びしますの」

「止めてください」

「NO！」という勇気があなたの人生を変えます。

「どうしてですの？」

「いや、むしろオレがそれ聞きたいんですけど、何故に「たん」……」

「その方が萌え要素が増しますのー！」

「いい笑顔で飛んでも無い事を言われた。」

「いや何かもう、この飛んでも具合は間違いなくデュランの関係者だな、うん。」

「取り合えず丁重にお断りしました。」

「で、オレ達が何か」

「一通り自己紹介を終えて、オレはデイジーさんに尋ねる。それにデイジーさんはにっこり笑って、」

「んー、ちょっと気になりましたの。陛下はこう言う時にお一人で行動なさいますもの」

と答えた。

あ、成程ね。ほむ。

「オレが我がまま言ってくつついて来たんです」

「そのナカちゃんに我がまま言って同伴させていただいたの」

「右に同じく」

「ちなみにもな目的はデュランの財布と観光ですんで」

「んー、ですのー……」

上品に頬に手を当てて何か考え込むデイジーさん。

その様子を見ながら、オレは控え目に手を上げる。

「あー」

「何ですの？」

「オレからも二つほど質問良いですか？ 凄く今更なんですけど」

「かまいませんのー。でも、営業秘密の関係はお話しできませんのー」

「」

「あ、多分大丈夫です」
「でしたら結構ですの」

ばっさばっさと睫毛をしばたたかせて許可してくれたデイジーさんに、オレはずっと気になっていた疑問をまずは一つぶつけてみる。

「あの、デイジーさんって……えーと、男性ですよね？」
「勿論ですのー」

……勿論なのか。

ということ、黒髪を赤いリボンでポニテに結び、つけまつげをてんこ盛りにし、真っ赤な口紅に真っ赤なネイルをして……がつちりむつきりな大胸筋をフリルのついた襟元から惜しげも無く晒すデイジーさんはやっぱり立派な男でございました。

スーツの上からでも分かるはちきれんばかりの上腕二等筋だとか、いかにも広背筋とか三角筋だとか鍛えてますみたいな逆三角プロポーズ……じゃない、プロポーションだとか。

きつとあの引き締まりまくったウエストの下には素晴らしい腹直筋が秘められてるんだろう。

いや、もう男の娘とかいうレベルじゃねえですよ。

どれかっていうと漢オトコの女メイト？

声も渋い感じの素敵なバスです。

こんな所でソファアに座って服のデザインやってますって言うより、ストファイに出ていますっつわれたほうが納得するような、そりゃあ見事な漢オトコっぷりでした。

ま、あの一八 越えのデュランをやすやすと抑えつけてひん剥くにはこれぐらいは必要だろうっけどさ。

オレがしげしげと大腿四等筋からハムストリング、下腿三等筋へ

続くドラマチックな調和を眺めると、顎に両手をやって頬杖をつけてた「うふ」とデイジーさんが笑った。

仕草は非常に可愛らしかったです。

思わず惚れそうになりません無理ですさようなら。

いや、マツチヨはきらいじゃねえけど、惚れるのは無いな。

それにデイジーさん、微妙に男くさい感じでの美形なんだよな。

ダンディズムがそのたくましい僧帽筋から漂ってますよ。

まあ、服装のインパクトに負けて霞みがちですが。

これでタキシードとかスーツとか着たら無茶苦茶似合うだろうに。

「別に女装趣味でもございませんのよ」

「……。そうですか」

いや、物凄く説得力無いんですけど。

まさか夏の新作を自分で試着して宣伝とか言わないよね？

言っちゃ悪いけど確実に売り上げ落ちると思うぞ。

「愛する妻もおりますもの」

と、どんな巨獣も一撃で蹴り殺せそうなおみ足を足首の所で組み直すデイジーさん。

実は既婚者でした。

奥さん、止めないのか旦那を。

リムりん達も何とも言えない顔をしている。うん、コメントに困ってるんだね。すまん。

うん、じゃあとりあえず話題転換で……さて、どうやって聞くかな？

「えーと、じゃあ二つ目の質問ですけど。デイジーさんってもしかして四」

「あ、陛下お帰りなさいのー」

ちっ、肝心なところで邪魔が入ったか。ずらかるぞ。

……いや、ずらからんけどさ。

オレは舌打ちしながら振り返り、戻ってきたデュランを迎える。

うん、例によって白かった。終わり。

「お帰り」

「ん？ ああ……ただいま」

デュランの笑顔でのされた黒服の皆さんが生き返りました。

医者いらねえな。

「陛下、ちょっとお待ちくださいのー」

デイジーさんが立ちあがって、デュランのどこまで行ってチヨイチヨイ着方を直してる。

てか、一本一本がカイコですか？ ってな太さの指なのにあんなに細かい作業が出来るのは正直びっくりだ。すげえなプロ。

「結構ですの」

ようやくOKを出したデイジーさんにほっと一息を吐くデュラン。
お疲れの様子ですな。

「んー、では今回の分のご相談しましょうの。お連れの方はそうですわね……黒服、お部屋までお送りしなさいの」
「ハッ」

部外者は退出せよってことらしい。ま、しょうがねえか。

復活した黒服ズ（まだちょっと顔色悪い）に促されてオレ達は立ち上がる。
と、

「ナカバ」

「何だよめんどくさいな美形は死ねば良いのに」

「本心が駄々もれだな」

あれ？ 口に出してた？ すまん、本当に面倒なんだ。

「少し話がある。残ってくれ」

「えー……」

「でも陛下」

言いかけたデイジーさんを手の動きで遮って、デュランが俺を見上げる。

あ、珍しい。ちょっと優越感。

「ナカバ、大体予想は付いているのだろう？」

予想？

あー、えーっとつまりアレのことか。

うーん、この場合何ていうのが無難なのかな。リムりん達居るし。オレはちょっと考えてから、多分デュランが期待している答えを出してみる。

「デュランとデイジーさんが同類って事か？」

正解。

そう言いたげな感じでデュランがにっこり微笑んだ。

敏腕社長とオレ（後書き）

【作者後記】

回答編。

デイジーさん、れっきとした男性でした。

そして、ついでに言う人間でも無い……？ようです。その辺の話は次でナカバやデュランが語ってくれるはずですよ。

今晩は、尋でございます。

久し振りの方、またお目にかかれたことを光栄に思います。

久し振りでもない方、また来て下さってありがとうございます。

初見の方、お初にお目にかかります。お気に召したならば末長いお付き合いを。

この後しばらくインターバルのような部分に入ります。

本筋に……うーん、関係無くは無いですけど、読まなくてもOKという部分ですね。

世界観だとか、設定だとかの説明になります。

結構ぎつしりなのでどこまで読みやすく書けるか、少し挑戦してみようと思います。

それではまた、いずれかの機会にお会いしましょう。

作者 拝

過去物語とオレ（前書き）

とりあえず裏方語りみたいなもんです。

いろんな話が含まれてますが、とりあえず観光旅行には基本関係ありません。

過去物語とオレ

「デルギウスは物質界側の協力者の一人でな」

人払いが終わって、おにゅーの服を着たデュランはソファーに体を埋めて足を組む。

相当際どいところまでスリットが入ってるせいで足組むのは楽々って感じた。

いや、下にズボン履いてるから別に問題ないですよ？

誰だって魔王の生足なんざ見たかねえだろ？

「デルギウスなんて名前で呼ばないで下さいのー。今はデイジーですのー」

「ああ、そうだったな。まあ、昔の彼の名前はディアヴォロス・デルギウス……まあ後ろの称号はお前には意味を為さないから省略するが、元魔族ということだ」

「デイジーですのに……」

ぶつとい指をつんつんと突き合わせていじけるデイジーさんこと、ディアヴォロス・デルギウスさん。

やっぱり魔族でした。

いや、普通に考えて普通の人間がデュランを「陛下」って呼ばんですよ。

「陛下」って呼ぶって言う事はつまり、こいつが魔王だって知ってて、なおかつその魔王を「陛下」って呼ぶポジションに居るってことだ。つまり、魔族。

デイジーさんはしょっぱなからデュランの事を「陛下」って呼んでたし、デュランもそれを当然として受け取ってたし、加えて明らかにデュランが何らかの目的で中央にセントラル来ると分かっていることをに

おわせる発言。ここまで揃えば答えは簡単でしょ。

まあ、同じディアヴォロスって種族だとは思って無かったけどさ。

……ん？

「元魔族？」

「今は人間ですよ」

にっこり笑うデイジーさん。

もしや、その格好は人間になる為の謎の儀式とかですか？

「関係ございませんのー」

……さいですか。

説明を求めてデュランを見ると、コーヒーカップを両手で持ってたデュランが「ん？」と瞬いた。

「いや、えーと、元魔族で今人間ってどういうこと？ 何で？」

「愛ゆえですよ」

いや意味が分かりません。

取り合えずじーっとデュランを睨んでみると、奴はややあって小さく苦笑した。

「まあ、確かにそうだな」

「んー？」

「私の妻が人間でしたの」

ほー。

デイジーさんの話にオレはちょっとびっくりする。

「結婚も真剣に考えたのですけれど、ちょっと色々と事情があつて難しかったんです。彼女と私と種族の差があつたのもそうなのですけれど……」

言つて言葉を濁すデイジーさん。

ほむ、あまり追及されたくないっばいな。じゃ、触れないでおこう。

「それで、陛下に相談しましたの」

「マーガレットがな」

「あうう、それは言っちゃイヤですよー」

「あれはなかなかの見ものだったぞ。デルギウスの半分ほどの背丈の娘がこやつを耳を引っ張つて俺の前に引きずり出してきた時はな「むー」」

嫁関白だったらしい。

てか、嫁さんの名前、マーガレットさんつて言つたんですか。

「今の姓も妻から貰つてますのー」

「ふーん。それでどうなつたんですか？」

「それで、陛下に助けていただいて私は人間になつて、マーガレットと二人物質界で新たな生活を始める事が出来ましたの」

「魔族つて人間になれるもんなの？」

「まあ原理としては充分可能な話だからな。とは言え、実行するのは難しい……俺でなければ無理だっただらうな」

はいはい、チート説明乙。

「でも、陛下にはすつごく感謝してますのよ」

とデイジーさん。

「私達が結婚できたのも、幸せな生活を送れるようになったのも、子供に恵まれたのも陛下のお陰ですもの」

「それでマーガレットさん今どちらに？」

「……亡くなりましたの」

うわ、しまった。

そう思ったのが顔に出たのか、デイジーさんはにっこり笑って「良いんですよ」と首を振る。

「仕方ありませんの。人間ってとつても脆いって知ってましたもの。今の私も簡単な事で傷が付きますし、一度傷つけばなかなか治りませんもの」

「……何か、すみません」

「別にあなたのせいじゃありませんもの。それに、それまでずっと二人で居て幸せでしたもの」

はつきりと幸せだったと言い切るデイジーさん。

生まれ故郷も捨てて、魔族から人間になって、奥さん先に亡くして、それでもそれまで幸せだったって言い切れるこの人はきつと強い人なんだろう。そして、幸せだったんだろうな。

オレにはまだ、そういうのは良く分かんけど。

これから先も分かんたらうけど。

「それに、今の仕事もずっと性にあつてて楽しいですの」

「仕事つて、社長さん？」

「そつちじゃなくて、お洋服の方ですの」

「ああ、成程。ちなみに元は何をやってたんですか？」

「ディアヴォロスですから軍人ですの」

「……成程」

すっげー軍人っぽい体格ですよ。物凄く納得してしまった。

「でも、向いてませんでしたのね、きつと。今の方がずっと充実してますもの」

「その服もご自分で作ったんですか？」

「ですの。妻がこう言うのが好きだったんですのよ」
「ほむー」

……んー？ 趣味じゃなくて、仕事でも無くてとなると。

「その服装とか喋り方って奥様を偲んで……とかですか？ 夫婦一心同体っつーか」
「ですのー！」

ぎゃー！ 鋼鉄ハグー！

「この子賢いのですのー！ さすが陛下のお気に入りですのー」

「ぎゃー、しぬー」

「あら、ごめんなさいですのー」

ぜーぜー、と肩で息をするオレにデイジーさんが済まなそうに謝ってくれました。

が、もう少しで複雑骨折する所だったと主張しておきます。

てかデュラン、お前も珈琲眺めてないで助けるよこう言う時は。役たたねえな。

「でも、元魔族と知っても普通にお話ししてくれるなんて、良い子ですの。陛下が気に入られるのも分かる気がしますのー」

「いや、気に入られてませんから。それに、オレは魔族についてちやあんまし現実味ないっつーか、知り合いがそちらの魔王陛下と、セシエンさんと、あとえーと……後もう一人だけで、特に恐怖とか憎悪を感じるような経験したことが無いだけですから」

「んー、でもなかなか貴重ですよ？」

そう言われてもなあ。

オレはぐにー、とノビをしてここまでずっと黙ってるデュランの方へ眼を向ける。

「で……何でオレだけここに残した訳？」

「……」

「おーい」

「あ、ああ。すまん」

ちよつと、しっかりとしっかりしてくれよな。

そう思うオレの前でデュランは珈琲の入ったカップを机の上に置いて、足を組み直す。

「まあ、簡単に言うと今後のお前達の行動方針について、かな」

「お前達って……オレとリムリンとヴィーたんのこと？」

「そうだな」

行ってデュランは小さく眉を顰め、天井を見上げる。

「連れてきた以上、お前達の事はなるべく守る。だが、この体では限度があるので……お前も少し事情を知っておいた方が良く。そう思ってここへ残って貰った」

「うーん、オレ知っちゃって良いわけ？」

「問題ない程度しか教える気は無い」

この野郎。

尊大な態度でふんぞりかえる魔王様の胸倉を掴んでガクガク揺さぶって居たら、デイジーさんに「服が乱れますのー！」と強制剥離されてしまいました。

てか、こんな時も服の心配ですか。本当にデュランに感謝してるんだろうか？

……で、仕切り直し。

「つまり、オレは協力はしなくて良いけど、最低限身を守れるぐらいの事情は知つとけてることか」

「まあ、それだけではないがな」

「ふーん」

並々と湛えられた黒い水面を眺めながらオレは呟く。

「じゃ、あなたの目的に邪魔が入らないようにオレがどうしたらいいのかわせてくれよ」

ちよつと目を見張ったデイジーさんの隣でデュランが微笑んだ。

過去物語とオレ（後書き）

【作者後記】

ということまでデイジーさんの昔話でした。

デイジーさんはこのシリーズにおいては珍しく幸せなカップルです。
（まあ奥さん死んじゃってますけれど）

今晚は、尋でございます。

再びのご来訪、或いは初めてのご来訪感謝いたします。

前回、前々回はコメディ風味強めでしたが今回と次回はややシリアス色が強くなると思われます。

一般人で、特に力も無いナカバが「力あるモノ」にどう関わってゆくのか。

若干退屈かもしれませんが、見守って頂ければ幸いです。

それではまたいずれ、次の機会にお会いできることを願って。

作者拝

依頼三件とオレ（前書き）

普通三つの願い事をするのは魔人ではなく、人間の方です。ですが、魔人の願いを人間が叶えることだって出来ると思うのです。

依頼三件とオレ

「まあ、少々面倒な仕事でこちらに来ていてな……」

お前めんどくさい事ばつかだな。性格含めて。

とは心優しいナカバさんは言わずに黙って頷いてあげました。優しいオレ。

誰も言わないから自分で言ってみました。

自分でダメージ受けました。

手間いらず。

「それを妨害したいと考えている者が居る」

「何で？」

「一つはあれの目的にとって望ましくない事を俺がしようとしているからだな」

「ほむ、もう一つは？」

「俺の事が嫌いなのだろう」

気が合いそうだ。

「まあ俺がこうしてこちらに来ると言うのはアレにとって嫌がらせの良い機会なのでな。張りきって色々構ってくれとやって来るといふことだ」

「ん？ 何で良い機会？ 護衛ワシゴが居ないから？」

「いや、それもあるが……俺本体にはあれが傷をつける事は不可能だからな。だがこの人形オートマタの体は強度は人間並み、魔力に至っては体を動かす為の最低限度しかない」

「ああ、弱っちいから狙いやすいのか」

「そう言う事だ」

「せこいなー」

まあ、チート満載の魔王本人に立ち向かえつつてもそれどんな無理ゲー？ って感じだけどさ。

ふーん、でもそれだけのリスク背負って、デュランは何しに来てるんだらう？

そんな疑問を込めて見ると、デュランが小さく笑った。

「まあ、パッチをな」

「はい？」

パッチ？ ブローチ見たいな奴？

「ああ、いや、差分だ。^{パッチ}まあ、メンテナンスの為にな」

「何のメンテ？」

「……」

黙って微笑とかけまして、その心は黙秘権つてところか。全く整って無いが。

「で？」

「お前に頼みたいのは三点、一つは万一途中で俺がリタイアした際のパッチの回収だ」

「いきなり重いな……で、そのパッチってどんなのさ？」

「それは秘密だ」

「……ほほう」

秘密ですか。そーですか。

ゆらーりと某忍術学園の戸部先生のように立ち上がったオレから不穏な空気を感じたのか、さっとデイジーさんがオレを摘まみ上げ

た。

ぎゃーす！

「駄目ですよ！ 落ちついて下さいのー！」

「はなせー！ この馬鹿の顔、一度蹴る！ 蹴り潰す！」

「まあ落ちつけ」

「お前が言うな！」

「大体お前の足の長さでは俺の顔の高さまで届かん」

「うっさい！」

「教えてしまつとお前が危険だ」

「なら頼むな！」

「お前なら」

オレの言葉を遮って、デュランが少しだけサングラスをずらす。

縁から覗く紫の目。

「その時になれば分かるはずだ」

「……いや、無理ですから」

「分からなければ俺の所持品全てを処分してくれば良い。元よりあまり持ち歩いていないからな。判別が出来ない状態ならお前は放置してかまわないから、代わりにデルギウスに連絡を取って残骸の回収に来るよう依頼して欲しい」

「あ、いやちよつと待って。えーと……」

え？ リタイアってつまり、そういうことですか？

いや、うん……変じゃないよな。ほら、デュランって魔王だし。

列車の時だって襲われてたし。あれマジで防衛失敗してたらそりゃあ、うん。アレだよな。こう、チュドーン、コッパミジンと言いますか。

まあ立場もアレだし別に予測できない話じゃ、ない、よな？ う

ん。

「ナカバ」

ぶらぶらとデイジーさんのぶつとい腕の先にぶら下がってるオレのデコに、ポン、とデュランの手が乗る。

「……何でしょう」

「少しでも迷った時は直ぐにデルギウスに連絡を取り、DDDに保護を求めろ。良いな」

「……いや、まあそうするけどさ」

「オートマタ人形もいずれ破損する。それだけのことだ」

「……うん」

いや、ダメーだつて分かってますよ。聞きましたから。平然と答えたオレに、何故かデュランが小さく眉根を寄せた。

「……すまん、やめておくか」

「いや良いつてば。ま、テキトーにしか出来んけどさ」

デイジーさんに下ろして貰って、オレはもっかいソファアに腰を下ろす。

うん、何か色々頭から血が引いた感じだ。

そっか、さつきオレ達死ぬかもしれなかったんだ。今更そんな事に気付くなんて変だけどさ。

でもあの時は全然そんなこと考えちゃなかったんだ。リムりん達が居たし、デュランも居たし、何か知らんけどDDDも後から来たし。何かドカドカ音がしたり光ったり揺れたりしてたけど、そんなの今時何処の遊園地だつてやってる演出だし。

だから、あれが一步間違えれば死んでて可笑しくない状況だつて

オレは今の今まで分かって無かったんだ。

デュランが、そういう目的の為に列車一つ平気で巻き込めるよ
うな奴に狙われてるなんて。それも、他人を操ってそういう事させ
てる奴に狙われてるなんて。少し考えれば分かることだって全然思
いもしてなかったんだ。

今更だ。ホントに。

「ナカバ」

「や、平気平気。ちょっと自分鈍いなってだけだからさ」

「……。二つ目、このホテルは一種の結界だ」

目を閉じて小さく息を吐いて、デュランが急に話題を変えてきた。
あ、いや変えてねえのか。

「つまり、緊急時にはここへ逃げ込めってことか」

「そう言う事だ。お前は連れの二人と、それからDDDを誘導する
為の標になれ」

ふむー。

確かに一番弱いオレが動くってのは良い誘導の標になるな。適役
だ。

でも誘導はまあやってみるとして、問題は逃げ込んだ先……この
ホテルの強度だよな。

見た所大した防衛機構とかも備えてないっばいし、結界とかは良
く分からんけど絶対壊れないってもんじゃねえだろ。

中に内通者が居るかもだし、誰かが操られてるかもしれねえし。

目的の為に列車まるごと一つ破壊しようとするような奴が、ホテ
ルに対して手加減するようには思えない。

ので、聞いてみた。

「でもさ、そういう結界って『もうダメ、耐えられない。結界が破られる!』とかなるのがお約束じゃね?」

「ああ……多分それは問題ない。ここを破ることは、あれの望みそのものを壊すことになるからな」

「ほむ?」

結界を破るイコール向こうの目的が失敗、ですか。

良く分からんな。

何かえげつない手でも使ってるんだろうか。きっとそつだな。

とりあえず、ここは安全っと。

了解。

あれ、でも良く考えたらオレ、魔王の手先になって良いのか?

「ああ、問題ない。今回の仕事は魔王としての仕事では無いのでな」

「あ、そうなんだ」

「強いて言うならメンテナンスだ」

「それさっき聞いた。で、何の?」

「黙秘権を」

「させねえよ」

笑顔で断言したら、デュランが沈黙した。

そしておもむろに指を一本立てる。

「それは秘密です」

「謎のゴキブリ神官の真似とか古いアニメ引つ張り出すんじゃないかねえ!
! 通じないだろうが!」

いや、オレは通じちゃいましたがね。

「まあ、秘密だ」

「結局秘密なのか」

「ヒントは時計塔。君にこの謎が解けるか」

「いや、だから古いんだってば。犯人この中に居たら困るし」

「では、見た目は子供で頭脳は大人のバーローの真似を」

「せんで良い」

いやそっちはまだやってるけどさ。この前劇場公開もしてたけどさ。

「で、頼み事の二つは分かったけどさ。最後のは何？」

「ああ、それはな」

デュランがオレを真面目な顔で見つめる。

紫の瞳。

良い色だな、とふと思う。

「ナカバ」

「おう」

「付き合ってくれ」

依頼三件とオレ（後書き）

【作者後記】

最後に何気に何か魔王様がおっしゃっておられますがそれはさておき、ナカバがやっと現実感をもって今の状況に臨むようになってきました。

それでは恒例……と言う程でも無いご挨拶をば。

今晚は、尋でございます。

再びお越し下さった方、またお目にかかれた事を嬉しく思います。初めてのお客様、ようこそいらっしやいました。

お気に召したなら幸い。

無駄なお時間を費やさせてしまったのなら申し訳ない。

まだインターバルが続きますが、お付き合い頂ければ幸いです。

作者拝

黒服救急とオレ（前書き）

さりげなくやられた事をやり返しているナカバ。
結構執念深い子なのかもしれませんな。

黒服救急とオレ

夕食はホテルの三階にあるレストランでとることになった。

足元は暗いブルーの絨毯。テーブルには白のテーブルクロスの上に交差するように孔雀緑のテーブルクロスが重なって、意外と良い感じだ。椅子もクロスの色に合わせて緑色で、金色の縁がちょっと高級な感じ。

あちこちに観葉樹とか、花が飾ってあって、中央の所はプールって言うか池？ みたいな感じのスペースがあって店内の水路の水はあそこから出てるっぽい。

そのプール向こうのステージではピアノとバイオリンの生演奏。

これで向こうのテーブルで豪快に笑ってるデイジーさんのバスが加わって無ければかなりロマンチックな雰囲気なんだろうなーというようなお店でした。

そんなのを田舎者丸出しでぼけーっと見てたら、目の前でぱたぱたと手を振られてしまった。

「ナカちゃん？」

「え？ あ、ごめん。何か言った？」

「どうしたの？ ぼーっとして」

「うん、ちよっと考え事って言うか、作戦って言うか」

作戦？ と首を傾げてるリムリンに愛想笑いしつつ、オレは隣の席に目をやる。

オレの左隣。

窓の外の夜景が一番良く見える位置に陣取ってるこいつ。

魔王デュラン、かつこ人形入り^{オートマタ}。

並んだ食事に手をつけようともしないで、さっきからずっとぼー

つとしたまま珈琲をかき混ぜているこいつを横目で睨んで、オレは視線を逸らし溜息を吐く。

さっきの話なあ……一応、あの場で即決で答えは出したんだ。

それについちゃ男に一言無しっていうか、前言撤回する気も無いんだが……あんなこと言つて、こいつ一体どういっつもりなんだろう？

オレはもっかい左側に視線をやる。

デュランは相変わらずぼーっとしてるだけで、さっきから何もしていない。

表情だつてさ、眉がちろっと動くぐらいだし。唇も偶に僅かに動くんだけど何も言わんし。

言いたい事があるならばつきり言えよ、と足をテーブルの下で踏んづけてもノーリアクションだし。

ここに来た時に部屋の反対側の席で吸ってた人の煙草の匂いに気付いて嫌そうな顔をしたぐらいで、後はずっとこの調子だし。

列車の中じゃちゃんと食ってたのにさ、コレ失礼だろ。

それに、珈琲に何も入れてないのにそんなにかき混ぜて意味あるのか？

冷めるぞ？

「ナカちゃん？」

「ん？」

「食欲無いの？」

「うっん」

オレはナイフで切った豚肉の端っこを口に入れる。

うむ、美味し。

ま、確かに食事中にぐちゃぐちゃ考える話でも無いかー。

マッシュポテトをフォークの背に乗つけて、パクっと口に運ぶ。
ソースが染みてるんで、これだけでも美味しい。さっきのこんがりソテーした豚肉と一緒に食べるのは王道。

ほろ苦のクレソンと合わせてもイケル、脂身まで甘いって感じの良い豚さんです。

「そう言えばナカちゃん」

「むー？ 何？」

「買い物、何か買った？」

「あー、うん。ジュースとチュロと、レプリカナイフとねねこたんの携帯ストラップとか、珈琲とココアと苺味のマッシュマロとか、あと電池と……あとヴィーさんにピロシキおごってもらった。美味しかったよ」

「貴方がそう言ってくれるなら嬉しいですね」

「リムりんも今度一緒に食いに行こうぜ」

「ふふ、今食べてる最中なのにもう次のこと？」

「いや、これも美味しいんだけどさ。やっぱりああ言うのって美味しいなーって思うと、他の人にも食べて欲しくなるっーか、うん、オススメだから」

「そ。じゃあ次はナカちゃん案内してね」

「うん。ヴィーたんも食べようよ。オレだけ食ってたじゃん」

「いえ、一口分けていただきましたから」

「そんなんじゃ足りなくね？」

「いえ、充分ですから」

「ヴィクトリア、貴方幾ら重量制限があるからってある程度食べないと剣技官としてやっていけないわよ？」

「それはそうですね……」

「そうだー、食べ食べー。そして太れー」

「いえ、太ってはいけないのですが」

「オレとか食っても太らないぞー……の、伸びないぞー……」

「す、すみません。ナカ吉……」

「ナカちゃん、落ち込まないで」

「くそう……何だこの燃費の悪さ……」

食ってやるー、と豚肉にフォークを突き立てたオレに何故かヴィーたんがそつとオレの皿にこんがり焼けたスズキさんを追加してくれた。

リムりんもオレンジソースのかかったカモ肉をそつと乗せてくれる。

……いや、うん、食べるけど何でその反応？

いや美味しいから良いですけどもぐもぐ。

そう言えばデュランはくれないのだろうか。

思つて左を見たら、さつきから一ミリも動いてなさそうなデュランがそこに居た。

あ、いやもう珈琲スプーンは持ってないからちょっとは動いたのか。

左手で頬杖をついて、右手は膝の上を下ろしてるっぽい姿勢で、やっぱり窓の外をぼけーつと眺めてるようだ。

おい、食卓に肘を着くなとか、食事中に手をテーブル下に下ろすとか習わなかったのか貴様。

そう思つてデュランの足を蹴飛ばしてやろうとしてオレはふと止まる。

……いや、多分気のせいなんだけどデュランの顔おかしくないか？
いや、顔が異常なのは元からだけだよ。

何か、周り暗いし顔背けてるからはつきりとは分からないけど……

…少し、顔が赤くないか？

他の奴なら「あー、酔っぱらったんだな。ダサッ」で終わるんだけど、こいつが珈琲以外のもの飲むとは思えないし。

大体その珈琲だってそこで手つかずで冷めている。

これだって充分異常事態だ。

重度の珈琲中毒者のデュランが出された珈琲を冷めるまでほっとか普通？ ほっとかねえだろ。

もしかして、偽物？

……いや、そう言えばさっきデイジーさんの部屋に居る時からこいつ珈琲飲まないで居なかったか？

うん、確かテーブルに置かれたカップにはまだ並々と中身が残ってて

「……デュラン？」

「……」

返事が無い。ただのしかばねのようだ。

じゃなくて。やっぱり変だ。……これは、もしかするとアレか？
思いついてオレはそっとテーブルの下に隠れているデュランの手を盗み見てみる。

そこには、血が滲むぐらいきつくきつく握りしめられたデュランの右手があった。血管が浮くほど力がこめられていて、時折ピクリと跳ねるように動く。

まるで、痛みに耐えかねたみたいに。

「おい」

「……。大丈夫……だ」

いや、どう見ても大丈夫じゃないぞ。痩せ我慢も大概にしろってんだ。

「医者呼ぶか」

「駄、目だ……んう、く……っ……。……」

掠れた呻き声をあげて後は沈黙したデュランに、オレは何となく事情を悟る。

確かに医者駄目かもしれない。こんな精巧な人形オートマタが動いてたなんてばれるのは拙いからな。

それで黙って我慢してるってことか？

なら、事情知ってるデイジーさんにつなげばいいって事だ。

しっかし、あつちで高笑いしてるあのおっさんにどうやって、他の人に違和感を覚えなくて気付かせるか……うーん……お、良い事思いついた。

コーヒー拝借。とりやつ！

「あ、服に珈琲の染みがー」

「いやあああつ！ ありえませぬー！！ 黒服カモンですのっ

！」

「ハッ」

思いつきり棒読みだったがデイジーさんの反応は早かった。

その声に応じてサツと何処からともなく沸いて出た……てか本気でどっから沸いて出てきたんだな黒服ズが今度は躊躇わずデュランを神輿担ぎして、あつけにとられているお客さんの間を嵐のように駆け抜け、レストランの外へデイジーさんと共に消えていった。

ボタン、とレストランのドアが閉まる。

アデュー、デュラン。

パタパタとナプキンを振って見送り、オレはやれやれとテーブルの方へ向き直りチャキとナイフとフォークを構えた。

え？ おっかけないのかって？

だってやる事あるし。

「いったただきまーす」

デュランの残したお料理、残さず食わないとね。うん。

黒服救急とオレ（後書き）

【作者後記】

デュランを追い出した後におもむろに残った料理に手を付けるナカバ。

これでこそナカバだと思えます。はい。

出されたものは残さず食べる。粗末にしない。玩具にしない。じいちゃんの教えの一つです。

さて、今晚は。尋でございます。

再度のご来訪、または初めてのご来訪、ありがとうございます。お気に召したならばどうぞ末永いおつきあいを。

さて、次は運び出されたデュランがどうなったかの話です。

運び出されたまま帰ってこない、とかなると一種の都市伝説になってしま……うわなにすするやめ（待

……まあ冗談ですけれど。

こんな調子ですが、宜しければまた次にお会いできることを願って。

作者拝

探検短剣とオレ（前書き）

相変わらずやりたい放題のナカバ、ですが……。

探検短剣とオレ

「暇だー」

ばたー、つとベッドに仰向けに倒れてオレは唸る。

何が暇って、オレが暇だ。

や、それは分かるか。

いやさ、だって食事から帰ってきてやる事やりつくしちゃったんだもんよ。

「ご飯は当然残さずいただきました。」

それから部屋に戻る前に一通りホテルの施設を探検しに行きました。

スカッシュのコートだとか、室内プールだとか、あとは温泉施設だとか、カジノもあったし、ビリヤードとダーツができるところもあったし、それから当然スパのところもちよこつと入口から覗いたりました。

特にスパの感じがリムリンとヴィーたんは気に入ったらしくて、今彼女たちはそっちにお出かけ中です。

オレも危うくにこやかなお姉さんに入らされそうになったけど、オレは出来ないんで丁重にお断りしました。

あー、温泉行きたかったなー。

オレサウナ好きなんだよね。サウナ。

しゅわー、っていう奴。木の匂いとかさ、あとちっちゃな砂時計とか、その後の水風呂に入る時のぐわーって感じとか。すっごい好きなんだよな。

……ま、今は入れませんけど。チッ。

温泉施設にサウナが三種類もあることをすっかりチェックしてしまった自分が恨めしいぜ。

まあ、しょうがないんでオレは部屋にくっついてたシャワールームでさくつと済ませましたとも。

これはこれで楽しかったけど。

うちの風呂に泡立つ入浴剤とか入れらん無いもん。風呂釜の掃除が大変だから。

とりあえず寝巻がわりのTシャツ羽織った恰好でベッドに倒れたまま、オレはまだ濡れてる前髪をピチツと指ではじいてみる。

部屋の探検も一通り終わってしまったし、ベッドの上でジャンプするのは時間的に下の階の人の迷惑になるから出来ないし、やりかけの脱出ゲームもさつきクリアしてしまったし。

携帯にゲームでもダウンロードすれば良いんだろうけど、オレんちの経済状況を考えるとあんまりそう言う事出来ないもんな。

かと言ってカジノとかのあ言う施設は興味無いのもあるけど、そもそもオレ利用できねえし。

リムりん達に会いに行くのは却下。

彼女達は彼女達で楽しんでゆっくりしてるはずだし、そこを邪魔して気を使わせたくない。

オレにつきあったせいで、あの子達の楽しみが減るってことは本当はあつちやいけないことだ。

だから、なるべく邪魔したくない。

「つつてもなあ……暇だなあ……」

後何かやることあったかなあ。

オレは「よいせつ」と勢いを着けて起き上がり、リュックサックの中身を取り合えず全部ベッドの上にぶちまける。

おー、やっぱり重いと思ってたけど結構入ってるなあ。

ペットボトルの水とか、救急セットとかはまあ普段から入れているんだけど、今回中央で買った荷物もプラスセントラルされているからなあ。

重さが分散するようにリュックの中に詰め直しながら、オレはふとある物を手に取った所で思い出す。

そう言えばこれ、デュランに渡さないと意味ねえじゃん。

ダメじゃん！

てか、良く考えてみるとあの運びだされて消え去った後、デュランに会って無いんだよな。

うーん、やること無いしちょっと見に行こうかなあ。

デイジーさんがあの後、あの豊かなバスの声で「陛下は少し、あちらの体に問題が起こっただけのようです。御心配無用ですの」と内緒話のポーズで教えてくれたから、ホントは様子見に行く必要ねえんだろうけどさ。

でも暇だしなあ。

問題ないってんなら遊びに行こうかなあ。

「よし、決めた」

そうと決まりや準備は急げ。

ってことでオレはサクサク道具をリュックに詰めて、ベッドからポンと飛び降りうわこけそうになった。

ふいー、あぶねー。

よし、行くか。

ってことで現在、デュランの部屋の前です。

現場はしんと静まり返って、辺りに人の気配はありません……いや、オレそういうの分らんけどね。

最上階のスイートルームでも取ってるのかと思いきや、意外にもデュランの部屋は一階下のフロアのシングルルームだった。

部屋番号から想像はついてたけどさ。

意外と質素だな。魔王の癖に。美形の癖に。足が二分の一になっ

て某マヨネーズの妖精みたいになれば良いのに。

「デュラン？」

コンコンとノックしてみるが反応が無い。ただのドアのようだ。

……いや、ただのドアじゃなかったら困るんだけどさ。

うーん、しかしどうやって入るかさっぱり考えて無かったな。どうしよう？

とか思いつつ、とりあえずそーっとノブを握って引いてみるとあっさりドアは開いた。えー、ロックしろよ不用心な。

ま、こっちには都合が良いけどさ。

足音忍ばせてオレは部屋の中に入る。

声をかけられるかとビクビクしながらだが、ラッキーなことにデュランは何も言ってこなかった。

いや、そう見せかけて背後から「わっ！」とかやってくる作戦かもしれない。おのれ魔王め。

「とか思ったオレのドキドキを返せ」

魔王様、御就寝中でした。

ベッドの上で仰向けになって、胸の上で手を組んだ姿勢でぐっすり眠っているらしい。

いびきでもかいてれば爆笑出来たのに、残念ながら寝息一つ聞こえませんよ。

つまり男だな。

まあ良いや。熟睡中とは都合が良い。

「探検ごっこエピソード3、オレの復讐、つと」

簡単に言うとデュランの部屋探検、ついでに何か悪戯しちやえ大

作戦である。

取り合えずさつきデイジーさんにひっpegされた服を発見したので漁ってみる。うむ、空っぽだ。

そうすると、主な物はもう今の服の方に移し済みってどこか。どれ、ちよつと失礼。ごそごそ。

「あ、やつぱりか」

しかし本当に持ち物少ないな。

椅子の背に掛けてあったデュランの上着の内ポケットから財布。

それからネックストラップにパスと携帯。

胸ポケットからは万年筆と使い捨てのライター。ちなみに色は当然のようにオールホワイト。

何処のホワイトプラン……。

ちなみにリディルは左の袖の内側に隠すように、ベルトで固定されて入ってました。

お前は暗器使いか……って、ああ、そう言う事なのか。それで柄の方が下へ向けて装着されてんだな。嫌なもん知っちゃったな。

オレは溜息をついて、暢気に寝こけているデュランを見る。

このやせ我慢大魔王。いったいいつまでそのスタイルを貫く気なんだらう。

「緊急避難装置、だっけか」

十騎士だとか、えーと後何だっけ……何かにはか効果が無い、存在を削り取るナイフの使い道なんて、こいつが持った時点でほぼ決定だろ。こんな装着方法見たら他に想像しようがない。

ほんと、しょうがねえなあこいつ。

オレは溜息をついてリュックをがさごそと漁る。

どうすっかなあ、デュランに渡そうと思ってたもんがあったんだ

けど。

「……。ま、いつか」

袖の隠しにナイフを差し込んで、オレはリュックを持ちあげ。

ガシャララー。

「ぎゃー！」

中身全部ぶちまけたー！

いや、蓋閉めるのさぼったオレが悪いだけ、けど！ ああ、オレのマシユマロが明後日の方向に！

待ってー、オレを捨てて行かないでー！

……。……ということ、無事全員が生還するまで十分ほどかかりました。

いや、結構広範囲に派手に散らかっちゃって。いや、疲れた。

……。……ん？

オレはそつとデュランの居るベッドの方を振り返ってみる。

相変わらず胸の上で手を組んで行儀よく横たわっている。

……。……ちよつと行儀良すぎないか？ 普通寝返りぐらい打つたる。

それに、これだけ騒いでまだ熟睡しているってちよつとばかり寝付きが良すぎやしないか？

何かきらびやかすぎる見た目が嫌で近寄らないようにしてたんだけど……。……オレはリュックを抱えてそつとデュランの傍に寄ってみる。

「おい、デュラン？」

声をかけるけど反応が無い。
ベッドに登ってみる。

「デュランナー？」

反応はやっぱりない。

オレは手を伸ばして、デュランの顔の前で止める。

嫌な予感は当たった。

「息、してない……」

探検短剣とオレ（後書き）

【作者後記】

某マヨネーズの精霊、実は苦手です。

たーらこー、たーらこー、たーっぷりたらこー……と。

さて、ご挨拶をば。

今晚は、尋でございます。

初めての方、ようこそおいで下さいました。少しでも貴方の無聊の慰めになったなら幸いです。

再びの方、またお目にかかれた事を嬉しく思います。貴方のお陰で筆を執る気力が養われています。

ありがとうございます。

さて、本当に「ただのしかばねのようだ」となっている魔王ですが……次回はその魔王の為にナカバが頑張ります。その時またお会いしましょう。

作者拜

一時救命とオレ（前書き）

注意！

・以下の描写は現実には即したものではありません。真似してはいけません。

（演出上の理由により、あえて幾か所かかえています）

・流血表現はありません。
・差別表現のつもりはありません。あくまで物語上の要素です。

それはさておき、ただ読むだけじゃ面白くないという貴方にちょっとしたクイズ。

Q1・ナカバの押ししたの短縮番号。ちょっとした遊びです。脱出ゲームとかではお馴染みのアレなんですけど……何でしょう？

Q2・いくらフィクションだからって、救急ならこれしなくちゃ！というのをナカバはすっかり忘れてます。さて、何でしょう？

Q3・基本的に尋はあるポリシーを持って統一している事があるのですが、今回に限ってはそれを守ってません。何でしょう？（知るか）

……では、本編をどうぞ。

一時救命とオレ

息をしてない。

デュランが息をしてない。

息を。してない。

息が。

無い。

無い。

無い……どうしよう。

「落ちつけ、馬鹿」

オレは呟いて白いデュランの顔を見下ろす。

……落ちつけ。冷静になれオレ。クールになるんだ圭。

落ちついてやるべき事を頭の中で復唱しろ。

この場に対応できるのはオレだけだ。

ホテルマンは呼べない。

普通の医者も拙い。

状況を発見したオレがファーストエイドをしっかりとやって、状況を把握してしかるべき人……デイジーさんにつなぐ。

少なくともオレがこの部屋に入って十分以上経過している今、と

にかく一秒でも早く対応しなくちゃ手遅れになるかもしれない。

だから、落ちつけ。

「よし、オツケー。了解した」

深呼吸よし、心構えよし、後は実行だけだ。

オレはまず靴を脱いでベッドの上に乗る。

状況確認。

出血や大きな怪我をしている様子は……無いな。

目立った腫れも無いし、手足が妙な方向に折れてる様子も無い。

次、無いと思うけど意識の確認。

「デュラン、おい、変態美形、誘拐魔、珈琲取っちゃうぞ」

呼びかけて肩をバシバシ叩いてみたが反応しない。

珈琲でも反応しないってことは意識は無いな。了解。

一応呼吸もあるかどうか、胸に耳をくっつけて、ついでに携帯の画面を顔の前にかざしてもう一度確認する。

うん、呼吸無し。

何か喉に詰まってる様子は……えーと無いな。

ついでに襟を緩めて、脈があるかどうかも確認する。脈無し、冷たい。了解。

リュックから取り出したタオルを丸めて、デュランの頭の下に入れて気道を確保する。

意識ない人間の体って結構重いんで苦労したが、これもなんとかクリア。よし、次。

オレは携帯を取って、ぐいっとコードを引きだす。

それから短縮番号「#578」を押す。

『緊急コール、B・L・Sを受信。一時救命処置の準備に入ります。マスクを準備して下さい』

はいよ。

オレは携帯がブブブと震えている間にリュックを漁って、薬箱からマスクを取り出してデュランの顔にセットする。次に青いマークのついているコードを手に取る。

「テスト」

『テストします』

プシュー、とコードの先から空気が噴き出す。よし。

オレはそれをデュランの顔に装着したマスクへ接続する。

『接続を確認しました』

「データリンク。男性、二四歳、身長一八〇、えーと……体重分からん……とにかく細身。呼吸停止、意識反応なし、脈反応なし、血圧不明」

『データリンク。クランケは男性、二四歳、身長身長一八〇、細身。意識不明、心肺停止。データの受信を完了しました』

「ブレス、ツ」

『ブレス、ツ』

プシューと音がしてデュランの肋骨が膨らむ。

もう一回。

それを見ながらオレは次の手順に入る。

今度は赤のマーカの付いているコードからそのマーカを外す。こうすると二本になるんだよ。

で、くそシャツ邪魔だな。

良いや、切っちゃえ。

オレ鉄を取り出して、とりあえず臍まで完璧に見えるようにデュランのシャツ前を縦に切り開く。

……後で弁償しろとか言われませんように

念の為シーツの端っこを引っ張って、タオル代わりにデュランの胸を軽く拭いてから一つを右胸の上に、もう一方を左わき腹の辺りに着ける。

掌でグツと押して……よし、しっかりくっついてるな。

『ブレスツィ終了。脳波、反応ありません。心肺機能、反応ありません』

『コール、30-2』

『コール30-2。実行します』

……これで上手く行くと良いんだけどな。

これで行かないならショックも考えないと。

オレはデュランの様子を、ショックの時に備えて少し離れて見守りながら思う。

基本的に携帯に搭載されているBLS機能任せだから、オレにはあまりやる事が無いんだけどさ。

あ、ちなみにこの機能、法律で全ての携帯に搭載することが義務付けられてる。

リムりん達のも「#578」を押せば同じ現象が起きるはずだ。

『一分経過しました。回復が見られない為ショックに入ります』

「承認」

『承認を確認。被術者より離れてください』

ピー、ピー、ピーという音が始めたのでオレは慌てて部屋の隅に行く。

五コル以内で離れないと危険なんです。ええ、とても。いや、ここまで離れる必要は本当は無いんだけどね。

『ショック開始します』

音声案内と同時にバンツと何かが破裂するような音がして、ガクンとデュランの体が跳ねた。

「うおっ?! 怖っ?!」

いや、実際見るのは初めてなんで。

びっくりしたなあ。

……強すぎてコレが原因でトドメ、とか無いよな? 無いと言っ
てくれ。

『再測定を開始しました。ツッー、ツッー、ツッー、ツッー、心臓の再鼓動を確認。呼吸器、グリーン。血圧、グリーン。被術者の状態確認をお願いします』

「……っ」

電子音声の無感動なアナウンスを聞いてオレは思わず小さく体を震わせて、大きく息を吐く。

冷静だと思ってたのに急に足から力が抜けるような。

背中に一瞬にしてびっしりと汗が浮かぶ。

……そっか、緊張してたのか。

久しぶりに自分の肺が膨らんだ感覚にその場に座り込みたくなるのを我慢して、オレは未だに起き上がってくる気配の無いデュランに近寄って顔を覗き込む。

いくら心肺機能が再起動したって、脳が死んでたら意味が無い。

意識、戻ってるよな？

もう、手遅れ、とか……言わない、よな？ な？

低く重い音をたてた装置。

饅えたような体臭。

チューブを通る、薬で白濁した液。

脳裡をよぎったソレに手をきつく握りしめる。

馬鹿野郎。

ビビってんじゃないよ。後悔なんて一度で充分だ。

「……デュラン？」

やっぱり寝てるみたいな、こんな時でも泣きたいくらい綺麗な顔を覗き込んで声をかけてみる。

頭を揺すらないように、胸の所をぺちぺち叩く。

「デュラン、おい、なあってば。起きろよ、なあ、起きろってば」

「……」

「なあデュラン、なあってばっ！」

堪らなくなつて両手でゆさゆさ揺さぶったら（良い子は真似しないように。悪い子も右に同じ）、ようやく、デュランの目蓋が小さく震えた。

ゆっくりと開いた狭間の紫色。

深い董色みたいなその色に力が抜けて、オレはぺたっと腹の上に座りこむ。

「……何だ、起きれるじゃん」

「……ナカ、バ」

「……あー、おう。何？」

へちよけながら答えたオレの肩にトンと何かの感触。
視界が急に回転する。

あれ、オレ、倒れてる？

一時救命とオレ（後書き）

【作者後記】

さて、如何だったでしょうか？

今回は結構尋にとつて冒険の回なのですが……。 （今ビクビクして
ます）

描く場面があまりコメディに出来ない所なので、息抜きに小ネタを
仕込んでみました。

挑むも挑まないも勿論皆様の自由ですが、「何故世界を征服するの
か。そこに世界があるからだ」というその貴方の為にヒント。

Q1・時計とか

Q2・ナカバ、自分でやるって言ったのにやって無い……。

Q3・「表記の統一」に関わる話なのですが……。まあ、今回は読み
方が通常と違うので、敢えてこんな風になりました。

Q2だけは本編中でネタバラシしますが、1、3（特に3はナカバ
達は感知しようが無いので）は本編中で語る予定はありません。

これだ、と思つた貴方は拍手でぽそつと一言頂ければ。

勿論「勿体ぶらずに教える」でもOKです。

それでは、最後にご挨拶。

はじめていらつしやつた方、ご来訪に感謝を。お気に召したならこ
れ幸い。

またおいで下さつた貴方、いつもお世話になっております。今後と
もお見捨て無きよう邁進する所存でございます。

もし宜しければまたおいで下さいませ。

それでは、いづれまた。

作者拝

近接体温とオレ（前書き）

ある意味王道ではないでしょうか？

近接体温とオレ

回転した視界。

勢い余って投げ出された手が、パサツと音を立てて柔らかくマットレスに受け止められる。

体の下は他人の体温が移ったシーツの温かい感触。

体の上は見知らぬ天井と、何か重くて黒くて温かなもの。
ん？ 何これ？

何かが乗っかってて動きづらいんですけど。

「……ナカバ」

上に覆いかぶさってる何かが、オレの耳元でオレの名前を掠れた声で呼ぶ。

お腹がムズツとするようなこのアルトの声はデュランだ。

ギシリ、とオレの顔の脇に囲い込むように置かれたデュランの腕が動いてベッドが軋む。

覗きこんだ顔。

長い前髪がオレの額に触れる。

甘い、香水とはどこか違うデュランの匂いがその黒髪から香って、この匂いは嫌いじゃ無い

……何て思う訳ねえだろうが。

てか、オレの上でなにしてるんですか貴様。

いつのまにやらすっかりオレを抑え込んでるデュランを見上げ、オレは思わず半眼になる。

何この状況。訳分からん。

えーと？ つまり何ですか、貴様はオレに横四方固めでもしたいんですか？

つーか、この姿勢になる前にオレを引きずり倒して、視界回転させたのは貴様だな。

ちょっとだけ自分の方がデカイからって、人をホイホイひっくり返して良いと思ってんのかコラア！

……でことで、オレはどうやらパンケーキよろしくデュランにひよいつとひっくり返され、おまけに押し倒されて覆いかぶさられて、がちりホールドされてるっばいです何これ。

もう一度言おう。

押し倒されてるっばいです何これ。何これ！

てかさあ、オレ最近やけに美形の男に押し倒されすぎじゃね？

数ヶ月前に前も美形男（あれはワンコ姿だったけど）に押し倒されたし、今度はデュランですか。

何？ オレなんかしたか？ むしろ呪われてんの？

交通安全のお守りなら持つてるけど、こいつら避けにはならなそうだしなあ……いっそ美形退散のお守りでも探すか？

とか、暢気に考えてたらいつの間にかデュランの顔が更に近くにあった。

「っていやいや、近い近い近い近すぎるって」

「【動くな】」

突っぱねようとするより早く、デュランがオレの目を覗き込んだまま低い声で囁く。

うわ、またお腹がゾクツッとしてビクツとした。何これ気持ち悪い。

「いや、動くなって言われて」

【静かに】「

えー……動くなと来て次は喋るなですか。

うわーい問答無用ですねー。オレの意見は無視ですかー。そーですか。さすが魔王ですね……って似たようなネタ前にやったな。

しょうがないんでオレは唇をへの字に結んで、せめてもの抵抗にギロツとデュランを睨み上げる。

それに、オレの心臓の上に手を置いた姿勢でデュランが少し目を細める。

「そう、良い子だ……【俺の目を見ている】」

何で目？

てか言われなくても、今思いつきり睨みあいになってますけどね。……しかし、こうやって近くで見るとやっぱりこいつの目って変わってるんだなーってのが良く分かる。

紫色。

いや、うーん、紫なんだけど……何だろうな、夜空が紫になったらこんな感じなのかもしれない。

単一の色じゃないんだよな、よく近くで見ると。

微妙な濃淡があつて、どんな花や宝石にも似てないのに何処か懐かしい、安らぐ色。

オパールファイアみたいに奥の方でゆらゆらと、ちらちらと瞬いている小さな紫色の燐光が、一層幻想的な雰囲気強めている。

見ていると吸い込まれそう。

嫌な気分とか記憶とかがスーッと和らいでく。

気持ち良い。

落ちつく。

こいつの顔も体も見た目全部大っ嫌いっつーか……いや、正直言
うと今はまあ嫌いっつてゆうか苦手な感じなんだが、この目だけは何
故かオレの苦手意識を刺激してこない。

不思議な目だな。

いや、紫なんて何処のアニメのキャラですかとは今でも思ってる
けどさ。

しかし、こうやって近くでしみじみ観察する日が来るとはなあ。

いや、ホントに近い。

むしろ近い。

近すぎる。

正直お前邪魔なんですけどー。視界が狭いんですけどー。鬱陶し
いんですけどー。綺麗過ぎてうざいんですけどー。てか暇なんです
けどー。

何が悲しくてオレはこんなきららしいモンに拘束されてなきや
ならんのですかね。

はー、憂鬱だ。

どこぞのロボットじゃないけど「憂鬱な夜、君のせいだよおおお
ー」と一曲歌いたい。

耳たぶと言わず貴様が燃えてしまえ。

……なんて、動けないし言えない状況で思ってみても無駄だけど
ろ。

や、まあとにかく近いんですよ。

お互いの毛穴見えちゃうんじゃないかってくらい近い。

デュランの肌に残念ながら目立った毛穴もしみもくすみも無かったけどさ。畜生死ねばいいのに。

てか、デュランの前髪がオレのおでこに触れててちょっとこそばゆい。

潜めているようなデュランの息遣いまで伝わって来る。

それと仄かに香る、ちょっと甘いようで涼しげな、花のようで何処か違うデュランの匂い。

心臓の上に置かれたデュランの少し冷たい手から、こいつの鼓動が伝わってくる気さえする。

オレの心臓の音も今デュランに聞こえてるんだらうか？

困い込まれた視界は薄暗くて、紫色の目から何だか目が逸らせなような感じがして、なのに特に怖いとかそういう圧迫感は無くて家の机の下にもぐってじつと膝を抱えてる時みたいな妙な落ちつき感がある。

トク、トク、と心臓の音。

自分の音と、デュランのと二人分。

……あ、眠くなりそう。

っていやいや、寝ちゃダメだろ。見てろって言われたし。

えーと、何か暇つぶしになるもん、暇つぶしになるもん……うーん……あ、そう言えばこいつ、相変わらず睫毛バシバシだな。

デイジーさんのアレはやりすぎだと思っけど、こいつの場合あくまでナチュラルに無茶多い。

お前はラクダかよっ！ って突っ込み入れたいくらいだ。

これならマッチ棒乗せ、十本は固いな、うむ。

あと、あれにも似てる。「まつげは常に上を向いていなくてはっ！」って奴……あれ、これだとデュランがヒロインになるのか？

ププツ。

うん、でもまあやる事無いし、暇だから端っこから数えてみるか。

えーと……。

とか人が大人しくしててやったっつーのに、一四五本まで数えたところでデュランがパチつと瞬きをした。

あーっ！ 貴様ー！ 後ちよつとだったのに！

「問題ないようだな」

ふ、と吐いた溜息がくすぐったいです止めてください。

真剣な顔で見つめていた目を少し緩めて、デュランはようやくほんの少しだけ唇の端を上げる。

「もう【動いて良い】ぞ」

そうですね。

オレはその言葉に甘えて、まずはデュランの横つつらを枕でひっぱたいた。

近接体温とオレ（後書き）

【作者後記】

こんな状態なのにさっぱり甘くない。

ま、ナカバですし。

さて、ご挨拶。

初めての方、お初にお目にかかります。糖分ゼロ、雑味ありの世界へようこそ。お口に合えば何より。

またおいで下さった貴方。今回も肩透かしだったもう来ない、とか思われてたらどうしよう……ええ、でもこの二人こんな感じですよ。はい。

それでは、また次の機会にお会いできることを願って。

作者拝

変形林檎とオレ（前書き）

暫くナカバとデュランのターン。

多分……間挟んで五話ぐらいですかね。

……イマイチ文字に対する感覚が緩くて分からないんですが、フリガナ足りないとかあればどうぞ。

変形林檎とオレ

「で、何で死にかけてたのさ」

「ああ、それが……」

物憂げな眼差しでオレが叩いたせいで乱れた前髪を直しながらデユランが溜息を吐く。

「悪かったな」

「いや、謝ることじゃねえよ」

「いや、これは俺の責任だ」

目を伏せるデユラン。

無駄に色気満載でちとむかつくのですが、もっぱつ（もう一発）枕で殴って良いかな？

ちなみにさっきの一撃、さすがのデユランも空気を読んで避けずに受けておりました。

よろしい。

責任、ねえ……。

まあ、自分の生死には自分で責任を持つって考えは嫌いじゃねえけどさ。

そこまですよげる事ねえんじゃね？ ってな感じでデユランは明らかに落ち込んでいた。

あー、もう辛気臭いなー。

ちよつと心臓とか呼吸とか色々止まってただけじゃん。

それつくらいのことでガタガタぬかすんじゃねえよ……いや、あんまりそれつくらいってなレベルの話じゃないか。

でもさあ、いい加減立ち直れよ。

オレだつて応急処置に関して恩に着るとは思つけどさ、別に詫びて欲しい訳じゃあねえんだよな。

謝るぐらいなら金をくれ。もしくは身長。

や、やっぱ身長だけで良い。くれ。

お金じゃ買えない価値がある、買える物はマスタードカードで。

「嫌な思いをさせたな……」

そんなオレの内心とは裏腹に相変わらず辛気臭いデュラン。

辛気臭くすぎて、隅っこでキノコ栽培でも始めたら大いに育ちそうな勢いのじめじめっぷりのくせに、それでも絵になるってどうよ。美形なんて滅べば良いのに。

もしくは全身からナメコが生えれば良いのに。スープの具材になつてしまえ。それが、真つ白炊き立てご飯のおかず……あ、お腹減つて来た。

ので、さくつと話を終わらせることにしました。

「あのさー、さっきからそればつかでさっぱり訳分からねえし。さつさと先に進めよ」

「あ、ああ……すまない」

「デュランが謝るのって初めて見たかも」

「……そうだったか？」

「うん。やっぱ魔王だから簡単に謝るとか出来ねえんだなーって思つてたし」

「まあ、な」

あ、やつと笑つた。

「面倒だなー、王さまって」

「まあ大してやる事も無いがな」
「いや、仕事しろよ。草葉の陰でワンコが泣いてるぞ」
「まだアレは生きているのだが……まあ、あの忠犬から仕事を取り上げたりして泣かせるのは俺の特権だからな」
「んな特権ゴミ箱に捨ててしまえ」

ホントに胃に穴が開くぞそのうち。
もう手遅れあつてゐるかも知れねえけど。

「で、そのも一個のほうの特権放棄してオレに謝っちゃって良かったのか？」
「まあ、お前は魔族ではないしな……他の魔族も今はいない。問題ないだろう」

ずいぶんアバウトだな。
まあ良いけどさ。

「でー、何で死にかけてたんだ？」
「そうだな、どう説明するべきか……」
「何、説明めんどうな話？」
「まあ、な……」

何か煮え切らない返事が返ってきた。

「内容自体はさして難しくは無いのだが……」
「お前の簡単は当てにならない」
「そうか？」
「そーなんです。で？」
「まあ、そうだな……世の中には知らない方が良い知識というものもあってな」

「ほむ？ あれか、洗ったシャツが白いのは実は蛍光塗料のお陰ですよー、みたいな」

「……まあ、それもそうかもしれんな」

ちよつと違つたらしい。

「そう、だな……まあ話してもどうせお前は忘れるのだからある程度ならば問題ないか」

……死にたいのか貴様。

いや、オレの記憶能力は確かにボンコツスープですけど。

忘れるの前提って酷くね？

なあ、その納得の理由酷くね？

……と心の中でしか反論できないオレもびみょーに酷いつつーか情けねーですが。はい。

「簡単に言うと、存在を構成する情報が壊れかけている可能性があるあつたということだ」

「はい、デュラン先生」

「どうぞナカバ君」

「さっぱり簡単になつてません」

てか存在を構成する情報って何？

「……。世界というのは情報で出来ていると言う認識はあるか？」

「んー？」

「世界をお前はどうかやって認識している」

「どうやって……んー、オレの場合は五感でつてことか？」

「そう、各感覚を通じて入って来た情報を統合し、お前はこの世界を見ている。つまり、世界に存在する物はそれぞれ、お前の感覚を

通じて入って来る情報の複合体と言い換える事も出来る」

「あー……もうちょっと細かくプリーズ」

「そうだな……例えばリンゴ」

ベッドサイドの備え付け冷蔵庫に手を伸ばし、デュランは中から一個リンゴを取り出す。

あ、うまそう。

「どうぞ」

いや、まるごと渡されても……。

「お前が今リンゴを認識しているのは例えば視覚情報……形状や色、質感。それから触れた手触り、重み。そして嗅覚での微かな香り。そう言った物の総合体としてリンゴを認識している。逆に言えばこれらの情報の集合体がリンゴを構成しているとも言える」

「ほむ」

「だが、この情報が例えばオレンジ色の楕円球状態であり、もう少し軽く、表面の手触りも凹凸のあるようなものへ変化した場合……

お前はリンゴの認識をオレンジに切り替える」

「ふむふむ」

「つまり情報に変質したことによって、リンゴはリンゴという存在ではなくなったということだ」

「ありえるのかそれ？ 手品じゃなくて？」

「手品でなくともあり得る」

滅多にある事ではないがな、とデュランはオレの手からリンゴを取り上げる。

あー！

……って何だ、剥いてくれるなら別に良いや。

「まあ、部分的に変質するだけでも相当な痛みを伴ったり、人の形を保てなくなったりする。下手をすれば死亡する……或いは苦痛の中で死ぬことすら出来ないモノになる場合もある」
「意味逆だけど、どっちもどっちだなあ」

どちらかというと後者が嫌だが、死ぬのも嫌だなあ。

「だが、幸いにも今回は何事も無かったようだ」

「あ、大丈夫だったんだ」

「スキャン検査してみたが、特に情報に異常はみられなかった」

「ふーん」

「……まるで他人事だな」

八分の一に切ったリングをオレの掌に乗っけながらデュランが苦笑する。

いやいや、思い切り他人事ですから。

ま、無事なら別に良いんだけどさ。

何故か可愛らしくうさリングに剥かれてのを見て、オレは「確かに元気っぽいな」と何と無く納得した。

変形林檎とオレ（後書き）

【作者後記】

林檎を剥くと必ずうさりんごにする魔王様です。

裏話としてそれでうさ牧場を作って「食べ物で遊ぶな」としかられた事もあります。駄目な大人ですな。

それでは恒例（にしたい）のご挨拶をば。

初めての方も、またお会いしましたねの方も、ようこそおいで下さいました。

今晚は、尋でございます。

少しでも楽しんでいただけただけなら、私としても嬉しい限りです。

今回も簡単なトリックをしのばせてありますので、気が向いた方はそれを見つけてみるのも面白いかもです。

ヒントは話題の転換、で。

それでは、また次の話でお会いできることを願って。

作者拝

衝撃事実とオレ（前書き）

実は前話とこの話と書きなおしてます。UP前なのですが、おかげで連日更新の記録が途切れました。ストックが切れたのでまた暫く更新速度が落ちます。

衝撃事実とオレ

引き続きデュランの部屋からお送りしております。

どうも、現場のナカバです。

ただいまオレの目の前には反省中ということで正坐させられてるデュランが居ます。

あ、してるんじゃないやねえよ？ オレがさせてんの。

まあさっきまで死にかけてた奴に正坐させるってどうよ？ っつ

ー意見もあるだろうけど、別に土下座させてる訳じゃないし、座ってる場所だってベッドの上のままだしさ。

ま、セーフかな。

オレだってそこまで酷い人間じゃねえもんよ。

でも反省を態度で示すつてのは大事だと思うんだ。うん。

……ま、デュランの顔はさっぱり反省しているようには見えませんが。

てかさあ、さっきから何でお前そんなに和みまくってるんですか。反省しろよ。

それと、孫を見守るじいちゃんというか、雛を見守る母鳥っていうか、何と云うか鳥肌ものの視線でじーっとオレを観察するのは止めてもらえませんかね。飯が不味くなるから。

オレは胡坐をかいたまま、軽くイラッとしながらうさリングをシヤクツとかじる。

あ、ちなみにうさリングは現在三個目です。

最初、食べる時に頭から食うか、ケツから食うかで迷ったんで、取り合えず、頭、ケツ、頭って一匹ずつ交互に食べる事で決着しました。今頭の番ね。

「タイヤキなら確実に頭から食うんだけどなあ……オレ、一番好きなの最後に取っとく派なんだよね。」

「タイヤキの尻尾旨くね？」

「……あんまりセントラじゃポピュラーじゃないか、タイヤキ。」

「間違ってもタイヤだと思わないように。」

「かの名曲「泳げたタイヤくん」でもない。もぐもぐ。」

「ナカバ」

「何さ」

「旨いか」

「いや旨いけど……」

「そうか」

「オレが食べ終わったタイミングを見計らって、丁度良い時にデュランが次のをオレの掌に追加した。」

「何と言うナイスタイミング。」

「実にさりげなく、実にスムーズで、邪魔にもならず、とってもベストな感じだった。」

「お前もつ、自分で執事になっちゃえよ。」

「えーと……あのさー、デュラン」

「どうした」

「食事中にじーっと見られると食べにくいんですけど。てかお前さつきから何やってんの？」

「お前の動作状態の再確認と、餌付けだ」

「ていつ」

「餌付けとかふざけたことをぬかしやがったので、正面から胸をけつとばしてやりました。」

「そのまま抵抗せずにあーん、と仰向けに倒れるデュラン。」

正座のまま上体倒しとはなかなか高度な技を……。しかもしっかりうさリングはキープしてやがるし。無駄に器用な奴め。

こいつならブリッジしたまま階段を高速で降りるとかも出来そうだ。

いや、物凄く見たくないけどさ……。

とりあえず折角蹴り倒せたので、オレはついでによいしょっとデュランの腰の上に座ってみる。

「……ナカバ」

「何さ」

「退いてくれないと起きあがれないのだが」

「ふーん」

いや、その為に乗っかってますからね。

ちょっと困った風のデュランの顔を見下ろしてオレがニヤツとすると、デュランは諦めたのか溜息を吐いてそれ以上どかさうとかはしなかった。

ふふん。オレの勝ちー。

「あまり俺の体に接触するな。検査したとは言え、見落とした因子が無いとは限らないのだぞ」

「何だ、まだ具合悪いのか？」

「今の所はその兆候は見られないが……好き好んで危ない真似をする事は無いだろう」

まあな。

剣士危うきに近寄らにゆと言つ奴だ。

「噛んだな」

「うつさい！ モノローグにまでつつこむな！」

「口が動いていたぞ。それと剣士ではない」

「え、違うの？」

「違うな」

………つてそれで終わりかい。ちゃんと正解言えよ、気になるじゃないか。

ま、しかし。

オレはデュランの顔をじーっと見下ろす………や、さっきの見たことの仕事しじゃねえよ？

たださ、ちゃんと元気になったぽいなーと。

さっきまで死にかけてたわりに、今のデュランは普通すぎてちょっと拍子抜けと言うか。

元気ないよりは良いんだけどさ。

調子狂うもん。

「ほんとにもう大丈夫なのか？」

訊ねたオレに、デュランがほんのり苦笑する。

「信じる、とは言わんが………もう無いようにする」

「当たり前だろ」

自己管理しつかりしろよ。

思わず半眼になったオレを見上げてデュランがやっぱり苦笑する。

「本来そうそうある話ではないのだがな。すまなかった」

「しつかりしてください」

「ああ……お前を二度と同じ目には合わせない」

いや、まず自分が二度と同じ目に合わないようにしろよ。分かってるか？

じとーっと睨んでいると、デュランがまた少しだけ笑った。

いや笑ってる場合じゃねえからな？

反省しろってオレは言ってるんですからね？

「やはり、怒れないのだな」

「はあ？ 充分ムカツとしてますけど。お前さあ、もう結構実年齢はジジイレベルの癖に自己管理なってねえってどういうこと？」

「……それを言われるとなかなか耳が痛いのだが。しかし、偶に休憩はしているぞ」

「いやそういうレベルの話じゃねえし」

休憩しないで働いたらそりゃあ心臓の二つや三つ止まりますけどさ。

「……ナカバ」

「何さ」

「すまない」

「いやだから、もうそれ聞き飽きたんですけれど」

「……」

何でそんな微妙な目でオレを見るんですか。

デュランは暫く何かオレを観察しながら考えているようだったが、ややあつて少し迷った様子で口を開いた。

「ナカバ」

「はいよ」

「知らない方がよい事もあるのだが、お前には怒る権利がある。お前達が何であろうとも」

「……え？ 今オレ現在進行形で馬鹿にされてる？」

「ああ、いや……今のは無しにしよう」

今のはナシー、セーフ。ってお前は五歳児ですか。

オレがなまぬるーい目で見てる間もデュランは何か考えてるっぽかったが、しばらくしてぱたりと目を閉じた。

あれ、寝たのか？

「さっきの説明で良いのか」

「あ、起きてたのか。で、えーとさっきの説明って情報がどうの、って奴？ うーん、まあまだちょっと納得してねえけどな。良いよ別に。お前も話し難い内容なんだろ？」

「……お前を見ているとつくづく自分のずるさを思い知らされる」

溜息を吐くデュラン。

それってオレのせいなのか？

「先程の検査スキャンの時に」

デュランがうつすらと目を開けて呟く。

「俺はお前の支配権を奪っている。まあ、一時的にだがな」

「？」

「普段のお前ならばあの状態で、動くな、喋るな、目を見ると言われても抵抗しただろう」

「……そう言えば、そうかも」

あの時は特に何の疑問も覚えなかったけど……そう言えば何でオレ、大人しくしてたんだ？

こいつに攻撃する絶好のチャンスだったのに。

「そうして支配された事にすら気付けない、まるで己が望んだかのように従わせる……最低の術を、お前にかけて」

そう呟くデュランの顔は、微笑の底に隠しきれない嫌悪の色が滲んでいて……そのせいで、何と無くオレは怒りそびれてしまった。

いや、うん、そんなことされるのは当然嫌なんだけど、目の前で自分より怒ってる奴を見ると冷めちゃう見たいな感じでき。

代わりに浮かんだのは疑問。

「何で？」

「……説明して、お前に同意を取る余裕が無かった」

迷った間にお前に壊れてしまったらと、そればかりが恐ろしくて囁くようにそんな事を言われ、オレは戸惑う。

「それって」

それって、つまり、

「……もしかして死にかけてたのってオレかああっ?!」

オレの叫びに合わせて勢いよくドアが開いた。

衝撃事実とオレ（後書き）

【作者後記】

死にかけてたのは実はナカバの方でした。

一人称の愉しいところですね。

視点や解釈が一人のフィルターを通してあるので、必ずしもその内容は正確では無いのです。

ところでこんな魔王様は好きですか？うざってー、と思われそうな気がするのですが。反応がこわい。

さて、今晚は。尋でございます。

通って下さっている皆様ありがとうございます。

初めておいでの方は初めまして。生きの良い変な一般人と、変な魔王と、その他が居るこんな場所へようこそ。

暫く更新がまた緩やかになるかと思いますが、もしお気に召したならばまたのご来訪お待ちしております。

また、いつかお会いできることを願って。

作者拝

事故反省とオレ（前書き）

今回は息抜きの回。

事故反省とオレ

ドアを開けて入って来たのはリムりんとヴィーたん、そしてデージーさんでした。

帰って来たらオレが部屋に居ないうえに何時までも戻ってこないんで心配して探しに来てくれたそうだ。

いや、それはありがたいんだけど……良くなかったのはその後で部屋をフロントで借りたスペアキーで開いて（あれ、実は鍵かかってただけで、オレみたいな魔力ゼロの奴には無意味だったんだそうな）、まずデージーさんがデュランの服装（ほら、オレが救急処置の時にざくつと切ったアレだ）に野太い悲鳴を上げ、次にやっぱリムクの叫びみたいな顔で叫んだりリムりんがデュランの上からオレを引っぺがし。

後はこんこんとお説教です。

曰く、年頃の（一応これでも十四だほっとけ）可愛い（わけねえ）女の子（一応生物学上の問題で）が夜中にそんな恰好（Ｔシャツに短パンに素足……だってあの後そのまんま寝るつもりだったんだもん）で男（デュランのことです）の部屋に行くもんじゃない、と。いや、まあ確かにデュランは男だけどさ。そういうのは心配ないって。デュランだし。

と試みてみただけ逆にもっと叱られてしまいました。何でだ。

「良いですか、ナカ吉。貴方はそう思っていて世間がどう見るかは違うのですよ」

ヴィーたんにまでこんこんと諭されてしまった。

「そして、間違っても相手を押し倒して跨るなど、するべきではあ

りません」

うん、確かに良く考えるとあの体勢は拙かったかもしれない。

仰向けに寝てる(てか、倒れてた)デュランの腰の上に乗ったオレを見た時のリムリンの反応ときたら……いや、本当にもう。

リムリンが壊れたと思ったね。

デュランに掴みかかってたし。

叫んだ後半の言葉とかもう、意味不明だったし。

まあ、何か誤解してたらしくて、落ちついた後は「ごめんね、そうよね、ナカちゃんがあんな男相手にするはずないものね」と何故かオレに向けて謝ってた。

ちなみにデュランは放置されて、そのままデイジーさんに部屋の隅に連行されていった。

今も何か話し合い中。

「ナカ吉、聞いていますか？」

「あ、うん。聞いてる、気を付ける」

「本当に反省していますか？」

ヴィーさんの顔が真剣で怖い。

「戻った時に貴方が居ないと知って、私達がどれだけ心配したか…

…

「……ごめん」

それは本当に申し訳ない。

うなだれたオレにヴィーさんとリムリンが顔を合わせ、溜息をつく。

「しょうがないですね。次から気をつけてください」

「本当に、もうやめてね」
「うん、ゴメン」

ギョツ、ギョツとヴィーさんとリムリンとに交互にハグを交わして、オレはふいーと息を吐く。
うん、二人とも心配かけてごめん。

「ナカバ」
「あ、デュラン。お前も説教終わったのか？」
「……まあな」

部屋の隅っこに連行されてたデュランが、裂けたシャツの前を手で押さえながら戻って来た。
お前、そうやってると無駄にしろいよなー。本当に無駄だ。
ペッペッ。

「では、お騒がせしました。私達はこれで」
「待て」
「まだ、何か」

あ、ヴィーたんから怖いオーラが。

「ナカバを置いてゆけ」
「は？」

何故にと思つてデュランを見ると、奴はオレを見たまま緩く首を横に振つて、オレの胸を指した。

あー、そつか。
さつき分かつた事なのだが、どうやらオレは何故か知らんが死にかけたらしい。

さっぱりちつとも覚えが無いんだが、デュランはふざけてはいても、こつ言つ事で冗談言つ奴ではない。つまりガチでDEATHする五秒前だったって事だ。

で、どうやらそれを妙にデュランは気に病んでるっぽくて……つまり心配だからまだここに残れ、と。

いや、でもさあ……オレも寝ないとだし。

うーん。

「まだ、何かお話しがあるのですか」

あ、ヴィーたんがちょっと怒ってる。ヴィーたんはこついう静かな怒り方をするのでちょっと分かりにくいのだが、実は表に出ないだけで彼女が多分オレらの中で一番短気だ。

うーん、拙いな。

「ある」

デュランが端的に答える。

「明日にして下さい。私達はもう休みます」

「待って。ヴィーたん、オレ、残る」

「ですがナカ吉」

「きつちり話つけねえとオレも気がすまねえし」

オレは言っつて、笑つてヴィーたんの背中をポンポンとする。

「もう心配させるような無茶はしねえからさ。ちゃんと帰る。だから待つててくれよ」

「ナカ吉……」

「任せましょう」

意外にもそんな風に言ったのはリムりんだった。そして、デュランの方を見てキュツと唇を結ぶ。美少女は何しても絵になるなあ。

「ナカちゃんを、貸してあげるわ。でも必ずちゃんと無事に返して」「約しよう」

「ですが、リミュリシエル」

「良いのよ……ナカちゃんそうしたいんでしょう？」

「うん」

「じゃあ、気をつけてね」

ちゅ、とデコチューされました。

……うん、ちよつと照れた。ふふん、羨ましいだろ。

そんなオレとリムりんにヴィーたんはまだ何か言いたそうにしていたけれど、諦めてくれたのかオレの頭をちよつと撫でて「分かりました」と頷いた。

うん、ありがと。

オレは二人から視線を外して、黙って待ってるデュランの方へ目を向ける。

そんなオレにデュランはちよつと苦笑して、デイジーさんへ「お前ももう下がれ」と命じる。

「でも陛下」

「お前には聞かせられん。分かるな」

「よろしいんですの？」

「……問題ない。いつもと同じだ」

「そう、ですの……」

「ああ」

……大人の会話って良く分からない。

けどデイジーさんとデュランの間では何やら結論が出たらしい。熊にだって負けないたくましい腕をがちりした腰にやって、デイジーさんが溜息を吐く。

「陛下がそう仰るのでしたら止めませんのー。でも、その前にやるべき事がございますのー」

やるべきこと、って……あ、何か先の展開が見えたぞ。

デュランは分からないのか小さく首を傾げているが、オレはそろーっとデュランから距離を取る。ついでにリムりん達も退避させると、キラーンとデイジーさんの目が光った。

来たっ！

「お着替えですのー！」

「ま、待て今はそんな事をしている場」

ラガーマンも真っ青の見事なタツクルを食らったデュランの体が浮く。

そこをすかさず片腕でひょいっと確保して、デイジーさんはそのまま嵐のように通り抜けた。

遅れてバターンと閉まるドア。

あつげにとられるリムりんとヴィーたんの前でオレは静かに手を合わせた。

うん、成仏しろよ。

事故反省とオレ（後書き）

【作者後記】

ということ、ナカバ説教されるの回でした。

ちよつと今回は話の内容的には息抜きの回ですね。

久し振りにリミユリシエル達も登場しましたし……またデュランがかっさらわれてますし。

今回の魔王様は大分パワーダウンしてますから、意外とあっさり確保できます。それ以前にデイジーさん系のテンションの相手をあしらうのが下手なのかもしれません。

お久しぶりでございます、尋でございます。

初めての方はいらっしやいませ。

再度ご来訪下さった方には深い感謝を。

次回からいきなり設定説明がずらーっと続きます。

ラスボスであるデュランが話しているので、相当核心に近く……そして、長いです。（あ）

読み難さが増すと思います、すみません。

特に初回の方はとっつき難いと思うので、よろしければ暇つぶし辺りで何となくこの雰囲気を掴んで頂ければ、と。

世界観が分かり難いとの話があつたので足した話であつて、本筋には気持ち程度しか関わりませんので、飛ばして頂いても結構です。

では、また次の話でお会いしましょう。

感謝をこめて。

作者拜

眼鏡正義とオレ デュラン先生の講義1（前書き）

拍手で見たコメントの為だけにデュランが着替えさせられている事は作者である私とあなただけの秘密です。

さて、説明好きデュランのターンが始まります。

くだいようですが、この段は世界観の説明が主な目的であって読み飛ばし可です。

読まなくても大体の伏線もどきは他で補えます。

また、説明しているのがラスボスの魔王なので、その内容はこの世界の常識とイコールではありません。

非常に核心に近く、かつ適当にぼかしている内容です。

以上の事を踏まえて、それでも読んで差し上げようという強者の方はお進みください。

眼鏡正義とオレ デュラン先生の講義 1

暫くしてデイジーさんによって着替えさせられたデュランがペイツと返送されてきました。

戻って来た時の方が疲れていたのは、うん、多分気のせいじゃないな。

ちなみに、何故かデュランの服装は白一色のアレじゃなくて、縦じまのグレーのスーツにシャツ、ネクタイ、革靴、ついでに銀縁眼鏡という何か教師風ルックだった。

その服をプロデュースしたデイジーさんは、デュランをポイツと屈強な片腕で部屋の中に投げ込んで、ついでに「美形の眼鏡は正義ですの」とバチンと音がしそうな特大のウイंकを残して意気揚々と立ち去って行った。強え……。

「おい、大丈夫かー？」

「……まあ、な」

駄目だ。腐ってやがる。早すぎたんだ。

白くないと力が出ないのか、ちよっぴりフラフラしながら椅子に座りこみ、デュランはぐったりしたまま辺りを見回す。

「あの二人は帰ったのか」

「うん。その方が良いんだろ？」

「ああ……」

眼鏡の縁を指先で押し上げて、デュランは頷く。

うわー、無駄にその仕草が似合う。

絞め殺したい。

まあ、こんな殺しても死なそうな奴をイチイチ締め上げてもしよ
うがないんで、オレも勧められた椅子に座る。

何か、前にこういう感じでデュランの部屋で話合った時の事を思
い出した。

もう随分前の事のような気がする。

オレとデュランの関係はまあ、今と大して変わらなかったけど、
あの時と今とじゃ決定的に違うものがある。

それは、デュランがオレに話す気になったって事だ。

話の内容に興味はあるけど、それよりもデュランのその気持ちの
変化を、大事にしたいってオレは思ったから。

「で、さっきの言い訳希望ってどこか」

「まあ、そうだな」

オレの言葉にデュランは苦笑して、少しネクタイを緩める。

「きちんと話そうと思う」

「最初からそうしやがれ」

「まあそう言うな。色々と事情があってな……しかし、お前にも有
意義な話のはずだ」

さて、といい加減恒例の足組みポーズ。

あの格好になれたら人として何かが終わる気がするのはいのせい
じゃないだろう。

「まあ、誤解があったようだが死にかけていたのはお前だ」

「お前だって死にかけてたじゃん」

「その辺りの話を纏めて説明しよう。問題は魔力と器の関係だ」

ほむー？

「魔力とは何か、覚えているか？」

深く椅子に座りなおしたデュランの前に、オレはうーんと首を捻る。

何だっけ。もうだいたい忘れたなあ。

魔界に居た時に聞いた話じゃあ、魔族のご飯でー…えーと、白くてパルツ ぽい感じの奴だったような？

「悪くないイメージだ」

そうなのか。電球で良いのか。

ピコーン！ ひらめいた！ 乱れ雪月花！

「まあ、流石にそれは難しいが……」

「や、それ以前にオレ魔力無マナレスしですから」

オレの言葉にデュランは何故かちょっと曖昧な微笑みを浮かべて、
「そもそも、魔力とは質量を備えたエネルギーだ」とか言い出した。

お前は新興宗教の人ですか、と。

いや、オレも宗教とか分からんだけどね。

現代では古代宗教の名残はちこつと残ってるらしいけど、それこそ専門家がマニアじゃなけりゃ知らんマイナー知識だし。今も新式の宗教が立ちあがっては消えてるらしい。駅前で見かけるしね。

うちのじいちゃんに言わせれば、時計台の双神子様の存在そのものが殆ど宗教と言っても良いものらしい。

「真面目に聞け。大事な話だ」

「えー。てか、質量を持ったエネルギーだから何なのさ。さっぱりピンとこねえし」

「まあ少し待て。順に説明する……世界の理の一端を、な」

「い、いやそんな壮大な話聞きたい訳じゃないんだけど……」

さつき何があつたのかさえ分かれば充分なんですけど。

思わず腰が引けたオレに、デュランはちよつとだけ笑む。

「安心しろ。致命的な物は明かす気は無い……根源に触れさえしなければお前は人間のままで居られる」

「だから、そんな危ない情報いらねえつての」

「魔力は」

聞けよ。いらねえつて言ってるじゃん。

これって押し掛け説明だからクーリングオフ効くのかな？

「存在を維持する為の力。言い換えれば情報を具現化する為のエネルギー、或いは世界に干渉する為の原動力だ」

「え？」

考え事してて聞いてなかったんだけど。

「魔力とは質量を備えたエネルギーであり、存在を維持する為の力。言い換えれば情報を具現化する為のエネルギー、或いは世界に干渉する為の原動力だ」

「えーとちよつと待って。今頭整理する」

「ああ」

存在を維持する為の力、ってことは「生命力」みたいなもんか？
情報をどうの、ってあたりはさっき存在イコール情報の集合体っ
て言う話があったから何と無く分かる。でも世界に干渉する為のっ
て辺りが良く……あー、そういうことか。

オレは不意に思いついて納得する。

つまり、何かが存在していること自体が、その存在が世界へ干渉
しているってことなんだ。

だから「魔力」イコール「世界へ干渉する為のエネルギーの源」。

「理解が追いついたようだな」

「うん、多分。で？」

「この魔力に関して、個々の存在に目を向けた時にそこには大きく
三つの要素が関わってくる。すなわち、最低魔力量、保有魔力量、
そして最大許容魔力量だ。これは少し例を引こうか」

言って、デュランはさっきリングを出した冷蔵庫から空っぽの冷
えたグラスとミネラルウォーターの入ったボトルを取り出す。

喉渴いたのか？

「まず、このグラスを人の器と仮定しよう」

コトリ、とそれを冷蔵庫の上に置くデュラン。

「ナカバ、何かペンは持って居ないか？」

「んー、ちょっと待って。……ほい」

「ありがとう」

オレがリュックから出したサインペンからポンツとキャップを取
って、デュランはコップの下から三分の一ぐらいのところを線を描
き込む。

あ、いけないんだーホテルの備品に落書きして。センサーに言うてやるー。

「後で洗うから大目に見てくれ……さて、このグラスという存在を維持するには魔力が必要だ。その量は存在によって違うが、このラインを最低魔力量という。ここのラインを魔力が下回れば、その存在は消える」

「死ぬって事？」

「まあ、そうだな。そこで、消えない為にまず魔力を注いでおこうか」

言ってデュランはその線のところまでボトルから水を注ぎ込んだ。成程、あの水が魔力の代わりってことか。

「これで、このグラスはこの世界に存在出来るギリギリのラインを確保したことになった。ただし、大抵の存在はこの最低魔力量よりは多少の余裕を持って、魔力を保持している。この最低魔力量のラインまでしか魔力を保有していない状態は非常に安定に欠ける……何かの拍子に魔力を消耗すればすぐに存在を維持できなくなってしまうからな」

「ほむ、念のためちょっと多めに金持っておこう、みたいな？」

「そうだ。その個体が実際に持っている魔力量。これを保有魔力量という」

デュランがグラスに水を継ぎ足し、半分ぐらいまで水面の高さが上がる。

「この余剰分の差を普段人は怪我の治癒や、或いは魔法の行使に利用していると言う事だ」

「なるー」

「さて、最後に最大許容量だが……」

「あ、それオレ分かる。そのグラスの縁ギリギリまで注いだ時の総量だろ？」

「その通りだ。その個体が保有できる魔力の最大量。これを最大許容量と呼ぶ」

「はいデュラン先生」

「何だねナカバ君」

「それ通りすぎたらどうなるんだ？」

「溢れるな」

いや、そんな見たらわかる事聞いてないんだけど。

「いや、本当に溢れるのでな」

トクトク、と注いだ水を溢れる一歩手前で止め、デュランは「俺の本体を覚えているか？」と訊ねてきた。

「忘れたいです」

「よし、覚えているな。俺の体の周囲が発光していたら……あれは余剰魔力が体内から溢れだした結果だ。まあ、俺のように視覚化出来る程の濃度が滲みだすのはまず無いが、イメージとしては分かり易かるう」

「あー、確かに紫色の後光背負ってたもんな。凄い目にイタイっつか、精神的にもイタイっつか……」

「目には見えずともオーバーしていればあのようになるという事だ。もつとも、過剰分が抜けきれば治まるがな」

「ふーん」

てことはデュランはよっほど有り余ってるのか。垂れ流しっぱなしだったもんなー。

「さて、基礎知識は分かったな？」

「何と無く」

「では、次の段階に進むとしよう」

教科書三十七ページ。

スーツに眼鏡のデュランの後ろにホワイトボードが見えた気がした。

眼鏡正義とオレ デュラン先生の講義1（後書き）

【魔王講義】

さて、学生諸君。良く集まってくれた。

私はデイアヴオロス・デュランダ。以後数回にわたってこの授業を担当する……宜しくな。

（眼鏡の位置を少し直して微笑）

さて、今回は魔力についての基礎知識だ。

まず前提として「魔力はエネルギーであり、かつ質量を備えている」。

そして「魔力は世界に干渉する為の原動力である」。

（指し棒でピシピシと指し）

魔法が炎を世界に出現させるのも、魔力を介して世界の情報に干渉し、そこに「炎が存在する」というように情報を上書きしているからだな。

ああ、それと今回教えた三つの要素についても後で良く復習するよ
うに……テストに出るぞ。

では、次回の講義は五月二十八日だ。

不明な点や、質問のある者は後で下の拍手から来るように。以上。

魔力分与とオレ デュラン先生の講義2（前書き）

しつこいようですが、この段は世界観の説明が主な目的であって読み飛ばし可です。

読まなくても大体の伏線もどきは他で補えます。

また、説明しているのがラスボスの魔王なので、その内容はこの世界の常識とイコールではありません。

非常に核心に近く、かつ適当にぼかしている内容です。

以上の事を踏まえて、それでも読んで差し上げようという強者の方はお進みください。

魔力分与とオレ デュラン先生の講義2

「では、ここに二つの魔力許容量の異なるサンプルを用意しよう」

ペットボトルをガラスの脇に置くデュラン。

「俺とお前とダイゴローだ」

「いや一人多いし」

「ではお前とダイゴローで」

「お前が戻ってこい」

本題にも戻ってこいよ。遊んでないで。

「まあ、お前も俺もサンプルとしては不適切だから……仮にAとBとしようか」

「最初からそうしろよ」

「さて、Aをこのグラス、Bをこのボトルとする。前提条件として二つとも魔力を保有し、かつ魔力保有量が異なる事が必要だが……

…さて、この二つの個体が接触した時どう言う事が起こると思う？」

「ぶつかっただなら痛いんじゃない？」

「いや、まあそうだが……分かってやっているな？」

そりゃ勿論。

「では、ヒントだ。基本的には、エネルギーは高い方から低い方へ流れる」

「エネルギーは……ってことは、魔力もエネルギーだから、じゃあ魔力の少ないグラスの方にボトルから魔力が流れ込むって事か？」

温度は高い方から低い方へ流れるように。

物質は必要エネルギーが高い方から低い方へシフトした方が安定するし。

空気の対流だって、あれは冷たくて重い空気が温かく軽い空気の方に流れ込むから。

差っていうのは自然界では平均化したほうが安定するように出来てるらしい。

ま、根拠がある訳じゃなくて、オレの感覚だけだよ。

「Exactly」

この丁寧過ぎる態度……神経に障る男だ。

「接触した点から、高い方から低い方へ魔力は流れる」

ストローでバイパスを作って、デュランがボトルからグラスに水を流す。

意外と小器用だよな……こういう工作とか、うさリンゴとか。もしかしたら裁縫だってやつちゃうのかも。

グラスに流れ込んでいた水は、水面の高さが一緒になった所で止まった。

「これを魔力の流出、或いは流入と呼ぶ。意図的に行う場合は分与だな」

「そのまんまだな」

「……まあ、な」

その反応。もしかして命名はお前なのか。

「ああ、ついでに言うとお手当てもこれと同じ原理だな」

「手当てが？」

「基本的に怪我や疾病の際、その個体は治癒に魔力を消費する為普段の保有魔力量よりも魔力量が減っている。つまり、より生存最低ラインの最低魔力量に所有量が近付いていると言う事だ」

「あ、弱ってるってそういう見方もあるのか。で？」

「そこへ、より高い魔力量を持つ個体が手を当てる事によつて接触による魔力分与が起こる。そして、魔力を与えられた弱った個体は与えられた魔力の分だけ負担が減り、存在消滅の危機からも遠ざかる。手当てを行った方は魔力が減った事で疲労を覚える。」

アサギで俺に魔力を抜かれた後にアドルフが食事を摂っていただろう。あれは、抜けた魔力の分を食物を介して補おうとする生理的な反応だな。人間は食事、消化、吸収といった各プロセスを介して間接的に魔力を体に取り込んでいるからな。

ついでに補足すると、魔族は食物から消化、分解などの過程を経ずに直に魔力を吸収する。この魔力吸収の過程の違いが人間と魔族の根本的な差だ……と、この話は前にしたな？」

「あー、うん……」

何だかパズルみたいにパチパチと連鎖して問題が解けてく。

ちよつと気持ち良い。

けど、肝心の問題が解けてないぞ。

「で、結局それがオレが死にかけたことにどう繋がるんだ？」

「お前と俺だからだ」

ダイゴローは出てこないらしい。

「俺の保有魔力量は多い」

「はいはい、自慢乙」

「……本体にも収まりきらず、コントロールもままならないものを

傲慢する気にはならんさ」

苦笑するデュラン。

……いや、うん。何かゴメン。そう言うつもりじゃなかったんだ
けど。

「先程、二つの魔力を有する個体が接触した際には魔力の流出、流入が起こると教えたな」

足を組み替え、眼鏡の縁を指で軽く押さえてデュランが言う。

うん、聞いたよ。

「この時、二個体間の保有魔力量と最大許容魔力量が大きく異なる場合、魔力のオーバーフローが起きる……そして、通常ならば許容量を超えた魔力は器の外へ流れ出す事によってバランスを保つ。これも分かるな」

「何となくな……で、何だよ。さっきから回りくどいぞ」

「では、イメージしてご覧。このグラスにボトルいっぱいの水を一息に注げばどうなる」

「溢れるだろ」

「では、ダム一つ分の水を一息に注げばどうなる」

溢れる……じゃなくて、割れる？

「そつだ。一度に器が受け切れる魔力の量にも限度がある。あまりに過剰な魔力を急激に受ければ器はその力に耐えきれずに壊れる。先程お前がパツクと言っていたから電気製品の例を引こうか」

「ほむ？」

「家庭用電機は通常何テクスで動くか知っているか？」

「いや知らん。千ぐらいじゃないの？」

「まさか。百だ……やれやれ、この程度も知らないとは」
「うっさいな」

しょうがないじゃん。知らないんだもん。

「ちなみに、電池は？」

「あ、それは分かる五テクスだろ」

「そうだ。単純一位電池から単純七位電池まで、全て五テクスとなっている」

電池って何であんなに種類があるんだろ。単三だけで良いじゃん、とか思うんだけど。

そう言えば、どうでも良いけど魔界にも電池とかってあるんだろ
うか。

「無いぞ」

あ、そうなんだ。

つまりこんなに詳しく知ってるデュランはやっぱり人間フリーク
だっってことらしい。

「発電所で作られた際、その電圧は約二万テクスだが……これを直
に百テクス対応のパルツ に接続した場合、ルツクはどうなる」
「割れる？」

「そうだ。魔力も同じように、その器の容量をあまりに過剰に越え
る強さの力で魔力を流入した場合、器が壊れる。まあ、電気と違っ
て魔力は大抵圧と力、及び質量が比例するがな」

ほむー。

「ちなみに、そのたとえで行くとデュランとオレってどれくらい違うんだ？」

「そうだな、お前を五テクスの単純三位電池とすると……いや、単純七位くらいか」

「テクスは変わらんに、わざわざ小さいサイズ選びやがったなこの野郎！」

「テクスは変わらずとも容積が小さい分先に息切れするのだが」

「すみませんでした。適切な表現でした。」

「まあ、お前を電池だとすると……。……」

「お前は？」

「無いな」

「無いのかよ。」

「差がありすぎて適当な例がない」

「ほーほーそりゃーすごいことでございますねー」

「怒っているのか？」

「呆れてるだけです。」

「まあ、中位魔族を電池レベル5テクスとすれば、俺は落雷レベルくらいかな……」

「落雷ってどれくらいだっけ？」

「どの時点で測るかによるが、そうだな……お前達の知識は側雷のケースで一度対象物に電流を流した後の地表測定を行っていたのだったか。それならば二千万テクス程度だな」

「……何か笑う気にもならん差だな」
「俺は少々特殊だからな」

苦笑するデュラン。

中位魔族でそれぐらいの差ってことは、オレとはもっと差がある
ってことだよな。

「まあ、実際器が破壊される程の極端な差があるケースは少ないの
だが……今回はお前と俺だからな。運が悪ければあのままお前を構
成する情報と言う情報を俺の魔力でスタスタにされて、エンド、だ」

つまり、単七電池のオレに、君の瞳は百万テクスのデュランが接
続されると、オレ、パーン！　ってことか。

「うわー、こえー」。

「って、アレ？」

オレは一つの事に気付いてはたと首を捻る。

「あのさ、デュラン」

「何だ」

「でもその流入と流出って魔力を持った個体間の現象なんだよな？
じゃあオレ関係ないじゃん」

だって、オレ魔力無しだもんよ。
マナレス

魔力検知器にかけたって数値ゼロだけ？

魔力を持ってない個体であるオレには関係ない話じゃん。なーん
だ。聞いてた時間無駄じゃん。

そう思ったオレに、何故かデュランは少し寂しそうな顔で首を横

にゆっくりと振った。

「ナカバ、それは違う」

それってどれ？

「お前にも、魔力は備わっている」

世界が外れる音がした。

魔力分与とオレ デュラン先生の講義2（後書き）

【魔王講義】

さて、学生諸君。今日も良く集まってくれた。

根源学担当のディアヴォロス・デュランだ。

さて、本日は接触による個体間の魔力分与について説明しよう。

通常、個体同士の間には魔力差が存在する。それらに個体が接触した際、より高い魔力をもつ個体から、低い個体へ魔力が流出する。とは言え、その量は基本的には微々たるもので存在に影響を及ぼす事は少ない。

減少分も全ての個体には自己還元能力が備わっている為、時間を置けば回復する。

ただし、例外的にその差が一定レベルを超えると、流入した魔力が流入された側の情報を変質させることがある。

その変質の程度によっては器の完全破壊を招くこともある。

……。 （ノートを取るのを待っている）

さて、今日はここまで。

次回の授業は五月の二十九日……いや、六月の四日だな。

今回の授業について質問のある者は下の拍手ボタンから聞きに来るようじ。以上。

休憩時間とオレ デュラン先生の講義？（前書き）

今回は説明は抜き、ですが、
中身が相当暗いです。

人が内に抱えている暗い部分。目を向けたくないもの。目をつむっている事柄。

そう言ったものが混沌と混ざりあい、葛藤している回なので、苦手な方は読むのを止めることをお勧めします。

なお、休憩時間は「講義が中断」と言う意味ですので、実際に休憩はしてません。あしからず。

休憩時間とオレ デュラン先生の講義？

「あ、うん。何だ、冗談か」

いやもうびっくりしたなあ。

デュランの冗談にしちゃあ悪質だけど、確かにびっくりした。一瞬だけな。一瞬。

「いや、事実だ」

そう思っているのに、思おうとしてるのに、何でそんな事言うんだよ。

オレは黙ってデュランを睨む。

デュランは相変わらず何処か少しだけ寂しげな目でオレを見下ろしている。

何だよ。何だっつんだよ。

「事実？ はあ？ 何言っつんだお前」

「お前にも魔力は備わっている。そもそも、マナレスとは魔力の無い者の意ではない」

「嘘」

アホの一つ覚えみたいにオレは嘘だ、と繰り返す。

だって。

だって今更じゃないか。

オレには魔力が無い。だからしょうがない。そうやって今まで納得して生きてきたじゃないか。

生れつき魔力を持たないマナレス。

別にオレを産んだあの人達が悪かった訳じゃない。

別にオレの周りの人たちが悪かった訳じゃない。

ただ、ちよつとオレの運が悪かったただけだ。

出来ない、出来損ないはそれなりにそれらしくやってければ良いやうな。

なのに。」

「何で今更そんなことお前が言うんだよ……」

「……」

「どつして……」

真実だとか事実だとか、正直どうでも良い。

事実だからって正しいと思って貰える訳じゃない。真実だからって信じてもらえる訳でも無い。

それでしようがない。それで良いって納得して、納得するしかない。それで今まで来たのに、何で今更お前がそんな事言う訳？

オレに聞かせてどうしたい訳？

膝の上で握った手に力が入る。

魔力が無いからしようがないと思ってきた。

でも、デュランは魔力はオレにもあるっていう。

じゃあ、じゃあオレの今までは一体何？

「マナレスとは、呪われた名では無い」

オレのその手の所に水の入ったグラスを差し出しながら、デュランが静かに言う。

「望まれて、幾つもの試行錯誤と覚悟と決断の末に新しく作り上げられた可能性、或いは存在。それがマナレスだ……飲め」
「嫌だ」

「水分は取った方が良い。飲め」

握った手の上に押し付けられて、オレは渋々グラスを受け取る。
ついでにごじごじと目を手の甲で擦る。

「あまり擦るな……皮膚が痛む」
「うっさい……」

デュランの手をペシと払って、オレは水を口に含む。
冷たい。

美味しい。

ほっと息が零れる。

デュランがじーっと見てるのが分かったんで、腹いせに全部飲みほしてやった。

お前の分なんか残さん。

「水分は取れたか」
「お陰さまで」

ケツと吐き捨てるとデュランがちよつと笑って、オレの持っていたグラスを取り上げた。

そして、ボトルの水をさっき引いた線の所まで注ぎ直す。
相変わらず無駄に洗練された動作。

オレはただぼけーっとそれを眺める。

「マナレスの事を……知りたいか？」

深い、染みいるような柔らかいアルトの声。

「そりゃ」

オレはグラスをぼーっと眺めたまま答えかけて、ちよいと迷う。

元気はつらつう？ イエスオフコース。

知りたいか？ イエスオフコース。

そりゃ、自分の事だもん。分かった方が良いとは思っちゃ。

でもさ、とオレは思う。

でも、知ってどうするんだ？

知って何か現実が変わるか？

いや、変わらんだろう。

デュランのセリフじゃないが、知らない方が良い事だってある。

知った方が辛くなることだってある。

世の中、ナチュラルに理不尽だったりするからな。

うん。まあ人間の理を世界に強要しちゃあかんぜよ、どげんか

せんといかんぜよ、ってことなんだろうけど。

でも気分的な話は別だろ？

理屈は理屈、気持ちちは気持ち。

自分が原因で悪いことが起きる。これ因果おーほー。まことにけっこー。こけこっこー。

まあ、そう言う時代だからしょうがない、とか。

運が悪かったんだ、とか。

そうやって納得する事で、オレ達は一応うまくやってきてるはずだ。

でも、デュランの知識はその納得の根拠を思い切りひっくり返すんじゃないだろうか。

どうしてこんな目に合わなくちゃならないんだ、ってひっくり返って泣きわめきたくなる自分を宥めすかして、どうにかやってきた今までをガツツリ、ガツプリ、ぶち壊されるんじゃないだろうか。

そんなことになったら、オレはどうなるんだろう？

泣きわめいて、座り込んだまま叫んで許される年じゃない。

だからと言って、全てを飲み込んで飄々ひょうひょうと笑うデュランほど大人でも無い。

知識だって中途半端。

立場だって中途半端。

何もかも中途半端なオレに、それを聞く覚悟はあるのか？

それに、さ。

オレが仮にここで何かデュランから聞いて、そこから先は？

その知識はオレの所でラストオーダー……じゃなかった打ち止めだ。

例えば他人に喋ってみたとして、オレの言葉なんかを誰が信じて言うんだ。誰も信じないのは目に見えている。マネレスってそういうことだ。

どう言う原理だとか、どう言う理由だとか、そんな事は関係ない。ただ単純に、オレはそういう「立場」だったことだ。

そしてそれはオレの世代……ってかオレが死ぬまでに変わるなんてありえねえよ。うん。

だって変わらなくても誰も損しないもん。

そして、変わっても誰も得しない。

変わらない。

逃げることもできない。

変わらないこの場所以外、オレが生きていける場所は無いって分かってる。

聞くのか、聞かないのか、聞いて……どうしたいのか。

知ってどうなるんだ。どうにかなるのか。どうしたいのか。

もう、今のまま、知らないままで良いんじゃないか？

……って、うっかり一人で考えに没頭してしまった。いかんいかん。

オレは慌てて顔を上げて、すまんと言おうとして……デュランと目があつた。

さつき、不意ながらもじーつと見る羽目になったあの目。相変わらず無駄に綺麗な紫色をしている。

その目を見たら、ストーンと気持ちが落ち着いた。

こいつ、オレがここで嫌だついたら話さないんだろつなあ。

オレならデュランが嫌がるなら喜んで喋るけど、デュランはオレが本気で嫌なら絶対にやらない。

傍若無人なのに、距離の取り方はびっくりするぐらいに慎重だ。ほんと、変な奴。

魔王で、人類の敵の癖に、オレみたいな人間の子供にそんな目を向けるなんて。

……あーあ、うん、分かってる。

こんな話するのも結局はオレの為なんだってことぐらいさ。

だから。

「ちゃんと教えるよ。その代わりに、オレもちゃんと聞く」
「そうか……」

だって自分の事だし。

頷いたオレにデュランはちょっとだけ目を細めて笑み、足を組み直した。

休憩時間とオレ デュラン先生の講義？（後書き）

【作者後記】

ヒマ潰しの時代からナカバがこう言う立場にあることはずっと決めていました。

当人は魔法が使えない自分の体質を欠陥として捉えています。家族も欠陥として認識しています。

友人であるリミュリシエルとヴィクトリアもそうです。

クラスメイトも、教師も、地域の住人も、世間もそうです。

人間である前に、ナカバである以前に、彼女はマナレスでした。そして、マナレスとして扱われてゆくでしょう。

これまでも、これからも。死ぬまでずっと。

そのことを分かっていて、なお聞くという選択をする彼女を愚かと捉えるか、無謀と捉えるのか。

或いは他の感想を抱くのか。

それは読んだ貴方の手に委ねられています。

さて、こんな所まで読んで下さってありがとうございます。

お付き合い下さった貴方に感謝を。

縁があればまた来週土曜、デュランの講義の続きでお会いしましょう。

作者拝

欠損魔力とオレ デュラン先生の講義3 (前書き)

ナカバが思い切り間違えています。

が、自分でも呪文の元ネタがどうしても一つ思い出せないという…。

それはさておき、またしても世界設定の話です。

欠損魔力とオレ デュラン先生の講義3

「先程、お前と俺では適切な例とは言えないと、そう言ったが。その理由の一つはお前がマナレスだからだ」

「……うん」

正直、面と向かって「マナレス」と言われるのはあんまり好きじゃない。

しょうがないんだけどさ。事実だし。

でもデュランの発音するマナレスは言葉は同じなのに、どこか違う。

何が違うのか分からんけどな。

お陰で「マナレス」と言われる度に落ちつかない感じになる。

……よし、こうなったら意識を切り替えよう。

マナレス、マナレル、ミマニヤネス、合わせてマナレシユ、ムマナシユ……うん、いつも通り壊滅的だよこんちくしょう。

しかしマナレルってなんか変身用コンパクトでも使いそうな響きだな。

マナレルマジカルルルルル！。

「楽しそうな所悪いが、説明を続けても？」

デュランにっこり笑顔で脅されました。

良いじゃんちよつとぐらいさー、ケチ。

ケチな美形はモテない……いや、お前ならケチでもモテモテのウツハウ八だな。死ねばいいのに。

「邪念を感じるのだが……ともかく、まずは前提を確認しようか」

言つて、デュランはピンとグラスの縁を指で弾く。

「魔力は世界に干渉する為の力……存在の根源だ。マナレスであっても、世界に存在する以上必ず魔力は所有している。存在するとはそういうことだ」

「でも」

「まあ待て。では、マナレスとは何か……簡単に言えば、保有魔力量と最低魔力量、及び最大許容魔力量の三つがほぼ同じ値のもの。これがマナレスだ」

「……はい？」

いや、え？ 何だつて？

「最低魔力量、保有魔力量がほぼイコールで、かつ最大許容魔力量ともほぼ同じだ」

「えーと、つまりそれって器がちっちゃ……小型……うっさい誰が豆粒どちびじゃあつ！」

「落ちつけナカバ。錬金術で背は伸びないぞ」

ちっさくつて悪かつたなあ！

足がお前みたいに長くなって悪かつたな！

「落ち込んでいたのでは無かつたのか」

「それはそれ、これはこれ」

「そうか……まあ、お前は誤解しているが、器の大きさ自体はあまり個人によつて大きな差は無い。マナレスであっても器が特別小さいと言ふ事は無い」

「じゃあ、最低魔力量がやたら沢山必要とか？」

「それも違う」

「じゃあ何だ？」

「オレが首を捻っていると、デュランがさっきのグラスを指さす。」

「今そこに先程のグラスがある。魔力は今最低魔力量のラインまでしか入っていないが……水を注ぎ足さずにこの水面をグラスの縁近くまで持ち上げるにはどうすれば良いと思う？」

「グラスの上を切っちゃうってのは無しなんだよな」

「ああ」

「じゃあ、上が駄目なら下だな」

「オレの答えにデュランは満足そうに微笑む。正解を出せたようだ。」

「そう、上げ底をすることでこの問題を解決した。こんな風にな」

「グラスの中に大量の砕いた氷を入れるデュラン。」

「水面はそれに押されて、コップの縁近くまで昇った。」

「これがマナレスの状態だ。器の底を上げる事で保有魔力量が限りなく最低魔力量に近く、かつ最大魔力量までの余裕が非常に小さい状態を維持できる。まあ、魔力は備わっているがな」

「でも、オレ検査で無しって言われたんだけど」

「今の物質界の技術ではそう思われるだろうな……なぜならばお前の保有している魔力は常に、お前の生存の為に消費し続けられているからだ」

「……えーとプラマイゼロの自転車操業、みたいなの？」

「そういうことだ」

「我が家もけっして裕福な家じゃないが、それ以前にオレの魔力がほぼ赤字だったらしい。」

てか、実際やっぱりないも同然じゃん。

「存在するのとしないのは大きな違いだ」

「そうかなあ……でもさあ、これって不自然な状態だよな」

思い切りデュラン自分で上げ底発言してたし。

買ったお菓子がそうなってたらオレはその場で暴動起こすぞ。確
実に。

「まあ、そうだな……人為的に作り出した状態だからな」

「何でまたそんなマゾいことを……はっ！ お前の趣味か！」

「違う」

光の速さで否定されました。

でもなあ、オレ結構疑ってるんですけど。名づけて魔王様はドM
疑惑。

「やめてくれ……」

「Mの人のやめて、はけしかr……もっとやれ、の意味だって聞い
ただけど」

「少なくとも俺は違う」

デュランがそう言い張るので、真実はさておき、そういうことに
しておいてあげることにした。

「さておかなくて良いのだが……」

「ぶつぶつ煩いなあ。美形の分際で」

「……偶に驚くほどお前は理不尽だな。まあ構わんが……」

良いらしい。やっぱりドM……。

「違うと言つのに……多少慣れているだけだ」

「慣れるってどんだけ」

「もうその話題は止さないか？」

「えー、せつかくの弄りネタがー……」

「あまり続けるようならば……そうだな、いつそ望み通りにふるまってみせようか」

はい？

「お前に向かつてどうか苛めてくれと一晩ねだり続けてやるつ。さぞかし忘れられない夜になるだろうな」

言つて、艶めかしい笑みを浮かべるデュラン。

オレが即行土下座して謝つたのは言つまでも無い。

いや、「もっと苛めてください」とかあの見た目で迫られたら精神が死にます。無理無理。

「どうせ出来ん癖に」

ほそぼそと悪態をついたらデュランがニヤツと魔王スマイルを浮かべた。

「問題ない。偶に他の役を演じてみるといつのもなかなか楽しいからな」

「何かものすんつごく実感がこもってるような」

「ふふ……」

何してたんだこの五歳児魔王様……どこの誰かは分からんけど、

魔王様の学芸会ごっこに巻き込まれた人の冥福を祈ります。チーン。

「でー？ 何でそんなマゾいモン作っちゃったんだ？」

「ん？」

「いや、だから何でマナレスみたいなデュランの趣味全開のマゾい代物が……」

「そうかそうか、そんなに俺に迫らりたいか」

「すみませんでしたあっ！」

うわーん、魔王がいじめるー。

つってみても誰も助けてくれなさそうだ……むしろ黄色い救急車が光の速さでN 八七星から飛んできそうだ。

ちくしょう。ぐれてやる。

「じゃあ、デュランの趣味半壊のマゾい」

「いや、俺がひっかったのはそこでは無いのだが」

趣味全開で良かったらしい。

「だからその話題から離れると……そうではない。俺が制作者の一人だと話したか？」

「うんにゃ。でも、こんな事するのお前ぐらいだろうし。事情詳しくいつつても限度があるだろ」

「ああ、まあそうだな……」

魔王様はまっどさいえんちすとなのです。

「まあ、依頼を受けてな」

「ああ、それで趣味が全開に出来なかった、と」

「趣味趣味と連呼するな……研究はライフワークだ」

マゾいモンを作るのがライフワークって……やだ、この人気持ち悪い。

ススツと距離をとってみる。

「……………」

無言でにつこりと威圧されたので、オレはしぶしぶ白旗を上げてデュランの傍に戻る。

何だよー、ちよつとふざけただけじゃんかよー。

「そう怯えるな。ただの冗談だ」

「うつさいばーか。怯えてなんかねえよーだ」

「それは失礼」

くそう。

あー、もうさつきから何か気分が高揚したつきり落ちつかないなあ。テンションが変だ。

往生際悪すぎだろオレ。さつき覚悟したじゃん。

「そんな覚悟で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

「では話を戻そう」

思わず反射で答えたオレにデュランはテンションを若干真面目な感じにシフトして、長い指を組む。

「くどいようだが魔力というのは世界に干渉する力だ。それ故に、余剰魔力が強い程周囲の環境に影響を与える。俺などそのハイエンドだが……その逆がマナレスだ。極限まで所有魔力による周囲への

影響を抑え、周囲からの魔力によって受ける影響を減らし、世界があるがままに見つめる者。マナレスを最初に提唱した者が目指したのはその境地だ」

「世界を、あるがままに？」

「そうだ。在るがままの事象を、限りなく正確な形で観察すること。在るだけで世界を歪めるのが俺だとすれば、ナカバ……お前の存在は世界に対してどこまでも優しい」

「優しいかなあ、ソレ……でもさ、その影響しないって……何か微妙じゃね？ 影響されないし受けないなら、居なくても同じじゃん」

や、別に良いんだけどさ。そういうの慣れてるし。

そう思ったのがバレたのか、デュランはちよつとだけ苦笑して首を緩く横に振る。

「あくまでこれは体質の話だ。お前の性格や思考は別だ」

「つまりハートで勝負しろと」

「まあ、そう言う事だな」

毛が生えたノミの心臓なんて欲しい奴居るのかなあ。

「俺はお前を気に入っているがな。実に面白い人間だ」

「や、オレお笑いに生きる予定はねえよ？」

魔王に面白いとか言われるなんてちよつとおいしい立場だと思っ
つてないからな？

いや、マジで。

欠損魔力とオレ デュラン先生の講義4（前書き）

切り良くしたら長くなりましたorz

それはさておき、デュランの講義第四回目です。

いい加減聞き飽きたと仰っしゃる方も多いと思いますが、この内容は世界設定の補足及び裏話のようなもので、本筋には僅かしか関わりません。

必要なヒントはこれ以前ので一通り張っておりますので、面倒な方は読み飛ばしてくださいって結構です。

（今回は取り分け長いですし）

それでも読んでやろっじゃないか、と言う方だけ先にお進みください。

欠損魔力とオレ デュラン先生の講義4

しかし、今の話聞く限りじゃオレは常にじり貧というなかなかスリリングな状態らしい。

死と隣り合わせの日常、とか。

どこのハードボイルドですか。責任者出てこい。

あ、魔王^{おまえ}か。

「何か良い事とか、チート能力がつくとかないとやってらんねーな、コレ」

「チート能力は無理だな。元々少ない魔力をやりくりしているお前にそんな能力が付いたところで、使った瞬間に死にかねん」

テンさんサヨウナラ。こうですね、分かります。

「治んないのコレ？」

「疾病でも障害でも無い。治療するようなものではないのだ」

「そつ、か……そんならしょうがねえよな」

デュランが変に誤魔化さずに言ってくれたことはありがたかった。うん、奇跡が起こって治るんじゃないかなんて思ってた時期もありました。

でも、そういうもんじゃないなら、しょうがないよな。

「まあ、確かにお前には一般に普及している回復^{エイド}や治療^{ヒール}といった魔法は意味を為さないし、大抵の攻撃魔法は効果は抜群だ、となる上に魔力の循環効率が悪いせいで成長も難しい体質だが」

「……何このスライム未満」

「その代わり魔力に働きかける探査^{シーク}や、魔力によって対象を判別したり障害する施錠^{ロック}などの魔法は意味を為さない」

「……それって遭難したら終わりフラグ？」

「そうだな」

「もしかして、オレが良くゲートのエラーにひっかかるの？」

「ゲートがお前の魔力を感知出来ないからだな。うっかり一人で行動すると、永久に閉じ込められるという特典もついてくるかもしれないな」

「全然利点じゃねえじゃん！」

オレ可哀そう！ むっちゃオレ可哀そう！

てか、道理で良く防犯ゲートにひっかかりたり、列車とかバスとかエレベーターのドアに挟まったり、オレがまだ居るのにチェッカーが下りたりしていたのか。

うわー、分かったのにちっとも嬉しくない何これ。

「……って、そう言えば何でそんな不便な状態にお前までなってるんだ？」

いや、確かにデュランの本体は魔界の魔王様なので、シャレんならんレベルで魔力がバカ高い。らしい。

オレには良く分かんけど、御主人大好きワンコさん（仮名）の証言ではそうらしい。

まあ、あんな色気駄々漏れの奴がこの^こ物質^{じつ}界^{がい}に来られちゃ迷惑なんで、人形でパワーダウンばーじょんでやって来たのはこいつにしちゃ賢明な判断だったと思う。

思うけど、何もオレレベルまで落とさなくても、普通の人レベルで良かったんじゃないか？

「やっぱりマゾヒ……」

「違う。必要があったからだ。言っただろう、マナレスはその性質上、魔力を基準とした探査や判別に感知されないと。この体はその利点の為にほぼ仮死状態……お前達マナレスに近い状態に設定してある」

「感知されないことが必要って……泥棒する予定とか？」

「まあ、その逆だな」

逆って言うと、警察？

首を捻るオレをほつといて、デュランの説明は先に進む。

「もう一つ、俺の魔力が少々お前達のそれとは違うのも理由だな。お前がマナレスであるが故に一般例として適切でないのと同様に、俺もまた一般的な対象としては適切ではない」

「魔力が重い、だっけ？」

「そつだ。良く覚えていたな」

デュランが微笑む。

「魔力が世界に干渉する力である以上、それは他者へ干渉する力ともなる。他者もまた世界の一部だからな」

「ほむ」

「俺の持つ魔力は、お前達のそれよりも重い……密度が高いというか、故にお前達には大きく影響する。俺が望むと望まざるとを問わず、な」

微笑するデュラン。

「例えばそれは魅了という形で表層に現れたりする。バスや街中で騒ぎを覚えているだろう」

「忘れようつつつてもありや無理だけどな」

「俺の魔力による一種の意志汚染だな……人間であつても俺の持つ魔力に酔うと、ああ言う状態になる。本来持つている魔力をかき乱され、意志を圧迫された、まるで自らの意志でそうしているかのようにつ錯覚し、俺に従い歓心を買おうと奔走する。哀れな話だ」

お前はジャン 史上最凶最悪のヒロインですか。

お色気ポーズで威力が増したりした日には五光石かますしかない。濃ゆい顔になつてしまえ。

……あ、今でも相当濃い目なのか。

「これを転用すれば俺は好きにお前達を支配下に置く事もたやすい……魔族が俺に従属しているの主な理由もそれだ。そして、お前達ではその事に気付く事は出来ない」

「出来ない、つて。断言出来るのか」
「出来る」

静かに一つ頷いたデュランに、オレは無意識に少し体を後ろに引く。

それを見て、デュランは少し悲しげに笑った。

「逃げてても無駄だ。俺がそのつもりになればお前は喜んで、まるで自ら望むかのように俺の方に来るだろうからな」

「いやいやいやいやいや。あり得ないから」

「ならば何故、俺がお前を抑えて検査をしている時に抵抗しなかった」

「いや、そこまでするのも大人げないかと思つて……多分」

「……自覚できるものではない、と教えてあげただろう？」

甘く囁かれ、オレは鳥肌を立てて椅子の上に縮こまる。

いやもう支配がどうか、魔力がどーのより、この無駄にエロい空気をまき散らす今のお前が怖いよ！

正直にそう申告したらデュランはちょっと少し表情を緩めて苦笑した。

「まあ、お前の場合影響を受ける魔力そのものが少ないから……滅多な事では俺に影響されて自己を失うことは無い」

「あ、そうなんだ」

「そもそも人間は魔力を直に取り込む器官が備わっていないからな。それに、お前の器には大して余裕が無い。俺の力が混入した所で直ぐにオーバーフローで抜けてしまう。基本的には、な」

何か意味深な事を最後に付け加えやがった。

「基本的には、って……何」

「説明しよう。基本と言うのは」

「……絞めるぞ」

「冗談だ」

立ち上がったオレにデュランがにっこり笑う。

軽く絞めておいた。

「こほっ……大事に扱え。器はさほど丈夫ではないのだぞ」

「やだ」

「まったく……まあ、基本的にと付け加えたのは普段は俺がなるべく魔力を体外に放出しないようにしているから、という前提をつけているからだ」

「漏れてたじゃん。思いつきり」

某吸水性実証のCMみたいな勢いで駄々もれだったじゃん。

「だから、お前には直に触れなかつただろう」

「……そうだっけ？ 最終日に宙ソラづりにされた覚えが」

「あれは服に触れただけだ。ドラウプニル漆黒の桜袴を持たせ、阿修羅王も傍に待機し、かつお前の精神が殆ど向こう側へ引かれていたからな」

「それでもなければ危険すぎる。」

デュランは淡々と言う。

成程。

魔王は危険物。お子様の手の届かない所に置いておいて下さい、と。

「でも、今は平気なんだろ？ 魔力殆どない人形なんだし」

「そうとも言えん。今も俺から界を超えて魔力をこちらの器へ注いで操作しているからな。お前たちの魔力よりも重い俺の魔力は少量でもお前には致命的だ」

「ん？ ちょっと待って。界を越えて俺からって……お前今何処に居るんだ？」

「魔界だな。この人形はいわば遠隔操作で動いているということだ。まあ、意識を分割してこちらの体にも俺自身を埋め込んでいると言えばいいのか……」

感覚も共有しているし、分裂したようなものだな、とデュラン。

ちなみにさっきの死体っぽいアレは、意識の接続を切って本体に集約した結果の抜け殻が残って立って事らしい。ややこしやー、ああややこしやー。

「まあ、並行処理だけは昔から得意でな……平常状態の人形ならば十体程度までは楽に操作できる。それを超えると少々情報処理が面倒になるな」

「情報処理って？」

「この体で受け取る情報を本体で処理しているからな。情報の双方
向交換というべきか……情報を受信し、本体が判断し、結果をこち
らの器にフィードバックする。まあ、複数の体を一つの精神で処理
していると思えば良い」

良く分かん。お前の話は良く分かん。

「まあ、この人形の手でお前に触れても今は問題が起こる確率が低
いのは、俺が魔力がお前の方に流れ込まないように常に制御してい
るから、ということだ」

「なるー」

「それと、あの服だな」

と、視線で例の白づくしルックを指すデュラン。

ああ、パナ エーブですか

「そうではない……この服の素材となっている生地には一応内外の
魔力交流を遮断する効果があつてな。服越しであれば接触しても問
題はまず起こらんようになってる。まあ、お陰で毎度デルギウス
の世話になるが」

「それでデイジーさんがお前のスタイリストなのか」

「ああ」

ほむー。

……んん？

つまり何か？ 服越しで、かつデュランの意識がはっきりしてれ
ば大体安全ってことは……。

「つまり、お前が先程意識の無い俺の服を無理矢理引き裂き、肌と

肌を重ねた為に

「ちえすとー！」

「うるうらああー！」

「何だ急に。危ないぞ」

「表現を考えろ！ 表現！」

オレが襲ったみてえじゃねえか！

「そうか？」

そこできよとんと首を捻るな。きよとんと。なんで可愛らしさアピールしてるんですか。

てかさあ、二十四歳でその手の仕草が似合っつて人としてどうかと思うよ？

あ、人間じゃなくて魔族だっけか。

「では、制御の利かない俺の体とお前の体が直に交じわ
「ぎゃーすー！」

わざとか！ わざとなのかこの野郎！

だから、「え？ 何で僕ちゃん怒られてるの？」みたいな目を向けるな！ お前は五歳児ですか！

「まあ、俺が不在で魔力のコントロールが出来ない状態の時に、お前が直肌接触をしたからな……運が良くなければ、あのままこの器に残留した俺本体の魔力に浸食されて死んでいたかも知れん」

「最初からそう言え。最初から。で、確認してどうだったんだよ」

「幸いお前の情報に異常値は見当たらなかった……恐らく、幸運に

もこの器と、お前の保有魔力量の値が近く、交流が起ころなかったのだろう」

「ふーん」

「手遅れにならなくて、良かった」

デュランがふわつと笑む。

その笑顔にオレは何て返して良いのかわからなくて、取り合えず氷満タンの水を飲んだ。

凄く冷たかった。

欠損魔力とオレ デュラン先生の講義4（後書き）

【魔王講義】

さて、良く集まってくれた受講生諸君。

四回続いた講義も今回が最後だな……では、始めようか。

引き続きマナレスについて説明する。

現在の物質界の文明レベルでは測れないものが大きく二つ。

一つは最大魔力許容量。もう一つが最低魔力量だ。

前者はまだ測定方法が確立されておらず、後者はそもそも存在が認識されていない。

よって、平均的な所要魔力量すなわち、グリーヤの定理を用いて計算すればすぐに出て来るが……まあ、現在の年齢分布及び人口比率からすると八十キリア前後。

これにニダー定数を掛けた数値が現在の製品規格に用いられている魔力量だ。

この量から三十キリア以上下回った場合は作動しない製品が多い……これは誤作動防止の為だな。

誰も居ない状態でスイッチが入ると危険だからな……まあ、この安全措置の為にマナレスの多くが苦勞している。

ちなみに、一般には出回っていないがアラクネと呼ばれるこの繊維はヴァンパイアの開発した魔力遮断呪を織り込んだ繊維の模造品だな。

まあ、物質界では魔界と気候や大気中の魔力濃度も違うし、そもそも材料が手に入らんからな……。

一部はDDDに捕縛用の網として提供されている。

ただし、魔力を遮断するとは言え強度は一般の合成繊維とさほど変わらないので扱いには注意が必要だ。

……さて、以上を持って今回の講義を終了する。
何か質問のある者は下の拍手から聞きに来るように……6月18日
までなら私は研究室に居るからな。
では、解散。

授業終了とオレ(前書き)

放課後のだらだら

授業終了とオレ

「…ことで、大体事情は分かった。

つまり、寝てるデュランは起こすな。

起きてる時だったら攻撃判定アリ、ってことだ。

そう言ってみたらデュランは苦笑して、「コントロールが常に万全とは限らんからな、直肌接触はあまりするなよ」と訂正してきた。ほむ、つまり服の上からなら良い、と。

納得したので取り合えず腹んとところにタックルかけてみた。避けられた。

「何だよ、平気なんだろ」

「お前はな。ぶつかられたら器が痛む。大事に扱え」

「やなことだ」

喰らえ！ フライングアタック！

「だから止めると言っているだろう」

さくつと回避されました。畜生。

よし、分かった。飛んだら急には止まれない。なら、じっくり距離を詰めて、追いつめて攻めれば良いんだな。

オレはニタアツと笑って、両手の指をわきわきさせる。デュランが珍しく素で退いた。

「……何だその不吉な指の動きは」

「何だと思えますか？」

「……嫌な予感しかしないな」

「ヒント、ゴールドフィンガー」

「……銃の分解か？」

いや、そんな芸当は出来ません。

答えは、くすぐりです。

「魔王、覚悟！」

「くっ……良かろう勇者ナカバ、かかって来るが良い」

で、結果。

五秒待たずにデュランがKOされました。

弱っ。

もう一度言おう。

弱っ！ 魔王の癖にくすぐりが弱点とか、弱っ！

どんだけ、わき腹とか弱いんだコイツ。

「勝利とは意外と空しいものだな……なんちゃって」

まだベッドに撃沈してるデュランを見下ろし、オレはちょっとたそがれてみたり。

うん、でも折角分かった弱点だけど、致命的な欠陥があるんだな、これが。

それは、ですね。

デュランのダメージ声はやたらにえろいつてことだ。

お陰で危つく変な世界に目覚めそうになりました。

ここか？ ここなのか？ ここが良いのか？ こっつされるのが好きなんだろう？ ほれほれ、とか。

ちよっぴり悪代官の気分が分かった気がします。

意外と危険な遊びだったんだな、ゴールドフィンガーごっこ……危険すぎて封印されし技になりそうだ。

「おーい、生きてるかー」

「……何とか、な」

まるで襲われて悪戯されちゃったいたいけな少女、みたいな感じで起きあがる魔王、かっこ自称二十四歳男多分独身重度のコーヒー中毒かっこ閉じ。

……あれ、いたいけな少女って以外のところは結構当たってるかも。

「酷い目にあつた……」

「ごめんごめん。反応が良いから止まなくなつてさ」

「もう勘弁して貰いたいものだな。万一本体の魔力操作を誤つたらどうする」

「何で本体？」

「言つただろう。接続していると……感覚を共有しているのだから、俺のぶれは本体の俺にも影響する。指先が傷つけば本体も痛みを感じる。そういうことだ」

「あ、そうなんだ……うん、オレも何か止めとこうと思う。別の意味で危険だから」

そのうちマシンガンぶっぱなして、か、い、か、ん、とか喋る人格になつたら困るし。

「それと、今はまだあまりはしゃぐな……良いか、お前に本当の意味で異常が起ころなかつたかどうかは断言出来んのだぞ」

「え？ さつき検査したんじゃないの？」

「したが、完全では無い」

ちゃんとやれよ。

「完全というのは……お前を構成する情報全てを視ると言うことだ。その意味が分かっているか？」

「いや、まったく」

「……つまり、お前が机の奥に何を隠しているのだから、今日取得した全ての情報、子供の頃の思い出も、何もかも全て俺に視られることになるということだ。それでも良いのか？」

「や、それは……ちよつと……てか、何でそこまで見るのさ」

「本来そういうものだからだ。今は俺が意図的に情報を選別し、フィルターをかけているからお前の身体構成情報しか見ていない」

「体だけ？」

「そうだ」

「いやーん、でゆらんさんのえつちー」

「俺はどこぞの青タヌキにすぎりつく眼鏡少年か……？　しかし、その反応は初めてだな」

「だってそれ、服ひん剥かれて素っ裸にされてるようなもんじゃん」

「……まあ、確かにな」

「何かそれ聞いたら微妙だなー、さっきの検査って奴。にらめっこしてるだけかと思ってたのに」

「俺はあまり気にしたことは無いが……」

ま、魔族のデュランからすればオレらはその辺の犬猫と変わらんもんな。

オレだって道端を素っ裸の猫が歩いてても別に何とも思わんし。まあ、そう言うのに興奮を覚える人間もいるのかもしれないけど。しかし、みられた側としてはちつとばかり複雑だ。うん。

「よし、じゃあデュランお前ここで脱げよ。そしたらキャラにしよ

う

「ざ、裸の付き合い。」

「だが断る」

「何だよケチ、減るもんじゃねえだろ」

「お前は先程何を聞いていたんだ……服で力を遮断しているといっただろう。第一、この体は俺の作った人形だぞ。見てどうする」

「あ、そっか。何だつまらん。減れば良いのに」

「まったく……まさか、今の話が影響の余波で無いだろうな」

「どうなんだろう？」

まあ、そんなふざけた会話をしてみたり（半分冗談ですから）、デュラン直々に正しい噛み合わせの講義あんどリフレクト……ん？

何か違うな、まあいつか……リフレクトをしてくれやがったり、最近読んだ漫画の話をしたり、魔界に居るうさっこという萌えキャラの話の聞いたりとその後はだらだらと過ごして、気が付いたら会話も止んで、オレはデュランの背中によっかかってポチポチと携帯を弄っていた。

背もたれ代わりにデュランはデュランで、何か本を読んでいるらしくって時々パラ、とページをめくる音がする。

いや、もうオレ帰れよって感じなんだけど……ま、もうちょっと良いか。

よし、メール送信、っと。

一仕事終わったんで、オレはもぞもぞとベッドの上で方向転換して、デュランの方を見る。

やっぱり何か読んでるっぽい。後ろから見てるんで、肩越しにデュランの横顔がちらっと見えるだけで本の内容とかタイトルまではこっからじゃ見えない。

ふむ……何真剣な顔して読んでるんだろ？

「何見てんの？」

座ったまま背伸びしてみたがさっぱり見えないので、オレは膝立ちになってデュランの肩越しに奴の手元を覗き込む。

って、コレ……同人じゃん。

数年前に流行った某アニメの二次創作本だ。

しかも素人お手製って感じバリバリの、それこそ東大陸のビッグドリームの夏の祭典で販売されてそうな奴。

小難しい哲学書か、難解な専門書でも見てるみたいな顔してるから何かと思ったら、お前何読んでるんだよ。

「面白いのか？ それ」

呆れたついでにごん、と肩に顎を落としたら、デュランがちらつとオレの方を見て「そうだな」と微笑した。

「参考になる」

「参考？」

「ああ。一応世界の敵たるもの、いつ何時その場面が来ても良いように、演出を考えなければならんからな」

「ふーん？」

言われてもう一度デュランの読んでる辺りを見直してみる。

丁度ラスボスがやられる場面だった。

そのシーンをじっくり読んで、オレは「おい」と呟く。

「まさか、最後にうばあー、とか言う気じゃねえだろうな」

「駄目か？」

「駄目だろ明らかに」

「なかなか個性的で良いと思ったのだが……」

「そんな個性捨ててしまえ」

いや、だって苦勞して苦勞して倒したチート魔王の最後のセリフが「うぼわー」とかあり得ねえって。

そんなセリフをかけて良いのはユンケ …… じゃないな、何だっけ、ヒュン ルはアバンの 徒の人だし。

「ついでにあべしっ、とかひでぶっ、とかも禁止な」

「……」

「なんちゃって」

「……」

え？ 冗談で言ったのにマジで候補に入ってたのか？

止めるよ。お前その顔でそのセリフは絶対に言っなよ。

真剣にやってる勇者に失礼だろ。

「てか、何でそんな台詞をチョイスしたんだよ」

「いや、あまり悲壮な最期にしてトラウマを植え付けると拙いと思ったのでな。緊張を緩和できるようなものを……」

「そんな分かり難い優しさは要らんですよ」

むしろ逆に妙なトラウマになりそうだ。

だってデュランの見た目こんなだぜ？

この見た目で「うぼわー」とか、ヤマトがポテトになるぐらいの違和感だろ。

こんな魔王を相手にしなくちゃならん勇者の皆さんの精神の平和の冥福を心からお祈りします。エイメン。

……っつーか。

「何でお前、自分が死ぬ時のことシミュレートしてんの？」

「誰が趣味だ。それを言うならばシミュレートだ」

「そうだったけ？」

「そうだ。シミュレート……ほら、言ってみる」

「シ、シミュレート」

「良く出来ました。さて、迎えが来たようだな……」

「へ？ 迎え？」

「今アドルフがこちらに向かって来ている。どうやらお前の連れがしびれを切らして迎えにこさせたようだな」

「あ、リムリンにちょっかい出しに行つてふられたのかアイツ」

ついでにパシられたつてところだろう。

それであつさり従つちゃうあたり情けねえって考えもあるんだろ
うけど……ま、オレはそう言う奴嫌いじゃないな。

ま、リムリンは手ごわいから一先ず言うこと聞いて好感度上げて
ついでに周囲のオレから突破口開こうつてところだろう。

ふーん、頑張つてるじゃん。

少なくとも、年下の女の子の言うこと聞いて興味もねえガキのお
もり引き受ける程度にはやる気あるってことだ。

なら、一応素直に一緒に帰つてやりますかね。

「もう行つて良い？」

「……ああ」

返事する時ぐらい本読むの止めるよ。

「帰るぞー、おーい」

「ああ」

「だから帰るんだつてば」

「ん？ ああ」

ようやく本から顔を上げて、デュランはにっこり笑った。

「またな、ナカバ」

「おう、またな」

うん挨拶は大事だよな。

授業終了とオレ（後書き）

【作者後記】

魔王、覚悟！と挑まれるとつい受けてしまっデュランでした。相変わらず二人ともノリノリです。

今晚は、首にマフラーを巻くとかくすぐったくて出来ない作者こと尋でございます。

昔はハイネックも着られませんでした。とっくりセーターとか何処の地獄かと……。

そんな事はさておき、

変身顔貌とオレ（前書き）

久し振りの本筋ですが、まだまだ息抜きターン。
何の伏線も張ってませんのでゆっくりお楽しみください。

変身顔貌とオレ

「ナ、カ、ちゃん」

ほっぺたつつかれて目が覚めました。

「うぁ……………」

「おはよ、ナカちゃん」

「おはようございます」

「うーん……………おはよー……………」

まだ頭が起きとらんですよ。

ポケーとしてたらひよいとリムりんの顔がオレを覗き込んできた。
うん、目の覚めるような美少女……………ふぁぁ。

「起きた？」

「うん、まぁ……………わりと。何？ 朝飯？」

「かわいいっ！」

ぎゃー！

いや、まぁリムりんに飛び乗り抱きゅされても大してダメージは無いけどさ。

とりあえずスリスリしてくるリムりんをほっつといて、ヴィーたんの方に目を向ける。

「今何時？」

「六時半ですよ」

「あ、そうなんだ……………まだ朝食には早くね？」

「色々と計画があるようですよ、彼女には」

「そうなの！」

グイーさんの解説にリムりんがひよいと起きあがる。

そして、何やら紙袋を取り出し、取り出した中の物をオレの前にぐいっと掲げた。

「じゃじゃーん。可愛いでしょ」

「え？ ああ、そのワンピース見た事ないな。新しく買ったとか？」

「大当たり！ さっすがナカちゃん。ちゃんと見てるのね」

いや見えますけど、リムりんにしちゃ珍しく大人しい感じのワンピースだな。

それにサイズがちと小さいような。

……あれ、嫌な予感。

「えーと、あのさ、リムりん。それってもしかしてオレ……」

「ナカちゃん変身大作戦よ！」

ぎゃー！ やっぱりー！

いやいやいや、無理無理無理、いやホントに良いつてば。ありえねえつてば。

オレ女装する気ないんだつてば。

スカートとか要らないし。女の子っぽさとか要らないし。そんな胸元が段々のヒラヒラになってるとか、そういうの大平原の小さなオレに着せてどうするんだ。

と、全身で拒否してみたらリムりんの顔がすーっと曇った。

……あ、えーと。

「ナカ吉、普段の服にしておきますか？」

ヴィーさんの声が優しい。
うう。

「……やっぱり、嫌？」

ダメ押しのように美少女に悲しい顔で訊かれてYESと言えるか？
オレは無理だね。

言ったら男が廃る。
いいさ、こうなったらトコトン受けてやる。

ってことで、昨日風呂に入ったのに再度風呂に入り直し、普段使
わないドライヤーまで使って髪を乾かして、うん、まあその後は色
々ですよ。下着まで取り替える羽目になったですよ。

てか、聞いて良いリムりん？

下着のサイズがぴったりすぎるんですけど。
ちょっと怖いんですけど。

そしてブラに胸パッドが入ってる事をオレはどう解釈すれば良い
わけ？

いや、追及すると怖い事になりそうだから聞かないけどさ。

えーと、でこれがさっきのワンピか。

うーん、こういう襷ひだがヒラヒラしてるのとか、見てる分には良い
んだけどなー。

てかどうやって着るんだ？

あ、背中のチャック外せば良いのか。よいしょっと。

「ナカ吉、着替えは出来ましたか？」

「あー、あとちつですよ」

あとは背中のチャックを上げて……上げ……上あが……上あがれえっ！

「ぐぬぬぬ……」

「ナカ吉、大丈夫ですか？」

「いや、ちよつと、チャックが……」

背中のチャックが上げられねー！

腕が回らない。

いや、オレの体が硬いのが行けないんだけどき。ぐっ、くそっ、このっ！

「……ナカちゃん」

「ごめん、ちよつと手伝って」

ギブアップしましたともさ。ええ。

情けないぞオレ。

「ナカちゃん可愛いわー！」

「良くお似合いですよ」

「いや、何かコレ、やつぱ変じゃね？」

「あら、ホント可愛いわよ。もうちよつとレースとか多くても良いと思うけど」

「いや、この胸の段々だけで充分ですから」

「ストッキングはどうしますか？」

「生足の方が私の好みだから良いのよ。あ、袖はちゃんとこつちやつて留めなきゃ」

「ひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！ くすぐったー！」

「ちよ、ナカちゃんじつとして」

「あ、ごめん」

「はい、これで出来たわよ」

「ありがと。ん？ これなんか意味あるのか？」

「この方が可愛いの」

「いや、服は可愛いかも知れないけどさ」

「ベルトも通しましょうか」

「え？ これりボンじゃね？」

「こう言つりボンなのですよ。前で結びますか？ 後ろで結びますか？」

「いや、前後左右何処でも良いですけど」

「駄目よ、そんな投げやりじゃ。そうね、でもやっぱり後ろの方が似合つと思つわ」

「では、後ろに」

いや、もう好きにして下さい。

その辺オレは分らんのでお任せします。

で、やっと服を着たと思つたらその後がまた大変で。

ヘアバンドで前髪をがさーっと上げて、その状態でお化粧タイム
いや、化粧水って何、乳液って美味しいの？ ベースって楽器じゃないのか。シャドウとかハイライトだとか何処の君は光で僕は影
もう何が何やら分からんうちに肌にべたべた、バタバタ、塗り塗り、ついでに眉毛切られたりってなもんで。

うう、肌が重たいし。

睫毛が固いつてか何これ。

唇もグロ……なんだっけ、気分的にはグロイんだけど、多分違う何かでべたべたするし。

化粧品の匂いつていうの？ あれに酔いそうです。

気持ち悪い……うう、うえっぷ。

世間の女性様はこれに一時間二時間と言わず付き合つてらっしゃるそうです。

……オレには理解できません。はい。

いや、もう気分はまな板の上のフグですよ。

好きにしてくれ。
いつそひと思いに殺してくれ。

や、うん、でもまあヴィーたんもリムりんもすごく楽しそうだから良いんだけどさ。

可愛い女の子が喜んでくれるなら、化粧の二時間や二時間、付き合いますよ。

「ナカちゃん、やっぱり可愛いわー。肌綺麗だもんねー」

「えー、いやそれリムりんに言われむみっ」

「ほら、眉間にしわよせないの。ファンデが皺に入りこんじゃうでしょ」

「んー……」

終わったら終わったで髪をピンでとめよつと言っ話になりまして。

「はい、お疲れ様ナカちゃん」

「ナカ吉、大丈夫ですか？」

「……」

デュランじゃないが、器から魂が抜けかかってました。

何ていうか、朝から疲労感と敗北感でいっぱいです。

で、劇的ビフォー フター。

誰これ。

「なんじゃこりゃ」

あ、待って。今の無し。やり直し。

オレはおもむろに腹に一度手を当て、それからその手を見下ろし

て。

「なんじゃこりゃー！」

「ナカちゃんよ？」

……あ、はい。そうですね。

「お腹痛いの？」とか心配しているリムりん達にちょっと悲しくなりながらオレは何でもないと手を振って、改めて鏡に映ったオレを見る。

いや、マジで別人二十八号。

シヨタに操縦されそうだ。

ま、鏡の中からガン飛ばして来る表情だけはしっかりオレなんだけどさ。うん、我ながら目付悪いよな。

しっかし……異世界トリップ時にも回避した「お着替え、メイクアップ、これが私？」という王道イベントをまさか今体験することになるとは……人生何があるか分からんな。

その点、デュランはオレにアレを着るだの、これを着るだの言わなかったし、当然のように舞踏会なんかにも参加させなかったし、お披露目もしなかった。

案内つけて、財布を渡して「好きな服を自分で選んで着替えを用意して来い」だったもんな。

選んだ服について「センスがどーの、似合うかに合わないかどーの、とも言わなかったし。

必要になったならまた買いに言って構わないぞ、とそれだけだった。

ま、あーゆーのを甲斐性無しとか、放任主義というのかもしれないけど、オレにはそのデュラン流の扱いが結構有り難かったんだよね。もしかしたら、今更だけどデュランって結構オレの気持ちを汲んで

くれてたんだらうか？

……や、無いな。デュランだし。

そんな事を考えながらオレはまだテンションの高いリムリんと、それから一工事……じゃなかった、仕事終えた満足感に浸ってるヴイーたんに一応お礼を言つて、丁度朝飯の時間も近くなってきたんで三階のロビーに降りる事にした。

変身顔貌とオレ（後書き）

【作者後記】

異世界トリップにつきもののお着替えイベントをすつとばしたナカバですが、何故か本来の世界でこんな目に。しかし女装って……ナカバお前……。

さて、皆様今晚は。

初めましての方も、そうでない方もようこそ。

どうも、尋でございます。

さて、観光旅行実はまだ三日目という……ええ、でもゴールデンウイーク内の日数で終わります。

よろしければ今しばらくお付き合いください。

では、また来週、縁があえばお会いしましょう。

感謝をこめて 作者拝

正体暴露とオレ（前書き）

どんな格好をしてもナカバはナカバってことでしょうか。
ということ、まだまだ息抜きターン。

（誤字修正いれました）

正体暴露とオレ

チン、と古めかしいベルの音を立ててクラシックなメーター付きのエレベーターのドアが開く。

三階は食堂のフロアで、あっちが昨日夕食を取ったレストラン。他にも五つのお店が入ってて、オレ達が今朝食べる予定なのはそこに今白い木の看板を出してる店だ。朝食がバイキングになってて和食もちよこつと出るらしい。

気の早いお客さんとかは既にその店や、その隣のサウザンド料理専門店何かに入ってるたりしている。

他にもロビーでパソコンを広げてる人、何やら打ち合わせ中っぽい数名のビジネスマン、それから……あ、いたいた。

ロビーの端でソファーに腰掛け、足を組んでるデュランを発見。相変わらず遠巻きに観察されてるけど、本人は気にせず新聞を広げて読んでいる。

しかし、今時ペーパーの新聞とか目立ち過ぎだろ。

てか、この前読んでたのもメディアじゃなくてハードカバーだったよな。

そついう紙の奴好きなんだろうが。高いのに。

「デュラン、あーはー」

近寄ってって挨拶すると、デュランはちらっと紫の目を上げて「ん？」とオレを見た。

「ああ、おはよう」

「ってそれだけかいっ！」

つつこめよ！ 格好とかセリフとかさ！

オレのセリフにデュランはちょっと首を傾げて、

「……「ごぞいます?」

「違えよ」

誰が挨拶が足りないと言った。

「可愛いでしょ」

リムりんが自分のことのように自慢する。ま、これリムりんの力作みたいなもんだもんな。

リムりんに促されてデュランはちらっとオレの服装を確認し、それからオレの顔をじっと見た。

何だよ。

「サイズは合っているようだな」

「あー、うん。ぴったりフィットですけど」

リムりんがオレのスリーサイズがいつばれたのか。凄い不思議です。

「でもさー、変じゃね?」

「そうか?」

「や、リムりんが選んでくれたんだし、色とかデザインだってまあ……嫌いってほどじゃねえし? でもなあ、何かほら、あれだ孫にも衣装っぽい感じなんだろうなあ、って」

「ああ、成程。馬子にも衣装か」

ん?

「今お前、ちょっと訛ってなかったか？」

「そうか？」

「孫にも衣装だろ？」

「ああ、馬子にも衣装だな」

「……孫」

「馬子だろっ？」

んー？ やっぱり訛ってるっばいような……ま、いっか。

そんな会話をしてると、またチーンと音がしてアドルフ達が姿を現した。

アドルフもすぐにオレらの方に気がついたのか、きびきびした足取りでこっちにやって来て、まずデュランに向かって挨拶する。

「おはようございます、陛下」

「……」

デュランが珍しく黙ってこめかみを抑えた。

「一つ、良いか」

「何ですか？」

「何故陛下、と？」

「いや、イーニングウッド氏がそう言ってるのを聞いてから、うちの連中の中で流行っちゃってます。でも似合ってますよ、陛下」

複雑な表情で苦笑するデュラン。ま、確かにDDDDに言われてもな。

「オレも陛下って呼ぶか？」

「やめておけ」

「あれ、こっちのお嬢さんも陛下の知り合い……………」

言っつて、アドルフがこっちを見て…………凍る。

ああ、そうそう。これこれ。

こっつ言っつ「何か妙な物見ちゃった！」的リアクションを求めているたのですよ。

「お前……………」

「はいよ」

「その格好」

「リムりんを買って貰いました」

「…………女装趣味だったのか」

…………はい？

ポカンとしたオレをほつといて、アドルフは何故か大笑いしだした。

「ぶっは！　　すげー！　　何だこりや、最高だ！　　うわー、その胸パツドだろ？　　どうせならもっとデカイの入れるよ。あ、無理か。しっかし、いや、マジ最高！　　お前面白過ぎる！」

腹を抱えて笑い転げているアドルフを見下ろし、オレは黙ってデユランの方に手を出す。

「デユラン」

「どっぞ」

スパーン、と渡された新聞紙を丸めて、チョコ男の頭を殴っておきました。

それから新聞を広げて、デュランに差し出す。

「はい返す」

「どうも」

「……おい」

「何だよ」

何事も無かったかのように新聞をまた読んでるデュランから視線を外して、オレはさっきの爆笑男を見る。

それに、アドルフはちよつと困った顔をして頬を掻き、

「いや、まあお前の趣味を笑うつもりじゃなかったんだが……悪かったな。どんな格好だって個人の自由だよな」

「まあ、だな」

別にオレ、女装趣味の人じゃないけどな。

そんなアドルフとオレの会話に傍観していたデュランが口を挟んできた。

「アドルフ」

「何aska、陛下」

何を言う気だ？

オレもちよつと興味が出てデュランを見る。

デュランは新聞をぱたりと閉じて、サングラスの奥から真面目な紫の目をアドルフに向ける。

「お前の発言は正確ではない」

「つーか、九割くらいハズレですが。」

「あの服装はナカバの趣味ではない。そして、視覚効果の約八割は確かに内蔵されているパッド部分だが、一割五分はあの服のデザイン……具体的には胸部部分にあるラッフルと、サイドのギャザーによる錯視、そして五分がナカバの体型によるものだ。分析をするならば正確に行うように」

……。

「デュラン」

「どうぞ」

スパーン、と渡された新聞紙を丸めて、デュランの頭を殴っておきました。

周りが「信じられないもの見た！」みたいな目でオレの方を見るけど、今更だろ。

人生開き直りが必要だ。

「はい返す」

「どうも」

てか、ちつともお前は動じてないんだなデュラン。

二度も武器使用という本来の用途からすると百八十度間違ってる利用をされた新聞は、哀れくしゃくしゃにされてましたが、デュランはそれをちらっと一瞥すると特に何の感慨も込めずに端っこを持ってピシッと引っ張った。

一瞬で皺クリア。復元完了。

ついでに片手でちよっと払っただけで、髪の毛もさらっとクリア。

すげー、アレどうやるんだろ？ いや、髪じゃなくて紙の方ね。

「あー……えーと……」

「何見てやがる」

「いやいや、そっちは見てません」

ギンツと睨んだらアドルフが逃げ腰になった。が、まだこっちを見てる。何だよ。

「……趣味じゃない？ ん？ どういうことだ？」

ああ、そこですか。てかまだ分かって無かったのか。

うーん、ここまでくると逆にこのまま誤解させとくってのも面白そうだな。うん、アリだな、アリ。

「……ナカバ」

「へいへい」

分かりましたよ。種明かしすりゃいいんだろ。

てか、別に隠しては無かったんだけど……訂正しなかっただけで。

「おーいアポロ。ほれ」

オレはウンウンと悩んで唸ってる奴の目の前にパスを掲げてやる。

それを見て、アドルフが毎ピンクの目を大きく見開いた。

「……おん、な？」

「うん」

「っ！」

あ、頭抱えてしゃがみこんだ。

お、面白すぎる……っ！ やばい、こいつの反応癖になりそうだ。とりあえずオレはぺちぺちと莓色の頭を上から叩いてやる。

「まあ落ち込むなよ少年」

「少年って、お前……面白がってただろ……」

「うん」

というか現在進行形で面白い。オレって結構いい性格してる？

「ナカちゃんみたいな可愛い子を間違えるなんて最低ね。人間の屑いいえ、男の屑ね」

リムりんが何やらとどめを刺している。

「そこまで言わなくても……ただ、人間を見る目が腐っているどころかそもそも備わっていないのでしょう」

ヴィーたんが追撃をかけている。

「その辺にしておけ」

アドルフふるぼっこ(ばい、言葉(ごっこに終止符を打ったのはデュランだった。

新聞を閉じて、立ち上がると一気に視線の上下が逆転する。

「食堂が開いた。行くぞ」

「飯！」

「そうですよ！ ごはんですよ！ ご飯何かなー。和食もあるかなー。楽しみだー！」

「……あれで女なのか」

何か聞こえたので振り返ってニッコリ笑ってやった。

「今度こそ蹴り潰すぞコラ」

何処をとは言いませんが。

ズササアツと青ざめた顔で退いたアドルフにふふんと鼻で笑ってやる。

ついでに既にオレ達のコントに見切りをつけて先に歩きだしてたデュランを追っかけて、白いサマーセーターを着てるわき腹を横からちよいちよいとつついた。

ピクツと反応された。

「んっ……よせ、くすぐるな」

「くすぐってねえよ。なあなあ、オレDDDに勝った」

「そうか、それは良かったな」

ウキウキと報告するオレに少しだけ唇の端を吊り上げるデュラン。

「おう」

ついでにイエーイとハイタッチ。ハイッタツ……ハイ……ハッ……トウツ……テリヤツ！

「届かねー！」

「ハイタッチなのだろう？」

「うっさい、しゃがめ、縮め、おーろーせー！」

お前が手え上げたら届かねえだろうが！

しかも、微妙に下ろして、オレが届く寸前でひょいっと上げるとか。おちよくつとんのか貴様ー！

ゲシゲシと足の甲を踏みつけて抗議したら、やっとここさでデユラ
ンが笑いながら手を下ろしてきた。

良し。

「やり直し」

「はいはい」

「はいは五回」

「はいはいはいはいはいはい」

「……多くなかったか？」

「気のせいだろう」

下の位置で掌同士と甲同士をバシバシと一回ずつ合わせて、オレは満足する。

よし、じゃあ飯食うか。

「おい、アポロー、置いてくぞー」

「アドルフ！」

うん、実は覚えてるけどね。

正体暴露とオレ（後書き）

【作者後記】

一晩明けて、デュランとナカバ再会です。

しかし新聞ではたかれて……まあ、ナカバですしね。

さて、恒例？のご挨拶を。

初めての方もそうでない方もようこそおいで下さいました。尋でございます。

貴方のご来訪に心からの感謝を。

今回は六月十八日（じゃねえ十九だ！）、食事風景です。

現在下書き中ですが、長くなりそうな予感が今からします……内容は軽いのですけれど。

もし宜しければまたおいで下さいませ。

では、また縁があればお会いしましょう。

作者拝

朝食戦争とオレ（前書き）

弱肉強食の世界

（6月19日追記：お気に入り人数がいつの間にか99名になってました。おめでとう自分！

カウンターついてないので自己申告になりますが、「我こそは100人目の気がする！」と言う方、良かったらぽそつと仰って下さいな。

ついでにリクエストあれば受けます……ち、遅筆にも程がありますけど……）

朝食戦争とオレ

「おおお……」

白磁のお皿の上にこんもりと盛られた赤いアイツを見つけて、オレはバイキングの皿片手に思わず声を上げる。

「梅干しだあ……」

まさかこんな所で出会うとは。

ちよっぴり感激してるオレに、ヴィーたんが不思議そうに首を捻る。

「何ですかこれは？」

「梅干し。和食の一つで、えーっと……梅の実のピクルスっていうか」

「違っぞ」

デュランうっさい。お前にゃ聞いてねえんだよ。

「それ、梅の実なの？」

「あ、リムりん。うん、そうだよ。確か」

「でも、毒があるんじゃないかったかしら？」

「……はい？」

「そうなの？」

「確か実と種に強力な毒が含まれているって聞いたことがあるけれど」

「口にして問題ないのですか、これは」
「オレは普通に生きてますけど……って何笑ってんだ貴様」

オレ達の話題を聞いてクスクスと笑っていたデュランの足をけつとばしておいた。

「失礼。いや、確かに青梅……未成熟の梅の実や天神様と呼ばれる核の部分には青酸配糖体が含まれている。」

「青酸って、あの推理小説で良く出て来る青酸カリみたいなの？」

「まあそうだな」

デュランの言葉に「プラム？」と言いながら梅干しに手を出そうとしていた人達が硬直した。

うん、思いとどまって良かったと思うぞ。

梅干しをプラムと思って食べると痛い目見るからな。マジで。

オレはあれをヨーグルトに入れてしまった人を知っている。

「だが、この状態になれば毒性は抜けている。毒の抜ける原理を詳しく聞きたいのならば説明するが……」

「や、良い。要らん。され」

「はいはい」

「はいは一回だっつーの」

言いながらオレは梅干しを三つ、皿に乗せる。

しっかし流石天下の中央セントラルだな。メニューに和食があって、しかも梅干しとかマイナーなもんまで揃ってる。ま、他の地域の料理に比べるとやっぱりちょっと少ないけどさ。

あー、長おなさん家でまたご飯食べたい。アユの塩焼き食いてー。生姜おこわも良いなー。

とか思いながらじーっとヒジキの煮物の前で、これを取るかとら

ないか迷ってたらリムりんが「ナカちゃんどうしたの?」と声をかけてくれた。

「あー、うん。ちょっと迷っててさ」

「え、なにそれ……虫?」

「いやいやいや……ヒジキっていう草だから」

「草食べるの? ジパング人って変わってるのね……」

うん、まあ。でもニラとかだって草だしね。

「草じゃないだろ。それ、確か海藻だぞ」

と、口を挟んできたのはデュラン……じゃなくてアドルフだった。

あ、はいさつきから居ますよこいつも。

ずーっと未練たらしくオレとリムりんの後をくっついてきてます。

お前……仕事しろ。

とか厳しい事は食事前なので言わないであげました。ご飯は美味しく食べたいし。

「あー、そうだった」

「なあ、チ……」

「それ以上言ったらクロス」

「……あー、いや、なんだ。お前ってさ」

「はあなんでしょう」

「……その、もしかしてジパング人なのか? それ、ハシって奴だろ」

「あー、うん」

なんだ、これ気になってたのか。

オレは言われて持ってた箸をカチカチさせる。

これ、ホントは行儀悪いことなんだけど、考えてるとついやつちやうんだよなあ。

他にも色々箸には箸のマナーってのがあって、色々じいちゃんに教わったんだけど……うん、忘れた。何だっけなあ。涙箸とかあった気がするけど。

それを呆れたっばい目で見て、アドルフが「そんなただの棒きれで良く食べるよな」と呟いた。

棒きれじゃねえよ。れっきとした食器なんです。

オレがムツとした目を向けると、アドルフがちよつと退いた。

チツと舌打ちすると更に退いて、何か言いたそうな目でこっちを見る。

何だよ。喧嘩なら買っぞ。

「箸もそう悪くないぞ」

取り合えずもっかい急所蹴飛ばしとくか？ とオレが思った所でデュランがヒョイとオレとアドルフの間にくちばし、じゃなくて箸を挟んだ。

あ、そう言えばこいつ魔王の癖に箸使える奴だった。

唐突に乱入したデュランをアドルフとリムりんがポカンとデュランを見上げ、にっこりとほほ笑まれて一緒に顔を赤くする。

こら、アドルフはどうでも良いけどリムりんの色目使っな。

「ま、陛下がそう言うなら仕方ない、か」

「その呼び名は確定なのか……」

あ、デュランが軽く嫌がってる。ふーん。

「良いじゃん陛下。頑張れ陛下。負けるな陛下。笑えるぞ陛下」

「……」

折角なので後押ししてみたら、デュランがじとつとした目でオレを見下ろして、

「ぎゃーっ！ オレのポテトさんがー！」

「良いじゃないかナカバ。頑張れナカバ。負けるなナカバ。笑えるぞナカバ」

「返せー！ 返せつてばこの誘拐魔！ それオレのポテト！」

「……愛されてるなあ」

「……愛なのかしら」

なんじゃそりゃー！ てか、返しやがれ！

箸を伸ばすけどデュランはそれをひよひよいと避けやがる。

こ、の、や、ろ、うっ！

くそう、こうなったら奥の手だ。

勿体ないけど皿に取っておいたロールパンを掴んで奴に向かって投げつける。

が、デュランはそれを持っていた箸であっさりと空中キャッチし、優雅な動作で自分の皿に乗せる。

「すっげ……」

その鮮やかな箸さばきにアドルフが喉の奥で呻いた。

むう、流石デュラン……無駄に器用な奴め。

ならばこれでどうだっ！

オレは皿の上のプチトマトさんをペイペイツと立て続けに投げつける。

どうだ、同時に二個はいくら箸が使えても捉えられるまい！ これぞ頭脳ぶれい！

「……」

デュランが小さく笑う。

そのまま落ちついた動作で一個目を箸であっさり空中キャッチ。くう、やりおるな。だが、第二段が既にそこまで迫ってるぞ！一度に二つは持てるまい。

そんな風に考えていた時期がオレにもありました。

デュランがやったことはシンプルだった。

一個目のプチトマトを持ったまま、その箸で飛んできた二個目のプチトマトを真上にバレーボールをレシーブするみたいに打ち上げる。

ポーンと天井高く舞い上がるプチトマト二号。

その間にキャッチしていた一個目をやっぱり優雅な手つきでデュランは皿の上に置く。

その横に、数秒遅れて真っ直ぐ落下してきたプチトマト二号がちょよこんと乗った。

「おお……」

どよめくギャラリィ……って何時の間に。

それに皿をウェイターよろしく持ち直し、恭しく、茶目つけたっぷりに一礼して見せるデュラン。

拍手が沸き起こった。

何これ。

しかも何故かオレにチップをくれる人もいた。何これありがとございますもってください。やった、臨時収入だ。

……でも気が咎めるので後で募金箱に入れようと思います。オレ

が稼いだ金じゃねえし。

デュランに渡すのが筋なんだが、多分受け取らない気がするし。
魔王様セレブだからな！。

ちなみに、奪われたポテト達は帰ってきませんでした。
くそ。

朝食戦争とオレ（後書き）

【作者後記】

食べ物で遊んではいけません。

勿論投げてはいけませんし、打ち上げたり、落としたりするものでもありません。

ただし制作中のピザとオムレツは許される気がします。

今晩は、尋でございます。

おいで下さった皆様に心からの感謝を。

さて、ゆるゆると本筋に戻って来ました。

観光旅行の日程も後しばらく。気長にお付き頂ければ幸いです。

それではまた来週、縁があればお会いしましょう。

作者拝

清式交際とオレ（前書き）

そう言えば見なくなりましたね。
ダイヤル式の黒電話。

（誤字訂正しました）

清式交際とオレ

「で」

おかゆに梅干し三つ浮かべて、オレはそれをほくしながら「今日の予定だけどさ」と話を切り出す。

ちなみに席は昨日と一緒。

今回は四角いテーブルなんで、こっちがわにオレとデュラン。向かいにリムリンとヴィーたんって感じ。

何故かアドルフが椅子を引っ張ってきてリムリンとオレの間に入り込んでるけど。

まあ、入り込んでくるのは許してやっても良いけどさ。でも、ちらちらとリムリンの胸見るのは止めてくんないかな。

ギロツと睨んだら、何か微妙な表情で見つめ返された。

何だよこの野郎。リムリンに変な事したらタダじゃおかねえからな。

「ナカちゃん？」

「へ？」

「今日の予定がどうかしたのですか？」

あー、はいはい、途中でしたね。

オレはおかゆをスプーンですくって、「オレ、デュランに付き合うことにしたから」と伝えた。

三人が同時に噴いた。

え？ 何で？

ちなみに噴かなかったのはオレとデュランだけで、デュランは澄ました顔で珈琲を飲み、オレから奪い取ったバターロールを小さくちぎって口に運んでいる。

ああ、愛しのバターロール……オレのだったのに……。
さようなら。小麦色の君が好きだった。

「っ、っ、っ」

とかバターロールとの永遠の別れを惜しんでたら何かリムりんが
壊れてた。

どうしたんだろう？

ついでにヴィーたんは何やら激しくむせている。

ああ、分かります。飲み物が気道に入ったんですね。

冷静なお姉様キャラと見せて、意外などじっこ属性発動ですか？
萌えの固まりだなヴィーたん。

「っ、っ、っ」

「っ、っ、っ？」

「っ、っ」

「っ、っ、っ……っころばし、ごーまみーそずーい？」

「歌詞が間違っているぞ、ナカバ」

「そうだったっけ？」

「それを言うならずいずいずっころばし、だろう」

「えー？ずいずいって何さ」

「……。隋ずいというのは今をさかのぼること約六億五千年前に存在し
た成文国家の一つだな」

「いやいや、遡りすぎですから。まだ文明生まれてませんから」

「三時のおやつは？」

「文明……あれって二番は何だったっけ」

「電話だな」

「デンワって何？二番になんか関係する奴？」

「ああ、それはだな……西大陸に約八百年前に存在したベルリング
朝の十二代目の王、コードレスに仕えた名宰相ルース・デンワのこ

とだな。知らないか？」

「えー？ 聞いた事ねえな」

「まあ、有名な逸話があつてな……相当優秀な人間だったことは確かだが、ある日の会合で国一の知恵者だと言われた時に『己は常に二番である事を心掛けてきたというのに、今日このような言葉を受けた。それは私の態度が高慢と映つたのだろうか、服装や食事が豪奢すぎたのだろうか、賄賂が横行し政治に公明さが欠けているのだろうか、取り上げるべき賢者がのけられていているのだろうか、宮中に節度がなく乱れているからだろうか、民が職を失い路頭に迷っているからだろうか』と云つて反省したといわれている。

その言葉を知つたコードレス王は反省して、より一層国内の改善に力を入れるとともに、驕おごらずに己の身を顧みたデンワをより重用するようになったそうだ。これが後に三百年続くベルリグ朝の基礎となつたことを考えれば彼の功績は大きいな。まあ、そんな二番手であることに誇りを持っていたデンワを敬愛した民の間で出来た言葉が『デンワは二番』……と、いう話だ」

「へー、そうなんだ。何かすごいなそいつ」

「ああ。ちなみに今の説明はフィクションだ」

「何いつ?!」「何っ?!」

何故カリムりんまで一緒に立ち上がつて叫んだ。

お？ 何？

「どしたのりムりん」

「っ……っ、付き合つって何?!」

「え？」

「ん？」

ごほごほと噎せているヴィーたんより一足早く立ち直つたりムりんがテーブルに手を着いてオレの方に身を乗り出す。

その剣幕に思わずちよっぴり逃げ腰なオレ。
相変わらず気にしないデュラン。

いや、てか……え？ 何？ オレ何か拙いこと言った？

「え、えーと……だから、普通に」

「普通ってどういうこと？ ねえ？」

「え？ そう言えば普通って何だろ……いや、えーと……リムりん
がダメってんなら止めとくけど」

「絶対ダ」

「ナカバは」

メ、と言いかけたリムりんより早く、デュランがオレから奪った
プチトマトを掴まんて微笑んて言う。

ああ、懐かしのプチトマト……オレのだったのに……。
さようなら。ほんのり甘みの中に酸味を秘めた君が好きだった。

「今日は俺の予定に付き合ってくれるそうだ」

「……予定？」

「うん。観光巡り」

「あ、そう……そう言う意味ね」

他にどんな意味があるんだろう？

ま、いつか。

てことで、中央ニに来る前の約束を果たすとか何とかで昨日デュラ
ンから話があったんです。

天壇の中を見てみるか、と。

天壇って言ったならミレイの最高傑作のひとつですよ。

あ、いや天壇のご真ん中にドーンとそびえ立ってる時計塔はミレ

イの作品じゃねえよ？ あれはもつと古い奴。

ミレイが手掛けたのはその時計塔の周りの庭です。

建築家として有名だけど、基本的にミレイは建物だけじゃなくて総合プロデューサーなんです。

庭の設計もしたし、あの時代はまだ珍しかった水球型の噴水も提案してるし（これはボツつたんだけど時代の先取りだよな）、家具のデザインもやってるし、乗り物だって考案してる。

ちなみに絵も描いたことがあるらしいけど……うん、あれはちょっと、無かったことにしたい。

簡単に説明すると……えーっと……。

最初見た時は便秘に悩んでる腕時計、もしくは魔王への供物にさげられたブロッコリーかのどつちかだと思っただけどさ……その絵が実はネコの絵だったと言えば分かってもらえるだろうか。

……うん。

悪いけどネコには絶対見えない。

そんなお茶目なミレイ師匠ですが、天壇の庭部分は一般公開の外苑と非公開の内苑の二段構成になっていて、師匠はその内苑の一部を任されたらしい。

つまり見えません。

外から見えません。

パンフにも載ってません。

ちなみにミレイが当時描いたはずの設計図も残ってません。

なのに何でこんな話が分かっていくのかつーと、ミレイの知り合いが恋人に宛てた手紙の中でそういう記述があるのと、中央からミレイに宛てた設計料に関する支払証明書の控えが残ってるからだ。

ちなみにミレイは手紙も日記も嫌いだったんで何も残ってません。偏屈な爺さんだったらしい。

でもオレはひそかに、字が下手だから書きたくなかった説を考え

てる。

だってほら、あの絵だし……。

「あー、陛下」

今まで沈黙を守ってたアドルフがここで手を上げた。

「……。……何だ」

「観光旅行は良いですけど、その間俺らどうしたら良いっすかね？」
「指示を変える予定は無い」

デュランはちらりとアドルフに色目……じゃない、流し目をする。

「それは……」

「まあ、指示だけに従うもよし。裏を読んで行動するもよし。好きにすれば良い。フォローはしないがな」

嘘つけー。

お前どうせどっかでフォローの手を打ってるだろ。バレバレすぎてヘソで……何だっけ。

へそが沸く？

「頭が沸いているらしいな」

「うつさい黙れ。そして滅びろイケメン」

てかオレの考え読めないんじゃないやなかったのか？

「今は見えないが、お前の顔を見れば一目瞭然だな。バレバレすぎてヘソで茶が沸かせそうだ」

「……デュランなんて大嫌いだ」

「それはどうも」

いやみか！ いやみだろこんちくしょう！

涼しげな顔で珈琲を飲んでやがる残念な感じのイケメン。略してザンネンの足を取り合えず力いっぱい踏みつけようとした。

さくつと回避された。

嬉しそうに珈琲をお代わりしているその笑顔が無茶苦茶腹立つんですけど。

このこのっ、とテーブルの下でデュランの足を追っかけまわしてたら、椅子の足に小指の角をぶつけました。

ガンッ、ゴンッ。

一回目が足の激突音。

二回目が痛さのあまりテーブルに突っ伏したオレのデコと、テーブルの衝突音です。

「……」

「ナカ吉、どうしました」

「……や、何でもない」

言えません。

隣でデュランが小さく肩を震わせて笑いを堪えてるのをとりあえず目で睨むだけ睨んでおいて、オレはそっと手を伸ばして足をさする。

せっかくリムリンに買ったサンダルもどきに傷がついてたら嫌だなあ……それ以前に、この靴でデュランなんか踏んだら買ってくれたリムリンに失礼だ。もったいない。

あとでデュラン用にどっかからレンガとか探してこよう。

それで、しゃがんでる隙に後ろから殴って、あとは列車を乗り継いでアリバイを作るんだ。

いや自分で言っつてて訳分からんぞ。

てか、魔王をレンガで一撃、殺人事件ってオレどんだけTSUE
EE設定ですかムリムリ。

まあ、デュランを殺そうと思ったなら簡単な気もするけどな。

「一生珈琲抜きとか」

ぼそりと呟いたオレに、ずっと笑いを堪えてたデュランの肩がビ
クツと跳ねた。

「……殺す気が」

「いやいや、一割未満ぐらい冗談だから」

「殺意満々だな、ナカバ……」

いや、殺そうとは思ってませんよ？

死ねばいいのには思ってるが。

僕の知らないところで！。KAIT 兄さん、うざやかで素敵で
す。

しかし足が痛い。小指の爪割れたかもしれないな……デュランへ
の殺意（さつき無いつて言ったとか、記憶にございません）がこも
った一撃が自分の身に跳ね返って来たんだから、爪の一枚や二枚割
れてもしょうがないかもしれんけど。

後でテープ巻いておこう。

それとデュラン、後で覚えとけ……。

知らん顔しているデュランへ内心で仕返しプランを練っていると、
何か言いたげな顔でオレとデュランを交互に見てたアドルフが何故
か溜息をついて「陛下、もう一つ確認したいんですけど」と緩く手を
上げた。

「仕事の件は構わないんですけど……」

ちらつとオレを見るアドルフ。
何さ。

「そっちのチビっこは……」

「何？ 箸ぶつ刺されたいんですか？」

「だから！ 何で一々お前は暴力に訴えようとするんだ！」

「そっちこそ人のことチビチビ呼んでるんじゃないやねえよ。デカイからつて良い気になるな尊頭。あ おうに謝れ。ついでに中身までチヨ
コになつてしまえ」

「……」

やられたら五倍返ししますが何か。

立て続けに言い返したらアドルフは暫く絶句して、それから肩を
落とす。

「……んなだからなあ、お前男だと思われるんだよ」

「はいはい、そーですね」

「あ、いや……そうじゃなくて、お前は」

「その辺りにしておけ」

カチン、とカップをソーサーの上に戻してデュランが静かに言う。

「……他の客の迷惑だ」

お前がソレ言うか？ 魔王のくせに。

いや、まあ確かに他の方のお食事の邪魔だけどさ。

しょうがないから黙って「だってあいつが先にー」と目で訴えて
みたが、同じようにデュランに「ここで争うことではないだろう」
と目で窘められただけだった。

ちえー。

「ナカバのことは最後まで私が責任を持つ。お前達は気にする事は無い」

言いながらデュランがオレから奪ったポテトを上品に切って口に運ぶ。

さようならオレのポテト……黄金色に焼けた君が好きだった。

ところで、人形オートマトンが食った場合、食材は何処に行くんだろうか？

清式交際とオレ（後書き）

【作者後記】

三時のおやつネタが今の若い方に通じるかまったく自信がありません。

ちなみに二番は「赤坂局の二番」に登録されていたのが由来。一番は確か個人がとってたはず……。

さて、皆様こんばんは。

初めての方も常連さんも、偶に居らっしゃるお客さまもようこそおいで下さいました。

ということので、めでたくデュランとナカバは付き合う事になりました。良かったね！（って意味が違う）

さて、徐々に本筋に戻ってきますが……その前に一話挟もうと思っております。

では、もしご縁があればまた明日お会いしましょう。

感謝をこめて 作者拝

誠意謝罪とオレ

食事が終わって、後は部屋に戻って荷物取るう、ってなった時に後ろから急に首根っこを掴まれた。

ぐえ！

「おいこらデュラ……あれ、アポロじゃん」

「アポロじゃなくてアドルフ。陛下じゃなくて残念だったな」

オレの襟首ひつつかんでたのはアドルフだった。

何だ、デュランじゃないのか。てか、何でお前さっきからオレに構おうとしてくるんだ？

「いや、どうでも良いけど首締まってるんでやめてください」

「あ、ごめ……」

すぐさま手が離れたんで、オレはちょっと喉をさすってから「何だよ」と奴を見上げる。

……身長差だ、ほっとけ。

それにアドルフはちょっと苦笑して頬を掻いて、

「悪い悪い、掴みやすい位置にあったからつい」

「……死にたいのかキサマは」

「あ、違う違う！ 今のは言葉のアヤってやつだ」

……デュランと別の意味で殺意が沸くなこいつ。

ちなみにそのデュランだが、さっきエレベーターにさっさと乗りこんでました。置いていきやがりました。

あの野郎……後でオレの仕返しプランにおののくが良いさ！

ん？ おのののく？ おのののの……おののの……驚くが良いさ！

その辺は後でやるとして。

「えーと……で、何しに来たんだよチヨコ」

「だからチヨコじゃなくてアドルフな」

「ふーん、で苺頭、何か用？」

「……覚える気ないだろ」

「うん」

もう覚えてますから。

素直に頷いたオレにアドルフは何故か半眼になっていた。
や、理由は分かるけどな。

「つたく、しょうがねえガキだな……」

「誰がチビだ」

「いや言っつてねえよ。それより、ほら、足出せ」

言いながらオレの前に跪いたアドルフが、オレの右足を掴む。
取り合えずデコにひざ蹴り喰らわせました。

「?!」

「いきなり何しやがるんですか」

「そりゃこつちのセリフだ！ びっくりしたー……」

むう、無駄に頑丈だな。確か回復特化だっけ？

「あのさー、お前もうちよっと思えるよ」

ついでに離された足をひらひらすると、アドルフが「あ」と間の

抜けた声を上げて慌てて立ち上がる。

「悪い。そうだったな、そういや一応お前ってお……」

「はいはい、通路の端っこに寄りましようね。邪魔ですからねー」

「……そっちなのか」

え？ こっちじゃなくて反対側に寄った方が良かったか？

アドルフがそう言うのでオレは最初行こうとしてた方と反対側、窓側の端に寄る。

これで良い。

「で？」

「いや、足さつき怪我しただろ。ちよつと治すから見せてみる」

……うん、まあさつきデュランの足じゃなくて椅子の足蹴りましただけだね。

今見てみたら小指の爪の角が欠けて、ちよつと血が滲んでる。

それを見てアドルフがちよつと眉を顰めた。

「痛いだろ、これ」

「そりゃまあ、それなりには」

「ちよつと待ってる。回復^{エイド}」

アドルフがオレの足に手を当てて、短く唱える。詠唱破棄ですか、さすがだな。

ほう、と点つた光はそのまま数秒で直ぐに消えた。

ま、当たり前だがオレの傷は治ってません。

「……ん？ 調子悪いな」

「あー、もしもし？ それ、意味ねえですから。オレ、そういう魔

法きかねえの」

「……は？」

オレの言葉に跪いてたアドルフは顔を上げ、それから意味を悟って「あちゃー」と呻く。

「使えないだけじゃないのか……」

「うん」

「……一応試すか、治癒^{ヒール}」

さっきみたいに光が点つて、今度はそれがオレの足に照射される。……うーん、何か当たってる気がするけど良く分かん。

「どうも、かけてもすりぬけてる……いや、違うな……何が原因だ……」

「あの、さ……もう良いんじゃない？ てか、何でオレの怪我なんかお前が治そうとしてる訳？」

「……昨日、無神経な事言っただけだから」

はて、どれのことだろう。心当たりが多すぎて分かりませんが。

「回復魔法練習しろとか、さ。知った風な事言って、悪かったな。お前だって出来るならやってるよな……」

「あー……」

そっか、とオレは納得する。

さつき、種明かしの時にパス見せたから、こいつにもオレがマナレスだつてもうばれてるのか。

ふーん……。

オレはちよっと肩を竦める。

成程、朝からやけに絡んでくるなーとは思ってたけど、それが言
いたかったのか。ふーん。

「気にすんな。オレも気にしてねえし」

なるべく軽い調子で言ったオレに、しゃがみこんでたアドルフが
苺ピンクの目を上げて、「俺もさ」と苦笑する。

「マナレスのことは知識として知ってた。けど、お前全然普通に見
えてたから気付かなくて……悪かったな」

「しょうがねえよ。オレ、魔法が使えなくて、回復できねえけど他
は普通と変わらんもん」

外見だけでオレがマナレスだって分かるようなことなんて滅多に
ない。

マナレスはジパング人特有の症状だとか勘違いしてる人にはさら
に気付かれんだろう。

だってオレ、ジパング人の血は混ざってるけどかなり薄いし。

ほら、髪の毛は焦げ茶だし、目は薄茶だ。

黒髪ってんならデュランの方がよっぽど黒い。や、あいつは目の
色が明らかに変だけどさ。

そうは思われないのかもしれないけど。

マナレス^{オレ}だって普通に人間なんだ。

オレの言葉にアドルフはちょっと目を開いて、それからくしゃつ
と笑った。

「だよなあ」

「……へ？」

「ま、お前ケガ治りにくいってんならもうちよつと気をつけて動けよ。転んでピーピー泣いてからじゃ遅えんだからな」

……あの、オレ十四歳なんですけど。
転んだぐらいで泣いたりしませんよ？

「それと、怪我したらちゃんとええよ。俺らDDDじゃなくても良いから」

「何で？ これぐらい大したことねえよ？」

「お前、もう少し頼る練習しておけよ……つと、あーこれも駄目か」

エラーあんどリトライ、って感じだな。

しかしまあ、良くもこう次から次へとポンポン治療系の魔法が出て来るもんだなあ……これが、傭兵集団DDDの実力、ってことなんだろうか。

「聞いてるか？」

「へ？」

「やっぱり聞いてないな……良いか、もっと小さいことから他人を頼る練習をしておけって言ったんだ」

何故に？

「肝心な時に頼り損ねるからだ。頼り方や加減を覚えるのはなるべく早いうちが良い。この傷だって、言えば何とかかなるかもしれないだろ」

「いやいや、なりませんから」

「俺は」

また魔法の種類を変えたらしいアドルフがポツンと呟く。

「そうやって、頼り所が分からないまま自力でやるって突っ走って死んでく奴を何人も見てる」

「いや、そんな大げさな……」

「他を頼れない奴は、結局誰かを助けることも下手だからな。助け損ねて後悔する前に少しは他人を頼る癖、つけとけ」

……。

アドルフの言葉にオレはちょっと黙って、しみじみ思う。

お前はどこまでお兄ちゃんキャラなんですか、と。

いや、良い台詞言ってると思うよ？

でも、オレの足診ながらって時点で大分絵的に損してますけどね。

「しっかし本当に治らないな。何でだ？ 魔力が入れる端から溢れてるっつーか……」

「分かるのか？」

「ま、魔力の流れぐらいいは読めるからな。何で中に入らないんだかは分からないが……呪い？」

「オイコラ」

「すまんすまん、しっかしどういう理屈だコレ……幾らやっても流れ出てくし、回復は弾かれ……あー、そういうことか」

こりゃ想像以上に厄介だな、と呟くアドルフにオレは一瞬、拳を握る。

いや、うん。深い意味は無いのは分かってるんだけど、さ。うん。

ひやりと冷えたオレの内心には気付かないで、アドルフはうーと

かあーとか唸っている。

何考えてんだか……。

そう言えば。

デュランならオレのこの冷えた感じも見抜いてしまっただろうか。
ふとそんな事を考えた。

「あのさ、詫びの気持ちは分かったからもっ……」

「すまんっ」

「いや、だから」

「お前のコレ、俺じゃあ無理だ」

「いや、それは分かってますから。魔法きかねえし……」

「回復と治癒系が効かないのは分かった。これ、多分蘇生リザレクトなら効くぞ」

はい？

「ま、生憎俺は使えないんだけどな」

悪いな、とあっけらかんと笑うアドルフ。

いや、えーと……すみません意味が分かりません。

「いやさ、本当に蘇生リザレクトなら効くかどうかは分からないんだけどな。

普通傷の手当てレベルで使う魔法じゃねーしょ」

「はあ……そもそも聞いたことがありませんが」

「ま、普通の医者程度じゃあ使えないしなあ……俺のチームでも使える奴ついたら二人だけだしな……」

えーと、何か大事の予感がするのですが。

そのリザ……なんとかってそもそもどう言う魔法なんかサッパリ見当が付きませんけど。

アドルフは「ま、後で調べてみるか」とかなんとか言いながら勝手にオレの小指にテープを巻いた。あれ？

「持つてるんだ、へー。オレ自分以外で持つてる奴初めて見た」

「ま、職業柄な。お前みたい一般人が持つてる方が本当は珍しいんだけどな……」

「ま、体質柄な」

真似して言ってみたら妙に受けた。お前のツボは良く分からんな……。

「よし、良く我慢したな。もつぶつけるなよー？」

ついでにワシヤワシヤと撫でられました。

……何？ 喧嘩売ってる？

「あ、悪い悪い。何か撫でやすい位置にあるからつい」

「本気で殺意沸くな貴様……」

「そう怒るなつて、よしよし」

わしやわしや、パート2。

はつきり分かった。

確実にオレの年齢忘れてるんだなこいつ。

……言っとくけどオレ、一応十四歳だからな？ お前んとこのチビさんたちより年上ですからね？

お前と二歳しか変わらないからな？

「あー、やっぱちっせー」

……よし、死刑。

オレはとりあえず容赦なく、奴の小指の角をけつとばした。

怪我が一つ増えました。

誠意謝罪とオレ（後書き）

【作者後記】

首根っこを掴んで持ち上げる時にはやり方に注意しましょう。
ちなみに成猫は首をつかんで持ち上げると相当苦しいらしいのでや
つてはいけないそうです。

こんばんは、尋でございます。

初めての方もいつもの方も、偶にの方も迷子の貴方もよろこそいら
つしゃいました。

お気に召したならこれ幸い。

もう一度来ていただけたならこれ喜び。

一度きりのご縁でも、まあ袖触れ合うも多生の縁ですし……貴方に
とって何か得られるものがあればと願う次第です。

さて、次辺りでそろそろ陛下とナカバのお付き合いの様子に入る予
定です。

仲の進展を願ってるそのあなた、乞うご期待（とか見得を切って
みる）

それではまた次の機会に。

作者拝

再開再会とオレ（前書き）

懐かしの某車もの……。。

再開再会とオレ

「だって反則じゃん！」

大事なことなので力いっぱい主張しておきます。

「何で靴に鉄板仕込んでるんだよアイツ！ おかげで無茶苦茶痛かったし！」

「鉄板では無い……が、あれは戦闘用の靴だから当然だ。壁を蹴っただけで穴が開く代物だぞ。仕込み刃が作動する前に回避して貰ったことを感謝するのだな」

「うーわー、何か納得いかねー！」

ぎにやーと唸ったら問答無用で首根っこを掴まれて持ち上げられました。

プラーン。

「……落ちついたか？」

「……うん」

落ちついたところで観光旅行の再開です。

良くネットの質問サイトで見かける質問に「天壇とゼロ地区って何が違うんですか？」ってのがある。

せっかくなのでオレが説明しよう。

天壇とは！

「簡単に言えば番地と建物の名称の違いのようなものだ。ゼロ地区はあくまで番地。そこにある時計塔を含めた施設全体を示す名称が

天壇だ」

……だ、そうです。

天壇は周囲の庭園とその庭園の奥にそびえ立つ時計塔の二つで構成されている。

まあ、今更オレが説明する必要はねえと思うけど、時計塔は永久時計がある場所で、ゴージャス美女の双神子様の住んでる場所でもある。ま、管理人だから当然だけど。

お湯が沸くのも、列車が走るのも、フライパンでオムレツが焼けるのも、スーパーに商品が並ぶのも、全部この永久時計をちゃんと双神子様達が管理してくれてるお陰だ。

世界のエネルギーのほぼ十割を生産しているロストテクノロジーの最終形態^{ハイエンド}。それが時計塔の中に管理されている自立式動力装置【永久時計】だ。

まあ、当然そいつを狙った勢力があったとか、ここをめぐって国同士が対立したとか、その手の話は歴史の教科書の中にゴロゴロ転がってるが、今のところ成功したって例は無い。大抵中央十騎士とそれからDDDによって撃退されてるからだ。中には双神子様自身が立ち上がって戦ったなんて眉唾な話も混ざってるけど、うーん、これはまあ一般的には認められてない説だ。

でも戦う美女って素敵なので、オレとしてはそういう事実が一回くらいあっても良いと思う。

あ、ちなみに美女美女とオレは双神子様のことを言ってるが実際にその姿は知りません。

てかオレじゃなくても大抵の人は知らんだろう。

何せ公式な場所にほっとんど姿を現さないからな。神子様。全然マスコミに顔見せることもないし、公式発表でも遠くから映されるだけで顔見えないし、肖像画みたいなのも出てない。

そもそも顔を合わせることがまず出来ない。

だって時計塔に居るんだもん。

生まれてから死ぬまで、ずっとそこで世界の為に祈りながら永久時計の管理を続けていくんだそうな。

ちよっぴりエメード姫みたいだな、とか思ったのは内緒。

お陰でオレの中の双神子様のイメージは金髪の儂げな美少女だ。

そんな話は置いといて……。

まあ居るんだか居ないんだか実証が無い双神子様は、そんなんだから「実は居ない」とかいう話が出てきてもおかしくなさそうなんだけど……何故だかそう言う話は無い。

オレも特に根拠は無いけど、何だか居る気がしてる。

いや、普通に考えたら「何で存在してると思える訳？」って感じなんだけどこればっかはなあ……うん、でもなんか居る方が普通って気がするんだよ。うん。何となく。

でも時計塔は一般人立ち入り禁止、つーか中央十騎士のトップスリーぐらいしか入れない場所なんで知りようがないんですが……デュランは今回そこに堂々と侵入する気らしい。

さすが魔王だな。

そんでもって、双神子様を誘拐して……あれ？ お前もしかしてザガトって名前じゃね？

「何だ？」

オレが後ろからじーっと睨んでたら不思議そうな顔をしてザガト……じゃなかった、デュランが振り返った。

「うんにゃ、別に。後頭部禿げれば良いのにとか思ってますんから」「何だそれは……とりあえず許可が下りるまで十五分ぐらいかかるからな。少し待つとしよう」

言つてデュランは入口の壁に寄り掛かつて腕を組む。

てか、許可下りるつてもう決まつてるみたいな態度だな。幾らこいつの偽造パスが上手く出来ても、果たして中央セントラルの中でも最高機密の天壇に入れるものなんだろうか？

オレはつつつつ、と近寄つてデュランの袖をぐいぐいと引つ張る。

「どうした？」

閉じてたサングラスの奥の紫の目が開いて、デュランがオレを見下ろす。

「ホントに大丈夫か？ 十五分後に牢屋に直行とかオレごめんだからな」

「ん？ ああ……問題ない」

本当かよ。

ここで死ぬさだめでは無い、なんて現実世界じゃ言つて貰えないぞ？

「あのパス自体は正式な手続きを経て発行された物だ。まずあれに異議を唱えられる者は居ない……ここならば尚更だ」

「どゆこと？」

「後で教えてやる」

相変わらずの上から目線ですか、そうですね。

しょうがないんでオレはデュラン越しに柵の向こう側を見やる。

今オレ達が居るのが外苑と内縁の境目だ。

オレが立ってる側が外苑で、こっち側は一般公開されている。恩寵公園とも言われてて、ここに来るだけで不治の病が治つただとか、

精神的な問題で口が利けなかった子が喋り出したとか、冴えない画家がこの景色に天啓を受けて、以来有名な巨匠になったとかいう眉唾もんの噂もある。

で、デュランの居る側が内苑。

正式には内苑に入る手前の緩衝地帯みたいな場所で、基本は非公開だけど特別な日に一部のVIPだけを招いて公開されることもあるらしい。

その更に内側が内苑で、ここは関係者以外立ち入り禁止の非公開区域。ちなみに、ごく稀に神子様散歩することもあるらしい。

で、デュランの話によれば、ミレイが作った庭は内苑にあるんだそう。

つまり、こんな機会でも無い限り一生拝めないってことだ。

デュランでも役に立つ日が来るなんて……これはある意味奇跡かもしれない。

「何と無く馬鹿にされている気がするのだが」

「何を言うか。この感謝にあふれた目を見る……あ、やっぱり見るな

だから見るなって、顔が美形すぎて鳥肌立つからこっち見んな！」

「……」

デュランの視線が生温いのは気のせい……じゃ、ないよな。やっぱり。

「いや、その顔はあんまり好きじゃないっていつか……」

「そうか……では、この手は？」

「うわー、指先まで美形だ。死ねばいいのに」

「何だそれは……」

美形美形と連呼するな、とデュランが麗しく顔を顰める。

この野郎。

変顔してもこいつの場合絵になるんだからしょうがない。

いつかみたいに、またこいつの口に指突っ込んでぐいぐいーとやってやるう。うん、今決めた。

オレが決意に深く頷いてるとデュランが軽く退いた。

ニヤリと笑うと苦笑いが返って来る。

「お前は本当に飽きないな」

「は？ オレそんなに飽きっぽく見えるか？」

「いや……だが、興味の無いことには薄情なようだな」

「そりやお前だろ」

「ふふ……かもしれんな。まあ安心しろ。俺はお前への興味もきちんと持っている」

「何がどう安心なのか二秒以内に説明してみる」

一、二。はい、しゅーりよー。

「早過ぎないか？」

「お前が遅いんだよ。ほら、ちゃっちやと答える」

「俺がお前達に無関心になったら大変だろう？」

「知るか」

「やれやれ、つれないな」

「はいはい」

「はい、は一度だけ……だろう？」

甘やかにデュランが笑んで、普段オレが口にしてる台詞を真似する。

それにどう返そうか考えてたら、ガチャリという音がデュランの背中側で聞こえた。

「訪問者。いと高き者、黒の君の許しにより閉ざされし門は開いた。

「主守りし剣たる我ら十騎士が一振り、ファリドが案内申し上げる、いざ来たれ」

……えーと、半分くらいしか聞き取れなかったんですけど。

「何やら妙に仰々しいセリフにはなマークを飛ばすオレとは対照的に、デュランはニヤリと魔王スマイルを浮かべて振り返り、境界の向こう側からきたロマンスグレーのおっちゃん……多分ファリドって名前っぽい人に片目を瞑って見せた。」

「今回はきちんとつかえずに言えたようだな、ファリド」

「……デュラン、様？ そんな、まさか……」

「さて、許可が下りたようだ。行こうか」

「あ、うん」

「ほら、ファリド。何をポカンとしている。また置いて行かれるつもりか？」

「は、いや、貴方様は……」

クスクス笑うデュランに目を白黒させていたファリドさんの顔がちょっと面白かったとか……本人には言わないで置いてあげよう。

再開再会とオレ（後書き）

【作者後記】

一人増えましたがチヨイ役です。

中央十騎士の一人ファリドさんです。ロマンスグレーのおじい様……ならぬおじ様です。

十騎士はもう一人出てくる予定ですが、今しばらくお待ち下さい。

さて、今晚は皆様。改名を考えている尋でございます。

再度ご来場下さった貴方、またお目にかかれて光栄です。

初めてお越し下さった貴方、こんな場所ですがよろしければ足を休めて行って下さい。

観光旅行三日目はナカバとデュランと……のターンです。

何処に何が潜んでいるのか、どうぞ気を緩めず、心を許さず……」
そんなのしんどい」って方は適当に。

ナカバ達の旅行にお付き合ってください。

作者拜

桜花探花とオレ（前書き）

食べられます、食べられません。

桜花探花とオレ

「あれが更紗空木、食用では無い」

ほむほむ。

「その隣が梅花空木、これも食用では無い」

なるほど。

「夏椿、食用では無い」

ふむ。

「マルス……別名クラブアップル、一応実が食べられる」

ほほう。

「クレマチス、食用では無い。それからクリスマスローズ……これは食べてはいけない」

デュランがゆっくりした速度でオレの隣を歩きながら、オレが視線を向けた植物を一つ一つ説明してくれる。

「じゃあ、あっちの金色シャワーみたいなのは？」

「あれはエニシダだな、食用では無い」

「あそこの赤い葉っぱの奴はモミジ？」

「あれはサトウカエデだ。あの木の樹液がメープルシロップの原料だ」

「そつちの卵そぼろみたいな奴は？」
「アカシアだな。食べられるぞ」

うーん、なかなか桜が見つからない。

一応携帯で検索して画像は取り込んでるんだけど……お？

「あ、あれ桜だろ！」

「あれは花桃だ。一応食べられる」

「じゃああれが桜？」

「それは木瓜だ」

「いや、ボケても突っ込んでみてもねえし」

「違う。木瓜という品種だ……実で酒が作れる」

「じゃあ、あつちが桜だ」

「あれは蠟梅だな……食べられなくもない」

「じゃあ、あれが桜？」

「あれはアーモンドだな。食べられるぞ」

「……」

「いつそすがすがしいまでに見事なハズレっぷりだな」

「桜はどこじゃー！！」

ぎゃーすと叫んだオレの隣でデュランがクスクスと笑う。

うん、てことで現在、『双子の庭園：黒』の中に居ます。まだ内苑じゃなくて緩衝地帯な。

何でオレが桜を探してるのかっつーと、さっきデュランが「ミレイの庭への目印は桜だ」とのたまったせいだ。

桜がどう目印になるのか分からんけど、しかしオレのミレイマニア魂なめんな！ 必ず見つけてミレイの庭に行くぞ。おー！

……って思ってるのに、何この桜もどきの数。くそう。

いや、言い訳っぽいけどしょうがねえんだよ。だって、ここすっ

げえ植物の種類多いんだもん。

入ってびっくりしたね。

季節外れの花なんか平気で咲いてるんだもん。

デュラン曰くここは実は元は果樹試験場で、植物の状態を好きなところで止めたり、繰り返したり出来るんだそう。へー。ちなみに今はここは果樹試験とかじゃなくて、時計塔から出られない双子様の心を慰める為の大きな花瓶になってるらしい。ふーん。

こんなに沢山必要なのか、と思うのは貧乏人のひがみだろうか？

「てか広いなー」

「外苑に比べれば当然狭いのだがな」

「何でこんな緩衝地帯みたいのがあるんだ？」

「まあ一応外敵が直ぐに時計塔に入らないように一種の迷路になっているということだ。ここから内苑に入ってしまったら時計塔まですぐだからな」

「ほほう？」

「逆に言えば、正しい目印をたどらなければ内苑に……ひいては時計塔へは辿りつけない。お陰で、新人の中央十騎士などは迷子になる者も偶に居てな。ふふ」

クスクスと笑うデュランの目が一瞬悪戯な色を浮かべてファリドさんを見た気がするけど……うん、あの人の名誉の為に気付かなかつたふりをしておこう。

「そんなに分かりにくいと大変じゃね？」

「まあ、あまり簡単に分かるようでは防衛の意味が無いからな。だが、注意して見て居れば色々なヒントがあるのだぞ。例えばあそこ
の……」

「……デュラン様、そんな気楽に機密をばらさないで下さい」

さすがにファリドさんに止められました。

ちなみにファリドさんのこと、オレはちょっと知ってるのですよ。中央十騎士第四位、ファリド。

式典で双神子様の代わりに出席するのがこのファリドさんと、第三位のアルアーレフさん。

ちなみに四位ってのは中央十騎士の中で四番目に偉い人ってことだ。

でも、そのお偉いさんは今、デュラン（とオレ）が案内無視してガンガン先に進んでる（そして多分正規ルートも外れてる）せいで後ろを着いて来るので精いっぱいって言うか……思いつき振り回されています。

さすが魔王。中央十騎士も翻弄しますか。って違うか。

「お願いですから、勝手に行かないで下さいデュラン様」

「何だ……この前はお前が勝手に行って迷子になっていたのを探してやっただろう？」

「デュラン様……」

苦りきった顔をするファリドのおっちゃん。困った顔がちょっとチャーミングだ。

オレの父親よりちょっと若いくらいかな。

五十……はいつてるよな気がする。いや、おっちゃんの年齢って正直良く分からんけど。

「しかし、ついこの前まであんなに小さかったのに……大分背が伸びたな」

「今はもう縮んでおります……本当に、貴方はあのデュラン様なのですか？」

「ふふ、さてどうかな？」

意地悪く笑うデュラン。ああ、何か生き生きしてるなあ。

どうもデュランはこの手の真面目な人をからかって遊びたがる悪癖があるらしい。

え？ オレ？ オレは真面目な人を弄んだりしてませんよ？

「てか、どう言う関係？」

「ああ、前にここに来た時の案内役だ。どれくらい前だったかな…
…まあ、とにかく最近だ」

「最近など…… もう百数十年ほど前です」

ばあさん飯はまだかいの？

いやですなえ、おじいさん。さっき食べたじゃありませんか。

そんな光景が頭をよぎった。

ん？

今、百数十年つったか？

「あの…… ファリドさん？ で良いんですかね」

「構いません。何か？」

「失礼ですけどおいくつなんですか？ うちのじいちゃんより若く見えますけど……」

「今年でもう百八十になります」

「はあっ？」

いや。いやいやいやいやいや、年上に失礼だと思っただけど…… いやいや、それは無いでしょ。

幾ら医療が発達した今でもそんなご長寿は居ないですよ。

「二十三歳で今の位置を賜る名誉に浴し、以来ただ人よりも年を取

るのが遅くなりましたよな」

「人間じゃないの？」

「人間だ。ただし階位が違う」

デュランには聞いてません。

しかし、実は百八十歳とか……超若作りだな、ファリドじいちゃん。

ところで階位って何？

「階級のことだ」

「……バカニシテルンデスカキサマ。てかデュランに聞いてないし」

オレは期待の目をファリドさんに向ける。

「そう怒らないで下さい。デュラン様も、程々に」

「まあ考えておこう」

……いや、期待の眼差しのもりだったんだけど。

怒ってないですよ？

この目付の悪さはただの地です。

そしてデュラン、お前程々にする気無いだろ。

「それよりファリド、お前のような堅物がペア抜きで迎えに来るとは随分変わったな……あまり感心しないぞ」

「ああ、ええ……本来はもう一人来る予定だったのですが」

曖昧に言葉を濁すファリドさん。それにデュランが微かに顔を曇らせる。

「また発作を起こしたか」

「いえ、黒の君は健やかに過ごして。貴方にお会いすることを心待ちにされている様子で……しかし、まさかデュラン様ご自身が来るとは思っておりませんでしたな」

普通百年以上経ってたら相手は死んでるか、そうでなくてもんでもないじいちゃんになってるだろうしな。

しかし、その割にはあっさり（多分）当時のままの姿で現れたデュランへの反応が薄いような？

……自分も年とるのが遅くなってるからあんまり気にならなかったのかね。

と、ふとオレはデュランが明後日の方向を見ているのに気づいた。何見てるんだ？

同じ方向を振り返ってみただけど空があるだけで何も見えない。

もっかいデュランの顔を見る。

いや、うん、普段と同じように微笑スマイルなんだけど……サングラス越しの目の温度が違う。

「デュラン……？」

「ふ」

小さく息を吐き出すようにデュランが笑った。

魔王スマイル。

「デュラン様？」

「放蕩息子が帰って来たらしい……このタイミングで入ってくるとは、どうやら相当俺にご執心らしいな」

「ほーとーむすこ？」

何か美味しそうだな、ほうとう息子。

「それは鍋料理だ」

「鍋うまいよ、鍋」

「分かった分かった、後で何か食べるものを買ってやるっ」

オレ、そんな胃袋キャラだと思われてるんだろうか。

敢えて言おう。誤解であると。

「デュラン様、一体」

「この結界に少し端子を忍ばせておいた。問題なく通過したとなるとまず間違いなく……」

「……あの方が？」

そこ、二人だけで分かる会話とか始めないでくれないかなあ。

疎外感バリバリだな。

慣れてるから良いけど……お、あれ桜じゃね？ ほら、名前に「

サクラソウ」って書いてある。

……やっぱ違うかな。

とか考えてたら、デュランがひょいとオレの首根っこを掴んでフアリドさんの方に突き出した。

「フアリド、これを預かっていてくれ」

オレはお前のペットですかこら。

フアリドさんがむっちゃ困った顔でオレを受け止めるべきかどうか迷ってるぽかったので、全身で「不要です」と主張オーラを放っておいた。

誰も彼もポンポン気安くオレを扱って良いと思ってんなら大間違いだからな。

オレに触ってオツケーなのは女の子と職業上必要な人だけです。五歳児魔王様はもう何言っても無駄だろうから放置してるけどさ。いや高くて楽しいとか思ってたませんからホント。って急に持ち方変えるな！

「お前も聞いていたな？」

高い高い、とばかりに、服の肩を掴んでオレを持ちあげた状態でデュランが聞いて来る。

あのさー、百八十歳の若作りじいちゃんと、それからさらに数千歳上の生きた化石のお前からすりゃ確かにオレは若いよ？ 若いけど……赤ん坊じゃないからね？

「聞いてたけどさ。先にオレに言えよ。で？ お前何処行くんだよ」

「少し探し物を、な」

「場所分かってんのか？」

「いや」

分からないのか。役たたねえなあ。

「生憎探査をかけることも今は出来ないしな……まあ、こここの出入りだけは分かるからな」

随分大雑把だなあ、と思ったのが顔に出たのかデュランは苦笑して……で、オレを下ろす。

「ファリドをつけておく。案内して貰え……それと、けっして、誰にも　　るなよ」

「へ？」

いや、最後の条件の意味が良く分からないんですけど。えーと、とりあえず言わなきゃ良いんだな。

分かった、とオレが頷くとデュランはちょっと笑ってファリドさんの方を向く。

「ファリド、黒の君の客人の名に置いて十騎士に命じる。これに近づかず、遠ざからず、守り、案内せよ。それ以上もそれ以下も許さない」

デュランの言葉にオレは横暴だな、と思ったけど敢えてつっこまなかった。

……てかデュラン、どこまで分かってやってるんだろう。

「良いな？」

誰が逆らせるんだ？　みたいな心蕩かすような微笑を浮かべたデュランに、ファリドさんが冷や汗流しながら頷いていた。

うん、ごめんねファリドじいちゃん。

桜花探花とオレ（後書き）

【作者後記】

フアリド氏に若作りとかナカバは言ってますが、もっと若作りな奴が傍に居ますからね？

そして説明にいちいち食用の有無をつけるデュラン……まあどういふつもりなのかはご想像にお任せします。

さて、今晚は皆様。

初めての方もそうでないかたも、何でここに居るのか思い出せない方もようこそいらっしやいました。

ご来訪に感謝を。

短くさつくり読み終わるように心掛けてたのに最近文字数が多くないがちで、ちと反省してます。

もう少し短くしたいのですが、デュランとナカバが喋り出すと伸びる伸びる……あの不自由人達どうしてくれよう。

それはさておき、デュランとナカバ暫く会いません。

それでも良いや、と言う方はまた次の回でお会いしましょう。

暑い日が続きますが、どうぞ皆様お体に気を付けて。

作者拜。

新旧対立とオレ（前書き）

新と旧と、どちらが正しいとか良いって問題では無いんですけどね。

新旧対立とオレ

「……」
「……」
「……」
「……」

会話がありません。

黙々と進むファリドさんの後ろに三尺下がって影を踏まずにくっついてってます。

や、一応ファリドさんも時々振り返ってオレが遅れてると立ち止まって待ってくれるますよ？

でも、それ以上に向こうから近寄ってくることもない。
嫌われてるとかじゃなくて、単純にデュランが釘刺してたせいなんだろうし、実際あまり近寄られても困るんでそれは助かるんだけどさ、これじゃなんか案内っていうより先導してるって感じだな。

肝心のミレイ庭園の目印になる桜も、さっきから探してるんだけど何処に在るか分からんし、色々咲いてる植物の名前とか由来もさっぱりだ。

ただ「あ、綺麗だなー」で通り過ぎるだけ。
別に普段ならそう言う感じでも良いんだけど、さっきのデュランのガイドを受けた後だと、ちよいと味気ない。

それと、ファリドさんが先導してくれるのはありがたいんだけど歩くの速すぎる。

何？ さっき置いてったことの意趣返しですか？

呼びとめようにもずんずん進んでくからタイミングがつかめない。しょうがないから、ファリドさんが立ち止まって振り返った時を

見計らって、オレも足を止めた。

「如何されましたかな」

「あー、えーっと……ちょっと体力切れっつーかですね」

てか百八十歳なのにきびきび動き過ぎですよファリドさん。

オレはちよっと膝に手を着いて息を整える。

はー、しんど。

ぜーぜー言ってるオレにファリドさんはやっと気付いたようで「すみません」と眉尻を下げた。

うん、もう少し早く気付いて欲しかったですよ。

デュランの察しの良さはちよいと異常だからあそこまでなれとは言わんけど、もうちよっと早く気付いて欲しいぜひゅー。

「あー、座って良いですかね」

「良いですよ。では今椅子を」

「いやいやいやいや、良いでしゅから……」

や、今の葉別に赤ちゃん系にキャラがえしたんじゃなくってですね。

息が切れてもう舌が回らないと言っか……良いや、もう座っちゃえ。

オレは肩で息をしながらぺたーっと地面に座る。

ジベタリアンばんざい。

はー、ケツ冷てえ……気持ち良い。

「大丈夫ですか？」

「あー、まあ……魔法とか良いんでほっといて下さいね」

一応先に言つといたら、何故かファリドさんは苦笑した。
うーん、苦笑いまでダンディだな。ヴィーたん好みだ。

「大丈夫です。頼まれても出来ませんから」

「それってどう言つ」

「十騎士が一般人の為に力を使うわけないでしょ、馬鹿じゃないの」

今馬鹿つったの誰だ。前に出やがれ。

とか心の中でこつそり言つてたら本当に出てきた。

うわ、すつげー生意気そうだなガキ。おまけに目付悪いし、感じ悪いし……あれ、お前もしかしてオレじゃね？

や、冗談ですけどね。

「ボルナー……今まで何をしていたのだ」

「仕事してたに決まつてるでしょ。おっさんこそ仕事ちゃんとしなよ。遊んでないでさ」

名称不明のガキの言葉にファリドさんの眉間にしわが寄る。

怒った顔もダンディですなファリドさん。

「遊び歩いているのはお前の方ではないか。いつも勝手に出歩きおつて。全く最近の若いもんは」

「あーあ、また始まった。老人の僻^{ひが}みつて嫌だね」

「ひよつこが何を言つか」

……えーつと。

もしかしなくてもこれは仲悪いってことですかね。

まあ同じ職場だからって皆が仲良しってありえねえよなあ。しか
し、ここまで堂々と部外者のオレの前でここまで堂々と不仲見せつ

けて良いんだらうか？

さすがにまずいんじゃないか？

そう思って、オレはとりあえず「よっこいせ」と呟いて立ちあがった。

それにフアリドさんがはっとしたようにオレの方を見る。うん、今まで完璧に存在忘れられてたな。

「あ、これは……お見苦しいところを」

「何、まだ居たんだ」

「休憩とっていたいただいてありがとうございます。もう歩けますから」

二人目の発言をスルーして、ついでにさっくり今までの流れもスルーして、オレはフアリドさんにお礼だけを述べておく。

むしろ二人目あうとおぶがんちゅー。誰が好き好んで美形男なんか見るもんか。

「おいチビ」

……。

「何ですかガキ」

ギン、と睨んだら敵意満々に睨み返された。

なにおう、ガンつけるとは……負けるか！ とさらに睨み返したら何故か不貞腐れた。

良く分かんけど勝った気がする。

「ボルナー！ ただ人相手に殺気を振りまく奴がいるか！」

「だってこいつ生意気だ」

「そんな理由で」
「あーのー」

手を上げたら両方から不可解な物を見るような目で見られました。いや、オレの方がむしろお前らのことが分からんよ。これが階級の差ですか？

ま、今はそのことは後回しで良いんだ。後でデュランに聞けば良いし。

それより今は別の件が控えてるし。

「殺気とか良く分かるので正直どうでも良いです。十騎士の品性とかもどうでも良いです、てか興味ないんです。そもそも十騎士とが良く知りませんし、知りたいとも思いませんし。なんで、とりあえず案内続けて貰って良いですか？」

今度は珍獣を見る目で見られた。

何？ 何か文句でもあるんですか？ ごく普通のことしか言ってますせんよ？

てか、オレの言ってることは形式上は確認でも、はっきり言えば「さっさと仕事しろ」ってことですから。

内輪もめならオレが居なくなっただけからやってくれ。

そういうオレの思いが通じたのか通じなかったのか、とりあえず中央十騎士二人（だよな？ もう一人が正体不明だけど）による先導が再開しました。

しかし、後ろから見てても分かるこの不仲っぷり。
どうにかならんのかね？

上司らしい黒の君（オレの予想が正しければ「あの方」なんだけ

ど、ども、どういづつもりでこの二人をデュランへのお使いにしたんだか分からんな。

もしかして嫌われてるのか？ デュラン。

「ところで」

うわ、びっくりした！

いきなり話しかけてきたファリドさんから全速離脱して距離を取ったら、ファリドさんの眉がまた下がった。

いや、うん……びっくりしたからですよ。本当にそれだけです。

「近寄るな、でしたな。失礼」

「あー……いえ、びっくりしただけです。それで何ですか？」

さっきまで黙りっぱだったのに、今更何を話しかけて来るのか。さっきの内輪もめの詫びか？

そう考えてたら、ファリドさんは少し迷ってからダンディな笑みを浮かべてこう聞いてきた。

「デュラン様とのお付き合いはもう長いのですか？」

あー、そうきますか。

オレは置いて行かれないようにせかせかと足を動かしながらそう思う。

ふーん、そーすかそーすかそーですか……や、まあ良いですけど。ただ思惑にのるもの微妙にイヤだったんで、オレはとりあえず「長いんですかね？」とすつとぼけてみる。

「ファリドさんは昔からのお知り合いなんですよね？」

そして間を空けずに質問返し。

「それなりですよ」

「そうですか。凄いですね」

間髪いれずにヨイシヨいしておく。

何が凄いかとかつつこんじゃいけない。オレも分かってないから。

するとファリドさんは分かり易く照れた。

……。

あんの男誑たらしめ。本当に見境ねえな。死ねばいいのに。

「黒の君がデュラン様をことのほか気に入っておられるのです」

「ほうほう」

「今まではその見目麗しさを愛でてらっしゃるのかと思っておりましたが……今日納得しました」

「納得って、何がですか？」

「あの方も特別な選ばれた存在だったということです。もっと早く、百年前のあの時に気付いていれば色々違ったのだらうと思うと、今まで惜しいことをしてましたな……」

何やら熱っぽい表情で熱く語るファリドさん。

ふーん。何がどう惜しかったのやら。

まあデュランはあれで結構お人良しと言うか、側近さんいわく「人間鼻眞」の魔王様だからファリドさんが何しても笑って流すんだらうけどさ。

嬉々として何か喋っているファリドさんに適当に相槌を打ちながらオレはそろっと視線を脇に逃す。

しかし、今までは「顔が良いからって上手く取りいつてた奴」だ

と思われてたと知ったらデュランはどんな顔するんだろ？

やっぱり嫌そうに「誰の顔が良いだと？ 冗談も大概にして欲しいものだな」とか言うんだらうか。

その様子がリアルに思い浮かんで、オレはこっそり笑いかみ殺した。

何だか急に、早くデュランの顔を見たくなってきた。

新旧対立とオレ（後書き）

【作者後記】

せっかく登場したのに影が薄いボルナー君。

まあ、ちゃんと見せ場は作るつもりです。後二人程登場人物を増やしたら、多分それ以上は増やしません。

と、予告したところで今晚は、尋でございます。

いつもの方もそうでない方もようこそいらつしゃいました。

感謝、感激、雨あられ雷にはこの時期注意しましょう。

（と、知り合いに送ったら「やかましい」と返信されました。そんなつれないトコロもグッドだ我が友よ）

30度を超える真夏日でも世間様は節電とやらでなかなか涼しくありませんが、どうかお体気を付けてお過ごしくださいね。

さて、せっかく二人きりデートのハズがさくつと別れたナカバとデコラン。

まだしばらく別行動ですが宜しければお付き合いくださいませ。

作者拝

迷走抵抗とオレ

何かさっきここ通らなかつただろうか。

オレは何やらまだ語ってるファリドさんの後ろについて行きながらふと思う。

記憶力に自信が無いので断言出来ないが、あの辺の卵そぼろには見覚えがある気がするし……あつちにはシロツプの元が居る。

うーん？

やっぱり見覚えある気がするんだけどなあ……。

いや、ここ一応侵入を防ぐための迷路らしいから、わざと似たような景色が繰り返し返されてるのかもしれないけどさ。

オレの記憶力って基本当てにならないっつー悲しい現実もあるしなあ。

あ、あれ食っちゃいけない奴だ。

……そう言えば今更だが、何故オレへの説明にあ奴はいちいち食える食えないとか付けてたんだらう。

いや、道草はくつても道の草は食いませんよ？

山羊じゃねえし。

……や、山羊は草じゃなくて紙食つんだっけ？

ちなみにパンダは笹だけじゃなくて肉も食えるとか食えないとか流石シロクロの熊。

怖いよパンダ。

じゃ、な、く、て。

いや、本当にこの調子でオレ、ミレイの庭に行けるのかなあ……。

ものすごく先行き不安なんですけど。

案内がこの二人つてのもなあ……普通中央十騎士とか偉い人の案内とかって恐縮しても不安は感じ無くね？

人類の味方のはずの中央十騎士の案内より、人類の敵こと魔王様の案内の方が安心感あるってこの状況。

結構問題あると思うんですけどね。

てかさあ、ぶっちゃけこいつらオレを案内する気ねえんじゃない？
喧嘩の方が興味あるっぽいしさあ。

もうそういう話なら、道教えて貰ってオレだけ先に行くとかアリじゃないですか？ アリですよ？

そうですね、ナシですか。

くそう、何だこのストレスフルでワンダフルな状況。

いやいや、めげるなオレ。

そんな事じゃミレイ好きを名乗れないぞ。ねばれオレ、頑張れオレ。とりあえず突破口を探せ。

ってことでまずファリドさんに聞こうかとも思ったけど、これは無駄っぽいから却下。

そうすると、質問候補は一応もう一人の方が……。

オレはさつきから嫌そうにファリドさんから顔を背けてるイケメン（呪われる）を見る。

うーん、こいつもわりとビミョーなラインだけど、ファリドじいちゃんよりマシかなあ？

にしても、こっちは随分若く見える。

オレらと同じぐらいかな？

いや、ファリドさんの百八十歳の例もあるから実際何歳かは分からないけどさ。

後はあれだ、天使のような美少年って奴。

デュランには負けるけどサラツヤの金茶の、細いふわふわした髪の毛。緑と青の混ざった大きな目は例によって無駄まつげが長い。

んで、垂れ目。

すらつと細い優男風と見せかけて、実は細マッチョ的な？

全体的に少女マンガチックな王子様、ただしちよつとひねくれ少年成分入りって感じ。

はい、美形ライン、スリーアウトー！ 誰か交代してー！

……ふっ、空しい。

まあ現実逃避するのは後にして、良く考えるとどこぞの見境なしにフェロモンまき散らしてる魔王様に比べればまだ人間としてマトモなレベルだ。

そう思えばちよつとはあの無駄に長い足に後ろから膝カツクンがましい衝動を我慢できる気がする。

睫毛の長さだけはタメ張りそうだけどな。

お前ら揃いも揃ってそんなに睫毛の長さ大事か？

ラクダですか？

睫毛なんて、目にゴミはいらねえ長さあれば充分だろ訳分からん。いつそ切るか。

ラジオペンチで。

そんな呪詛（あれ？ 元々何しようとしてたんだっけ？）を心の中で呟いてたら、心底面倒くさそうな顔で若い方（ボーなんとか）がこつちを振り返った。

そこで、先程から何やら一人で盛り上がってるファリドさんに「おい、おっさん」とぶつきらばうに声をかける。

「あなたさあ、そんなにその何？ デュランだっけ？ に会いたいならそつち行けよ」

「……何だ急に。どういうつもりだ」

「どーゆーつもりかは俺が聞きたいね。案内の癖に何で一匹しかいねえんだよ、つてな」

「デュラン様なら問題ない」

「俺はさあ、お前に問題があるつつてんだよ、おつ、さん」

見た目は天使や王子様でも、中身はこんなもんらしい。

棘のある、攻撃的なボーイソプラノにオレはちよつと距離を取る。うん、こつ言つのが苦手ですから。近寄らずですよ。

「片方野放しにして、それでよく仕事しろとか他人に言えるよな、もうボケてんのかよ？ え？」

「配慮の足りぬ若造に言われたくないですね」

……。

ちっ。

後でデュラン呪う。絞める。でもって何か恥かかせる。嫌がらせしてやる。呪われる、くたばれ美形。

心の中で十回ほど呪いの言葉を繰り返してからオレは「あ 空気読めないお子様ですよ」って顔を作って切り出す。

「じゃあ、ファリドさんお迎えに行つて来て下さい。オレもデュラン一人だと心配ですし、そちらの人も心配みたいですから」

あえて心配の意味を履き違えて、オレは何も気づいてませんよという顔で二人を見る。

悲しいけど馬鹿な子供の役は得意だ。

オレ賢くないから、殆ど地で行けるのさ……ふっ、空しい自慢だ。

「デュランも、お友達のファリドさんが迎えに来てくれた方が喜びそうですし」

あの魔王が「デュラン お友達」とかそんなタマじゃねえのは分かってるけどね。

てか、二人いるうちのファリドさんを差し向けるのは本当は得策じゃねえんだけどな……ファリドさんは一応オレへの保険としてデュランが置き土産してった人だし。

ただ、この場合動かしやすいのがファリドさんだっただけだ。どうしようもない事実だ。

実際、オレが分かり易く投げかけた餌、『お友達』って言葉にパアッって顔が明るくなってるし。

うん、ここまで効果抜群だと軽く退くな……。

「しかし、デュラン様からは案内をと……」

あ、一応その辺の自覚はまだ残っていたのか。消し飛んでるのかと思ってたけど。

オレは考え事するようなふりをして、顔を俯ける。

こう言う時にオレの目付の悪さがあだになるのはよく知ってますから……べ、別に傷ついてなんかいないんだからねっ！

……よし、今日のツンデレノルマ終了。

「案内ならもう一人の方が来て下さったみたいですし……デュランが心配ですし……」

ざ、曖昧な語尾。

空気を読まず、肝心なところはぼかす。見事に弱者の戦法だというのは分かっている。

けど、オレは魔王^{デュラン}じゃない。

その反対側。十四歳の、何もかもが中途半端な小僧でしかない。弱いなら弱いなりの戦い方を身につけるしかない。

とりあえず今拙いなりに使えるスキルをフル活用して、オレは後は反応を待つ。

かかれ。

かかれ。

ひっかかれ。

「まあ、それならば仕方ない」

かかった。

オレは安堵を見せないように注意しながら、「ありがとうござい
ます」と頭を下げる。

腰を低くするのもそうだけど、声や表情をコントロールする自信
が無いからだ。

その姿勢のまま言う。

「デュランを宜しく願います」

むしろデュラン、こいつよろしく。

お前こういう手合い慣れてるだろ？

心の中でそつと奴にハナムケの言葉を送っておく。大丈夫、草葉
の陰から見送ってやるからな。

スキップでもしそうな勢いでそそくさと離れてゆくファリドさん
を、オレは笑顔で見送った。

やー、すつきりした。

「お前、腹黒いな」

何か失礼なことを言われた。

迷走抵抗とオレ（後書き）

【作者後記】

ナカバは自分は腹黒くないと思ってます。
賛成するかどうかはお任せします。

さて、今晚は尋でございます。
いつもお世話になっております。今後ともよろしくお願いいたします。

身の危険より精神的疲労の軽減をとったナカバですが、この選択が
吉と出るか凶と出るか。

……どっちに出てもさらっとスルーされそうな気もしますな。

さて、別行動のデュランはもう少し放置したまままだ続きます。
この一日が一番長くなりますので、気長にお付き合い頂ければ幸いです。

作者拝

馬耳東風とオレ

そもそも腹黒いとは何か。

説明しよう。デュランだ、以上。

……や、ちよつと違うかな。アイツあれで意外と純情なところありそうだもんな。

どっちかっていうと意外とあのワンコ執事の方が腹黒かったりするんじゃないだろうか？

見た目爽やか系で腹グロで執事とか、テンプレ満載のベタな感じが逆に新鮮で受けるんじゃないかと思うんだけど。

「おい、現実逃避してんじゃねえよ」

チツ。

「今舌打ちしなかったか？」

「いえ、別に……」

まあ、ちよつと不本意な称号をもらったので軽く現実逃避してました。

てか、オレが腹黒かったら世の中の人の半分以上が爪先まで真っ黒だと思っんですけどどうでしょう。

や、純情というつもりもないですけどね。

「ただちよつと、純心な子供を捕まえて酷い汚名を着せるとか人間的に終わってるなとか、そんな人に支えられなきゃならない先行きのどす黒い鉛色の未来に思いをはせてただけです」

「……腹黒いってのは撤回してやるよ。お前ただ性格が悪いんだな」
「そうでしょうか」

「はっ、ま、どーでもいいけどさあ」

お前のことがオレはどうでも良いですけどね。

オレはちよっとずつ距離を取りなが……って何か近寄って来たあ
っ！

「何で逃げるんだよ」

「はあ、美形って嫌いなんです。きらきらしてて」

「……何だそれ」

いや、そういう疑問を浮かべながら近寄らないで下さいってば。

しょうがないんで花壇の中へ乗りこんで逃げようとして見せたら、
やっとこさで向こうが止まった。

意外と有効だな、花質。

「踏むな。踏んだら殺す」

諸刃の剣だった。

いや、でも踏みこまなくても殺すとか言わないし、予告してる辺り
はまだマシなのかもしれないって何だこの水準低すぎる話。

てか日常のいたる所にデッドオアアライブが無造作に転がりすぎ
だって話でして。

何だろっ……こんなモブに生死をかけたイベントとか大盤振る舞
いしなくてもいいと思うんだ。

そう言うのはデユランに回して下さい。

「ま、でもあのうっとうしいクソじじいを追っ払ったのは評価して
やるけどよ」

「本気で仲悪いな貴様ら……」

「べっつにー」

「天使もどきの見た目」「プラス「チンピラ臭のする仕草」でボー何とかが言う。

まあ、どっかの女神もどきの見た目に無駄色気満載の仕草の人よりマシだと思って我慢しよう。

「ただ、あっちが一方的に俺のこと嫌いなんだよ。あのクソ爺の唯一のお株を俺が奪ったからなひがんでんだろ。ったく、うざいジジイ早く死ねっての」

「はあ……」

「聞いてる？」

聞いてますけどさっぱり分かりません。

そう言う顔を見ると、ボーなんかは呆れたのか青い垂れ目をぱちぱちさせた。

それは自分の目が大きいという自慢ですか、絞めて良いですか？
や、無理だけど。

「いや、言ったと思いますけど偉い人に興味無いんで言われてもさっぱりピンと来ませんから」

「はあ？ あんた馬鹿じゃないの？」

「馬鹿ですけど何か」

「……一般人はこれだから嫌なんだ。開き直れば済むと思っているし」

いや、オレを一般人の基準に当てはめるのはどうかと……民間人としてもイレギュラーですし。

まあそこはフォローしても無駄だろうからオレはつつましく沈黙を守る。

オレって控え目な性格だからな。

「あの爺、言って無かったか？ 最年少がどうだとか」

「最年少……」

どうだっけか……うーん……。

「いや、聞きながしてたんでさっぱり記憶にないです」

正直にそう答えたら、ボーなんかは垂れ目を大きく見開いて、次の瞬間笑いだした。

「お前、さっきの全部聞きながしてたのか！ あっはは！ 傑作だな！ ええ、おい。第四位も舐められたもんじゃねえか、ざまあみやがれ！」

うん、発言がとっても残念ですね。
で、

「あのクソ爺の言葉、聞き流してたのか」

「はあ、さっきそう言った気がしますけど……」

「ふーん、お前クソ度胸あるじゃねえか」

「や、別にそう言う訳じゃあ……」

「じゃあどう言う訳だよ」

何か絡んでこられたんですけどー。うっとうしいんですけどー。
てかまた距離詰めてきてるし！

「待て」

「待ってって、言われて止まると思うっ？」

うわ……あの手の顔に見覚えがある。いじめっ子の顔だ。
人が嫌がるところを見て、きらきら輝くタイプの人種、こうです
ね、分かりません。
オレはわざわざ喜ばせる義理もないので、表情を消して傍の花壇
をビシッと指す。

「それ以上近寄ったらそここの花壇に全身ダイブした上に、芝生ごろ
ごろを再現してやる」

「……」

よし、やっと止まった。

「で？」

「へ？」

「どう言う訳だよ。聞きながしてた理由」

「こだわるなあ……」。

どうでも良いじゃんと思いつつ、オレは取り合えず正直に話す。

「あの人、オレが聞く事なんて最初から期待しちやなかったでしょ
うから。無駄な労力を省いただけです」

「……。へえ」

何かニヤアって感じの嫌な笑い方された。

「どうしてそう思わけ？」

「や、みてれば分かりますから」

あのすがすがしいまでの権力志向というか、特権階級っぷり。分らない方がどうかしてねえ？

デュランに対する態度も思いつきりそれだ。

「彼も特別な選ばれた存在だ」とか、「特別だと知ってたらもつと対応違つたのに」「今まで惜しいことをしていた」的な発言とか。

はいはい、つまり自分も特別な選ばれただと思ってるんですね。

はいはい、つまり今まで特別じゃないと思ってたデュランはスル―してたんですね。

特別と分かつたら態度がガラツと変わるんですね。

ま、中央十騎士なんていう特殊な立場を目指して成功した人だし、そういう権力志向が無いはずがないだけさ。

そういう人間が一般人の取るに足らない小僧のオレに期待することなんて何かあるか？

せいぜいカベに話すよりちとマシかな、程度の期待しかしてないだろう。

そんな相手の話を真摯に聞いてやれるほどオレ人間出来てねえし。

つまり壁に徹してました、まる。

終わり。

というようなことを穩便に、かいつまんで話すと何故かまた大笑いされました。

えー？

「お前、結構イイ性格してるな」

誉められた気がしません。

いや、まあ別にあの人カチンとはくるけどダンディなのは認めますよ。

基本的には年上は年上ってだけで敬意を払う理由になるし。ただ年上だって以外の部分に敬意を払う要素が皆無な相手が居るだけで

そんなことをうただうだ考えてたら、「おいガキ」とボーイソプラ
ノの柄の悪い声がかかった。

「良いぜ、案内してやるから感謝しな」

いや、あんたらそれが仕事のはずだからね？

馬耳東風とオレ（後書き）

【作者後記】

何であとがきを書くんでしょう。

多分そこに書き込み欄があるからですね。山に登るのといっしょです。

などと絶対間違っていることをふと考えてましたが、今晚は尋でございます。

いつもお世話になっております或いは初めまして。

暑いですねえ。

本当に暑いですねえ。

いやまったくもって暑いですねえ。

他に言う事が思いつかないぐらいに暑いですねえ……。

何がしたいんだか段々分からなくなってきますね……いや、もう筋道は随分前に決まっているので大丈夫です。多分。

さて、回り道が長くなるのもあまり宜しくないでしょうから次の次辺りで少し動きをつけます。

宜しければまたお越しくださいます。

作者拝

猫耳論争とオレ

「とつとと歩け、お前遅くて邪魔」
「……」

いつか殺そうと思います。

ということでも休みなく歩き続けてていやもう、何この徒競走。五十走るだけでも息切れするオレにどんな試練ですか。

でも今喋ると体力の時間切れが早まるので何も言えません。

おのれ、デュランの呪いか。

取り合えず都合悪いことは全部デュランのせいにながら、オレは何とかポーなんとかにくつついてく。

てかマジで名前なんだっけ？

ポー……、ポー……ボボ　ポーボポーボじゃないのは確かなんだけど。

や、もうお前「ボ」で良いよ。今度からボ、な。

「あの、ボさん」

あ、やっと止まった。

「……何だそのつるっばげ系の呼び方」

「ポーさん？」

「もっとダメだろ！　てか俺の名前覚えてんのか！」

「いいえ、さっぱり」

「……ボルナー」

「ナーさん」

「……」

「息切れしてるんで無理です」

「そんな流暢に喋る息切れがあつて堪るか……チツ、妙なガキだな」

「ところでボーさん」

「……」

「おボーさん？」

「……」

うん、やりすぎたか。

「じゃあナーさん」

「何で知らないガキに愛称つけられなきゃなんないんだ」

「いや興味無い人の名前つて覚えにくかったりしませんか？」

「……じゃあお前はガキで充分だな」

「はい充分ですよ」

笑顔で返してやったら渋い顔をされた。

まあ発言内容なのか、オレの笑顔に見えない笑顔のせいかどっちなのかは分らんけど。

「お前さあ、何サマ？」

「一般人のお客様です」

「……。中央十騎士の意味分かつてる？」

「取り合えず何か偉い人らしいけど自分には関係ないねプツ、つてどこでしょうか」

「このガキ……」

「はい」

「は？」

「だって今名前呼んだでしょう？」

「……もう良い」

チツとか舌打ちして、そっぽを向くナーさん。
ナー、って言うとか何か可愛いよね。猫の鳴き声みたいでさ。

「ニヤーさん」

「はあっ？」

「いえ、ナーさんでした。語尾にニヤーって付けると萌えそうだなとかちよっと思っただけです」

「お前があ？ やめろよ気持ち悪いな」

「いえ、ナーさんが」

「もつと止める！」

「ええ？ 絶対に合うのに勿体ないですね。あ、猫耳は要らないです」

「付けるかあっ！」

「ですよねえ。あれ付ける位置で二大派閥に分かれてる危険な代物ですし。ちなみにオレは耳の位置派です」

「……」

信じられない物を見るような目で見られた。

「あれ？ 頭派だったんですかニヤー……ナーさん。でもあの耳が四つの絵ってどうかと思うんですけど。耳が四つですよ？ 鼻が二つ顔についてたら不気味ですよ？ 頭に二つ、顔の脇に二つで耳が四つなんですよ？」

「勘弁してくれよ、何でオレがこんなとんでもないガキの案内しなきゃなんねえんだよお……」

泣きが入って来たので勘弁してやることにした。

ふっ、この程度で音を上げるとは軟弱者め。修行が足りん。

デュランが聞いていたら「何の修行だ」とか突っ込みそうなことを考えつつ、オレはよたよたとナーさんの後にくっついてゆく。

まあさっきあれだけ苛めたのでもう近寄ってこないだろうし。
しかし、ナーさんは一応ちゃんと仕事はしてるっぽくて明らかに
さっきと景色が違う。

…。
やっぱあのファリドさん、同じ場所回って時間潰してたんだな…

様々な形に刈り込まれた植木が並ぶコロッセオみたいなエリアに
入って、オレはそう思う。

さっきまでこんな無かったし。

あつちにはチエスの駒を模した刈り込みをされた木がざくざく並
んでるし、こつちには動物を模した木がある。

他にも木で出来た（生きた植木でね）ティーセット、人物像、魚、
天秤なんかの雑貨シリーズ、剣とか弓矢の武器シリーズ、どこぞの
テーマパークに出て来そうな建物のミニチュア版植木とか、うん、
凝ってるなあって感じた。

それが円形段々畑などところのあちこちに置いてあって、真ん中は
でっかい日時計っぽいものになっている。

なんだろう？ 日時計っていうよりあれカレンダーかな？

取り合えず傍にいた馬の植木によっかかってオレは一息つく。

残念ながら本物の馬じゃないので乗れないし、寄りかかるとチク
チクしますけどね。いや、本物の馬なんて映像でしか知らんけどさ。

「ガキ」

「何ですかナーさん」

「ここから動いたら首が落ちるからな」

「はい、質問」

「……何だ」

「ここで餓死したら景観的によろしくないとあります」

「質問じゃないじゃないか……とにかく、俺が戻るまで余計なこと
はするな。分かったな。死にかけても助けないからな」

「あ、それ」

「まだ文句あんのか」

いや文句つけた覚えは無いんですけどね。

「さつきもフアリドさんが似たような事」

「はあ?! 俺とあの爺のどこが似てるって?」

「オレの話を最後まで聞かない辺りそっくりですね」

「……続きを言え」

「や、それってさつきの中央十騎士は回復魔法は使わないって話と関係するのかなあと」

「はあ? お前頭悪いな」

……。

「相手のレベルを見て、判断して、分かるように説明する事もできないんですか。へー。ふーん。ほー」

「……ちっ」

「けっ。ぺっ」

「つば吐くな!」

吐いてませんよ。さすがに。

言ってみただけです。

「中央十騎士が何かも分かってねえからそついう馬鹿丸出しの馬鹿発言するような馬鹿になるんだよ」

「で?」

「ちつとも応えてねえな……つまり、中央十騎士はご主人様の為だけの存在なんだよ。他の奴なんか魔法なんてもつたない真似するはずないってこと」

「?」

「くそ、これでも分からないか」

「はいまったく」

「極端な話、呼吸するのも生きるのも死ぬのも全てご主人様の為。

他の奴の為には指一本も動かさないのが中央十騎士つてもんなんだよ」

「ほーほー」

ほけきよ。

納得した。

つまり、ご主人様の為なら指のささくれだろうが、足の魚の目だろうが喜んで治しますワンワン。

でもその辺のクズ（つまりオレ）の為には瞬き一つだって惜しいぜあっち行けワンワン。

こつですな。

そんなの十人も侍らせて何がしたいんですか双神子様。貴方を見る目が変わりそうな気がします。

「で、そろそろ良いか。あまりお待たせしたくないんだけど」

「あー、はいすみませんでした。教えていただきありがとうございます」

「……ちっ」

えー、何その態度。

何で素直にお礼を言ったのに舌打ちされにやなんのでしょう。理不尽だ。マダム・リーに説教されてしまえ。

ついでにバーコード禿げになって、顔は綺麗なのに残念だよねえって言われるようになってしまえ。

何か中央の日時計もどきをガチャガチャやってるナーさんの後ろから呪詛を送っていると、暫く何かやっていたナーさんがこんどはかずかと大股で戻って来た。

「おい」

いや、寄ってこられたら逃げますよ。

「待て」

「無理です」

「待てつて。動いたら首落すつたただろうが」

「じゃあ、落されないように逃げます」

「ちっ、めんどくせえ……」

ぎゃー！ 何か急につかまったー！

「ジャムおじーん！ 新しい首をー！ー！」

「うるさいー！」

「画面の前の皆さんさようならー！ ばーいばーいきん！」

「……こいつやっぱどっかおかしいんじゃないの？」

うん、ただのノリですから意味は無いのですよ。

「あ、ちなみにオレの体って掴まれるとちぎれますんで、運搬にはリュックを掴んでおくのがお勧めです」

「チッ」

舌うちはしたけど律儀にリュックに持つ場所を変えて、ナーさんはオレをずるずると引き摺ってゆく。

うん、お勧めといったけどマジで引き摺られるのはちょっと予想外でした。

ま、いいやー。靴脱げなきゃ問題無いし。

あ、スカートの裾が地面に……いやまあさっきジベタリアンしたばっかだから今更か。

後でリムりんに叱られそうだなーとかつらつら考えて、オレは何と無く頭を捻って行き先を見る。

あ、首ちゃんと付いてますよ。まだ。

ほらほら、ね？

……つて、誰も見てない状況でやってもむなしい。
はやくデュラン帰ってこないかなあ。

突っ込み要員としてナーさんは微妙に物足りないんだもんよ。

……つて、何か行き先が思いっきり植木な気がするのは気のせい
ですかね？

いや、シャレじゃなくつて。

「あー、どこに行くんですか」
「煩い」

言ってるうちにみるみる緑の群れが近づいてくる。

ナーさんがぐっとオレのリュックを掴み直す。

そして、無造作にオレをクイーンの植木に向かって投げ込んだ。
つてえええー！

「くれぐれも粗相のないようにな」

猫耳論争とオレ（後書き）

【作者後記】

ナカバはああ言ってますが、派閥があるかどうかは知りません。そしてぶっちゃけどっちでも良い……あ、こんな時間に誰か来たみたいだ。

誰かをお待たせしつつ今晚は、尋でございます。

初めての方ようこそ、いつもの方いらっしやいませ。

どうもお世話になっております。

暑い最中、こんな人外魔境までお越しいただき誠にありがとうございます。います。

…ま、随分呑気な人外魔境ですけどね。お化け屋敷の方がまだ殺伐としてますよ。

さて、次でまた一人増えます。

綺麗なおねいさんは好きですか？ 私は大好きです。

では、待たせてる何者かのところにちょっと逝ってきます。

作者拝

双神子様とオレ（前書き）

私は突っ込んだ事あります。

双神子様とオレ

茂みに顔から突っ込んだ経験を持つ奴手を上げてー。はい。
いや、あれ本当に大変だった。

全身ひっかき傷だらけになるし、髪の毛枝に絡むし、服の中に葉っぱとか色々入って来たし、抜けだすにもピキポキ折れる小枝は足場にならないし。

出た時にはオレも、オレのリュックも、オレの相棒も葉っぱまみれの泥まみれでそりゃーひどかった。

まあ大事な相棒はそれでもしっかりオレを家まで送り届けてくれたけどな。

良い奴だったのに……惜しい奴を無くした。

なんて現実逃避したくなる感じにピンチです。
どうしよう。

「……誰？」

不法侵入者ですすみませんでした！

とか叫んで回れ右したいのに、腰が抜けて動けません。
だって、目の前に美人さんがいるから。

足元までふんわり広がる銀色の髪。

ガラスをはめ込んだみたいなお真つ黒な目。
ピンクの唇。

白いふんわりしたドレスの上から、肩と胸を覆うようにくるつとふわもこの毛皮を巻きつけている。

その、見た目はまるで綺麗な人形って感じの、どこか見覚えがあるように見覚えのない美女が、オレの方を見て涙目になっていまし

た。

はい、バツチリ怯えられていますね。

目付悪くてごめんなさい。

不審者ですみません。

「……………あなた？」

「あー、えー……………お邪魔してます」

曖昧スマイルでそう応えると、美女さんは黒い目をパチパチとさせた。

睫毛まで銀色だ。

てか目大きいなあ……………瞬きしている間にポロツと落ちるんじゃないかと思うくらい大きい。

黒目の大きい目っていうのは魅力的らしいけど、この人の場合白目以外ぜんぶ黒目だし、その黒目部分だってかなり大きい。

それがウルウルしてて、ほんのり肌とか上気してるとかもうたまりませんなあ！

あ、思考がオヤジに。

オレの不屈きオーラを感じたのか、美人さんがピクツて震えた。

うん、子ウサギみたいでプリティです。

「あ、の……………」

「ああ、えーと……………違うか」

真っ黒な目を見開いている美女様を前にオレはちよつと考えてから、確認する。

「双神子様でいらっしやいますね？」

「……………はい」

うん、やっぱりそうか。

まあこの辺の推察は簡単だ。

まず候補が少ない。

言っておくけどここ、天壇内部ですから。

居るとすれば中央十騎士か、双神子様のどちらかだ。

今回はイレギュラーでオレとデュランも居るけど、どう見てもデュランじゃねえし。

中央十騎士がオレをみて涙目で震えてるとか無いだろうし、何よりイメージぴつたりですから！

この儂げな感じとか、神秘的な感じとか、何かすごい美女っぽい良い香りするよーってな感じでドストライクばっちりですから！

残念ながら金髪の幼姫じゃなかったけど、綿菓子みたいなふわふわで甘いそんな感じのお姫様ですから！

双神子様ばんざい！

もう十人でも百人でも信奉者侍らせて下さい。オレが許します。

っていかんいかん。

よだれ垂れ流しそうになってる場合じゃねえし。

何を思っただの猫耳が嫌いなナーさんがオレをこの場に放り込んだのか分らんけど、「くれぐれも粗相のないようにな」なんて台詞、この先に誰が居るのか分かってなきやあ言うはずが無い。

オレがこの美女（じゅるり）を双神子様と判断した最大の理由がそれなのだ。

他人の為には睫毛一本動かして堪るか。ご主人様大好き！ っていうある意味ダメ人間の集団の中央十騎士のナーさんが気遣って、敬語を使う相手なんてどう考えたって双神子様に決まってるじゃないか。

問題は、この「出会い」が何の為に仕組まれたのかってことだ。

偶然？

こんな偶然あつて堪るか。

あからさまに作り物だろ。

こんな陳腐な出会いを何の為にオレみたいなモブに用意したのか。双神子様の為なら死ねる！ な、はずのナーさんまで協力して、だ。

……ま、どうせデュランがらみだな。

本当に奴に絡むとロクなことねえな……よし、仕返しプラン追加しておこう。何させようかなあ。

そんな事を考えつつ、合間に次の手を考える。

この場に他に頼れる人間はいない。

デュランは……呼べば来るかもしれない。

何せデュランだから。

きっと地獄耳だし、あれでわりと面倒見が良いところもあるからな。不本意だけど。

でも呼び出しは最終手段だし、相手の目的が分からない今、デュランを呼ぶのは拙い。

それこそがこの茶番を仕組んだ相手の一番の目的って可能性が高いからだ。

そして目的を達成した後のオレを無事にしておく理由が向こうにあるかどうか分からない。

お、魔王出てきたな。良しお前用済みばーい！ とかされるかもだし。

それに、切り札は最後まで取っておくのが様式美ってもんだしね。最初からゴルディオスハンターかましてはいけないですよ。

ってことで自力でどうにかしますかー。

取り合えず目標は生き残るってことで……もうやだ、何この生死の選択の連続。

何の罨ゲーですか。

しかもオレ、間違はなく残機ゼロなんですけどー。

現実にはふっかつの呪文も、コンティニューもないからなー。

って、ぼけっと他のこと考えてたら、双神子様がこっちをじーっと見ていた。

……あ、放置プレイしてすまんですよ。

まあ最初の交渉は王道「知り合いの知り合いは知り合いだよね？」で行こう。

「デュランがお世話になっております」

「……デュランお義姉様を、御存じなの？」

頼りなげな表情にふっと喜びの色を浮かべる双神子様。

……今何か聞き捨てならない単語が混ざった気がするんだが、スルーしよう。

はい、ご存じですよ。

「デュランと一緒に来たんです」

「まあ……」

ばあ、と花が開いたみたいに嬉しそうに笑う双神子様。

あああ、ちくしょう笑顔が可愛いなあもう！

てかデュランの名前効果抜群だよ！

そしてあなたの笑顔はオレに効果抜群です！

もう、芝生ごろごろしていいですか！

……て落ちつけオレ。紳士になれ。

こんな場所でやったら傷だらけの人生コース一直線だぞ。

オレは少しテンションを下げ、周りを見回す。

うん、匂いが凄いなあと思っていたらここバラ園だった。

辺り一面、赤だとかピンクだとか白だとかオレンジだとか黄色だとか紫の薔薇ばかり。

大きいものから小さいなものまで、何でもそろそろよヤンマーデーゼル。

残念ながらオレにはどの花が何ていう名前だとか、飾りつけがどうだとかはさっぱり分かりませんけど。

とりあえず金の手と時間はかかってそうだなあ。

あれは蔓バラなんだろうか。蔓つぽかったら蔓バラでOK？

サイズ控え目ならミニバラでOK？

……後何か知ってることあったっけ？ 赤いバラの意味は情熱だっけ？ 関係ないか。

うん、でも外苑でも、そして多分緩衝地帯でも無いな。

多分ここ、内苑だ。

オレは振り返って、間近にそびえ立つ建造物を見上げる。

これが、【時計塔】。

ああ、何か……なんだろう。心がぐつとする。

威圧感とかじゃない。ミレイの建造物に最初に出会った時みたいな……。

と、急に手を掴まれてオレはビクッとして振り返る。

何故か、オレの両手を握って双神子様がほろほろと涙を流していた。

えーと？

放置プレイがそんなにダメなんでしょうか。

そんな緊張感が微妙に欠けたオレに、双神子様は悲しそうな顔のままこう告げた。

「貴方、マナレスなのですね……」

双神子様とオレ（後書き）

【作者後記】

ストックが尽きました。
冷やし中華始めました。

何となく響きが似ている気がしますが、片方は真実で片方は嘘です。どうでも良いことをしつつ、お馴染みの皆様もそうでない皆様も今晩は。

どうも、熱中症から回復した尋でございます。
謎の微熱と疲労としびれとだるさと吐き気と食欲不振はご指摘の通り熱中症だったようで……それよりの対処をしたらすっかり回復しました。
改めてこの場で御礼を。

さて、緊張感があるようで無いナカバと双神子様のターン、もう少し続きます。

デュランの出番はまだありません（苦笑）

それでは、また次回、縁があればお会いしましょう。

六身一体とオレ（前書き）

サブタイトルが思いつかず、こっちに逃げました。

何度も話の中で書いてますが、ナカバは目つきが悪いです。

六身一体とオレ

痛いのが嫌いだ。

怖いのも嫌いだ。

辛いことが嫌いで、苦しいのが嫌いだ。

ちっちゃいまんまのオレ。

成長しないオレ。

体も、考えも、心も、中身も、ちっぽけ。

一体いつになったら、オレはマトモな人間になれるんだろうか。
マトモな人間に、なれるんだろうか。

オレを何故かマナレスだと見破った双神子様の目には、別に蔑むような感じとか、嫌がるような感じとか、見下すような感じも無くて。

ただ、底なしに真っ黒だった。

黒いガラス玉みたいな目。

大きいそれに、ポカンとしているオレの顔が小さく小さく映っている。

「可哀そうな子……」

頭が現実には追いつけないで、ぼーっとしているオレの手をやんわりと双神子様の手が包んでいる。

背は双神子様の方が大きいのに、手は意外と小さい。

デュランの手は大きくて、指がすらつと長くて、意外とちよつと骨つばくて掌の一部がちと硬くて冷たいんだけど、双神子様の手は華奢で小さめで温かだった。

掌の一部が硬いところだけちよつと似てる。しつとりした掌の中の、オレの傷だらけアンド泥だらけの手を見る。

台風の日に水たまりに落ちて、タイヤでひかれて、そのまま一週間放置された軍手みたいな手だな、オレの手。

「こんな体で、今までずっと……耐えてきたのですね」
たえるいがいに行けることなんてなにひとつなくて。

双神子様のピンク色の唇が動いて、そんな風に言う。

しょうがないじゃないか。
しかたないじゃないか。
できなかつたんだから。

別に好きでじつとしてたわけじゃない。
ただ、そうする以外に方法が無かつたってだけだ。

嵐とかと一緒にだ。

せいぜい通り過ぎるまで傘を掴んで中でじつとしてるしかない。
嵐に向かつて猫パンチしてみたって、嵐は痛くもかゆくも無い。

オレの手が濡れるだけ。

だから、自分の傘をふっ飛ばされないようにしながら、じつと過ぎ去るのを待つしかない。

「辛かったですね」

双神子様の柔らかい声。

鈴を振るような声ってこういう声なんだろうか。

「何時も、ずっと、独りでそれを忍んで……」
「……」

別に、望んでのことじゃないけどね。

偶々……つーか、当然のように他にオレの方に手を貸す奴が居な
かったただけだ。

そりゃそうだ。

何の得も無いうえに、リスクだけの案件に手を出す馬鹿さ加減な
んて子供だつてちゃんと分かつてる。

おまけに放つておいても自分達には何の問題も無い。

だから、順当に、オレはひとりだった。

まあ、種類が違カテゴリーうんだからしょうがない。

要は、おたまじゃくし道端でが死にかけてたら助けますか？
つて話だ。

まあ、たまたま気が向いたとか、オタマジャクシにもものすごく
思い入れがあるとか。そう言う理由があれば助けるかもしれないけ
どね。

でもそれを常に期待するってのはアホだと思つ。

偶々だ。偶々。……あ、そんな名前の植物系ポケモ が昔居たよ
うな。

目付の悪さがオレにちよつと似てるんだぜ。

こそつとコピーした奴の顔を切り抜いて、そつと学生証の写真部
分に上書きしといたのを弟に見つけた時は呆れられたけどさ。

良いじゃん、何か親近感覚えたんだよ。別に提出する訳じゃない
し良いじゃん！

……つて、あれ？ 何でオレこんなこと考えてるんだっけ。

えーと、全部言えるかなの歌ぐらいは余裕で歌えますけど……そ
うじゃなくなつて……。

そうだ、デュランどうしてるんだろ。

あの、珈琲好きで我がままで気まま勝手に……まるでオレをマトモな人間みたいに扱う魔王様は。

あんまり放っておくと、そのうち拗ねるんじゃないんだろうか。

妙なところで子供だからな、あいつ。

まさか迷子とかは……いやいや。いや、しかし。だがしかし。…

…駄菓子菓子？

あ、いや何か本気で心配になってきたよ。

珈琲とかくつついた鼠捕りにひっかかってたら……それは是非見たい！ 物凄く見たい！ 絶対面白い！

よし、ちょっとひっかかってるデュランを探しに行つてこよう。

とか立ち上がるうとしたら、急に誰かに引き寄せられた。

へ？

「行かないで……」

「え？」

「独りにしないで……」

「そ、みこさま？」

「独りは嫌……」

い、嫌って言われましてもですね。ごにょごにょ。

「独りは嫌なのです……」

「や、そう言われ……じゃなくて、おっしやられますで……ん？

おっしやります……」

えーと、ちょっと出てこい正しい敬語。

セシエン君の言葉づかいを思い出すんだ！ えーと、えーと……

「ごぞいます？ ぞます？」

「おっしやございますでもですな……?」

いや我ながら意味分からん、とか思ってたらさらに引き寄せられて、なし崩しにハグされました。

おお！ 何と言うオレ得！

じゃなくて。

「あ、あの離してください……えーと、ございま……まあ良いやとにかく離して下さい。ほら、オレ泥ついてますし。汗臭いですから。ね？」

「行かないで……」

……もしもーし？ 聞いてます？ あ、聞いてないんですね成程ね。

しかし、この状況ちょっとときめくかも。

だって、銀髪サラツヤの美女にハグされてますよ。

双神子様が巻いた毛皮のふわふわ越しに、女神の谷間に顔埋めちゃってますよ。

ばふばふですね。分かります。

オレの場合はかっこよさは上昇しないきがしますが。

いやもう、このふくよかで柔らかな良い匂いな谷間に埋まっていたいです……っていやいや、ダメだろそれ。

人間として何かダメだろ。

ああ、しかし父さん、乳枕の誘惑に負けそうです父さん……。

その付けてるもこもこで隠さない状態で拝みたかった。

絶対動きたんびにユツサワツサと揺れるんだよ。プルンプルンしてるんだよ。ばいーんでばいーんですよ！

三回拜んでワンって言ったら御利益がありそうな感じになってるんだよきつと。

きよぬー好きに転向してしまおうか。
リムりんは喜びそうだ。

なんて、オレのスケベ心丸出しの思考は、消えそうな双神子様の声であっさり吹っ飛んだ。

「寂しいのです」

泣き出しそうな子供みたいな声だった。

オレみたいな人でないしの胸までズキリと痛むような、悲しそうな声だった。

「私だけ、独りなのは……嫌……」

「そんなことは……」

だって双神子様には中央十騎士ファンクラブが居るじゃないか。

守ってくれる人が。

何をおいても貴方が一番大事だと迷い無く言ってくれる人が十人も居るのに。

「誰も助けてはくれない辛さは……貴方も良く知っているのでしょう」
「う」

「オレは……」

「耐えるしかない痛みを、貴方も知っているのでしょうか」

たたみかけるような双神子様の言葉に、オレは口をつぐむ。

「怒りが悲しみに、やがて諦めが変わってゆく……理不尽だと嘆いても、貴方の言葉は誰にも届かない」

黙り込んだオレに双神子様がそつと囁きかける。

「誰も耳を貸そうとしない……そうでしょう」

「……当然のことだと思えますけれど」

「当然だから、苦しいと思うのでしょうか……当たり前のことはずつと変わらず続いてゆくことだから……」

何処にも逃げ場が無いから。

ここがどん詰まりだから。

先も無ければ後ろも無い。行き止まりで、生き詰まり。

「それはとても辛いことでしょう」

オレは答えない。

「苦しいでしょう」

オレは答えない。

「楽になれるならなりたいでしょう」

オレは答えない。

「死んで楽になれるならそうなりたいと思うほど、苦しんでのせよ」

オレは応えないことに決めた。

六身一体とオレ（後書き）

【作者後記】

悪戦苦闘の回になりましたが、結局こういう形になりました。最初はもつとドロドロと重くする予定でしたが、ナカバに拒否されました。

おかげで立ち直りが予想以上に早くなりました。無駄に強い子ナカバ。まさかポケモンに逸れて行くとは……。

ちなみに、ナカバの顔は左下の口をへの字にしているタマタマ（ポケモン）に似ています。もうちょっと目付悪いですが……。

どうも今晚は、尋でございます。

初めての方もそうでない方もようこそおいで下さいました。お気に召したなら幸いです。

では、ナカバがすごくナカバっぽい次回でまたお会いできることを願って。

作者拝

信念疑念とオレ

まあ、説得とか同情を引く手としては悪くなかったけどね。内心でそんな可愛げのないことを言ってみたりして。

オレはぐつと手に力を込めて、ハグから抜け出す。さよなら、きよぬー枕。

「すみませんけど」

抜けだして、オレはどこか驚いたような顔でオレを見てる双神子様につこり笑顔を向ける。

「死にたいとか、あり得ませんから、オレ」

でも、説得したいなら地雷踏んじゃあダメだよなー。

悪いけど、その「辛いから死んでしまいたい」とか、そのセリフだけは絶対に無しだ。

一度目はとりあえず我慢したけど、もう一度同じセリフを聞いたらプツンとかいきそうだし。

流石に双神子様に切れたらまずいだろ。

「どうして……」

「どうして？」

そんな事も分からないんだろうか。

オレは不敬だと分かってもイラっとする。

「どうして、ですか？ それこそ当たり前だからですよ」

「あたり、まえ……」

「何でオレがまだ生きてると思つてたんですか？」

マナレスのオレ。

マトモな人間とは呼べないオレ。

ちっぽけで、成長しなくて、どこもかしこも欠陥だらけのオレ。

そんなオレがまだ生きてるっていう事実。

「独りじゃ無かつたからに決まつてんでしょ」

マナレスだと判明した後もオレを処分せず、自力で育てて学校に行かせてくれてる両親^{あひたち}。

普段から淡々としてるけど、何かあつた時には助けってくれるうちの愚弟。

マナレスのオレにも「色々経験しなさい」と教えてくれたじいちゃん。

それを嫌な顔せず見守つてくれたばあちゃん。

自分達の予定をキャンセルしてまで、こんなところまで心配してついてきてくれたリムりん、ヴィーたん。

オレには勿体ないぐらい、凄い人達。

「オレの周りにはいっぱいいましたよ」

「悪意すらなく、ただ何と無くでオレの背中に火球投げつける奴らも居た。」

それをただ傍観するだけの「良い子」の皆さんも居た。

でも、そうじゃない人もいた。いてくれた。

「その人達が生かそうとしてくれたから、してくれてるから、オレは今こうやって十四年間を生き延びてます」

それはどれだけ大変なことだったんだろう。
どれだけ辛くて、苦しくて、そして凄じことなんだろう。
想像もできない。

自分のことじゃないのに。そんな大きな重い責任を自分の意志で
選びとって、背負って。

オレには、とても、真似できない。

「それをオレは知ってます」

それを。その努力を。行動を。信念を。

「それなのに、辛いから死にたい……？ ふざけんかって話ですよ」

辛い？

どの面下げてそんな事言うって？

それは周り見てからもう一度言ってみろってんだよ。

自分を庇^{てめえ}って守って、生かしてる奴らのこと見てもまだ、そんな
こと言えるならやってみやがれってんだ。

自分は独りなんです。迫害されてるんです。って、馬鹿じゃねえ
の？

オレはそういう「自分は可哀そうな被害者なんです」って顔する
のが大嫌いだ。

ヘトが出る。

自分の不幸に酔って、それを楽しんでるなんて。

「そう言う奴に言う言葉、知ってます？」

オレは笑顔を消す。

「甘ったれんなボケ、ですよ」

「……」

「という感じにオレ、恵まれまくっちゃってるんで双神子様の気持ちには分かりません」

言っつて、オレはやっちまったなーと思う。
でもムリだ。

さっきの話はどーしてもムリ。

生理的に無理。あのストーカー先輩と同じレベルで生理的に無理。これでも割と大人しめに主張したつもりです。

うん、分かってる、オレ控え目だけどちよっぴり怒りっぽいんだ。控え目っつていうと「えー」って顔されるけど。失礼な。

控え目ですよ。

愚弟に言わせりゃ控え目なんじゃなくて臆病なんだよアネキは、となるけど。うっさいほっとけ。

「っつてことで、双神子様のお気持ちはオレには分かりません。これっぽっちも」

「……」

「もう行って良いですよね？」

確認と呼べないような確認をとって、オレは踵を返す。

その後ろで、双神子様は疲れたように小さな笑い声を立てた。

「そう、ですね……ごめんなさいね、貴方まで、私と同じみたいに言っつてしまっつて……」

「や、別に……共感できないだけですから」

「そうですね……貴方は、もうすぐデュランお義姉様にマナレスで

なくしていただけるのに……」

……はい？

マナレスでなくしていただける、って……どういうことだ？

「それとも、もう変えていただいたのですか」

双神子様の無邪気な微笑みと問い掛けに、オレは聞き返すのを躊躇う。

まるで当たり前みたいにそんなこと言われるなんて……。

「いえ……」

「そう、でもきつとすぐでしょうね……」

「や、その……デュランにも出来ることと出来ないことがあるでしょうし」

「あら、どうして？」

「どうして、って……」

だってデュランは言った。

マナレスは治せるようなもんじゃないって。そう言ったのに。

まさか、冗談？ でもあいつに限ってそんな冗談言うか？

……あいつに、限って？

混乱するオレを不思議そうに見て、双神子様は首を傾げて微笑む。

「貴方をマナレスでなくすることぐらい、お義姉様にはとっても簡単なことでしょう」

だってお義姉様なのですから。

確信をもってそう言って双神子様はにっこりと、そりゃあ綺麗に

笑って見せた。

信念疑念とオレ（後書き）

【作者後記】

念の為、ナカバは十四歳です。

ということ、ナカバっぽいナカバの為のナカバな回でした。

今晚は、尋でございます。

ちよつと覗いてみたその貴方、ようこそ。お気に召せば幸い。

当然来てますよと胸を張つてる奇妙な貴方、ありがとうございます。

また来て頂けるよう頑張ります。

さて、もうちよつとで魔王様お戻りになるのですが……もう少しナカバのターンです。

また次回、お会いできることを願っています。

作者拝

自問自答とオレ

ハッと気がつくのと迷子だった。

い、いや違う。迷子じゃないんだ。ただちょっと現在地がどこか分からないだけでしてもごもご。

えーっと、で、どこだここ。

ああ、きつと時計塔の内側ですね。うん。

ほら、ちゃんと場所分かってる。オレえらい。

「……で」

オレはもう一度辺りを見回す。

「出口はどっちでしょうか」

うん、分からんね。

「おーあーるぜっとー」

口で言いながらペチーンと倒れてみたり。

はいすみません迷子です認めます。

景気良く迷いましたともさ！

マジでどこだここ！

いや、時計塔の中でしょうけどね。

思いつきり立ち入り禁止区域でしょうけどね！

何でここに入った何分か前の自分。ちょっと説教してやるから出てこい。そして思いとどまれ。

「……つて、まあ無理ですが」

振り上げてみた拳を下ろして、オレはとりあえず立ち上がり、周囲を見回す。

外から見たら黒い塔ばいものだった（ような気がする）のに、今見ている壁は無色透明だ。

庭園の景色が透けて見えている。

うーん、取調室の鏡みたいなもんなのかね？

見た感じまつ平らなのに、触ってみると木の板を撫でてみたい、微妙な感じ、こぼこ感があつて、でも紙やすりみたい、ざらざらじゃなく、つてちよつと気持ち良い。思ったより硬くないし、仄かな温かみがある。

耳をくつつけると、ごうんごうんと心臓の音みたいな、機械の駆動音がオレの骨に響いて聞こえた。

それに混ざつて風がざわざわと枝を揺らしてる時みたいな、波の音みたいな音。

それから、サラサラ流れる砂時計の音。

……うーん、透明っぽいけど実は中には色々コードとかダクトが通つてるのかな？

とりあえずその壁の中の音を聞いてたら少し頭が冷静になつてきた。

「や、まあつまりパニックつてたんですな。オレってば」

ぼつりと呟いた俺の声が周囲の壁にこだまする。

「ばっかみてえ」

その原因が特に馬鹿だ。

オレは溜息をついて、リュックからタオルと袋を引っ張り出して、簡易クツションを作ってその上に座りこむ。

いや、ちょー疲れた。

何かむやみやたらに走ってここまで来ちゃったからさ。

喉乾いたなあ……。

腹に抱えたリュックからペットボトルを取り出して、オレは一口それを飲む。

温くなってるけど旨い。

あ、中身はスポーツ飲料ですよ。ごく普通の。

お茶とかよりこっちの方がオレには向いてるから。

青いラベルをぼけーっと眺めながら、オレはちよっと頭を整理し直すことにする。

「まあつまり、弱点を突かれたってことなんだよな」

弱点。

それは割り切ってるようで割切れてない、マナレスっていうオレの属性のこと。

それと不確定要素デュランのこと。

『治して貰えるのですから』

そんな話は一切ありませんでしたか何か？

治せるようなもんじゃないとは言われましたけどどうかしましたか？

どちらが正しいのか。

両方とも嘘なのか。

両方とも正しいのか。

嘘なら、どうしてそんな嘘を言ったのか。

マトモに考えりゃどっちが信じられるかなんて決まってる。
双神子様だ。

だって、世界のナベア……じゃなかった、世界の双神子様だぜ。
時計塔の祈り姫。平和の担い手。常に魔族との戦闘において人類
の精神的支柱として存在し続けてきた神秘の神子。

その双神様がパンピーのオレに嘘をつく理由は無いし、あの人
は一応「人間の守護者」だ。
人間の味方^{オレ}。の、はずだ。

一方某珈琲好きのキラキラ無駄美貌の誰かさん。
紹介からして胡散臭い。

おまけに魔族でしかも魔王。生きしと生ける存在すべての敵。自
称世界の敵。

性格は気紛れ、ガキっぽい、天上天下唯我独尊、マイペースの斜
め三十二度をゆくマイペース。

顔は放送禁止レベル、見た目は美形すぎてむしろウザイ。そして
チートのでんこ盛り。メガ盛り。

まさしくザッツ俺様。

あいつなら「軽い冗談」とか「お茶目」でオレに嘘つくぐらい平
気だよってのけるだろう。

それに何より、アイツ魔王なんだ。

人間の……オレの敵。

オレに親切にする理由も、公平にする理由も、誠実にする理由も、
ない。

全くない。

欠片もない。

僅かも、これっぽっちの理由もない。

そんな魔王を、魔王と知ってたのに、オレはいつ、なんで、何を根拠に、ここまで信じてしまってたんだろう。

「……変な話だよな」

信じられる理由なんて、オレの側にも一つだってなかったのに。

だって、あいつそもそもオレのことヒマ潰しで誘拐ゆうかいしやがった変態だぜ？

出会いからしてサイアクだ。

こっちポカーン、あっちえろーい……じゃなかった。でも初対面の相手に寝そべってゴロゴロしながら挨拶しやがったんだぜ？

いや、まああれは多分「そういうこと」なんだろうけど……。

でもさ、オレがピンチになっても別に奴はオレを助けるようなことも無かった。これは事実。

基本自力か、もしくはワンコ執事君に助けてもらってるだけで、その間デュランはどうかでゴロゴロしてたらしい。またかよゴロゴロ。

一応金を出して貰ったけど、何か奴がオレに対して選んで買ったとかは無いらな。

料理は作ってくれたけど食材は我が家のだし、そもそもあれは宿代だ。

てか、まず事前のアポ抜きで許可なくウチに転がり込んできて泊るうって時点で迷惑してる。

見た目だってオレはああ言う美形男って嫌いっていうか、苦手だし。

声だってエロエロし過ぎて好みから外れてるし。

足無駄に長いし。組みやがるし。

オレより背え高いし。

動物みたいにつまみ上げて来るし。

わがままだし。

何かと言うと厄介事引っ張って来るし。

我が道をゆきすぎてて手がかかるし。

何考えてるのかさっぱり分からんし、分かることが出来るとも思えないし。

……そんなことぐらい分かってるぞ。

幾らオレがアホの子だからって、それぐらい分かった。

分かってたのに、さっきの一言で無様に取り乱して、みっともなく混乱してしまった……。

いつから？

いつのまに？

どうしてこんな風に？

「なんだかなあ……」

リュックをがさがさ漁って、オレはポテチ（サワークリーム&オニオン）の筒を取り出す。

一枚引き抜いて、唇で啜える。

「むー……」

やっぱりポテチはサワークリーム&オニオンに限るなあ。

啜えたまま上下にピコピコさせてみる。

行儀が悪いと怒られそうだ。

でも止めらん無い。何か無駄に楽しくってさ。

「……むー？」

今何か引つかかったな。

えーと……サワークリーム？ いやいや、そこじゃないな。

段々しおしおしてきたポテチを指でつまみ直して、端からチマチマ齧りながらオレは首を捻る。

そもそも、何でオレここに来たんだっけ？

いや、迷子とかその辺はまあ見ないことにしてですね。

うん。簡単だ。

オレが来たいと思ったから無理言っただけでデュランにくっついて来たんだ。

別にデュランが今回は攫いやがった訳じゃない。

勿論、デュランが誘うようなことを直接言わなかったからって、奴の狙いがそこに無かったとは言いきれない。

なにせあの魔王様、ネコのかぶりっぷりが堂にいつてるからなー。開けても開けてもネコばかり出て来るマトリョーシカみたいなもんだ……想像したらちよっと萌えた。

にゃんこ、にゃんこ、にゃんこーい。

「じゃなくて……もちつけオレ」

そこじゃなくて……まあ、ほら、アレだ。

魔王様の真意なんざオレには判りようがないってことですよ。

うん、そうなんだよな。

オレの頭脳は大人な名探偵でもないし、灰色でもないし、十万三千冊なんか入ってない、ただの一般人未満なんだから。

デュランの考えを読み取るうってこと自体がまず無理。無理っただけ無理。

ついでに、デュランが何かしようとしたらオレが百匹束になっても防げないのでこれも無理っただけ無理。

だから、そこは悩むだけ無駄。
よって放置。

それはさておいても、とりあえずデュランにオレからくつついてきたのは……何と無く楽しかったからだ。

うん。

そこは認めようじゃないか。

あいつと居ると楽しい。

あいつと一緒に居るのは楽しい。

特に意味は無いけど、無駄に楽しい。気持ちが良い。ワクワクするし、ドキドキするし、何より楽しい。

すっごく楽しい。

オレの行動で迷惑かけるんじゃないかとか気遣いしなくて良いし、やりたくない事やらせてるんじゃないかとか考えなくて良いし。衝動（主にあのきらきらっぷりへの条件反射とか、突っ込みの血が騒いだとか）に負けてうっかり飛び蹴りかましても笑って気にしないし。

何か、ろくでも無い休みになりそうだったこの数日間が、今かなり楽しい。

デッドオアライブな状況ばつかにもなったりもしたけど、でもじゃあデュランと今すぐ別れて普段の生活に戻りますか？　と言われたらきつと悩む。

何のかんの言いつつ、あのお人好しの魔王様はオレが危なくなったらやって来る気がしてるし。

いや、普通に考えたらおかしいんだけどさ。

分かってるんだけど。

「うーん、ちょっと試してみますか」

オレは呟いて、最後のポテチをぺろっと舌で口の中に巻き込み、

立ち上がった。

自問自答とオレ（後書き）

【作者後記】

書き忘れごめんじゃん！

……あ、退かないで。これには深い訳が。いえ、けっしてこうい
う方向に自分のキャラを変えようとかでは無くてですね。

とか言い訳しつつ、じゃんこキャラが悲しいくらい似合わない尋で
ございます今晚は。

挨拶し損ねた方も、そうでない方もようこそいらっしゃいました。

後記は基本ご来訪の皆様への感謝の気持ちを書く為にあります。

（尋にとつては、と言う意味ですが）

一人称だとかつぱりちよつとだらけというか、ゆるみますね。

心情描写もへつたくれもないのと、認識デバイスのお陰で伏線張り
易いのは良いんですけど……実はかなり技量が要求される手法では
ないかとか何とか。

さて、ちよつと気持ちに整理を付けて現状を見直したナカバと、そ
ろそろ魔王を合流させたいと思います。

もう少し間挟みますが、宜しければまた次回もお越しくださいませ。

それでは。

いつも貴方への感謝をこめて 作者拝

時計塔内とオレ（前書き）

最初にお詫びを。

水曜に掲載されると期待された方がいらっしやったら申し訳ありませんでした。

お詫び（？）も込めて気持ち多めに書いてます。

内容自体は善やすめですけど（そっと目逸らし）。

時計塔内とオレ

とりあえず左手を壁に付けて歩いてみることにしたんですよ奥さん。

ほら、あの迷路攻略法の有名な奴ですよ奥さん。

手は右でも左でも良いんだそうだが、出口が外側に繋がってる限りは出口が見つかるんですって、御存じですか奥さん？

と、某司会者っぽく言ってみただけ思ったより似なかった。
残念。

えーと、ちなみに分かっているとと思うけど基本、迷子になったらその場から動かない方がベターだ。

まあ山の遭難とかは話が別ですけど。

ついでに言うと、この方法すつごく効率が悪いです。運が悪いと延々時間かかりますから。

で、何でそんなこと分かっているオレがこんな方法を取ってるかつーとですね……うん、まあ、あれだ。

あれです。

察して下さい。

ほら、それに折角うつかりとはいえ入っちゃった時計塔の中も見物したいじゃん。

今なら見つかったても「迷子だったんです！」で済むし。

それならがーっと端から端まで観光してやらあつ！ 目の玉ひんむいてよく見やがれ！ じゃなかった見てやるっ！ ってなもんですよ。

適当に疲れない程度にうるちよると（無許可ですが）見学させて

いただくこうと思ってます。はい。

しかし、時計塔っていうくらいだから中身は時計だらけかと思いきや、実は溝だらけでした。

溝です。ミゾ。みぞ。

いやイントネーション変えてみても意味ないんだけどね。

今歩いてる廊下……だと思っ所の天井、床、壁の全面に溝が付いております。

……何？ 何か溝に相当な思い入れがあるんですか？

ちなみに床の溝は進行方向縦に平行にざーっと走ってる。

壁と天井のは何かうねうねしたり、水平方向だったり垂直方向だったり個性豊かだ。

いや、溝に個性求めても意味ないけどね。溝の個性って何だ。

ちなみに太さも色々で、オレの指よりほっそいのもあれば、オレの両足が余裕で突っ込めそうなくらいぶつといのものもある。

え？ 分かりにくい？

……まあ、色々あるってことだ。以上。

しかし、溝だらけなんだけど、これがぱっと見は何かの意味のあるもように見えるから不思議だ。

時計塔マジック、こうですか？ 分かりません。

それによく見ると、壁とかのところどころにちょっとした飾りが埋め込んであったりする。

見た目はビー玉ですけどね。

もしかしたらポチッとやると何処かでドカーンとドクロの雲が上がる、触っちゃいけないボタンなのかもしれない。

……押してみる？

「ていつー！」

いえーい、押しちゃったー！

……しかし何も起こらなかった。

反応が無い、ただの飾りのようだ。

「ちっ。期待させやがって……デュラン並みにがっかりな奴だ……」

いや、ドカンと一発はげ頭になっても困りますけどね。

まあ、特に意味が無いことは分かりましたよ。

多分、溝だらけの壁とか味気ないから足しちやえー、なノリで埋め込んだんだろうな。

ちなみに溝ですが、基本用途不明です。

しかも、足元の溝は完璧に埋めてあります。足でペチペチしてみただけど、何か透明なカバーがかかっているようで引つかかることが無い。歩く人にやさしい設計だけど溝の意味なくね？

ちなみに壁のやつはしっかり触るとデコボコがあって、溝らしい溝だった。いや溝らしい溝って意味分かん。

天井のは……知るか、届く訳ねえだろ。舐めてんのか貴様。

でも天井の溝は一応、用途は判明してる。可動式ライトのレールになってるから。

ライトがくつついてるってことは多分溝カバーはされてないと思うし、用途イコールライトの移動先までのレールってことでOKだろう。

しかし何でここにあんな可動式があるのかは分からんな。

時々虹色に発光する壁の溝をつんつんしながらオレは取り合えず

歩き続ける。

ずっと同じ景色で段々飽きて来ましたよ。

本当に飽きて疲れたら、その場で止まって休むつもりだから良いけ……今、何か指先にひっかかったな。

オレは足を止めて（いや、疲れてきたから丁度良いとかじゃねえよ？ マジで）指先に違和感を感じたあたりをじっくり観察してみ。

うん、立派な溝ですね。

いや、溝はそうなんだけど……今までとちよつと手応えが違ったような？

んー。

さわさわと撫でまわしているとまた何かひっかかった。

溝の縁に、よく見るとちっちゃなほそーい線というか……ああ、溝ですね。

もう溝すぎてお腹いっぱいです。

とか思いつつ、俺はその極細の溝をそーとなぞってみる。

下は床まで、上はオレがの腰よりちと上の高さまであって、そこから床と水平方向にグーツと伸びて、また下に。

……四角形？

いや、これはもしかするとアレか？

オレはその囲まれた中をぐいぐい押してみる。うん、反応無いな。溝に指を無理やり手前に引っ掛けて引っ張ってみる。違う。

ふむー……あ、そうか、そう言うことか。

オレは壁に嵌めこんであったさっきの謎のスイッチもどきのところに指を合わせて、ぐいつと横にスライドさせるように動かす。外れてたら恥ずかしいけど。

「おっ、開いたっ！」

ピンポン、大正解！ 隠し扉発見！

「デュラン、面白いもの……あ、居ないんですけどっけ」

すげえ恥ずかしいので今のは無しでお願いします。

てか、やっぱりこう言うところって変なからくりとか謎の仕掛けとかあるんだなあ。

脱出ゲーム好きのオレとしてはワクワクする。

王道的に電池の入ってない懐中電灯とか、プラスチックドライバーとか、あとはメモの切れ端を集めて暗号解読とかあったら良いのになあ……

…流石にないか。

さてさて、開いた先には何があるのかね？

「おじやましませう？」

一応挨拶して、壁に空いた穴をくぐった先は……不思議の国でした。
た。

いや、冗談ですよ。

そんなだったあの人達ブタにされちゃうし、オレ銭湯で働かなきゃならんし。

入った先は、誰かのプライベートルームらしき空間だった。

大きな卵型のドーム天井には白い大きなモビールぽいものがゆらゆらしてて、透明なタイルが張ってあるらしい足元は謎の液体に満たされてて、その中でガリレオ温度計みたいな感じの球体がぶかぶか動いてる。

かなり下の方までその謎の玉があるのを見るとかなり深いらしい。透明なせいで水の上に張った氷の上に立ってるみたいでちと落ち付かない。

とりあえず、飛び石みたいにところどころ白く塗られてる円の上に立っておく。あ、これだけ何故かうサギ型だ。

そう言えば……よく見ると、この部屋とところどころウサギが隠

れる。

本物じゃなくてこう、ウサギの頭をデフォルメしたみたいな形のモチーフが隠れてるのだ。

ほら、あそこのモビールにもこそつとまざってるし。

壁際に置いてある大きなソファーの中にもウサギ型のクッションがある。

足元のガリレオ温度計もどきの中にもピコツとした耳が生えたのが居る。

壁と一体化してる収納スペース（中身は普通の食器だ）の取っ手も片方がウサギだし、置いてある椅子も背もたれがウサギだったり、真上から見ると座席と脚でウサギになってたり。

……何？ 探し物ゲームですか？

テーブルの隅っこにペタリ通された黒い隠しウツサー（これからそう呼ぼう）をさらに一個追加で見つけながらオレは部屋を見回す。

何か、全体的にシンプルというか機能美追求みたいな部屋なんだけど、その一方で隠しウツサーがあるわ、ビーズクッションが置いてあるわ、モビールはゆらゆらしてるわだし、薄い水色の壁にはところどころクレヨンの落書きっぽいのがあつたりするし。

あ、あそこにあるのってデュランも持ってたひょうたん型コーヒーマイカーじゃね？

えーっと……。

何だろうこの絶妙なカオスっぷり。何ていうか、オシャレな子供部屋、みたいなの。

「うーん、隠しウツサー探しも良いけど、あんまり大したものなさそうだな。先行くか」

幸いというか何というか、オレから見て一時の方向にぼっかり空いたアーチ上の出入り口がある。

扉もついてない。

どうぞ好きなだけお通り下さいって感じた。

いや、実は通った瞬間に即死的なトラップかもしれないけど……
違うよね？

一応通る前にさっき空になったペットボトルを突き出してひらひらしてみただけ問題なかったんで、オレはそのままそこを通過して今度は随分広いスペースに出た。

うむ、即死系トラップではなかったようだ。良かった良かった。

「久しぶりだな」

即死系な声でした。

時計塔内とオレ（後書き）

【作者後記】

危ないボタンかとも思いつつもぽちつとやってしまおうナカバ。

いや、普通に駄目でしょう。

普段本人はこんな危ないことはしない子なのですが、今回は色々は無茶をやらかしてます……はてさて、その無意識には何があるのやら。

ということでお久しぶりでございます。尋でございます。

初めての方、お越しいただきありがとうございます。

リピーターの方、ようこそ。またおいでただけて光栄です。

水曜日……と思ってるその貴方。

……。うん、まあ、色々あります（目逸らし）

とりあえず明日は予定通りUP出来るようにします。

予約しておきます。

それでは、また次もお会いできることを願って。

作者拝

煌々笑顔とオレ（前書き）

魔王、降臨。みたいな

こういう表現を自分で書くのは若干抵抗があるのですが、内容には
ぴったりだと思えます。

煌々笑顔とオレ

ビシツと背筋まで凍りついたオレの首根っこをむんずつと捕まえる手の感覚。

ああ、懐かしいですね。

懐かし過ぎて涙で目の前が見えないんだトオサン。
涙の川の向こうにお花畑が見えるんだよトオサン。
アハハ、ウフフ、アハハ。

「何か言っておきたいことはあるか？」

「ごめんじゃさいでしゃー！！！」

うわーん！　しかも噛んだー！

さて、ここで四字熟語の勉強。

孤立無援。

戦々恐々。

絶体絶命。

魔王怖い。

魔王怖い。

魔王怖い。

「……どうやら、私が何を言ったのか忘れていたようだな？」

てか、美形って何で怒つてるとキラキラ度合いが増すんですか？
や、一部例外も居るけどさ。うちのストーリーカーキモイ先輩とか。
とかそんな事でも考えてないとやってられねえんだよこんちくし
よう！

もう何か本体に近いレベルの美形っぷりを発揮しながら、きらきら
らオーラを纏い、にっこりしてるデュランの目の前に腕一本で吊る
されてぶらぶらしながらオレはカタカタと震える。

怖いです。

マジで怖いです。

もう勘弁して下さい！

美形トラウマが悪化しそうです！！

「あの、デュランさんさすがに……」

ああ、居たんだファリドじいちゃん！

良いぞ頑張れダンディ！ オレの救世主！ 年はとつても心は現
役！

「……何か？」

「……ナンデモゴザイマセン」

弱っ！ 頑張れよオイ！ デュランに媚売って権力の階段駆け上
がるつもりじゃねえのかよ！

このヘタレ！ るくでなし！ 男の屑っ！ 禿げちらかせっ！

「おや、話の最中によそ見とは……余裕だな」

「ひゃいっ！ よよよ余裕なんてめっそもにゃいっ！」

もう恐怖の涙で前が見えません。

なのにどうして神々しいまでにお美しくいらっしやるデュランの魔王スマイルだけはしつかり見えるんでしょうか。

オレはダラダラ涙を流しながらプルプルと震える。

……オレ、今日ここで死ぬかもしれない。

さようなら皆さん。今まで御支援ありがとうございました。
完。

「勝手に完結しないでもらおうか」

ピルピルしてるオレにデュランが甘い声で容赦なく囁く。

色気満載過ぎの声に血の気がざーっと音を立てて退きました。いや、本当に音が聞こえたんですよ。ざーって。

多分今ならデュランの肌と比べてもタメ張れるぐらい真っ白になつてるオレに、魔王様は容赦なくにつこり笑ったままお尋ねになれる。

「約束は覚えているか？」

「ひゃい……」

「私は、ファリドに案内して貰えと言ったな？」

「ひゃい……ううう」

「何故離した」

離してません、離してません。

そう言う思いを込めてブンブン首を振ったら、魔王様の笑みが深くなった。

心なしが周囲の空気の温度まで下がったと気がする。

遠くの方で隠れてる役立たずなファリドさん死ねばいいのにまでプルプル蒼くなって縮こまって震えてる。

ああ、あっちに行きたい。

「……またよそ見とは余程お前は」

「しゅみませんでしたあつ！」

「……。ああ、ちなみにお前がそのかしてファリドを追い払ったのは分かっているからな」

そう言うてにつこりと微笑むデュラン。

纏つきらきらオーラが二倍になりました！

そして、しつこいようですが目が笑ってません！

てか、あつさりばれてるし！ ファリドじいちゃんちくつたな！

オレが八つ当たり気味に睨みつけると、ファリドさんは意図を悟ったのか手で大きくバツ印を作ってガタガタ震えた。

裏切り者！ 裏切り者！

「ファリドから聞かずとも分かる。私を誰だと思っている？」

お美しい声ですね、恐怖の魔王様。

「そしてまたよそ見か……そうか、よほどファリドが気に入ったようだな？ ん？」

「ちちちちちがいます」

「ならきちんと私の目を見る」

分かりました！ 精神的拷問ですね！

とか思ってる間に頭をもう一つの手で掴まれて、ぐいっとデュランと向かい合うように変えられる。

うっ。

きらきらしてて怖いよ。

美形すぎて本気で怖いよ。

目が笑ってないせいで怖さ突き抜けだよ。

「もう一つの言いつけまで破ってないだろうな？」

「やぶってましえんっ！」

ぶらぶらぶら下がりながら、ぴるぴる震えつつオレは敬礼ポーズで報告する。

「上官様（おんかみさま）の命令は絶対でありマス！」

「もう一つの方はあっさり破ったようだがな」

すみませんでしたああああっ！

ガタガタ震えてるオレに、デュランは笑顔のまま笑っていない目を細める。

「今すぐ、あの娘たちと共に元の場所へ帰るか」

「ごめんなさい本気でごめんなさいマジでごめんなさいもう本気で勘弁して下さいごめんなさい私はドジでのろまなカメ何で進みません本当にもう無理です無理です！ぱい！ぱい！なんです反省してるんです身にしてみてるんですむしる骨身にまでじっくりことと煮込まれたぐらいのレベルでしましたっていうか軽く魂抜けて昇天しそうなぐらい怖いんでもう止めてくださいお願いします土下座しても良いっていうかひざまずいてあしをおなめとか怪物 女みたいなかんじでももうやりますから三回まわってワンっていつてもいいんでもう勘弁して下さい泣きたいですってか泣いてますからー！」

「……お前は一体どういう目で俺を見ているのかな？」

もう、プライドとか言ってられる状況でも無く、恥も外聞もなく恐怖で号泣したオレにデュランは溜息をついて、一端視線を外す。

「何故離れた」

「ううう……」

「理由を聞こう……俺も先にお前を怯えさせすぎた……」

「すまない」と何処か疲れた様子で呟くデュランに、オレはぐしゅぐしゅと鼻を慣らして奴の方を見る。

相変わらず目に猛毒な顔だけど、デュランはもうさっきみたいな魔王スマイルじゃなかった。

苦笑のような、笑顔。

紫色の目は何処か疲れてるような、諦めてるような、暗い色をしていた。

それに、オレはなんだか胸が痛む。

そうだ。

デュランが何で怒ってるのかぐらいさっさと気付いて当然だったのに……いや、笑顔のお怒りな魔王様があまりに怖すぎて、正直ちびりそうなくらい怖かったんで頭が動かなかったんですけどね。

あ、ちびってないですよ。

オレの名誉の為に言っておくけど本当にそんなことはなっておりません。

なぜなら、怖すぎて全身ガチガチに凍りついてたのでそんなことしたくでも出来ませんでしたから。

うん、でも今は違う。

泣いて頭も冷えた。

それに、デュランは何だか、笑ってるのに、笑っているように見えなくて。

……。

怒られてた間、かたく握りしめてた手から、強張ってた体からゆっくり緊張が抜け落ちてゆく。

「デュラン……」

「何だ……」

オレの方を見る紫色の目。

それを見て、ふっと体の緊張がほどけるのを感じながら、オレは今の気持ちを口に出すべきかどうか、迷う。

でも、今伝えなかつたらきつと後悔する。

……うん。

絶対、後悔する。

「デュラン、あのさ、オレ。その……さ」

「ああ」

言いかけて、またちよつと躊躇ったオレにデュランが怪訝そうに首を傾げる。

あー、くそ。

今オレの顔赤いだろっなー！

すっげーもじもじしてるだろっな。

そりゃあ不審な目でみられてもしょうがねえよな。

なんて他人事のように思ってみたり。

「どっした」

アルトの声に促されて、オレは決心する。

ナカバ、ここはひとつキッパリ言ってやれ。

覚悟を決めて、腹をくくれ。

オレはデュランの綺麗すぎる顔を正面から見て、告げる。

「便所行きたい」

「分かった」

幸いセーフでした。

煌々笑顔とオレ（後書き）

【作者後記】

最後の辺りの下りに何か期待されていたその貴方……、「計画通り」（ニヤリッ／某ノートの人っぽく）

ちなみにデュランの方の台詞はどう受け取って頂いても結構です。

さて皆様今晚は、尋でございます。

昨日に引き続いていらっしゃって下さった貴方、ありがとうございます。

初めておいでの方、ようこそ。気に入ったのならゆっくりしていただいて下さいね。

久し振りの方、またお目にかかれたことを嬉しく思います。

今回は大分自分の楽しみに走ってしまいました。

読んで下さった貴方も楽しんで下さったならそれが一番です。

さて、今回魔王様降臨の回となりました。やっと合流です。

少し話を引き締めて行こうと思います。

それでは、またの機会にお目にかかれる事を願って。

作者拝

移動手段とオレ

まあ、気が緩んだら……うん、生理的反応ってやつですよ。すつきりしたーとすがすがしい気分ですっきりして、ついでに顔もばっしばっしばと洗う。

うん、リムりん達が施してくれた化粧は涙ですりすりになってもいい。

うーん、しかし微妙に一部落ちない。

どうするかなあ。

ただ泣きしたせいで目も微妙に腫れちゃったし。

というか昨日に引き続き今日も魔王様に泣かされちゃいましたよ、オレ。

涙なんて流したの何時振りだろう？

ここ数年、少なくともあの日以来は泣いてないはずだからなあ……その今まで溜めてきた分を一気に使いきっちゃった気分だ。

何かすつきりした。無茶苦茶怖かったけどね。

妙にはればれとした気持ちで外に出ると、デュランが腕組みして暇そうに待っていた。

「おまたー」

「せ」

うむ、ちゃんと補充してるあたり機嫌は直つたらしい。

そんなこと考えてたら、デュランはしみじみとした目でオレを爪先から頭のとっぺんまで眺め、

「酷いな」

「うっせえよ」

声のトーンが低くなったのはデュランが悪いと主張します。それでも足を出さなかったのは……内心同感だったからで。さっき鏡見た時にオレもちょっと思ったんだ。

こりゃひでえ、って。

折角リムりんが選んで買ってくれたワンピース（リムりんにしてはフリフリとかが控え目で、オレへの気遣いが溢れてる）がすっかり草と泥で汚れてしまったのだ。

整えて貰った髪もばっさばさで、ピンもどっかに無くしたし。

まあ、髪がオレ硬いんでほっとけばこうなるのはしょうがねえんだけどさ。

鏡に映った俺はデロデロの化粧も手伝って、まるで人間の服を着せられたサルだった。

思わず見た瞬間爆笑したんで、外にいたデュランとかファリドさんはさぞかしビビっただろう。

……いや、デュランはビビらないか。残念。

まあ、その辺はともかく酷いのは確かだ。

それとやっぱりの足のすかすかした感じは落ちつかない。

正直、まだ今のオレにはこういう格好はきつい。

髪を切ったて、どんな格好をしたって、中身はオレから変わってないんだもん。しょうがねえよなあ。

そんなことをぐちゃぐちゃ考えてたら、デュランが組んでいた腕を解いてオレの方にあるいてきた。

そして、オレの頭に触れる。

「何？」

「落ちていた」

んー？

デュランがすつと離れたんで、オレは手を伸ばして触られたところを探ってみる。

さっき無くしたピンが留ってた。

「うわ、良く見つけたな」

「探したからな」

こともなげに言うデュラン。

「お前すげえな。こんなちっこいもん探してもなかなか見つからないぞ」

「まあ、確かになかなか見つからなかったな……小さすぎてな」

「だよなあ。オレなら絶対無理」

無くすのは得意ですけど何か。

何故か微妙に呆れた目で眺められてるけど、オレが素直に尊敬するのはそんなに変ですかこの野郎。

しかし、何でオレがピンを無くしたことを離れてたデュランが知ってたんだらう？

うーん、魔王には謎がいっぱいです。

「化粧も落そうとしたのか」

「落したんです」

「残っている」

はいそうですね。

むすつとすると、デュランは苦笑して「まあお前に化粧はまだ必要ないと思うがな」とか言ってきた。

「何で？」

「何故化粧をする」

「うーん……」

何故でしょう。

オレは普段しないので分かりません。

「まあ、必要な時に適切に行うことだ」

「それが出来れば誰も苦労しねえよ」

オレが冷静に指摘するとデュランはきょんとんとして、「それもそ
うだな」とそれから苦笑した。

当たり前的事ですからね。

「てかこのワンピース、お前の魔法で一瞬でさくつと綺麗にしたり
とか出来ねえの？」

「一応出来るがな……」

何その生返事。

「魔力のストックにも限度があるからな」

「うーん……どっかでまた補給すれば良いんじゃないかねえの？ ほら、

あそこの隅っこで何かトラウマっぽいもの抱えてブルブルしてるフ
アルドさんとかからほいほいと」

「ここからでは無理だ。触れて居れば出来るが……」
「触れるですか」

「まあ、一度食った相手ならば相手の体が俺を覚えているから、二
度目以降は簡単にやれるのだが……ファルドはまだ経験がない上に
中央十騎士だからな。無理矢理抑え込んで頂いてしまうというのは
あまり気が進まん……」

……。

……えーっと、はい？

あ、そうか。魔力は魔族にとっては食事だったんだっただ。

つまり、あの列車でデュランはアドルフを美味しくいただいたわけである。

新事実発覚。

しかもアドルフ、二度も食われてた。

衝撃の新事実発覚。

魔王様、意外と手が早いんですね。

「てか、無理やりじゃなきゃ良いわけ？」

「合意の上なら構わんだろう。痛みもないし、別段存在が保てなくなる程の量を食っている訳でもないしな」

最低限しか食って無い、と主張する魔王様。

しかし、魔王の最低限って言われてもなあ。

それに、合意じゃなくても何とかかなりそうな口ぶりだったんですけど。

「本当に最低限だぞ」

オレの疑いの眼差しにデュランが苦笑する。

「何故俺がわざわざ列車やバスを使っていると思っている」

「観光したいから」

「……」

あ、目逸らしやがった。凶星だからって逃げんなコラ。

「まあ、それだけでは無い」

「じゃあ、何だよ」

「移動魔法が殆ど使えないからだ」

「移動魔法って……空を飛ぶとか、瞬間移動とか？」

「まさしくそれだな」

「空飛ぶぐらいはやつぱ魔王として出来なくちゃ拙くねえの？」

「本体ならば……いや、あれもまずいか」

飛べない魔王はただの豚だぐたれと思います。

「まあ、瞬間移動……のようなものなら一回のみ、マーカのある場所へと条件を限れば出来る。その程度の余力しかこの体には残していない」

「え？ 空飛ぶ方が難しいんじゃないの？ 何？ 高所恐怖症？」

「違う。魔王おれが高所恐怖症などイメージダウンだろう」

移動手段が無くてバスを使って、なおかつドーナツ屋さんの飲み放題コーヒーにつられて、ついでに鼻眼鏡かけた時点で魔王のイメージは地に落ちて土まみれだと思います。

「まあ、聞け。瞬間移動……のようなものは正式には移動では無い」

「てか、その「の、ようなもの」って何」

「お前にはこの言葉を使った方が分かり易いから瞬間移動と言っているが、原理から見ればこの名称は正しくないからだ」

「デユラン」

「何だ」

「その語尾つつとつしいから禁止。普通に瞬間移動って言え」

「……。テレポートは」

往生際の悪い奴め。

「あれは移動では無い」

「移動してるじゃん」

「正確には、座標を変更しているだけだ。よって消費する魔力は少なくて済む。空を飛ぶのは移動であって、移動中の区間でも魔力を消費するからな……テレポートの方が効率が良い」

「ほむ。点の置き換えと、目的地と出発地を結ぶ線の差ってことか」
「のみこみが早くて助かる」

「じゃ、マーカーって何？」

「文字通りマーク……だな。テレポート先を特定する為の目印と言っても良い」

「そこめがけてジャンプ！ って感じ？」

「まあな」

「それってマーカーずらすとか可能？」

「可能だが……基本的にずらせないようなものに文字を入れているからな。まず無理だろう。とは言え、妨害されれば失敗することもある」

「へー。お前が失敗ねえ……」

「まあ、最近も一度失敗したしな……何だ、ニヤニヤして」

「いやー？ 別にー？」

ザマアミロとか思ってますよ？ ププッ。

「懲りないなお前は」

「誉め言葉と思っておきます」

「本当に懲りないな……さて、話の続きに戻ろうか」

「ん？ 飛べないお前はただのゴミだって話？」

「いいや」

デュランは首を振ってにっこり笑う。

「何故言いつけを破ったのか、言い訳させてやると言ったのだろっ？」

移動手段とオレ（後書き）

【作者後記】

ナカバとデュランがタッグを組むだけで字数が増える不思議……。二人とも喋りすぎです。

そんな事はさておいて、今晚は尋でございます。

初めての方、今晚は。つたない内容ではございますが、お気に召したなら幸いです。

そうでなければ、力及ばず、貴重な時間を頂いたことを申し訳なく思います。

再度ご来訪の貴方。またお会いできてうれしく思います。

何度も繰り返し返して告げているセリフですが、一重に尋の語彙が足りないだけです……。が、こもっている気持ちは本物です。

そろそろ終盤に差し掛かって来ました。

速度を落とさず、質を落とさず。困難ですが両立してゆけるよう精進します。

それでは、またお会いできますように。それまでご健勝に。

作者拝

冷血魔王とオレ

ちなみに、灰と化していたファリドじいちゃんが仕事放棄で、案内する気ゼロだったあたりは誤魔化そうとしましたが……魔王には勝てませんでした。

矛盾を突かれ、揺さぶりをかけられ、何か洗いざらい白状させられました。

ごめんファリドじいちゃん。

オレちくつちゃった。

何か向こうの方でデュランの冷やかな視線と、あくまで優しい声にいたづらされてるファリドさんを見ながらオレはそっと手を合わせる。

でも、心なしか詰られるうちにファリドさんの顔が緩み始めてるのは気のせいだろうか。

何か微妙に顔が赤くなってるのも気のせいだろうか。

……デュラン、今お前は中央十騎士の一人を新たな世界に目覚めさせようとしてるんじゃないか？

詰られて、軽蔑の眼差しで見下されて何やら興奮を覚えてるらしいファリドさんからオレはそっと目をそむける。

うん、あの人には遠い世界で幸せになってもらおう。

「さて、そろそろ良い時間か」

ファリドさんを調教してたデュランがふっと踵を返してこっちにやって来る。

思わず逃げた。

あっさり捕まった。

「……また勝手に何処か行くつもりなのかな？」
「滅相もございませんです！」

なのでオレの調教は止めてください。

まだそつちの世界には興味ありませんからっ！

恐れ戦くオレにデュランは微妙そつな顔をしていたが、気持ちを切り替えたのか上を指す。

つられて上を見ると卵型ドームの天井から巨大な振り子がぎっこんばつたんと動いてた。

その振り子の表面に何か色々くっついてたり、わっかが周囲をぐるーっと囲んでたりするようだけど真下のこの位置じゃ良く分からない。

さらにその周囲には螺旋階段がぐるーっと天井沿いにのびていてずつと上の方まで続いている。あそこを登った日には翌日全身が筋肉痛でガツキボツキになるだろう。間違いない。
てか何に使うんだあんな凶器みたいな階段。

「えーと、あの振り子が【永久時計】？」
「では無い」

なんだ紛らわしい。

「じゃあ何さ」

「あれは【カノンコード天季盤・セカンダ第貳番】だな……この界の季節の運航、並びに気象の制御運営装置だ」

「……あれ、何か凄い単語が聞こえたような気が。耳に水入ったかな」

「本当の話だ」

耳は無事だったっぽい。

「太陽や星、月などが天球上を規則正しく運行しているのは、あそこから指令を発信しているせいだ」

「指令って、誰の？」

「この管理人達だ。とは言っても、今は一人だけだな」
「ほー」

管理人ってことは双神子様のことだな、多分。

しかし双神子様って【永久時計】の管理以外にもいろいろ仕事があるんだなあ。

それも世界規模の。
ん？

「じゃあさ。双神子様ってやろうと思えば好きな時に好きな場所に雨降らせたり、嵐にしたり、雷落としたり、雪で埋め尽くせるんだ」
「……。まあ、他にも晴れにすることも出来るがな。事実、此方に俺たちが来てから晴れ続きだろう」

「あれ？ あれって偶然じゃねえの？」

「この世に偶然など無い、あるのは必然だけ」

お前はどこの次元の魔女ですか。

じろつと睨むとデュランは「冗談だ」と笑って手を振った。

大して面白くもねえんだよっ！ と某メガネ君っぽい感じの動きで突っ込みを入れておいた。

ちよつと体がつった。

「でもさー、それって結構怖くね？」

「何故？」

「だって世界中のエネルギーの首根っこ握ってる人が、天候まで操っているとかさ。どっかが気に入らねえなーってなったら雨降らしま

くってやつつけるとか出来るし。バランス的に偏りすぎじゃね？」

「ふふ、すぐにそれに気付いて聞いてくるか」

「んー……だって、お前に聞く分には問題ねえだろ？」

そりゃあ普通の人が聞いたら目を剥くか、「頭おかしいんじゃないのこいつ？」って目で見られるか、危険思想をもった異分子だって迫害されたり怒られたりしそうだけども。

でも、デュランは魔王だし。

変な色眼鏡無くオレの意見を聞いてくれるだろうし。

色々裏事情も知ってそうだし。だから良いかなーと思ったんだけど、ダメ？

「まあ、確かに問題ないな……そして、お前の疑念だが、そちらも問題ない」

「何で？」

「あれらには自ら人間に害を加えることは出来ないように予めセーフフィルターがその存在に組み込まれている。仮に殺されかけても人間に自分から抵抗することは出来ない」

「え？ それもなんか随分だな……」

「だからこそ中央十騎士が存在するということだ」

「つまり？」

「自分では戦えないから、他に自分の意図どおりに動く人間を使って対抗する」

「……理屈としては分かるけど、何か悪どくねえ？ 中央十騎士にメリットあんのか？」

「あるぞ」

ま、メリット無かったらやらんよね。

「例えば、報酬もそうだな……一月分でお前の住んでいるあの建物

くらいなら軽く買えるだろうな」
「ぐっはあ」

てことはあつちのファリドさんとか、ナーさんもそうなのか。
……殺意を覚えるのは小市民の宿命でしょうか。
あんのジジイどもめ……。

「他にも身体能力も魔力も制御系も全てが上がる。ついでに老化速度も落ちる。ある意味人ではない存在になるということだな」

「あー、そりゃ志望者増えそうだな」

「色々特典はついてくるのだが……だがそれ以上に、中央十騎士になると双神子の意思に沿い、双神子の為に行動すること自体に喜びを覚えるようになるからな」

「洗脳？」

「そもそも双神子に絶対の忠誠を誓い、それから先の可能性全てを双神子に差し出すことで得る特権だ。契約の結論として当然のことだな」

そう言えばナーさんも、双神子様の為じゃなかったら指一本だつて動かさないつってたっけ。

あれ比喻とかじゃなかったんだな。

「まあ、中央十騎士の盲信をあまり責めてやるな。あれはただ、今はそういう存在になっているだけだ」

「んー……」

「それに、アレらも苦労していない訳ではない。【天季盤】を維持しているのはあれら自身の力を消費してのことだし、【永久時計】の機構の一部として生きるのもけっして楽な事では無い」

「だからこそ」とデュランは何でか苦い感じの笑みを浮かべて

大きな振り子を見上げる。

「こんなどうでも良いことに、わざわざ力を割くことは無いのだがな……」

「いやいや、どう考えてもどうでもよくないだろ。全国のお百姓さんと海の男と、明日雨になれと願ってる運動会直前のお子様には謝れ」「すまなかった」

素直でよろしい。

「で？ 話は戻るけど、上がどうしたって？」

「これから上がる」

「人殺し！ 人殺し！ 冷血漢！ サド！」

「……待て、なんだその反応は」

オレはびしっと延々と続いてる地獄の螺旋階段を指さす。

「オレに登れるわけねえだろうが！」

「まあ、そうだろうな」

「分かってて言うてんのかこの野郎！ 魔界に落ちろ！」

「言われずと落ちるが、俺達が使うのはそれだ」

デュランは上を指してた指をそのまますーっと下ろして、床に描かれたでっかい三つの紋章っぽいものの一つを指さす。

うーん、何か花をこう抽象化したような紋章なのは分かるけど、何の花かは分からない。

五弁の花びらの上にさらに何かこう、ヒラヒラしたのが乗っかってるといふ……ランっばいかな。

「あれ何の花をベースにした模様なん？」

「エピソードラムだ」

「エピソード……え？」

「エピソードラムだ」

「……もう一回」

「エピソードラムだ」

よし、分かった。

覚えられない。

「ちなみにあつちのは？ 何か真中にちっちゃい梅の花みたいのがくつつてて……何かああ言う感じの斑入りのミントなかつたっけ？」

「あれは薄荷ではなく初雪草だな。庭にもあるぞ」

「へー、気付かなかった」

これは覚えた。初雪草ね。うん。後で探そう。

「で、あ、あれは何か見たことある」

「何か分かるか？」

「えーと……えーつとね。ちょっと待って」

しばらくじつくり考えて、オレはポンと手を打つ。

「うん！ 分からん！」

「マリーゴールドだ」

「あ、そういうんだ……で、名前何だっけ？ もっかい言って？」

「後でメモを作ってやろう」

何か諦めたっぽいデュランが疲れたようにそう言ってくれた。
うん、まあその方が忘れないけどね。

「で、あれが何？」

「まあエレベーターのようなものだ。あの上に乗るとベクトル展開によって目的地まで運ばれる」

「移動？」

「移動だな」

「目的地つてどい？」

「お前達が言うところの双神子様の部屋の前に通じている」

「……へ？」

「出来るなら会ってみたいと言っただらう」

いや、言っただけ……もう会っちゃったと言いますかですね。

「とりあえずあの恐ろしい階段は登らなくて良いんだ」

「あれは別の所への道だし……お前にあれを登らせる気は元から無い」

なあんだ、びっくりした。

じゃあ疑問も解決したところでちやっちゃんか参りましょう。

双神子様待たせるのは多分良くないし、せつかく会えるなら……あれ、でもあんまり会いたくないかも？ ほら、さつき猛ダッシュで逃げたばかりと言いますかですねごにょごにょ。

とか考えてたら、むんずつと襟首をひつつかまれた。

「はい？」

「さて、誤解が解けたところで先程の言葉の訂正を貰おうか」

「へ？」

「誰が人殺しで冷血漢でサドだった？」

今オレを捕獲して目だけ笑って無い笑顔を向けてる貴方は充分サドだと思つんですが、どうなんでしょう？

冷血魔王とオレ（後書き）

【作者後記】

出てきた二つの植物はどれも実在するものです。それぞれ一応意味があります。

さて、今晩は尋でございます。

初めての方もリピーターな方も迷子の方もようこそいらっしやいました。

少しでも笑ったり、楽しんだりして頂けたなら本望です。

さて。

ナカバ、再び双神子様とご対面ということ……次回ご期待頂ければ嬉しいです。

作者拝

現実逃避とオレ

正直ものすごく気が重い。

何せ、さつき、ほんのついさつきオレ双神子様にケンカ売っちゃったばかりですから。

そう言えば前にデュランがあのえろい声で「後で良いことをしてやろう」って言ってたの忘れてたですよ。

ん？ ちよっとニュアンスが違うな。

良い子にしてたら会わせてやろう、だっけ？ 良く覚えてないや。あの時は「うわやった、魔王超すげー」とか思ってたけど今となっては後悔しかありません。

どの面下げて、さつき喧嘩売った挙句尻尾巻いて逃げだした姿を見られてる相手の前に顔を出せと！

「……何をしている」

「意志表明を」

柱っぱいところに　っこちゃん人形みたいにひしつとしがみついたままオレは答える。

「……そうか」

あっさりベリッと引っぺがされました。
ぎにゃー！

「鬼ー！ 悪魔ー！ 魔王ー！」

「……流石に魔王は酷いと思いますが」

ファリドさんが控え目にフォローを入れてるけどデュランは平然

としている。

だって本物まものだもんな。

そんな極悪人の魔王様はオレを引きずりかけた姿勢のまま、小さく首を傾げる。

「何をそんなに抵抗する」

「いや、何と云うか微妙に会うことに抵抗があると言いますかですね……」

もによもによと語尾を誤魔化したら、デュランが苦笑した。

「そう緊張するな。あれは割合気立てが良いし、悪い奴ではない」

……アレって双神子様のことですか？

さすがに双神子様を「アレ」呼ばわりしたのがファリドさんにはれると拙いのは分かってるのか、デュランは小声でオレに言っ、片目を瞑って見せる。

何ウインクなんかしてるんですか馬鹿ですか。

てかそれが様になるなんてさすが美形ですね。超絶イケメンですね。爆発しろ。

「さて、反論が無かったところで行くぞ」

「あ、待って待って。今反論考えるから！」

「あ、デュランさん勝手に入っては！」

「ん？」

「……どうぞお入りください」

につこり笑ったデュランに、さっと敬礼するファリドさん。心の底から屈服してます。

それで良いのか中央十騎士。

あ、中央十騎士と言えばナーさんどこだ。
おのれ、不利と悟って一人だけで逃げやがったな、あんにやろう！
天使みたいな顔して悪魔みたいな奴だな！ あれですか、一昔前
にはやった小悪魔系ですか！ ぴったりだな！

ちくしょう、帰ってこいナーさん。へるぷみー！

「さ、行くぞ」

「や、やだ。待って、はじめてなのにこんな……まだ、心の準備が
……」

「そつかそつか」

「聞く気ゼロかよこんにやろうっ！」

オレが心の血涙流してる間にもデュランはまるで友達の家に入る
みたいにならずかドアの方へ進む。

当然のようにオレの首根っこ掴んで引きずったままで。

ぎゃーす！ ギャああーす！

全力で暴れても、がちり掴まれてる感じは無いのに全然外れね
えんだよ。

お前さ、今パワーダウンして人並みの能力しかねえんじやなかつ
たの？

この嘔吐き！ 嘔吐き！

「入るぞ」

「入らんで良いからっ！」 「どうぞお入りください」

はい、どちらの要望が通ったでしょうか？
当然オレじゃねえ方だよ。けっ。

デュランの前にあった扉がシュッと音を立てて自動ドアのように

左右に開く。

きゃー！

「って……あれ？」

意外と、地味？

オレはデュランにずるずるされながらキョロリと辺りを見回してみよう。

木目のある壁。

床は若草色の石っぽい感じの素材だな……なんだろう？ かなりツルツルしてて、タイルみたいな繋ぎ目も無いのでオレもスムーズに引きずられることが出来ます。便利ですな。

ちなみに天井には薄い布の幕が縦横斜めに張ってあって、多分あの上には何かの照明があるんだと思う。

間接照明って光が優しくって良いよね。うん。

「どこを見ている」

特に冷暖房はかけてないっぽいんだけど、適温かな。

それと、ほんのり部屋の空気に何かポップっぽい匂いが混ざってる。落ちつくようないい匂いだ。

「ちゃんと前を向け」

何でオレがこの部屋のレポートしてるかということですね、

「現実逃避するな」

現実逃避ぐらいさせてくれ！

天井だけ見てたら、ニユツとデュランの顔に覗きこまれた。だか

らその顔出すなっば。

「やれやれ」

さかさまに映ったデュランの顔が苦笑して、ひょいっと床から持ち上げられた。

そして、ペイツと落される。

うん、まあ、つまり双神子様の目の前になってことですよ。
ばつちり目が合いましたとも！

双神子様は家具の無い部屋の真ん中に備え付けられたベッドの上に居た。

その脇にいるのは第三位のアルアールレフさんだ。

てか、双神子様さつきと庭で会った時とは恰好が違う。着替えたのか？

あの時はドレスにもふもふな襟巻っていうか、シヨールみたいな感じのをぐるっと上半身に巻きつけてたけど、黒のスケスケなネグリジエっぽいものをお召しになって、何と無く絹っぽい光沢のあるシーツを敷いたベッドの上に横になってる……あれ、どっかで似たような光景見たような。

ついでに寝てるベットはアレです。お姫様ベッド。

上からカーテンみたいなのをこう、がーっと垂らしてる奴ね。

ちなみに流石にフリルとか、花柄とか、色がピンクだとかそういうことは無かった。

ネグリジエと同じ黒で、金色の刺繍がちよこちよこしてあるって感じ。

あそこにオレが居てもまあ場違いなんだろうけど、銀髪で容姿端麗な双神子様には良くお似合いです。

てか、しどけなく崩したネグリジエが色っぽ過ぎます双神子様。目の保養ですな！

いやいや、見とれてる場合じゃなくて……挨拶しなきゃ。

そう思ってオレは愛想笑いを浮かべて何て言おうかと考えながら
双神子様を見て、あることに気付く。

「あーっ！」

「どうした」

「無いーっ！」

あ、あれが無いっ！
なんてことだ！

「む」

「む？」

「胸が無いーっ！ オレの、オレのきよぬまくらーがー！！」

……あ。

しろーい視線の中でオレはしまったと思ったけど後の祭りでした。
けど。

「くっ……」

沈黙を破った無駄に色気たっぷりな笑い声にオレはデュランを見
上げる。

「何か面白いのかよ」

「いや……くっくっ……」

笑いをこらえてるのか、口元を手で押さえて顔をそむけ、肩を震
わせてるデュラン。

「まったく……お前は……くくっ」

「なんだよー！」

「ふふっ……」

笑っていないで答えやがれ、とオレはギロツとデュランを睨む。それに代って答えたのは寝そべっていた双神子様だった。

「私は、無性種ゼロですから……」

「ゼロだって?! ……って、ゼロって何だっけ？」

ゼロの焦 ……いや、あれは小説か。

えーと、じゃあゼロの頂 ……いや、あれはパロCMか。

ゼロの使魔 ……や、あれはひんぬー正義か。

ゼロツ スはプリンターとかの会社だし、某赤い蝶はホラーゲームだし、ニユースでもないだろうし、ゼロ金利政策は大分前に終わってるし。

ゼロって何かもっところ、有名なものがあつたような……。

「あ……え、ゼロ・パーツ?!」

でもゼロ・パーツって黒髪に紫の目じゃなかったっけか？

ここに居るデュランみたいに。

それに比べて双神子様は綺麗な銀色の髪にガラス玉みたいな真っ黒な眼をしている。あんまりゼロ・パーツには見えないよなあ。

「無性種ゼロというのはな、中性種カルマの一つだ」

「カルマ？」

「中性種カルマだ。所謂いわゆるオス、メスに分類できないカテゴリーの存在のことだな。無性種ゼロは言ってみれば女でも男でもない存在だ」

「ほほう? え? てことは胸もゼロってことか?!」

「ええ」

にっこりとほほ笑む双神子様。

「でも、男性の身体部も持っていないません。無性種ゼロですから」
「てことは、あの至福のむっちりもっちり感触はマボロシ……」

そんなぁ……。

本気でがっかりしたオレに双神様が不思議そうに首を傾げる。
だって。だって。だって！

ぜったいたいアレは素敵なきよぬー枕だと思ってたのですよ！ 近年まれにみる最高級枕だと思ってたのですよ！

そりゃあ、実際手で揉んだわけじゃなくて顔をむぎゅーっとしただけですし？ ふつかふかの襟巻越してしたけどさ。

でも、きよぬリストのオレが間違えたなんて！ ショックだっ！

「これは今すぐ修行の旅に出なくては」
「何の修行だ」

あっさりデュランに首根っこを掴んで引つ張り戻され、俺の修行の旅は一步目から挫折しました。

「だから言っておいただろう。男でも女でもない」と

「ううう……」
「ちなみに最も有名な無性種ゼロがゼロ・パーツと呼ばれる一連のシリズだな」

「きよぬー……オレのきよぬーが……」

「お前のではない。他を当たれ」
「ううう……」

もう一度現実逃避したくなったオレなのでした。ううう。

現実逃避とオレ（後書き）

【作者後記】

ということ、黒の君は無性でした。

あ、黒の君というのは上に出てる双神子様のことですよ。

今晚は、尋でございます。

初めての方もそうでない方もよろこそ。

クーラーという文明の利器のありがたさが分かるような今日この頃ですが、どうか熱中症にはお気を付けて。

尋は何度か危ない所に踏みこんでいたようです。

誘惑極意とオレ（前書き）

I s t h i s a p e n ?
N o , i t i s n ' t .

誘惑極意とオレ

「さて、落ちついたところで紹介しておこう」

まだちよつと夢の国に心を飛ばしてるオレを摘み上げ、腕の先にブラーンとつりさげたままデュランが話を進める。

……てか今更だけどお前本当にパワーダウンしてるのか？
オレ、言つとくけどそんなに軽くないはずなんだけどな。
片手で軽々と扱うとか、お前弱いなんて絶対嘘だろ。

「これは俺の連れだ」

「これ言うな！」

「この場合はあれ、とは言わんだろう。距離が近いからな」

「コソアドの話なんざしてねえよ」

「これはメアリーです」

「メアリーでもねえよ。誰だメアリー」

「彼女はメアリーですか？」

「いいえ、彼女はアールアールさんです」

「これはペンですか？」

「いいえ、違います。これは机です」

「成程、お前は机だったのか」

「んな訳あるかつ！」

てか、ペンと見間違える机ってどんな机なんだろう。

言語学の授業は謎がいっぱいだ。

「あの……」

オレ達が楽しく授業ごっこしてるのについてけなかったのか、控

え目に、ずごく申し訳なさそうに双神子様が言葉を挟んできた。

あ、ちよつとだけ忘れてましたすみません。

「ああ、すまんな」

ちつとも反省してない感じで笑って、デュランがオレをひよいと床に下ろす。

「ともかく、連れだ」

「あ、あはは……えーと、どうも」

さっきぶりです。

ひきつった笑顔で挨拶したオレに、双神子様は何とも優雅な感じで微笑みを浮かべて「初めまして」と優しい声で御挨拶下さいました。

「あ、はい初め……」

……あれ？

いやいや、初めましてってついさっきお会いしましたよね？

もう忘れられたんでしょうか。

まあオレみたいなパンピーは記憶にとどめる価値もないんですけど……でも、デュランがそんな相手のことを気立てが良いとか、悪い奴ではないとか言っつかねえ。

デュランの感覚もちつとばかり変だから、微妙に信用ならない評価ではあるんだけどね。

でも、魔王なのに魔王だってことをかさにくてかかるとか、そう言うのが大嫌いなデュランのことだ。一般人だからって即座に記憶からデリートするような相手を褒めるか？

……。

あれ、てことはもしかしてオレ、分かってて無かったことにされてます？

それはそれでへこむんですけど。

「えーと」

ここにこしてる双神子様の顔をオレは見る。

ににににに。

「えーと」

ににににに。

「その、オレさっき」

ににににに。

「……初めまして」

はい、空気は読みますよ。

「で、あれが双神子の一人。お前達の通称では黒の君や黒の姫と呼ばれているのだったか……」

「あ、うん。聞いたことある」

「まあ、つまりクロだ」

今何か「つまり」の後が可笑しくなかったか？

え？ まさかと思うけど、その「クロ」ってのが名前じゃないよ

ね？

「BBだから、クロだ」

「意味わかんねえよ！」

……あ。

思わず某夏の人バリの突っ込みをしてからオレは冷や汗を流して固まる。

うん、今アールアールレフさんからむっちゃ睨まれています。

いや、本当にさつきからすみません。無礼者ぞろいで。

「お止よなさい、アールアールレフ。お客様に失礼でしょう……」

「しかし姫……」

「良いのです。お義姉様はいつもああでいらっしやるのですから……」

うちのデュランが御迷惑をおかけしております。

「そちらが、お義姉ねえ様のお連れ様なのですね……」

さっきの暴言をさらっと流して、相変わらず儂げなオーラを帯びたまま、上品に微笑む双神子様。

その笑顔からは怒りも、黒さの欠片も見えませんが。

恐るべし！

「ああ」

「まあ、一応そつです」

「ふふ、羨ましいですね……」

羨ましいなら代わって差し上げます。

デュランに首根っこ掴まれて振り回されたり、勝手な方向に行かれて振り回されたり、ついでに珈琲をおしつけられたり、笑顔で脅されてトラウマ植えつけられたりしますが、それでも良ければどうぞ。

と、言おうかと思ってオレは双神子様の顔を見て……口を引き結ぶ。

あ、そういうことですか。

ふーん。

はいはい、そーですか。そういうことですか。なるほどねー。

オレはちらっとデュランの顔を見上げてみる。

うん、こいつは予想通り完全スルーというか、全く気付いてないな。

爆死しろイケメン。

でも今、色々と納得しましたよ。

何でさっき庭で双神子様と事前面接受けさせられたのか、とか。

つまり、大事なデュラン「お義姉様」が余所の女を連れ回してるから気になって様子見に来てたんですね。

双神子様も意外と人間っぽいところあるんだなあ。

青白いほっぺたをほんのりピンクにして、潤んだ黒い目でデュランを見てる双神子様にオレは思わずニマニマする。

良いねえ。良いねえ。

若いねえ。

これぞ青春だねえ。

正直、オレ的にはデュランはお薦めしませんけど、その辺は個人の自由ですし。

まあ見た目だけは無駄に良いから、そう言うのが平気な人には見

てるだけで価値があるかもしれないし。

オレはイケメン何か滅べば良いと思ってますけどね。

「滞在は楽しんでいただけってますか、お義姉様」

「お前のお陰でな……しかし、天候ぐらい普段通りにしていい良かったのだぞ」

「……余計、でしたでしょうか」

オレと違って空気が読めない魔王様の言葉に、双神子様がしゅーんとうなだれる。

やっべえ、ちょー可愛い。

思わず抱きしめたくなる可憐さですよ！

だってしゅーん、ですよ！ 銀髪できらきらで儂げな双神子様のしゅーん、ですよ！

やべえ、あれ絶対何かウサ耳とかの耳生えてるよ、的なしゅーんですよ！

もうこれは地面のたうちまわるくらいの萌えレベルですよ！

これで平然としてデュランは人間失格だと思う。

……あ、魔族だったっけか。

「必要ではない」

……さらに鬼だった。

なんだよ。美女……いや、女じゃないけどの好意なんだぞ。

んな風にクールぶってないで小躍りして、三回まわって「嬉しいでございませすですワンワン」って言ってありがたく受け取りやがれ、この美形！

あ、俺の場合男への「美形」はけなし言葉です。あしからず。

「そんなことより」

しかも「そんなことより」とか目の前で言いやがったぞこの魔王様。

「ごう言つ時は……皆さん、さん、はい。」

死ねばいいのに。

「お前の体調の方が心配だ」

……あれ？

え？

何今の？

さらつと真顔で、しかしとびつきり甘いアルトの声で何か言いやがったデュランをオレはポカーンと見上げる。

「ごう、一端落して冷たくしておいて、それから急に真顔で優しくするとか。」

なにこれ。

なんだこれ。

なんだこれずるい！

「もし、私のせいでお前に何かあったら……とても、後悔で補えるものではない」

あわあわしてるオレの横で更に何か言いやがってる魔王様。

「私の為は無茶をしないでくれ」

そして「良いな？」と笑顔でとどめを刺しやがりました。
あーあー……。

見るよ、あの双神子様の顔。もう目とか潤んじやって、ぽーっと
してますよ。

脇に居たアールアールレフさんまでデュランの笑顔の余波喰らって、
腰砕けて座り込んでおります。

美女（片っぽちがうけど）二人して、顔を上気させてとろーんと
なっている様子は非常に眼福でしたが、原因がこの魔王とかだとち
よっと笑えません。

てか、考えなしに手当たり次第誘惑しやがって。

お前何がしたいんだ。

誘惑の極意でもオレに伝授したいんですか？

「ほんと……最低な男だな、死ねばいいのに」

「ん？」

「死ねっ、女の敵」

流石に向こうの二人に聞こえたら拙いので、小声で人類代表とし
て罵っておきました。

オレは騙されませんから。

こいつ、口ではこんなこと言っときながら、実際は大して何も考
えてないですから。

本当に、ただ思ったままを考えなしに口にしてるだけですから

だから、こいつの口車にのって妙な期待とかしちやいけない。

だって所詮、中身は五歳児ですから。

見た目しか取り柄ありませんから。

オレはこいつの見た目好きじゃないですけど……。

そんな思いを込めてじろっと睨んだら、何故かデュランは笑って
オレの頭を撫でた。
だから、縮むからやめろっつーの。

誘惑極意とオレ（後書き）

【作者後記】

英語の授業と言えばトミーとジョン、ナンシー、そしてメアリーでした。

ちなみに尋は英語が大の苦手です。暗記できませんよ、あんな大量の単語……。

さて、皆様今晚は。

初めましての方もそうでない方もようこそいらっしゃいました。

クロ様（なんか某猫のようだ）の紹介が何とか出来ました。

ナカバが見抜いている通り、クロ様はデュランを慕っています。

さて、顔合わせもすみましたので次の段階に進みましょうか。

決断の時間に向かって徐々に進んでいきますので、どうか気長くお付き合い下さいませ。

作者拝

以目伝心とオレ(前書き)

三秒ルール。

以目伝心とオレ

まあ、その後骨抜きにされた双神子様ことクロ様が正気に戻って……てか、何？ オレ、ホントに双神子様のことクロって呼んで良いのか？

デュランなら何やったって笑い話で済むけどオレは笑い話じゃすみませんよ？

うん、後が怖いので今まで通り双神子様と呼んでおこつ。

とにかく、双神子様とデュランはその後しばらくやれ、永久時計がどうだとか、扉の調整がどうだとか、DDDの護衛の話だとか、城がどうだとか、結界がどうだとか、内通者がなんとらだとか。第三者のオレ置き去りな話を暫くして、それから双神子様にくれぐれも無茶すんなみみたいな釘を刺して、やっと話を終わらせた。

その間オレは暇だったんで、無駄にでかい（足の長さとか、足の長さとか、足の長さとか背の高さとか！）デュランの陰に隠れてこっそり床で独り五目並べをしていた。

なかなか白熱した戦いになったと思う。うん。

俺の中で歴代ベストファイブに入る白熱だった。

あそこで一手間違えたら、オレはきつとオレに負けていただろう。うん。

ものすごく集中してたので、デュランに肩をトントンされるまですぐ気が付きませんでした。

「そろそろ行くぞ」

「うえ？ あ、終わった？」

「ああ……クロもあまり長いこと起きた状態では辛いだろうしな」

「双神子様体悪いの？」

「ハードワークが祟ってな」

へー。

まあ、見た目確かに病弱そうだし、今見たら顔色悪くなってるしね。オレもさっさと退散したほうが良さそうだ。

「もう、お帰りになるのですか……」

立ち去りムードのデュランに双神子様が切なげに訊ねる。

あんな顔で見られて、罪悪感を刺激されない男はいないだろう。

「ああ」

お前はもう男じゃねえよ、デュラン。

「そう、ですか……」

見るからにがっかりムードの双神子様。

うう、何か申し訳ない。もうデュラン置いて帰りますとか言いたくなるなあ。

でも、双神子様は立派だった。

オレを初対面扱いしてスルーしても、そこは流石時計台の管理者だけあって次に顔を上げた時はその表情は毅然としたものになっていた。

「分かりました……お義姉様もどうか、ご無理なさらさないで下さいね……」

「お前もゆっくり休め。あまり悩み過ぎるな」

「……はい」

「行くぞ」

「あ、うん……」

良いのかなあ……。

そんな思いを込めてデュランを見上げたら、小さく苦笑された。

「仕事が残っている」

「でもさ」

「それに、長く俺達と共に居るだけでもアレの体には毒だ。この浄室の中ではかろうじて安定状態を保っているとはいえ、今は俺達のような異物が混ざっている状態だから……」

「うーん、つまりオレ達みたいな心が汚れちゃった人が長居すると具合が悪くなるってこと？」

「そうだ」

……や、今のはもうちょっと突っ込むか否定するかしようよ。

え？ オレの心？

何を言ってるんだ。このツブラでジューンシンムクな目を見てみる！

あ、怖いですか。すみませんね目つき悪くて。

「分かったら行くぞ」

「うん」

何と無く、オレを連れてく為にデュランに手を掴まれたことに罪悪感を覚える。

つい振り返ったら双神子様は、変わらない儂げな眼差しのまま、オレを見ていた。そして、「気にしないで下さい」みたいな感じでふわっと微笑む。

うっ、何か……申し訳ない。

チクチク刺さって来るアールアールさんの視線（「何ウチの姫様差し置いて手え繋いでんじゃコラア」的な）にビクビクしながらそっと手を振ったら、双神子様も微笑んで小さく手を振り返してく

れた。

うん……。

デュランも言ってたけど、きつと悪い人じゃあないんだよなあ。初対面の印象は最悪の部類だったけど、もうちょっとちゃんと会って、お話ししたかったかも。

そしたらもつと好きになれたんだろうか。

ちよつぴりセンチメンタルになってるオレを、無神経な魔王様はさっさか引き摺って部屋の外に連れ出しやがって下さいました。

少しは浸らせるよ。

「どうした」

さっきの紋章の描いてある床の上に入りながらブツブツ言ってる、デュランが不思議そうに首を捻った。

「別に」

オレとデュラン、それからずっとドアの外で待機してたファリドさんが模様の上に乗っかると、シューンと音を立てて模様の部分が光る。

同時にふわつと髪の毛が静電気で逆立つような感覚。

後は来た時と同じように、すーっと光の柱の中を下に降りるだけだ。

どう言う仕組みか分からないけど、床を自分達がすーっと透過してくっつてのはなかなか不思議な感じだ。

時計塔はロストテクノロジーっていう有史以前の技術の宝庫だった話だから、多分これもそうなんだろう。

これが技術なのか、魔法なのかちょっと分からないけどね。

究極的に極めまくった技術ってのは魔法に似るらしいから、まあどっちだっていいんだろう。

携帯の仕組み何か分からなくなっちゃって、使いりゃいいのですよ。知らなくなっちゃってどうにかなることだって、いくらだってある。

目の前を垂直上方向に流れてく景色を見ながらオレはぼんやりと考える。

さっき、デュランがあ部屋のことをクリーンルームって言うていた。

普通に考えたら多分空気清浄機とかガンガン回して、ダニ、ホコリ、花粉とかを一切合財さっくりクリーンにしてる部屋ってことだよな？

そこに居ても、オレ達と話してるだけで具合悪くなるっていう筋金入りの箱入り娘な双神子様。

病弱のお手本みたいなその双神様は、さっきどんな気持ちで外出してオレに会いに来たんだろう。

恋する乙女こゝろなこせうじやの一途さで？

それとも、もっと他の理由で？

【永久時計】やら、世界の天候やらの重責をほっぽり出して、体張ってまで出て来る理由って……何だ？

無い脳みそを絞ってうんうん唸って考えてたら、ほんと大きな手がオレの頭の上に乗った。

しっしっ。

どさくさにまぎれて何さらしとんじゃキサマは。

てか、さっきからお前オレの頭に何か用でもあるわけ？ 単純に

高さに置き場として丁度良いとかだったら殴るぞ。

「着いたぞ」

「あ、ホントだ」

エレベーターみたいな内臓が上がってます、下がってますみたいな反動を感じないから気付かなかった。

いつの間にか最初の床に降りたので、オレはぴょんと紋章の一番外側の輪を描く線を小さくジャンプして飛び越え、普通の床の上に着地する。

びしっとなついでに万歳ポーズを決めたらファリドさんに生温い目で見られた。

……良いじゃん。様式美って奴ですよ。

ちなみにデュランは「一粒で三百か」とか謎の言葉を呟いていた。意味分からん。

「どうした、ぼうつとして……何処か具合でも悪いのか」

「うんにゃ、体調はわりと良好ですよ」

「……クロのことが」

オレの目を見て、デュランが呟く。だから読むなって。

「うん、ちょっとね。考え事」

「そうか……」

オレの言葉にデュランは少し目を伏せて、それから「それを、出来れば忘れないでやってくれ」と小さく呟いた。

うん、忘れない……って、何気に失礼だな。

幾らオレが忘れっぽくてもそんなに直ぐには忘れませんよ。しっけいな。

「で、こつからどうすんの？ 外に出る？」

「いや、まだだ……仕事が残っている」

「さっきから言ってる仕事って、ここでやんなきゃだめなことなのか」

「ああ」

「オレも行って良い？」

「無理だ」

無理、とききましたか。

「面白そうなのになあ……」

「恐らく作業中に妨害が入る。お前が危険だ」

「いつてらっさい！」

危険地帯へはお前一人で逝って来て下さい。

大丈夫。

魔王はゴキブリよりしぶとい。

新聞紙で叩いたくらいじゃ死なないのは実証済みだし。

「呑みこみが早くて結構だ。では、その間お前はさっきの部屋で待っていてくれ」

「えー？ またー？」

さっきの部屋って、あの隠しウツサーだらけのあの部屋ですか？
別にもう家探しするところ残ってないと思うんですけどー。

退屈なんですけどー。

退屈ー。

退屈ー。

たーいーくーっー。

と、いつのを渾身の力を振り絞って目で訴えてみた。

「……」

「……」

「……」

「……ふむ」

お、通じた？

何やら納得したように頷いたデュランにオレはちょっとワクワクする。

そのオレの方へデュランは手を伸ばし、

「これか」

ポント、オレの手に飴玉を乗せた。

床にたたきつけておいた。

あ、勿論三秒以内に拾って、ありがたく頂きましたよ。食べ物粗末にしちゃダメですから。

ちなみにラムネ味だった。

オレこれ好き。

「退屈か？」

って、実は通じてたんですか。侮れんな魔王め。

「んー、まあ……正直」

「確かに今は此処の機能はほぼ停止しているからな……」
「機能停止？」

口の中でパチパチはじけるような飴を楽しんでたら、デュランがちよつと苦笑した。

「使い方を知る者も、使う者も居ないからな」

「デュランはしらねえの？」

「……俺か？」

え？ 何か変なこと聞いた？

「だって何でも知ってるじゃん」

「ふふ……そう見えるか？」

「何にやけてんだよ。誉めてねえよ。で、使えるねえの？」

「結論から言えば、無理ではないが限りなく無理に近い」

「つまり無理なのか」

役たたねー。

「まあ、その辺は部屋に向かいながら説明しよう」

そう言っただけのごとく、自分のペースでさっさか方向転換をするデュラン。

ああ、またファリドさんが置いてかれてる……ここ数時間で急激に老けたファリドじいちゃんがちよつと心配です。

でもさあ、どうせデュランだからって理由でこの傍若無人っぷりも許されるんだぜ？

オレがやったら「何アイツ、空気読めっていうか豆腐の角に頭ぶつけて死ぬ」とか言われるのに、デュランは「顔が良いから許す」とか「そう言うところもクール」とか言われて逆に高評価だったりするんだぜ、きつと。

クールじゃねえよ。ただのポケポケのわがままっ子だろうが。とりあえず人類を代表して後ろから飛び蹴りかましておきました。

例によって見もしないで回避されましたけどね！

「てか、何で部屋にオレが行くこと決定してんだよ」

避けたついでに流れるような動作で首根っこを捕獲され、もはや恒例になりつつあるぷらーんを体験しながらオレは半眼で奴に聞く。

「てか、普通この姿勢って首しまるんじゃね？」

オレの全体重がどっかに偏るはずだよな？

試しにじたじたと足を振って揺れてみたけど、いたって快適だった。

おつかしいなあ……襟首掴んでぶら下げられてるだけのはずなんだけど……うん、アレだ。魔王マジック。

美形って何でも出来て素敵ですね。チツ、ふざける。

「行くだろう？」

何不思議そうな顔で当然のようにオレの意志を決定してるんですか！

……や、うん、行くけどね。うん。

「まあ、問題ない」

「何がさ」

まったく意味の分からない言葉に突っ込みを入れたオレに、魔王陛下は蕩けるような笑みを浮かべた。

「楽しいからな」

そっか。ならいつか。

以目伝心とオレ（後書き）

【作者後記】

えーと……まあ、あれです。

日付一つ間違っただけで予約していたとか、さっき気付いたとかそんな事情です。

今晚は、尋でございます。

初めての方もそうでない方もようこそお越し下さいました。

良く「なかなか進まなくてすみません」みたいな話を読もう！で見かけるのですが……うちは進まないどころじゃないですな。はい。

ま、寄り道好きの脱線話好きが二人で動いてるので、その辺は大目に見て下さるとありがたいです。

話の九割は寄り道で出来てます。

では、また次の話でお会いできることを願って。

作者拝

執行猶予とオレ（前書き）

ファリドじいちゃんに愛の手を

執行猶予とオレ

「あ、また隠しウツサーが」

「隠しウツサー？」

例のアーチ型の扉をくぐった時にアーチの内側にまた一匹発見しました。

思わず呟いたオレにデュランが怪訝そうな顔をして、それから「ああ、あれか」と納得したように呟いた。

「まだあったのだな」

「まだ、って？」

「随分古い物だからな……まあ、ここの機能を考えればそうそう簡単に風化するはずもないか……」

何か一人で納得してるんですけど。

「そう言えばここ何の部屋……ってまたファリドさん置いてってるし」

「ああ、そう言えば彼は入れないのだったな」

先にそういうことは言えよ。

入り口でうるうるしてる放置プレイまっさかりのファリドじいちゃん可哀そう。

しかし、何故に入れないんでしょう？

見た感じただのアーチがあるだけで、障害物はせいぜい空気しかないんですけど。

「ここのセキュリティの問題だな」

「ほむ？」

「最重要機密、とでも言えば良いのか……それらの大半の制御、監視、及び操作の為の設備が揃っている部屋だったからな。それ故に立ち入り制限があるということだ」

「えー、見た目ただの子供部屋じゃん」

「部屋の主人は実際子供のようなものだったしな」

「どこのシヨタロー君ですか。」

「鉄人操作しちゃうんですね、分かります。」

「中身が子供だと言っているだけなのだが」

「あー、お前ですか」

「……。……。違う」

微妙な顔で否定されました。

それはお前じゃないって意味？ それともお前が精神年齢五歳児じゃないって意味ですか？

「あれと一緒にされると少々複雑だな……出来れば止めてくれ」

「あ、そんなにそいつのこと嫌いなんだ」

「嫌いでは無いんだが……」

珍しくはつきりしないな。

デユランって大抵こういう場合は適当なことと言って笑ってけむに巻く癖に、この話題に関しちゃそれすらできないくらい引っかけがあるらしい。

可哀そうなのでそれ以上つかないであげることにした。

別に弱点突っつきあうのは悪いとは思わんのだけど、冗談で済ませられないところにゃ踏みこんじゃならんと思うし。

「で、ファリドさんどうすんの？」

「権限がなければ入れないからな……さて、どうしたものか」
「権限って？」

「文字通りの権限だ。此処には重要機関が集まっていると言っただろう？ それを滅多な相手に操作されては困るからな……入れるのは此処を制作したメンバーか、もしくはここで制作された者だけだ」
「制作された物？」

「お前達の言う双神子とか、掃除用ロボットとか」

双神子様とル バが同レベルで語られてしまった。

他の中央十騎士の皆さんが聞いたら憤死しそうな話だった。

「って、あれ？ 何でオレは入れてるんですか？」

「恐らく、マネレスだからだろう……ここは一番最初のマネレスの誕生の間でもあるからな」

あ、成程……つまりオレもルン と同レベルなんですね。

「まあ、仕方ないな。ファリドには外で待機して貰おう」

「えー、入れてあげようよ。あの人あんまり好きじゃないけど」

「俺には許可権限がない。無理だ」

あ、じゃあしょうがないね。さよならファリドじいちゃん。

「まあ、後は此処から出なければまず危険な目に会うことは無いだろう……他の人間は此処には入ってこられないしな」

「なーデュラン」

「ん？」

「そんなに今危険な状態なのか？ オレ」

「……。ああ、そうだ」

またあつさり肯定されたなあ。

別に驚く話でも無いのでオレは冷静にそう思う。

むしろ逆にオレの反応にデュランの方が少し驚いてるというか、戸惑っているようだった。

「もう止めて、帰るか」

「へ？」

帰るってホテルにですか？ まだ半日も観光してないんですけど。

まだ遊び足りませんってなことを言ったら、デュランはちょっと苦笑して「そうか」と頷いた。

「まあ、それならばらくここで待っていてくれ」

「あ、それなら何か読むものとか無い？ 退屈なんですけど」

「読み物か……お前に読める文字となると無いだろうな」

「いや、普通の文字くらいなら読めますけど」

「あの頃はまだ文字文化の発掘中で文法も字体も統一性がないのだが、それでも良いなら渡そう」

「要りません」

どう頑張っても解釈しても読める代物じゃなさそうじゃん。

しかし、どうしよう。暇だ。

デュランってもしかして普段こんな感じで暇なんだろうか？ それなら暇つぶしにちよっくら人間でも誘拐するかーってなる気持ちも分からなくもない……訳がない。

迷惑かける良くない。

「そうだな……代わりに何かお前の興味を惹きそうなもの、これはどうだ」

言つて、デュランは棚の中からバレーボールサイズの球体を幾つか取り出す。

なんだろう。楕円形のガラス玉みたいな中に何か色々入ってる。色が変わりだけ……これって土と水、それから草とか、かな。イメージとしては箱庭とか盆栽が近いのかもしれない。

「テラリウムだ」

「寺？」

「土や水を作ろうとしていた時期の試作品だな。何がなじむのか、何が有利なのかロアの計算だけでは確定しないからな」

「何で土とか水を作る必要がある訳？」

他にもあるぞ、と四角い箱やら丸い金魚鉢みたいのとかを取り出すデュランにオレは首を捻る。

水なんてその辺行けば汲めるし、土だってホームセンターに行けば売ってるし。

「昔はそれらが無い時代もあったということだ」

蛍光緑の気体が詰まってるひょうたん型のテラリウムを置きながらデュランが苦笑する。

「今は時計塔としての役目のみが残っているが、ここは元は住居で、一つの巨大な研究所であり、実験場だった。その研究課題の一つが「生活出来る空間の構築」だ。このテラリウムもそのうちの一つ」「うーん……？」

「今の形に落ち着く前には色々な試行錯誤があった、ということだ」
それと、とオレの前にデュランはやたら古めかしいスケッチブック

クを置く。

「何これ」

「この設計者のメモだ」

はいつ?!

「まあ、大分昔のだから劣化しているが……興味があったら見てみると良い」

「い、いや興味とかのレベルじゃねえですよこれ」

え？ 良いのこんなもんオレが見ちゃっても。

「構わんぞ。持ち出されては困るが」

「んなあつさりと……」

「それを見る覚悟が決まったのならば、後は好きにすると良い」

ぼん、と投下された言葉にオレは、スケッチブックに伸ばそうと
していた手を止める。

「やりたいことがあるようだが」

そんなオレを真上から見下ろして、デュランが言う。

「それに手を伸ばさないというのならば、それを見ても辛いだけだぞ」

「……」

「今すぐ選べとは言わない。だが、決まらないのならば見ないでおく方が良いことだけは教えておこう」

「……はっ」

いや、まさかこのタイミングでそういうこと言いますか。
さすが、ディアウオロス悪魔っただけあるよ、お前。正しい悪魔の誘惑ってやつだ。

「じゃ、良いや。オレこれ要らな」

「ナカバ」

返そうとしたオレの手を指先一つで止めて、デュランが小さく首を振る。

「何故お前がそれを諦めようとしているのか、良く考えることだ……」

「何だそれ。執行猶予みたいな話だな」

「お前はまだ幼い」

デュランの目は紫色で、静かに澄んでいた。

や、人形オートマタの目なんですけどね。

目の前の人型のそれに、前に会った魔王の面影バケモノが重なる。数千年以上を生きてるらしい、人外の美貌をもった、人外。

「今一度、良く、己の考えを分析し直して……それからこれを見るかどうかを決めると良い」

再び手に押し付けられたスケッチブックは、全然薄っぺらいのに何故かずっしり重い気がした。

重さに負けて、手放して落ちちゃえるなら楽なだけだ。

手放して落せるようなシロモノじゃねえもん……時計塔の設計者のメモなんて。面倒な物取っちゃったな。

「ナカバ」

「何さ」

「決めた道に進むことは尊い」

踵を返して、ファリドさんが立ち入り禁止でお預け喰らってる方向に歩きながらデュランが言う。

「だが、決めた道に進むことだけが尊いのではない」

「意味分からん」

「決断すること。それだけでも十分な意味がある」

お前達は生きて存在しているのだから。

何やら哲学めいたことを言い逃げて、デュランの背の高い後ろ姿がアーチの向こうに消える。

オレはそれを見送って「あんにやるー……」と力なく呟くしかなかった。

執行猶予とオレ（後書き）

【作者後記】

デュランは人間彙屑でチートな魔王様ですが、それゆえに誰よりも人間に高い期待をかけてる部分があります。

その高く厳しい要求レベルに応えられる人間はわずかで、殆どはその期待は報われず、下手をすれば受け取られさえせずに終わるのでしょうか……。

さて、今晚は、とりあえず魔王様の要求には応えられない派代表の尋でございます。

初めての方もそうでない方もようこそいらっしやいました。

貴方のその一回の訪問が文字の一つ一つを書く原動力になっております。

ありがとうございます。

わりとチラシの裏的な話が満載の回になりましたが、まあ深くは掘り下げずに次に進みます。

ナカバにとって一つの山場になる回がこの後の方に待ち構えています。多分次の次の次辺りで来るはずですよ。

虚実織り交ぜた登場人物たちの駆け引きを上手く描けるように精進しますよ、よろしければお付き合ってくださいませ。

作者拝

設計図案とオレ（前書き）

お久しゅうございます。

設計図案とオレ

ハタ迷惑な置き土産を置いてった魔王様はもしかしたらオレの、
願いを知ってるんだろうか。

そんな邪推だっけしてしたくなるよ、こんなもん置いていきやがって。

「こんにやろう」

机に八つ当たりで蹴飛ばすふりしたら、目測を誤ったオレの足の
小指に丁度良い感じに机の角がクリーンヒットしやがりました。

「いつ……」

声も出せねえ痛みに、暫く机のわきでごろごろしました。

はい？ 自業自得ですが何か？

「あつ、てえー……爪割れてんじゃねえだろうな……」

防御力の低さじゃ、水にぬれたティッシュとタメ張れる自信あり
ます。

幸い、見たところオレの足の指は割れても折れてももげてもなか
った。

……もげたら困るな。うん。

「あー、でも何か頭の血い下がったかも」

オレはブツブツ言いながら、頭を掻いて片手をスケッチブックに
伸ばす。

何と言うか、これが本当にスケッチブックなのかも良く分からん。あくまで「っぽい」物だ。

デュラン曰く、この時計塔の設計者のメモらしい。

嘘か本当か知らんけど、本当だってんならオレみたいな一般人が触るなんてとんでもない。鑑定不能のお宝だ。

たとえ中身のメモが建築に一切関係ない、ゲーム攻略のメモでも、むかつく奴の悪口でも、だ。

そうだよ。

てかさあ、よく考えてみたら内容が建築と関係してるかどうかなんて分からないじゃないか。

デュランは「設計者のメモだ」つつただけで、設計のメモとは言っていないし。

「……それより、読めるのかオレ？」

さっきデュランが言ったじゃないか。

当時はまだ文法も文字も決まって無くて、ごっちゃませのポテトサラダみたいになってたつて。

そんな状態でメモとか、オレ読めないじゃん。

読めないじゃん！

読めそうにないじゃん！

「なーんだ、迷って損した」

つつても、読めないからって見ないのも何かデュランにしてやられたほくって気に入らないな……。

うん、折角だから読めなくても見ておこう。

本当なら貴重品だしな。勿体ない。

てことで、おーぷんざせーさみー。よいせつ。

「……」

開いたスケッチブックは、少し黄色がかったザラザラしたあんまり上等じゃない紙の束に、クレパスみたいな太さの真っ黒い線が描いてあるだけのもんだった。

正直、文字が読める読めないどころじゃなくて、どれが文字何だかもさっぱり分からない。

線だつてぶつとくつて、設計図っぽい緻密さとかは無い、感じがする。

なのに、何でだか分からないのに解ってしまった。

デュランの言ったことは本当だった。

これ、ここの設計者の「メモ」だ。しかも、本当にこの世界樹ユルグシラドルの設計図だ。

妙にファンシーな落書き（花とか、星とか、ハートとか）の間に埋め込まれるように線が走っている。

全然細かくもねえし、複雑でもねえけど、ここを描いた図だつて分かる。

すごい。

さっぱり読めないけど、でもすごいのが理屈を超えて分かる。

「やっべえ……何だこれ」

設計図とかいうレベルじゃねえよ。

オレは待ち切れずに次のページをめくる。

ここも最初の一枚目と同じように落書きだとか、意味不明の記号の羅列みたいなのとか、謎の矢印が散ってるけど、何が描いてあるのかは解る。

「これ、この部屋だ」

オレは顔を上げて天井を見上げる。

うん、間違いない。この線が天井のところの構造線だ。

上から見た図、横からの、こっちは多分下の配線とか配管も含めての概要が描いてある奴だ。

クレパスみたいな太い線でざっくり描いてあるのにそう判るのは、線に無駄がないからだ。

どんな人が、これを描いたんだろう。

デュランはどうも知っているっぽいことを匂わせてたけど、それ以上のことは言って無かったし。

でも、どんなことを考えていたのかはこのメモから伝わってくる。オレはスケッチブックを抱えて、もう一度この部屋をぐるっと歩き回ってみる。

用途に合わせた壁や床の素材の反射率や吸音、衝撃吸収。

疲れた時に丁度良い位置にあるように設置された椅子。

横になったままでも他の設備の状況が確認できる位置に設置されたベッド。

椅子の形からテーブルの高さ、ひじ掛けの位置まで、この部屋の

主人だつていう研究中毒フーカーホリックの人の為に設計されてる。

構造設計だけじゃなくて意匠設計から設備設計まで多分一人でカバーしてたんだ。

オレはテーブルの木目の中に紛れ込んでた隠しウツサーを指先でなぞってみる。

「そっか。これもその人の為だつたんだな」

仕事に熱中して、自分の体さえ忘れるダメ人間……じゃなかった、極度の集中型人間のその人に合わせた工夫だつたんだろう。

何かの拍子に、隠しウツサーに気付いて、仕事の手を止めるように。

暮らしに合わせて。

その人の癖に合わせて。

自分の趣味を混ぜて。工夫を凝らして。発想を張り巡らせて。何より、自分自身が楽しんで。

それで、一つの空間を作っている。

「……すげーや」

紙が拙いのか、画材が拙いのか、ところどころ掠れちゃって読めなくなってるメモにそつと触れてみる。

オレがやりたかったことの、そのさらに先を見せられた気分だ。

プールの端っことで、水に足を着ける勇氣すらないオレの目の前で悠々と泳ぐクジラみたいな。

何て大らかで、何てのびやかで、何て自由で、そして綺麗なんだろう。

「はっ……」

強がって吐き出した息が震えた。

本当に、今一人で良かった。

「……ホント、お前ディアヴォロスって悪魔的だよな、デュラン」

憧れる先は広くて大きくて、遠くて。

想像だけでしかなかったそれを、はつきりとした形で、イメージを超える姿で見せつけられて。

「畜生……」

諦めようとしていたのに。
出来ないって分かってるのに。

確かに、こんなグラグラした状態で見たら後悔するだけだ。今、
オレはめいっぱい悔いに満たされている。

どうして、オレには出来ないんだろう。

「ん」

「……」

「あ　バさん」

「……」

「　カバさん」

あれ？

もしかして誰か呼んでます？　てか、この声って。

「ナカバ、さん」

「あれ……双神子様？」

か細い声に振り返ったら、入口のアーチの所に指をかけて、顔だけひよっこり出してる双神子様と目が合いました。

……あんた、こんなとこで何やってんですか。

ほら、隣でファリドじいちゃんが口パクパクさせちゃってるじゃねえか。

そのファリドじいちゃんに「内緒にして下さいね」と儂げな笑みで唇に指を当てて内緒のポーズをとってから、オレの方にあの真っ黒な目を向ける。

ここからじゃ良く分からんけど、相変わらず顔色が悪いっばい気

がする。

キラキラの、蜘蛛の糸みたいに細い銀色の髪が隠れきれなくては
み出して、ふわふわ揺れる。

「ええっと……あの、寝て無くて良いんですか？」

「貴方に、お話ししたいことがあるのです」

オレの問いかけは無視ですか。

魔界のトップと言い、一番上に立つやつは他人の話を受けないっ
つー法則でもあるんですかね。

てか、デュランが居ないと態度違うね？

オレのそんなささやかな欲求不満は、次の双神子様の言葉を聞く
までしか続かなかつた。

「ナカバさん」

ほっそりした指で入口の壁を掴んで、双神子様は必死な様子で口
を開く。

「どうか、お義姉様を助けてください」

「無理です」

うっかり即答しちゃったよ。

設計図案とオレ（後書き）

【作者後記】

昔話なり、神話に良く出て来るモチーフに禁忌とその破戒というのがあります。

振り返つてはいけないと言われて振り返ったオルフェウス。

開けてはならない玉手箱を開いた浦島太郎。

見ては行けないと言われて見てしまった鶴の恩返しの男。

食べてはいけない知恵の実を口にしたアダムとイブ。

数え上げればきりが無い訳ですが、禁忌に触れる誘惑というのはどこでも共通のようですね。

しかし、その行為は一つの変革でもある訳ですから、必ずしも「禁忌を破ること＝悪」とは言いきれないんじゃないかと最近思ってます。

何てグダグダと言ってみましたがどうも今晚は、尋でございませ。

初めての方はよろこそ。お気に召したならば幸いです。

前回何で更新無かったの？ という常連様……す、すみませんっ。

r z

まだ若干頭がぐらぐらしておりますが、一応見直してるので大体大丈夫だと思えます。

拙作ではございますが、どうぞお納めくださいませ。

……返す時はのしは不要です。はい。

さて、別方面からアプローチが来ましたが、「助ける」の意味は何か。

何が目的なのか。

二度もデュランの忠告を破ってるナカバがどう行動するのか。

観光旅行三日目、昼。

宜しければお付き合います。

作者拝

円環舞踊とオレ（前書き）

うまい、うまい、うまい、うまい、うまい、うまいどんぶりー

円環舞踊とオレ

まあ、すげなく断っちゃった訳だがちよつと考えて欲しい。

デュランは見た目こそ発禁処分物の美形で、行動は五歳児のオコチヤマ以下のわがままっ子で困っちゃったチャンだけど、あれでも一応魔界最強の魔王様だ。

自称「世界の敵」ってのもあながち大げさじゃない。

実際「魔王VS世界」なんてタイトルマッチがあったとしてもわりと良い勝負しそくなぐらいのチート中のチート様なのだ。

一方このオレはどうかっつーと、別に自虐趣味は無いけどはつきりいって同年代の中でも下から数えた方が早いつてなぐらいの貧弱っぷりを誇つてる。

体格はこれだし、ガラは悪くしてるし、取り立てて特技と言えるものも無い。

これでどうしろつてんですか？ 無理だろ。無理無理。

と、説明する前に双神子様の黒い目がじわつ、と潤んだ。

ええー？！

「……………」

そのまま無言でポロポロと真珠のよーな涙を流し始める双神子様。えええーっ？

「いーけないんだー、いけないんだー。なーかしたらいけないんだー」

状況についてけずにパニくるオレの頭の中に、二頭身にデフォルメされたどっかの魔王様がわらわらと現れてきて、輪になってマイ

ムマイムを踊り出す。

『なーかした、なーかした、せーんせーにいつてやるー。いーけな
いんだー、いけないんだー』

ぐるぐる、ぐるぐる。

二頭身のぷにっとした外見を裏切る妙にキレのあるマイムマイム
で踊りながらオレの頭の上をくるくる回る魔王様（イメージ）。

そしてしくしくと声も無く泣いている双神子様。

何このカオスな状況。

オレにどうしろと？

てか、何でここで泣き出す訳？

『いーけないんだー、いけないんだー。なーかしたらいけな
いんだー、あーららこーららー』

ぐるぐる。ぐるぐる。

……。

『なーかしたー、なーかしたー』

きゃいきゃいきゃい。

「でーい、うるさいっ！」

しっしっ、と頭の中のちみ魔王ズをおっぱらって、オレは真っ黒
な目を見開いてる双神子様の方へ向き直る。

「とりあえず、とにかく、無理ですから」

断る時ははっきりきっぱり、誤解を招かないように、ですよ。
まあ我ながら可愛げのない態度だとは思いますが、オレに可愛げな
んざ求めた時点で敗北決定だからその辺は別にOKだろう。

心の中で「泣き落としかよ、オイ」とか思ってるのは事実だし。

……良い。

自分、不器量ですから。

残念ながら目の前でぼろぼろ泣かれても「うわー、うざってー」
とは思いますが、それで気が咎めて「はい、言うこと聞きます」とか思
うことは無い。

そもそも、オレこういうことで簡単に泣く奴嫌いなんだよね。

これってつまりアレだろ？

自分がお願いすれば相手が言うこと聞くとはいいこんでたから、断
られたのがシヨックで「酷い」とか思ってるから泣いてるんだろ？

どんだけ自信満々なんですか。

頼りにしたのに裏切られて可哀そう？

そうだろうか？

勝手に相手の都合も考えずに自分の願いをさも当然のように押し
付けてきた相手が可哀そうか？

むしろ、こんな傲慢なことねえんじゃねえの？

そう、思うのは底辺にいるオレのひがみなんだろうか？

……ま、良いや。

泣こうが笑おうが、引き受けられんことに変わりはないんだし。

「オレがデュランに対してで出来ることなんて何一つありません。
お帰り下さい」

「お義姉様は……」

オレの言葉に青ざめた顔になりつつ、双神子様が入口の端っこを

握りしめる。

……てか、何故に入ってこないんですか。

某テレビから這い寄るっばくってナイアール……なんちゃらっばくなくなってますよ。

折角の美人が台無しだ。

何か微妙に死にそうな感じの細い呼吸をしながら、双神子様はやつとのことで、ってな感じでか細い声で呟く。

「お義姉様は、このようなところにいらっしやってはいけなかったのです……」

……って、ここ貴方の家ですよ。

何やら自分の家を急に罵倒し出した双神子様の斬新さにオレはついてけずに首を捻る。

それをどう受け取ったのか、双神子様は勢いこんで顔を上げ、「お義姉様は、いらっしやってはいけなかったのです」と強い調子で繰り返した。

「……はあ」

「お義姉様のお体は……私などの比では無く、傷ついてらっしやるのです」

いまいち乗りきれないオレを置いてきぼりのまま、ぼっぼつと双神子様が語りだした。

「長年の魔力の行使で、とても傷つき弱ってらっしやるのです……それなのに、いつも私のことばかり心配なさって、無茶をなさって……」

ぎゅ、と入口の縁を握る手に力を込めて双神子様は思いつめたような表情をする。

……うん、心動かされる場面のはずなんだけど某ホラーの怨霊を連想しちゃったせいでなんだか心が別の方向に動きそうです。

どうしよう、笑ったら拙いよな。

「本当ならばお義姉様こそ横になってらっしゃらなくてはならないのです……私よりも余程痛い思いをなさってるのです」

双神子様の目に浮かぶ涙の量がランクアップした。
てれれてつれれ！。

「きつと、今もお義姉様は喋ることもままならないほどの激痛に耐えてらっしゃる……そう、思うと、私……」

「……」

「……」

「……」

「……あの」

「はあ、何でしょう」

「驚かれないのですね」

「ええ、まあ」

うるるん滞在 ……じゃなかった、うるるな瞳とさらさらな髪で首を傾げた双神子様におレはほかした返事を返す。

うん、まあそんな気はしてたんですけどね。本人にちらっと訊いてみたこともあるし。

例によってデュランはアタリともハズレとも惜しい！とも言わなかったから、それっきりにしてあったけど。

「あの……」

「ま、大変ですね皆さん」

自分で言っても空々しいぐらいに心がこもってないセリフだった。

「でも、デュランならやりたいようにやるでしょうし、やりたいようにしかやらないでしょうから、オレの出る幕なんて一切ありませんよ」

「そんなことはありません」

おお、意外と粘るな双神子様。

「貴方にしかお願いできないのです」

ちょっと驚いたオレに、双神子様はやたら必死な様子で言う。

「お義姉様を助けられるのは貴方しか居ないのです。あれ以上無理をなさつては……それなのに、お義姉様はいつもああして一人で痛みを隠して……」

助けられるのがオレだけ、ね。

随分と大げさな話だ。

オレに誰かを助けるなんて芸当、出来るなんて本当にこの人は思っているのだろうか。

それが本当なら、どれだけ……。

オレは首をちょっと振って考えを仕切り直す。

「双神子様」

「はい、聞いて下さいますか!」

んなこと言ってねえよ。

「お話は分かりました。要はデュランは一人で突っ走った拳句、無茶してそのうち死ぬかもって話ですよね」

「はい……」

「で、なんだか知らないけどオレならそれを予防なり、軽減なりできるかもしれない、と」

「そうなのです。ですから」

「良いんじゃないんですか？」

オレの言葉に双神子様が啞然とした顔になる。

その双神子様にオレはなるべく平坦な声で言葉を続けて返す。

「聞いた話、相当辛そうですけどそれでも隠し通してやってやるっつゝ意地があるからやってるんですよ。自覚があって、覚悟があつて、それでも貫き通したいプライドがあつて行動してるんですよ、あいつ。それなら、やりたいようにやらせてやった方が良いでしょう、じゃないんですか？」

デュラン。

いつも余裕ぶつた、皮肉っぽい笑みを浮かべて、飄々として煙に巻いて知らん顔をしている魔王様。

もしかしたら、相当具合が悪いかもしれないことぐらい気付いてたさ。

だけど、気付いて欲しくないっぽかったから、よっぽど悪そうな時以外は知らない顔をしてきた。

それは、正しくないのかもしれない。

でも、それは当人には正しいより大事なことだったりすることもある。オレには、そういうものがあるから。

そこへ善意と言う名前の土足で踏み込んで行くことが、デュランにとつて嬉しいことかどうか、オレには分からない。

それは、余計な御世話じゃないのか？

「デュランだつて自分の状況が分からないほどアホじゃないでしょ。分かった上でやってるなら、見ないふりしておいて良いんじゃないんですか？」

「……貴方は」

双神子様の声に一瞬何か揺らぎが混ざった。

それは多分非難だつたんだろう。

冷たい、とか。酷い、とか。

その言葉に大抵後に「これだからマナレスは」が続く。

何かもうちよつとレパトリーが欲しいけど、拜啓で始まつたら敬具でしめるみたいなものだからしょうがないんだろうな。

さすがにこれで退散するだろう、てかさつさと寝た方が良いんじゃない？ とかオレが考えてると、双神子様は一つ、か細い溜息をついて残念そうに眼を伏せた。

「分かり、ました」

はい分かって下さい。

「では、どうか最後に一つだけ……お願いを聞いてはいただけませんか？」

「……交換条件ですか」

「え？ ……そう、かもしれません」

自覚なしですか？ 本当ですか？

しかし、さつききっぱりバツサリ断つた身としてはちよいと断り

にくそうな空気が出来上がった。

しかも双神子様の顔色が半端ない。

何か、「古代……私の艦ごと撃て！」とか言いだしそんな顔色をしてる。

……とりあえず聞くだけ聞いてみよう。

「何ですか？」

「あの……あの奥の階段の上にある部屋に、お義姉様から頂いた櫛を置いて来てしまつて……」

「はあ」

意外とうっかりさんだな。

「取つてきて欲しい、と」

「はい……せめて、それをもつてお義姉様の無事を祈りたいのです」
「他の人で良いんじゃないんでしょうか」

「お義姉様と一緒にでないところは通れないのです……私も、中には

……」

「あー……」

で、落して無くしたのは知られたくない、と。

……まあ、それぐらいなら良いか。

そろそろ双神子様の言葉を断り続けると、中央十騎士しんえいたいの皆さんに抹殺されそうな予感もするし。

「上に行つて、取つてくれればいいんですね？」

「……行つて、いただけるのですか？」

「じゃあ、オレからも交換条件を出します」

切り返したオレに双神子様がちよつと身構える。

「……何で、しょう」
「さっきのデュランの具合が悪いこと、オレが聞かなかったことにして下さい」

双神子様がポカンとした。何か不安なので念押しする。

「そちらはオレに言わなかった。オレは聞かなかった。良いですか？」

「……どうして」

「どうして、って……そりゃ言ったとおりです」

オレはスケッチブックを近くの棚に置いて、格好つけてデュランっぽく肩を竦めて見せる。

「デュランに通したい意地があるなら、それをオレは尊重したい。それだけです」

円環舞踊とオレ（後書き）

【作者後記】

レッドカーペットの上を歩きながら変わってゆく顔色。
なかなか衝撃的ですよね。

どうも今晚は。ナチュラルに顔色が悪いと言われたことがある尋で
ございます。

初めての方、こんな辺境へようこそおいで下さいました。

お気に召したならゆるりと散策でもなさっていつてください。

初めてじゃない方、またお目にかかれたことを嬉しく思います。

最近コメデイ不足で申し訳ないです。

一つシリアスの山場なのでご容赦を……。

もう少しシリアス続きますが、宜しくお願いします。

作者拝

胡蝶之夢と才レ(1)(前書き)

昔者莊周夢為胡蝶。栩栩然胡蝶也。
自喻適志与。不知周也。

胡蝶之夢とオレ(1)

巻貝の内側。

そんな感じの螺旋階段を登る。

ここはフットライトを使ってるのか、足元はほんのり明るい。

壁は透明な樹脂コーティングでもされてるような手触りで、そのコーティングの内側には溝に埋め込まれた何千本ものコードがうねっている。

ああ、その為の溝なのか。納得。

しかし今時こんな大量のコードで繋ぐ必要のあるもんなんてあったらどうか？

歴史の教科書ぐらいでしか見たこと無いぞ。

そんなことを思いながら上へ向かって歩いて……どんくらい経ったかな？ 気が付いたらオレは真っ黒な扉の前に立っていた。

何処かで見たようなデザインの黒いつるつるな扉の表面には銀色で何かの模様っぽい物が描いてある。

しかし取っ手が見当たらないなあ……どうやって開けんのこれ？ とりあえず手で押してみたら、あっさりと扉は左右に吸い込まれていった。

……何で真っ直ぐ押したのに左右？ 接触感知型の自動ドアみたいなもんなのかな。

ま、良いや。

さっさと用事を済ませて戻ろう。

「うわ、真っ暗だよ」

今までそれなりに明るいとこに居たのにいきなり暗い所に入ると、なかなか目が順応しないんだよな！。

勝手に灯りがついてくれるタイプなら良いんだけど。

リュックをあさって、ちっちゃなペンライトを取り出しながらオレは中に一步入る。

ばしゃり、と音がした。

「ん？」

足が冷たい。

何だろつと首を捻った途端、足元から唐突にゴボゴボと水の音が立ち上って、バチンと音を立てて辺りが明るくなった。

思わず見上げた頭上には巨大な数字のモチーフが浮かんでいた。それも一個や二個じゃない。ざっと見た感じ数十個以上。

ギリギリ、と何処かで音が始めた。

さつきから足首まで浸かっている水がさらにざわざわと音を立てて泡立ち始める。

「……何？」

ギリギリと音がする。何か、嫌な予感がする。

一步下がったら、足元でパシャンと水が音を立てた。

同時にギリギリと言う音が止まって、今まで空中に浮いて静止していた数字の群れがガクンと動いた。

部屋が鼓動する。

数字が廻る。

水が騒ぐ。

そして、

G u t t e r M o r g e n

D i e

S i s t D i e B i b l i o t h e k V O N A S H u r B a n i A

Pli

IchBegeSSeIhreRueckE

hrMeInneNFreun

IchBINFrOhSieWiederZu

TreffEn

何？

いきなり流れてきた訳の分からない音にオレは耳を抑えようとして、

パチン、

と、

はじけ

た。

胡蝶之夢とオレ（1）（後書き）

【作者後記】

わけのわからない音、解読できた方はご一報願います。

そのまま翻訳ソフトにでも放り込めばすぐに分かるような簡単な文章にしたつもりです。

一部分からないのはきつと固有名詞。

本来前書き部分なのですが、あとがきまで含めてやたら長くなったので三分割します。

続きはまた明日。

ではでは。

作者拝

胡蝶之夢と才レ(2) (前書き)

俄然覺、則??然周也。

不知、周之夢為胡蝶与、胡蝶之夢為周与。

胡蝶之夢とオレ(2)

頭がくらくらする。むしろガンガンする。

中でつるはし持ったおっちゃんが内側から頭蓋骨叩きまくってるように頭が痛い。

しかもさつきから周りが妙に煩いし……さっぱり何の音だか聞き取れないけど、煩いもんは煩いんですよ。

あー、もう何だよ。八つ当たりするぞこの野郎。

苛々しながらオレは『目を開けた』。

途端に、目の前に砂嵐みたいなノイズが走る。うわ、きも。

……てか、まさかさつき何かあった時に倒れて目を怪我したとか？
自分の想像にざつと血の気が引く。

オレはいわゆる普通の治療が受けられない。マナレスだから回復魔法が効かないのだ。

擦り傷だって自然治癒を待つか、馬鹿高い金を払って保険対象外の薬を買っしかない。

まあでも擦り傷ならほっときや治るけど、目は確かほっといても治らない箇所じゃなかっただろうか。どうしよう。オレなんか引き受ける病院何かないだろうし、目がこのまま見えなくなったらどうしよう。ただでさえ足りないのに、これ以上足りなくなったら……。

「おい、大丈夫か？」

オレがぐるぐるしてたら前の方から誰かが声をかけてきた。

知らない、男の声だ。

とりあえずさくつと関わらないようにした方が良さだろうと思っ
てオレは『口を開いて』、

「ああ……」

掠れた、妙にエロエロしい声が出た。

……。

やだ、オレ声変わりの時期なんて過ぎたと思ってたのに、きゃっ！
じゃねえよ。

今の声明らかにオレの声じゃねえよ。しかも、聞いたことあるぞ
この声。

そう考えている間に誰かが勝手に『オレの右目』を掌で覆って、
勝手に『オレの視点』を上の方へ移動させた。

「少し、調整が乱れて……」

相変わらずガヤガヤとやかましい音に混ざって聞き取れる色っぽい
アルトの声。

うん、間違いない、これ魔王様だ。

しかし何でオレの喉からデュランの声が勝手に出てるんでしょう
？ ……なんてすつとぼけてみてみましょうがないか。

これはあれですね。

オレがデュランの中になんか知らんけど紛れ込んでる状態です
ね。憑依ってことか。

……。

……。

……。

ぎゃー！ 誰かー！ ヘルプミー！

い、嫌だ！ 絶対嫌だ！ この後の一生をあんきらきらした男
の恰好で過ごすのはいーやーだー！！

「おい大丈夫か？」

内心（つーかオレの体どこ？）でじたばたしてたら、オレ（てかデュラン）の前に居た人が心配そうな声で手を伸ばしてきて『オレの頭』にぼむと手を置いた。

やめい、縮む。

あ、いやこれデュランの頭だから良いのか。よし、もっとやれ。擦り減らせ。

「無理すんなよ。ちょっと休むか？」

……。

何でしょう。この妙に癒し系オーラ満載の人は。

ようやく砂嵐みたいな……良く分からんけど歪んで、ザリザリとなる感じで、中に文字っぽい物が詰まってる目隠しが部分部分に入ってるみたいなんだけど……も、収まってきたんでオレは声と手の主を観察してみる。

残念、美形でした。

でも、その見た目とか顔とかを台無しにする勢いで全身から「お人好し」「人懐っこい」オーラが滲みでてるんですけど。

顔に「俺は物凄いお人好しで世話焼きです」って文字がぺたっと貼ってあるって感じた。

黙ってきりつとしてればかなりのイケメンなんだろうけど、そのお人好しオーラのせいでなんだか憎めない、愛嬌があるって感じになっちゃってる。オレとしては苦手意識刺激されなくて良いんだけどね。

妙に安心感を与える雰囲気のある人だなあ。

感情が顔に出やすいのか、今も「心配だな。大丈夫かな。俺何かした方が良くないか？」ってことを考えてるのがものすごー

く良く分かる顔でデュランの頭を撫で撫でしている。

……良く考えるとあの魔王様の頭を撫でるとか、相当命知らずだなこの人。

「いや、あと少しだから……大丈夫だ」

うーん、相変わらず『オレ』からデュランの声がするっていう状況に慣れられません。

そのオレ、てかデュランに心配そうな目を向けてたお人好しオーラの兄ちゃんは少し考えてからしょうがねえなあ、ってな感じで笑った。

「ま、俺達三人の研究の成果が出るまであとちょっとだもんなあ」

よしよし、とデュランを撫でまわすお兄さん。

ついでにその表情が副音声で「よしよし、お前は頑張りやさんだもんな。一生懸命すぎて無茶しちゃうんだよな。そういうしゅうーもないところも含めて俺はお前のことが大好きだぞ。一緒に頑張ろうな」と語っているし。

なんつー面倒見の良い……てか良すぎだろ。ほっとけよ。デュラんだって子供じゃないんだし。そうやって甘やかすからあんな我がまま五歳児が出来上がるんだぞ。

しかも何故にまだ撫でまわしているのか……あ、もうちょっと右、あ、そこそこ。そこです。絶妙な力加減ですね素晴らしい。次は左を撫でてくださいお願いします。

……はっ！ いかんいかん。

撫でまわされてうっとりする犬の気持が分かってしまった。

恐るべしこの兄さん。

影のテクニシャンと呼んであげよう。

「どうした」

あれ、誰か来たみたいだ。

オレはここでようやく何の状況も殆どまだ確認してないことを思い出した。

えーと……まずここはどこだ？ あ、あそこに隠しウツサーが居るってことはさっきの部屋に戻ってきてるのか。

しかしさっきまでよりもずいぶんと明るい。

てか、何か世界中が紗がかかっているみたいに光ってる。ぶっちゃけものすごく見づらい。

え？ 美形がキラキラしてるのってもしかして世界が輝いて見えるから自分もーとか、そういう理由ですか？

しかも何か画像がくつきりすぎて目が痛いんですけど……それぞれの輪郭がいろんな色に光ってて、しかもパーツごとに色分けされてるから、眩しいのなんのって。

非常に細かく細かく書き込んだ図を強制的に頭の中に叩き込まれるみたいな感じで、画像酔いしそうだ。おまけに、相変わらず謎の模様入りの砂嵐は酷いし。

しかも本当にさっきから何か分からんけど煩い。

匂いも何か色々してて、悪い匂いじゃないんだけど良い香りも強すぎるとただの拷問と言うか。

……ああ、そうか。

コレはオレの体じゃ多分無いから。

デュランには世界がこんな風に見えるんだ。

こんな極彩色の、音と匂いの洪水にもみくちゃにされてたらそりゃあ、多少性格だって悪くなるよな。

オレがデュランの内側で「うんうん」と非常に納得して頷いてると、現れた第三者がオレ……じゃなくて『デュラン』の顔を覗き込

んだ。

お、今度はお姉さんだ。

しかも、多分この人ジパング人だよ。

黒い髪に黒い眼。薄いクリーム色系の肌に特徴的な切れ長の目とか。すげー、本物だー。

しかもなかなかの美人さんでいらっしやいます。小柄だけど、お胸むっちり、腰はほっそり。ロングストレートで、前髪ぱつっん。男の夢がここにある。

「また何かやったのか」

「見えてるらしくってさ……ちょっとブルーになってるんだよな。少し落ち着くまで待って貰って良いか？」

デュランを相変わらず撫でながらちょっと困った風に言うお兄さん。

困ったなーとは思ってるんだろうけど、迷惑とかそういう感情は一切見えないんで変に気まずい思いもしなくて済む。

それにお姉さんは「了解した」と凜々しく頷いた。物凄いタイプなんですけど、惚れて良いですか？

「今まで休まず続けてきたのだからな。この辺りで一息入れることも必要だろう」

「すまない……」

「何、謝罪は不要だ。我ら三名の研究に対するお前の貢献の価値を思えば、一時の休息など安すぎるくらいだ」

お姉さん！ そんな風に言われたら惚れてまっやるー！

お姉さんの言葉にお兄さんもどこか感慨深げに溜息を吐く。

「ま、世界への反逆の第一歩だからな……」

はい？ 何か今どっかの魔王様が乗り移ったような言葉が聞こえたんですが。

そう言えば今更だけど、ファリドさんは何処に行ったんだろっ？
そして、この人達どっからこの部屋に入って来たんだろっ。

確か、ここって特別な人しか入れないんじゃないっけか……
何か、変だぞ。

オレは目を凝らして、お姉さんの持つてる紙をしてみる。

何が書いてあるんだかさっぱりだったけど、最後の三行はかろうじて分かった。

ザイオン

シキ

デュラン

さっき「我ら三名の」って言ってたってことは、多分あれがこの人達の名前なんだろう。

てことはこっちのお人好しのお兄さんがザイオンさんで、小柄でむっちりボインなお姉さんがシキさんか。

しかしどっちの名前も今の中央十騎士には居なかった気がするけど。

オレがそんなことをぐだぐだと考えてると、いつの間にかお兄さんにハグされてよしよしされてたデュランが小さく溜息を吐いた。

「本当に」

「ん？」

「本当に、どうにか出来るのだろうか」

珍しくデュランの声は弱々しかった。

……てか、こいつが弱音を吐くなんてことあったのか。いつも不敵に笑ってるイメージしかないんだけど。

障害？ それ美味しいの？ と言わんばかりに全部力技でねじ伏せるかと思ってたのに。

「不安か？」

「少し」

「どうした」

「これは……本当に始めて良いことなのだろうか」

デュランの声が弱い。

「他者の存在に手を加えるなど……世界がやっていることと同じではないのか？」

「んー、まあそうかもな。でもさ、本人も納得してるんだし良いじゃないか。俺たちは他者、じゃないだろ？」

「……」

「何だー？ まだ他に悩み事でもあるのか？ ん？ おにーさんに言ってみる？」

ぐりぐりとデュランの髪をかき混ぜながらお兄さんがかっと思ひまわりみたいな笑顔を浮かべる。

お兄さん、そんな優しい声で訊かれたら白状してまうやるー。

……惚れるのはちょっと無理かな。

「……これも計画プランの一環ではないかと、そんな気がして」

うむ、シリアスに耐えきれずにギャグに逃げようとしたのに、デュランの声が深刻すぎて失敗した。

でも体に乗っ取ってる、てか乗り移ってるせいかオレにもデュラ

んの気持ちがおほんの少しだけ分かってしまった。

心臓の辺りからゆっくりと凍りついてゆくような不安。

喉が焼けるような悲嘆。

出ようともがく端から指を一本ずつ引きちぎられて、身動きできなくなっていくような絶望の気持ち。

「今これからしようとしていることも、既に台本に描かれているのではないか。こうして、抗うことさえ本当に自分達の意志なのか、それともそのように設定されているだけなのか……どうすれば」「だーいじょうぶだって」

オレもデュランの気持ちに引つ張られて一緒にぐるぐるしてたら、お兄さんがむに、とデュランのほっぺたを手で摘まんて笑った。

「あちらさんの手の内で踊らされてるんでも良いんだよ」「そっだ」

そうやってにかつと笑ったお兄さんの後ろで、お姉さんもちょびつと笑む。

普段無表情な人が急に笑顔になったりすると、どきっとなるよね。

「これが駄目でもまた次、皆で対策を立てれば良い」

お兄さんよりは若干きこちなくデュランの頭を撫でて、お姉さんはちょっと恥じらうように笑む。

「私達は皆、お前の味方だ」

「……」

「落ちついたか？」

お兄さんの言葉にこっくりと頷くデュラン。

ああ、この動作前に見たことあるな。自分がやってるとかなり微妙だけど。

「じゃ、仕上げに行こうぜ。世界初の試みとかワクワクするよな」

「我々の仕事の大半は世界初だと思うが」

「あ、夢の無いこと言うなよ。良いじゃんか、世界初。何か格好良くないか？」

「その意見には同意しかねる」

「どうせなら俺がなってみたかったんだよな。この低干渉者」

「お前がなったらここを守る者が居なくなるからな……」

「あ、やっとな。よーしよし、良い子だ」

「……子供扱いは止めて貰いたいのだが」

「もう少ししっかりしたらな」

お兄さん良いこと言った！ そうだそうだー！ もっとしっかりしやがれこの五歳児めー！

デュランはちょっと不満そうだった。『中』に居るので分かるんだけどね。

「あー、そう言えば名前どうしようか？」

「許容量改変、で良いのでは？」

「お前相変わらず致命的に命名センスが無いな……まんまじゃないか。何かもうちょっとこう、格好良いのにしようぜ。ゴーカイヤーレッドとかさ」

「お前のネーミングもどうかと思う。私はそのような名前で呼ばれることを拒否する」

「ヒーローっぽくないか？」

「この場合はヒロインなのではないだろうか」

「どちらも御免ごつむる」

迷惑そうなお姉さん。

「それにもう名は決めてある」

「そうなのか？　どんな奴だ？」

聞いたお兄さんに、お姉さんはちょっと得意そうな顔をして、大事な秘密を打ち明けるみたいな声で言う。

「後続の者達への祝福と、世界への反逆を込めて。謙虚にさせるもの、だ」

ムデイル。魔力欠損者。

ああ、そっか。

これは一番最初の。

胡蝶之夢とオレ(2) (後書き)

【作者後記】

魔王にも弱かった頃があります。

むしろ、弱くて、悩んで、迷っていたからこそ、今でも心の奥にそう言ったものを抱えているからこそ、魔王は強いのだと思います。

……甘い、とも言いますけどね(あ)

どうも、今晚は尋でございます。

初めての方はようこそ。

あ、毎回こんな長文では無いのでご安心を。

そうでない方はいらっしやいませ。

三つに分けた理由が良く分かるなーとか、生温い目で見て頂ければ幸いです。

ちなみに今回の過去の人たちが気になる人は雑談の「懐かしき日々」をご参照ください。(あ、宣伝……)

ずらずらっと長い話が続いた後は少し甘めのもので休息を。

また次回よろしければお立ち寄りくださいませ。

作者拝

胡蝶之夢とオレ(3) (前書き)

周与胡蝶、則必有分矣。此之謂物化。

『莊子』

☐

胡蝶之夢とオレ(3)

真っ暗だ。

真っ暗な中に、誰か立ってる。

デュランの目で見た世界みたいに、その輪郭が光る。

他のものよりずっと不安定で、弱い光だけど。

時々パチッと音がして、線香花火みたいに明るいオレンジ色の光が浮かぶ。その光でそれが子供の後ろ姿だっということが分かる。

痩せてて、貧弱で、捻り潰せそうにちっぽけで。それでも、負けるかってな感じで偶に火花を散らす。

パチンと暗闇の中でオレンジ色がはじける。

『

デュランがそいつの名前を呼んだ。

『 、戻ってこい』

えーと？

『

うん、何か聞いたことのあるような気がするんだけど。

『

デュランが何か切羽詰まった感じで名前を呼ぶ。

子供の方は何処かを見てきよるきよろしてるだけで、全然気付いてない。おーい、もしもーし？

『 、戻ってこい』

迷子？ 誰が？

てか、さっきまでとまた場所が違う。

何か、今更だけど何かおかしくないか？

何でオレがデュランに乗り移ってたんだろう。何で大昔の出来事をリアルタイムみたいに見てたんだろう。

『

こんな真つ暗な場所に覚えは無い。

ここどこだろう。

とにかく戻らないと。

でもどこに？

そう言えば、オレはデュランじゃないけど、じゃあオレは誰だ？
さっきからここで見ているオレは誰？

あれ。

えーっと。

頑張れオレの脳みそ。思い出せ。

『

ああもうデュラン煩いな。少し黙ってるよ。こっちは考え事してるんだから。

しっかし、相手もさっさと気付いてやればいいのに。

相変わらずパチパチとオレンジ色の火花を散らして、きよるきよるしてるだけで一向に気付いてない。

『 『

相変わらずデュランは諦めずにあっちの人の名前を呼んでるらしい。

らしいっていうのは、オレにはさっぱり聞き取れないからなんだけどさ。

……そう言えば、デュランって、えーと……。うん、そうそう、知り合いだ、知り合い。

それより何でデュランの名前は分かっても自分の名前が出てこないのかってことですよ。

大問題だ。

えーと、確か、とりあえず美味しそうな名前じゃなかったのは確かだ。

何だっけなあ。

……。

……。

……ヒント下さい。

『 ナ 『

おお、最初の文字は「ナ」ですか。

えーと……。よし、分かった。とりあえず「ナスビ」「じゃ無い」。

『 ナ 、戻ってこい 『

てかヒントが少なすぎるんですよ。

いや、自分の名前にヒントって何だよとか思っけどせ。

『 えないでくれ 『

だからうつさいんだってば。さっきから。
何をそんなに必死になっっているのやら。お前魔王何だからもうち
よっと落ち着いて構えてるよ。

……魔王？

誰が？

『 『

そう言えば、何であの子はデュランに気付かないんだろう。
傍で聞いているオレだって、ちょっと心が動いちゃいそうなくらい
一生懸命呼ばれてるのに。

何でこんなに必死なのかな。

オレはちょっと自分のことを脇に置いて、デュランのことを
見直す。

つってもオレの位置からデュランのことは見えませんけどね。

『 ナ 『

デュランの声には後悔が滲みでていた。

後悔なんて意味がない。

もっとあの時あしておけば、とか。

もっと早く気付いていれば、とか。

どうしてこんなことに、とか。

そんなこと考えてみたってしょうがない。嘆いたって仕方無い。
起こったことは、起こらなかつたことにはならない。
デュランだってそれは分かっているはずだ。

でも感情が理屈を超える時だってある。

それにデュランが今感じている深くて重くて、とても悲しい気持ちは何か一つのことと偶々引き起こされたようなものじゃないっばかった。

オレは知ってる。

重なって、重なって、沈殿した古い傷がふとした拍子に呼び起された時のあの息苦しさを。

起こったことは、起こらなかつたことにはならない。

傷が一度ついたら、それはなかつたことにはもう出来ない。

傷がいつか治っても、傷ついた事実はまだ取り消せない。

『連れて来るのではなかつた……』

『こんな風に壊してしまうなど』

『理解していたはずだつた』

『どれほどこれらが脆く、儂く、失われ易いかぐらいは』

『それなのに』

『』

デュランの気持ちが伝わりすぎて、重い。
押しつぶされる。

『』

何か繰り返したデュランの声はひどく、弱々しかった。
そしてまた聞き取れない。

何でだろう？

てか、あれだろ？ お前がさっきから呼んでるのってあっちのオレンジの線香花火だろ？ ほら、居るじゃん。気付けよ。

そっちのオレンジもさっさと分かれ。

何でこんなにも繰り返して、こんな声で呼ばれてるのに気付かないのやら。

相当鈍いんだな、きつと。

もしくは言葉が通じてない？

いや、でも聞こえて居たら多分他人事でも振り返るぐらいのリアクションはしてるはずだ。

じゃあ聞こえてない？

しかし何故この距離で聞こえないんだろう。

デュランだって呼ぶだけじゃなくて、歩いてって捕まえれば良いのに。

『

いや、出来るならやっているよな。

デュランはアホの子だけど、馬鹿じゃない。やれることならやっているはずだ。相手に気付かれないならなおさらだ。

じゃあ何でやらないんだろう。

近づけない？

それとも、触れない？

前に魔力が馬鹿に強すぎて駄々もれしてるから、うっかり他に触るとパーン！ ってなるって言ってたけど。

……あれ、今何かひっかかったような。

『

デュランがまた誰かを呼ぶ。

呼びかける。

多分これからも呼び続ける。声が嘎れても、喉を痛めても。呼べる限り呼び続ける。

そう言う意志が今のオレには分かる。

オレはまだ向こうでぼけーっとしてるオレンジ火花に目を向ける。相変わらずさっぱり気付く気配ゼロだ。

……いや、やっぱりおかしい。

まず、第一にオレは誰だ？

デュランの中に居るオレ。

てことは、オレはデュランじゃないって自分で自分を認識してるってことだ。

そしてデュランのことも知っている。

それから、もう一つ。

オレはさっきからデュランが呼んでるのがあっちのオレンジ火花だって分かってる。

デュランのその単語はさっぱり聞き取れないのに、絶対そうだって何故か知っている。

オレは、デュランの他にあのオレンジ火花のことも知ってるってことか？

『 『

妙に心に残る三つの音。

誰かの名前。

ここでは誰にも教えるな。名を握られると困るからな……。

名前を握るって何さ。

存在の決定権を掌握される、と言えば良いのか。

んんー？

名前は存在を確定する重要な要素の一つだ……まあ、つまり、

お前の名前をお前のものにしておけということだ。分かったな『

』。

名前。

オレの名前。

じいちゃんから貰った大事な名前。

オレをオレにする。オレの形を定める大事な名前。

何事も過ぎたらいかん。

少なすぎても多すぎてもいけない。

少なすぎれば誰かをねたむ。多すぎれば誰かから恨まれる。

手に余ったもんははみ出して余所様に迷惑をかける。

だからお前は真ん中ぐらいでちょうどいい。

少ないもんにはちっと分けてやれるぐらいの余裕はあるが、余りすぎず。

多いもんからはちっとぐらい引き受けてやれるぐらいの余裕はあるが、少なすぎない。

そんな子になれ。

『ナカバ
』半

オレの名前。

オレンジ火花が振り返って、オレの顔でデュランを見上げてそれは嬉しそうに、にっこりと、笑った。

胡蝶之夢とオレ(3) (後書き)

【作者後記】

ナカバの名前を決めた時に考えていたことは三つ。

一つはぱつと聞いて名前ファーストネームに聞こえないこと。

左右対称の一文字であること。

キャラクターの性格なり方向性をあらわすこと。

結果、女の子には珍しい「ナカバ(半)」に決定しました……あ、

ナカバ、一応生物学上はメスですからね。

そんな裏話をしつつ今晚は、尋でございます。

初めての方いらっしやいませ。普段はこんなに曖昧模糊とはしておりませんのでご安心を。

初めてじゃない方ようこそ。次回は似たようなノリに戻りますから。似たような……ええ、頑張りますから(何)

次で夢は覚めます。

その時にお会いできることを願って。

作者拝

存在意義とオレ（前書き）

頑張った！ 俺頑張ったよ！

存在意義とオレ

オレは「オレの」目を開けた。

瞬間目の前にきらきらした顔があったんで、とりあえずとっさに手でそのほつぺたをむにーっとひっぱっておいた。

ふう、これでよし。

「……御挨拶だな、ナカバ」

むにーっと横にひっぱられた形でデュランがちょっと眉を寄せた。
うん、久しぶりにその顔見たらつい。

特に気の利いた返しセリフとか思い浮かばなかったんで、代わりにうにーうにーと繰り返して引つ張ってみただけ、やっぱり魔王様は例によって無抵抗だった。

その無駄なお綺麗な無駄美貌をぐにぐにとしばらく弄って、オレはようやくちよっとずつ現状を理解する。

魔王様にだっこされてる。

「ちえりゃー！」

「危ないな、落したらどうする」

「落せー！」

「分かった」

ぺいっ。ぐしゅ。

「落すんじゃないー！！」

「今落とせと言ったのではなかったのか」

床の上にべしゃとなった姿勢のまま叫んだら、至極もつともな切り返しをされてしまった。

うん、まあそうなんだけどそこは乗りツッコミとかしようよ。

とりあえずオレはちよつと腰をさすってから起きあがって辺りを見回す。

ああ、さつき昇って来た巻貝だ。

ぐりつと首をまわして（ついでにくきつと鳴ったけど気にしない）扉を確認する。

閉まってる。

さつきまで中に居たはずんだけど……オレは腕時計で時間を確認する。

「つて三時いつ?!」

「三時だな」

「三時?!」

「三時だな」

「三時だ!」

「三時だな」

「大惨事だ!」

「三時だな」

何故にこげな時間に?!

あ……ありのまま、今、起こった事を話すぜ!

「さつきまで午前の時間だと思ったら、いつのまにか三時を過ぎていた」

な……何を言っているのかわからねーと思うが、オレも何をされたのか分からなかった……。

頭がどうにかなりそうだった……催眠術だとか超スピードだとか
そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

「てか何で三時！」

「お前がいつまでも戻ってこないからだ」

時間もつたいねーと叫ぶオレの向こう側で、デュランが疲れた様子で床に座り込んでけだるい調子でぼやいた。
ん？

何かデュラン、疲れてる？

オレがずりずりと膝で這って近づくと、デュランはちょっと苦笑して、ぽんとオレの頭に手を置いた。

「大丈夫か？」

「何が？」

「その返事なら問題ないな」

だから何が？

「まあ、端的に言えば」

「言えば？」

「昨夜より本格的な存在の危機に陥っていたということだ。器が原型を留めていなかったしな」

「はあっ？」

オレは慌てて自分の体をぺたぺたと触ってみる。
うむ、この貧弱っぷりは間違いなくオレの体だ。

「あるじゃねえか」

「今はな」

何だよ驚かせやがって、と打ちこんだパンチを甘んじて受けながらデュランがだるそうな口調で言う。

「昨夜、スキャンしたお前の器のデータをもとに再構築したからな」
「……えーと」

「記憶に齟齬そごがあるのはそのせいだ……魂と器の記憶が一致しないから混乱しているのだろう」

ぼんやりと遠くを見ながら呟つぶいてるデュランにオレは状況を飲み込もうとする。

えっと？ つまり？

「オレどうなっちゃったの？」

「……あまり気分の良い話ではないぞ」

「え？ グロホラー真っ青なスプラッター状態とか？」

「いいや」

首を振るデュラン。

「情報レベルで四散していた。お前ではまずそこに何かあるのかすら感知出来ないだろうな」

「なんでそんなことになったのさ？」

「あの部屋に入っただろう」

視線で指された部屋に顔を向けて、オレは「うん」と頷く。

「あそこは情報の備蓄庫も兼ねているからな……侵入したことで大量の情報と接触し、許容量を超えるそれを流し込まれたせいで器が

耐えきれずにほぼ消滅してコンタミネーションを起こしていた」

「コンタ……何だった？」

「Contamination……科学実験の場における汚染、或いは意図外の情報の混入。お前自身を構成する情報があそこに蓄えられている情報の中に散乱し、混入していた」

「……」

「まあ、昨夜ベッドの上でお前の体を確かめたからな……何とかそれを元に、と何故そこで構える」

「いや、何か今不穏なことが言われた気がして」

何が引つかかったんだろう。

「それで時間かかったんだ」

「いいや」

じゃあ何だよ。

「器は戻しても魂までは手を出さないからな……お前自身が戻って来るのを待っていた」

一瞬、何かを懸命に呼び続けるデュランの声が頭をよぎった。

……いや、イメージにしたってさすがにこれは無いか。

デュランだし。

でも余裕綽々がデフォのデュランがこんなにへばってるのは珍しい。

「大丈夫？」

とりあえず手を伸ばして、今度はほっぺを引っ張るんじゃないかってぺたっとデコに触ってみる。

うわ、つめて。

とか思ってたら手首を取られて、オレの体が前に傾ぐ。

へ？

「良かった」

またデュランの膝の上に逆戻りしていた。

何してくれんじゃー！……と、まあ普通のオレなら十発ほどどついて噛みついてたんだろうけど。

オレを恐る恐るって感じで抱き込んだデュランの手が僅かに震えてたから、何か怒れなかった。

抱かれてるって言うよりも、しがみつかれてるみたいで、振りほどけなかった。

「何だよ」

「お前が失われなくて良かった」

オレに配慮してなのか、ちゃんと顔とかが見えないうちにすっぱりと胸のところに埋まる姿勢でホールドされてるせいで、デュランの声は頭の上の方から聞こえる。

「戻ってきてくれて良かった」

「……」

「お前が存在していて良かった」

「……何で？」

呟いてから、オレは「あ、えーと今の無し」とペスピシとデュランの胸を叩く。

「ナカバ？」

「いや、無し……ちょっと待って。何言ってるんだろオレ。ホント、まじで、ゴメン、本当に無かったことに」

「俺はお前が気に入っている」

ポンとオレの頭にデュランの手が乗った。

わしゃと髪を掻きまわした感じにどこかで覚えがある。

「お前のようなものと会えたのだから、飽きる程に長く続くこの時にも多少の価値があるというものだ」

「……でもさ」

「ん？」

「オレ、すっげえ迷惑じゃん」

こんなことまで言う気は無かったのに、なんだか口が勝手にそんなことを言ったのは、後で考えるとトチ狂ったとしか考えられない失敗だった。

こんなこと、口にしちゃいけなかったのに。

「だってそうだろ。オレ、働けもしなくて……食ってばかりで、すぐにケガするし、病気にもなるし」

ちよつとの風邪でもオレは寝込む。

魔法で熱は下がらないし、回復だつてしないから馬鹿高い金払って、保険対象外の薬を買う。

その薬だつて今の区画じゃ売ってないからうちの親が車を走らせて四つ先まで買いに行っている。

病院だつて向こうに拒否られるから、その間の世話は親にみさせている。

あの人たちだつて仕事あるのに。

仕事の話だつてそうだ。

マナレスが家族に居るつてだけで、あの人たちだつて何かしら絶
対言われてる。

あの人達のせいじゃないのに。

職場でも、御近所でも、肩身の狭い思いをさせてる。

親戚にだつて、何かしら言つてる人がいるのをオレは知っている。
何でオレがじいちゃん家に行くことはあつても、もう片っぱのじ
いちゃんのこととは知らないのか。

……そう言うことだ。

今の住居に転居する時も相当揉めていた。

受け入れ先がなかなか見つからなかったんだろう。夜遅くまであ
の人達が話合つて、仕事の合間を縫つて受け入れ先と交渉してたこ
とを、オレは知ってる。

オレを受け入れてくれる学校を探すだけでも相当苦労したはずだ。
今の学校の学費はけつして安くないけど、ここ以外は入学試験の
許可すらおりなかったし、何とか受かつたし。

でも、その分うちの決して多くない金は減つた。

オレの養育費に、治療費に、学費に。

親。

その金工面するのだつてきついだろ。オレが使つし、オレのせい
で稼げないし。直ぐに倒れて仕事の邪魔してるし。

弟。

オレの弟だからつて学校で八づられてたの知ってる。オレが金使
つてるせいでしたいことだつて出来ないで、旅行だつて行けなくて、
遊びにも行けなくて、学校だつて、学科だつて本当はやりたいこと
あるのに我慢させて。

じいちゃん、ばあちゃん、リムりん、ヴィーたん。

身内に、友人にマナレスが居るつてだけで酷いと言われて、じ
いちゃん達は悪くないのに。リムりんもヴィーたんも本当は凄いの
に。オレと関わりがあるつてだけでそんなことまで否定されて。

遊びに行くんだって相当気を使って、あそこは駄目だ、こっちは危ないって、本当は行きたかった場所行けなくさせて。氣い使わせて。守られてばかりか。

「周囲の負担になっている、と？」

「うん……」

どうしようもなく。

邪魔だ。

受け取ってばかり。与えられてばかり。貰ってばかり。助けられてばかり。

受けて貰って、消費して、浪費するばかりか。

何一つ、返せないし、返せる当ても、無い。

「……」

オレの言葉に、デュランがオレの頭を撫でる。

「オレが子供だからそうだってんならさ、早く大人になろうってすれば良い」

「ああ」

「でも……でもさ、オレ、このまま年重ねて、それでどうなるんだ」

今は義務教育の間だから良い。

世間から、子供だからしょうがないで済ませて貰ってる部分がある。

でも、この先は？

マナレスを雇ってくれるような会社なんてあるのか？ バイトですらお断りされまくってるのに。

マナレスを引き受けてくれるような学校なんてあるのか？ 義務教育の時だって苦労してるのに。

オレが消費しまくってる金は親が出してるけど、その親だっついで働けるか分からない。

後何年？ 何カ月？ 何日？

そこから先は、オレはどうしたらいい？

他人の選択肢を潰して、生き続けるのか？

誰かの脛を食い散らかして生き続けるのか？

いつまでこんなこと、続ける気なんだ？ いつまでこんなことが出来ると思ってるんだ？

それに。

健康で生きてける保証なんて何処にも無い。

むしろオレはマナレスだから、体を悪くする確率の方がずっと高い。

それで、寝たきりにでもなったら？

薬品の臭い。

切れ切れの電子音。

白いシートと、うねるコード。じろじろと濁る呼吸の音。

肉の落ちた体。

あんな風に、なって。

それでもきつとオレを見捨てないと分かっているから。そんな風になつてまで。

邪魔にしかならないなら。

「オレ、さ。オレさ」

こんなこと考えちゃいけないって分かってるんだ。
分かってる。

こんな失礼なことはないって分かってる。分かってるけど、でも、生きてても誰かの負担にしかならないなら。生きてても大事な人達の邪魔しかできないなら。

そんなことなら。

「死んだ方が、良いんじゃないか？」

オレが居ない方が、皆の為になるんじゃないのか？
ぐっと歯を食いしばった拍子に、目の端っこから何か落っこちる。

「オレ、生きてて良いのかな？」

親しい人から搾取して。し続けて。それしかなくて。そんな
ばっかりで。

「何でオレこんななんだろ……」

悔しい。

情けない。

しゃくりあげたら止まらなくて、ぎゅっとデュランの襟を掴んだ
ら大きな、指の長い手がオレのこめかみに触れてきた。

「オレ」

「ああ」

「オレ、皆の負担にしかならないとか……もう、嫌だ……」

どうして。

大事な人にはっきり、オレのことを大切にしてくれる人にはっきり、迷惑かけちゃうんだろう。

「オレなんか、居ない方が……」

「半、^{ナカ}また歯を食いしばり過ぎだ」

「うる、さいなあ……」

顔を見られたく無くて顔をさらに埋める。

デュランの手が背中を撫でる。

「私は」

デュランの体温はオレより低い。いつだってひんやりしている。

声はあつたかいのに。

「お前がそれを悔いているとしても、お前が生きていることに感謝する」

「……何で？」

「言っただろう」

ぐしぐしとデュランのシャツで顔を拭って見上げたオレにデュランは何処かで見たとような安心させるような笑顔を浮かべて、指先でオレの前髪を掬いあげた。

「お前のことを気に入っている」

「……そんだけ？」

「ああ。それだけで十分な理由にはならないか？」

「でも、さ……迷惑じゃね？」

「まあ、多少はな」

「そこは平気つて言えよ」

「事實は事實だ。だが……それ以上のものを得ているからな」

「……オレ、なんもしてねえよ？」

「ここに在るだろう」

お前がここにあれば、それ以上に充分すぎる程報われる。

一歩間違えたら口説き文句にも聞こえる台詞。

柔らかいアルトの声で言われて、オレは、みっともないぐらい安心して、なんだか妙に許されたみたいになんか気分になって、それから色々と頭も冷えて、

「……デュラン」

「ん？」

「腹減った」

とりあえず昼飯を食い損ねてたことを思い出した腹がキューっと鳴った。

存在意義とオレ（後書き）

【作者後記】

俺、頑張ったよ母さん！（誰）

当方としては珍しく甘味料入りになるように頑張ったよ！

……頑張ったのにこの程度なのか、と言う辺りには目をつむって下さいorz

そんなグダグダを言いつつ今晚は、尋でございませう。

初めての方。デフォが糖分ゼロ、雑味あり、朝の目覚めにぴったりじゃないブラックな世界へようこそ。

初めてでもないと思う方。頑張りました（くどい）、結果は察して下さい。

ナカバが空腹だと仰ってるので、この後はのんびり食事と遊びになります。

では、またお会いできることを願って。

作者拜

距離感覚とオレ（前書き）

大丈夫、ほら、怖くない（by ウシカ）

距離感覚とオレ

とりあえず飯食いに行こうぜ、飯ーとか思ってデュランの腕の中から立ち上がるうとして、

「……ん？」

ぷしゅーと空気の抜けた浮き輪みたいに動けません。

んー？

首を捻つてるとまだちょっとお疲れモードのデュランが、問答無用でオレを持ったまま立ち上がった。

おお！ 視点だけー！ ……って喜んでる場合じゃなくて。

「さてと」

「をい。何当たり前みたいに持ち運びしようとしてやがるんですか」「動けるのか？」

口は回ってますけどね。

「手足はまだ上手く動かないはずだ。魂と器が長く離れ過ぎた上に、魔力が足りないからな」

「………治る？」

「もう少ししたら落ちつくだろう………それまでは暫くは俺にこうして触れている」

「危ないんじゃないの？」

「そこまで魔力が減ってしまっているほうが問題だ………まあ、充電と思っておけ」

「ほむー」

ま、危ないレベルになったらデュランが離してくれるだろうし。オレはさっきのせいでびしょびしょのしわしわになってるデュランの襟を弄りながら思う。デイジーさんにオレがやったとバレたら殺されそうだな……デュランが。

とか考えてたら、また胸にぐつと頭を抱き込まれた。近い近い。

「ナカバ」

「へい」

いや、一応「はい」とか「うい」とか言つつもりだったんですよ。口が回らんかっただけで。

「何か、見たか？」

「へ？」

いや、色々見えていますよ。

あ、そうか。どうやらオレの体はさっきまでパーンになってたらしいから、視力が戻ってるかどうかの確認ですか？

大丈夫、ばつちりお前のシャツにオレの涙のシミがびつちりついてるのが見えています。問題ありません。

……ある意味問題大アリの光景ですが。

「そうではない」

じゃあなんですか。逆切れ気味に聞いてみたらデュランが苦笑した。

あ、心臓の音までするよこの体。人形オートマタの分際に芸が細かいなあ。

「お前の器を再構成し、魂を回収する為に俺自身を媒介として利用している」

「意味分かりません」

「俺の存在と一部交わらざるを得なかったからな……何か、見ないで済んだか？」

俺の記憶を。

言われて、オレはようやくデュランの言葉の意味に追いついて、首を捻る。

正直記憶は曖昧なんですけど……貝殻の中昇って、何か部屋に入ったあたりから良く覚えてないというか。

正直にそう申告すると、デュランは「そうか」と呟いた。

「ならば良い」

「ははーん、なんか見られたら恥ずかしい思い出とかあるんだろ。残念」

「まあ、無くは無いが……それより」

「それより？」

「お前に怖い思いをさせたのではないかと懸念していたのだが……見て居ないのならば良い」

……はい？ 怖いって、お前過去になにやってんの？

首を傾げて、ついでにうつかり目測を間違えて胸に頭突きしてしまったオレの頭をさらに引き寄せた。

え？ 頭突き防止策ですか？

成程、密着してれば出来ませんね。

デュランは小さく溜息を吐く。

「まあ、これでも魔王だからな」

「……おお、そう言えば」

「何だ、忘れていたのか？」

「いや、つーかなんか他のことではいっばいっばいで」

「……まあ、それもそうだな」

ぼむぼむ、と引き寄せられた頭を軽く撫でられました。

何故か縮まないような気がしたので放置しておくことにする。いや、うん、ほら後頭部だから平気だと思っただ。

「ナカバ」

デュランの声が上の方からする。

身長差が原因ですが何か？

「もう、帰るか」

……さつきも同じこと聞いてた気がする。

あの時は「観光切り上げて宿に帰るべー」てな意味だと思ってたけど、

「帰りたくなつたのではないか、人間の側おまえの世界に。魔王おれの側おれの世界から」

「……」

「もう、帰るか」

普段通りの日常に戻らないか。

デュランの言ってるのはつまり、そう言うことだった。

「でも」

「ナカバ」

「でもさ」

「お前は二度も消されかけた」

デュランの言葉にオレは何も言えなくなる。

どっちも自覚は無い。

でも、まるで空き缶をぺいっとゴミ箱めがけて放り込むくらいのお手軽さでオレは「消されかけた」らしい。

「二日だ」

オレを持ったまんま階段を降りながらデュランが言う。

揺れないように気遣ってくれてるのか、随分ゆっくりな移動だ。

「これだけの短期間に、二度、お前の存在は消滅の危機に立たされた……本来、あるはずがないことだ」

「いや、でも、ほら。なんか運が悪いとかで死にかけたりすることもあり得無くないと思うよ？ マナレスだし」

「死にかける、或いは死ぬことはあっても消えることは本来お前達には無い」

それは私達の領域の話だ。

デュランが柔らかいアルトの声で言う。

死ぬ、と、消える、の差。

オレには良く分からないそれが、デュランにとっては何か意味をもつものらしい。

「それぞれの存在には立ち位置ホジ ションがある。大抵の存在はその正しい立ち位置に在るが、偶に本来与えられるべき場が与えられなかった者も居てな。その場合は大抵歪みが生じ、当人にも自覚は無くともス

トレスが溜まる」

「んー？」

「大学生が幼稚園に紛れ込んでいるようなものだ。周囲の園児や保育士にも歪みが生じるし、当人にとってもストレスを感じる環境になる」

「おお！」

凄い分かり易かった！ てか大学生不憫だな！

「まあ、今回の俺の仕事の一つがそういったずれた存在の修正でもあるのだが……お前の場合は俺に関わったことで、逆に本来正しい位置に居たのが俺によってずらされた。その結果が……」

言葉を切ったデュランにオレは何て言って良いか分からないので一緒に黙る。

「ナカバ」

元の部屋があつた階に降りたつて、デュランがオレの頭を引き寄せた手を緩める。

ぷはーっ。

いや、別に息苦しくないし、デュランはオートでフローラルな香り（ちっ、美形め）なんで匂いも平気だったんだけど、何せ近すぎて圧迫感半端なかったから離して貰えてホッとしたですよ。

ついでに上からじーっという視線を感じたので顔を上げてみる。

ブドウよりも濃い紫の目がオレを見てた。

「恐ろしくなつたのではないか？」

「はい？」

「俺が、恐ろしくは無いのか」

いや、唐突過ぎて何が何やら。首を捻った俺にデュランはちょっと悲しそうに笑った。

「俺のせいで消えかけたのだぞ、二度も、この短期間に」

「え？ あ、うん、そうだね」

「……………それだけか？」

少し眉を寄せたデュランをオレはきよとんと見上げる。

それだけって……………いや、事実は事実だから肯定したんだけど。何？ もうちょっと捻りとか笑いのセンスのある回答をよこせて？

「恐ろしく思わないのか、それとも……………あえて目を向けて居ないのか」

「いや、ちよつと」

「私が誰か、お前は知っているだろう？」

オレを見下ろす純粹紫の目がゆっくりと、三日月形になる。

「魔王……………」

「人の皮をかぶったバケモノだ」

お前など一秒足らずで壊せる。

微笑んでそんなことを言うデュランが、魔王が、オレの首筋に指先で触れる。

「少し力を緩めるだけで」

「……………」

「お前も、お前の友人達も……………そうだな、この中央セントラルの人間ぐらいならば私が顕現するだけでこの世界から消し飛ぶだろう」

跡形も無く、何も初めから無かったかのように。
そう言うデュランの目はまるで揺らぐ様子が無くて、だから、冗
談じゃないというのは嫌と言うほど良く分かって。

「ナカバ」

逃げないのか、と耳元でささやかれてオレは、

「……あーのさー、デュラン」

魔王なんて意地でも呼ばねえと思いつつ、オレは「一人で盛り上
がってんじゃねえよ」と溜息を吐く。

「あのさあ、毎度毎度、他の奴にも思うんだけどオレを脅すならも
うちよつと上手くやれっつーの」

「あ、いや……」

「大体怖いつて何さ。何でオレがお前を怖がらなきゃあならんので
すか」

「……しかし、俺は危険だぞ」

「はいはい、そうですね。で？」

「？」

「で？ だから？ ほら、続き言えよ。はい、五、四、三」

「待てナカバ。何をそんなに怒っている」

「本気で分からないんですか？ ねえ？ 分からないんですか？」

オレが睨み上げながら（この体勢じゃあ威力が八割カットですけ
ど）訊くと、デュランは暫くパチパチと瞬いて、それからコテンと
首を小さく傾げた。ヲイ。

はー……。

いや、分かってる。こいつ、顔はこれだけど中身はポケ交じりの五歳児なんだ。しょうがない。

「つまり、お前はオレにとってお前が危険だから怖いと思うって考えてるんだよな」

「ああ」

「で、出来れば自主意志で離れて欲しいけど、離れない離れるの判断はオレに任せたい、と」

溜息交じりに確認した俺に、デュランはこっくりとうなずいた。

結局この茶番の正体はそういう話だった。

分かり易過ぎる。

「そもそも、お前がこんなこと言っても説得力ゼロだっつーの」

「何故？」

「何故？ って……あのですね、一回消えかけたらしいオレを復元したらしいのはどこの誰ですか」

お前じゃん。

「オレがへソ曲げて迷子になった時も何のかんで探して迎えに来てたし」

「ああ、あれはやはり拗ねていたのか」

「そこっ突っ込む場所じゃねえ！ いや、まあ……すみませんでした」

「構わない……俺もお前をここに連れて来たというのに配慮が足りなかった。説明無く一人にして悪かった」

「ほら！」

「……ほら？」

「お前ってさ、そうやってオレにもちゃんと謝るじゃん」

普段オレの近所に住んでいる人達でもしないことを、デュランはちゃんとオレに向けてやってくれた。

オレのやりたいことを聞いてくれた。

興味がありそうなものを調べて、用意してくれた。

いつだって、ちやめつけでわざと歩幅で引き離しやがったこともあったけど、基本的にはオレのペースに合わせてくれたし、コースだってオレが歩きやすい所を選んでたことぐらい気付いてる。

脅し文句だって、そうだ。

デュランの性格からして、オレの身が危険で守りきれないと思ったら、黙ってオレを置き去りにするだろう。

残念ながらそういう発想は良く分かる。オレも同じだから。

『オレさえいなければ良かったのに。だから、関わりなんか断ち切っちゃった方が良かった』って。

オレの意志は無視してでも、オレの安全が確保できればそれで良い。目標を達成する為ならどう思われても良い。そんな優しくって、一方的な、傲慢な決意がデュランの中にはある。

それでも、確認の形を取ってオレに決定権を委ねてくれた。

これはもう優しいとかじゃない。

ただ、甘いだけだ。

「そういうお前を怖いなんて、思う理由なんか無いじゃん」

「だが……」

「大体さー、何？ 危険だから傍に居ない方が良かったって言うってことは、つまり、お前はオレとかが危険なのが嫌なんだろ？」

「……」

「中央の人皆殺し可能です。そうですか、可能ですか。でもやって無いじゃん」

不便な思いして。面倒な手続きとって。

人間を殺さないように気遣う魔王なんて滑稽だけど。

「オレ、全然怖くないよ、お前のこと」

「……俺の存在のせいでお前が不幸になるとしてもか」

「あ、その辺はお前のこと蹴りとばして憂さ晴らしさせていただきますので無問題」

「……分かった、大人しく蹴られよう」

良い覚悟です。

「だが」

「あーもー、さっきから「だが」とか「しかし」とか多すぎ。これでラストね。はい、何？」

「ラストなのか……お前は俺がお前達を傷つけないよう意識しているから恐ろしくないと云ったな」

「うん」

「だが、俺とて力の加減を誤ることもある。制御に失敗することもある。それに……」

「それに？」

「場合によってはお前達よりも、為すべきことを優先するだろう」

うん、お前はそう言う奴だよな。

「それでも、か」

「しょうがないんじゃない？」

「……軽いな」

「だってさー、誰だってうっかりミスはあるし。うおっとお！手が滑ったー！ わーい、オレ死んだー！ ってことでしょ？」

「わーい、とは言わない気がするが」

「じゃあ、人生オワタ！」

両手バンザイしたら抱え直されました。

「落ちるぞ」

「すみませんでした」

冷静に諭されると結構堪えます。

「ま、失敗は誰にでもありますよ、ってことですよ」

「失敗で済むレベルでは……」

「それはしょうがないじゃん。お前は気をつけてた、でもダメだった、そんならしょうがないってだけじゃん。それでお前を恨むだとか、憎むだとか、怖がるだとか、何処のアホウですか」

「……」

「……それとも何ですか？ キサマはオレがそういう懐のせまーい、アホだと言いたいと」

「分かった。疑って悪かった」

じろつと睨んだオレにデュランが苦笑して、オレを持ちあげたまま器用に肩を竦める。

うむ、分かればよろしい。許してしんぜよー。

「で、お前の答えを聞こうか。戻るか、行くか」

まだ性懲りもなく確認して来るデュランを見上げ、オレは迷わず答える。

「旨いもん食えるところに行く」

「了解」

いっはー！

昼食風景とオレ（前書き）

たのしいしょくじのじかん？

昼食風景とオレ

出てきた白パンはつつく指が食い込むぐらい柔らかくて、これをさくつと半分に分けて間にチーズを三種類挟んである。

チーズの色は白っぽい、黄色っぽい、それからオレンジと黄色の中間っぽいのも三枚で、メニューにはなんちゃらかいいう名前が載ってたけどもう忘れちゃった。いや、でも見た目綺麗だよ。グラデーシオンで、正方形だから。

その上に輪切りにした肉厚なフレッシュトマトの赤、それからパンの内側に緑鮮やかなジェノベーゼソースをたっぷり塗りつけると、白、赤、緑、黄色系、で目にも嬉しいサンドイッチの出来上がりだ。ペラっとした見た目に似合わず意外とこくのあるチーズは口当たりは滑らかで、一種類ずつ食べてもおいしいし他の二枚と組み合わせてもまた別の味わいが楽しめる。

皮つきのままスライスされたトマトはやや酸味があって、皮の部分に歯を立てるとプチッと気持ちの良い歯ごたえがして、果肉の部分はシャリッとみずみずしい。

もちっとした食感のパンはちと粉っぽいんだけど、にんにくの利いたジェノベーゼソースと汁気たっぷりの真っ赤なトマトと一緒に食べると丁度良い。

こう言うのは大胆にばくつと食いつかないとね！

でことで六口くらいで最後の一欠けを口に突っ込んでむぐむぐしたら、デュランが苦笑してレモンの輪切りの入った水のグラスをオレの方に寄せてくれた。

「旨いか」

訊いてきたけど口がいつぱいだったんで、口を押えてうんうんと頷くと「良かったな」と笑み返される。

結局あの後、デュランに持ち上げられたまんま時計塔を出て、そのまま八番街のカフェに入った。

何故、途中で一度もデュランが道を迷わずすらすら抜け出したのか、謎だ。入る時はあんだだけ苦労したのに……。

まあ、とにかく店に入ったんだけど当然ランチタイムは終了してまして。

しょうがないから単品で幾つかお腹の膨れそうなものを選んで、お昼ごはんの代わりにする事にしました。

ついでに、おやつ代わりのパイっぱいのも頼んでます。

チーズサンドを食べ終わって、でもやっぱり一個じゃ足りないんでオレは二つ目の厚切りハムサンドに手を伸ばす。

これはパリジャンっていうちっちゃめの楕円形のパンだ。

外の皮が綺麗なキツネ色で、触らなくてもパリッとした感じが見ただけで分かる。入った切れ目の黄金色が綺麗だ。外見はそんなに凛々しいのに、中はしっとりできめ細かい餅肌……もといパン肌が隠れている。

ここにどどーんと二枚挟まってるのが売り名にもなってる厚切りハム様でございます。

本当に分厚いよ。オレの指の幅くらいあるよ。

表面にたっぷり胡椒が降ってあるスパイシー仕様で、ローズピンのクのお肉とアイボリーの脂身の対比を見ると「これって本当にハムですか？」って気分になる。

それから忘れちゃいけないさっぱりした酸味のピクルス。ガブツと噛むと口の中にハムのしっかりした噛みごたえとお肉のうまみ、それから脂身の甘みがじゅわーっと広がって、次にピクルスのカリッ、で酸味がすーっと口の中を爽快にさせる。脂身美味しいけど口の中がベタベタしないのはこのピクルスのお陰だ。

ピクルス、ぐっじよぶ。

ちなみにこっちのソースはつぶつぶのマスタードです。

うちの冷蔵庫にあるチューブの「粒入りマスタード」じゃない。本当につぶつぶとした、でもちゃんとマスタードな不思議なソースなのだ。これが噛むと口の中でパチパチはじけるみたいな食感で大変美味しい。

あつという間にこっちも食べ終わって、オレはさらにもう一つ欲しいなーと目を光らせる。

「ん？ もう少し選ぶか？」

「うん」

いや、オレが食いすぎとかじゃなくて、美味しいんだけど一個一個が小さめっていう、ね？

「野菜系が良いかも……」

「それならばこれはどうだ？ 季節の彩り野菜と牛肉の薄切りの西大陸風サンド。ああ、こちらには二色のズッキーニと丸ナスのポロネーゼサンド。クリームチーズとアボガド、卵、スモークサーモンのサラダサンド……」

「うーん……何かどれもおいしそうに見えてきた」

いや、きつとおいしいんだと思うけどね。

最初の西大陸風とかはちょっと珍しい感じだからきになるなあ……グリルした牛肉を薄切りにして、甘辛いタレで炒めて、そこにグリーンリーフと玉ねぎスライス、トマト、アボガドディップ、ベビーコーン、赤いんげん、ほかもろもろ十二種類の野菜を詰め込んだ「豪華てんこ盛り」てな感じのサンドイッチだ。

ああ、でもズッキーニも旨そうだし、ここのクリームチーズ絶品だって噂が……。

「あ、そうだ。お前は何か食ってたの？」

「ん？ これか？ ツナとアーティチョークと黒オリーブだな」

コーヒーを一口飲みつつ言うデュラン。

ほむ。

……。

「……どうぞ」

黙って見つめてたら、デュランが手で二つに割ってオレの方に差し出してきた。

話の分かる奴だ。

「やた、いただきまーす」

ワクワクしながらサンドイッチにガブツと齧りつく。

ほむ、ツナは普通にツナだけど、脂が魚臭いとかいう感じじゃない。丁度良い塩加減。

このシャキシャキしてる歯ごたえの正体がアーティチョークって奴だろうが。

味はあんまり無いけど、ほのかな苦味を感じる。大人の味てやつですね。ツナの香ばしい旨みと良く合って、癖になりそうな味だ。

ちなみに、生を茹でるのが一般的らしいけど、これはオイル漬けなのでほんのりとワインビネガーとどっかで食べたようなハーブの香りが一緒にします。

ソースは無しで、シンプルに塩、胡椒。

なかなかグッドですな。

どれも一口。

「ナカバ」

「む？」

「……俺の指まで食うなよ」

「むぐー」

分かってますよ。

微妙な顔で注文をつけるデュランに構わず最後の一欠けをガブツとやって、舌で口の中に巻き込んで完食。ついでにデュランの指にくっついてたのも舌で回収しておきました。文字通りペロりと食い切りましたよ。

「なかなか結構なお味でございました」
「良かったな」

言いながらデュランが手を伸ばして、オレの口の端っこをナプキンでくしくしくと拭う。

あ、どうも。

「もう少し食べるか？」

「うん、まだ余裕」

「では、このアボガドとてり焼きと大根のサンドはどうだ？」

「あ、美味しそう。それ良いな」

てり焼きってジパング料理なんだぜ。知ってた？ ……あ、知らないですか。まあ、原型残ってないしね。ワクワクしながら待っていると、可愛いお姉さんがかごに入ったサンドイッチを運んできてくれた。

おおお、これも好物の予感大ですよ！

「ありがとうございます」

「ありがとう」

接客は仕事でしょうけど、お礼は大事ですよ。
オレに続いてデュランもにっこり微笑んでお礼を言ったら、お姉さんが「うっ」と胸を抑えてよろめきながら去って行った。……お姉さん可哀そう。

「ナカバ」

「へいつ？」

「食べるか？」

「あ、うん食べる食べる」

頷いたオレに、デュランがサンドイッチを差し出す。

おお、良い匂いするなあ。

いったただつきまゝす、がぶりっ。もっしやもっしや。

「良い食べっぷりだな……」

「むぶー」

「そうか、旨いか」

満足げに鼻から息を吐き出したオレにデュランが可笑しそうに笑う。

何？ 旨いんだから別に良いじゃん。てか、お前が動くとお腹に
くいんですけど。

……はい？ いや、気にしないで下さい何でも無いですスルーし
ましょうね皆さん。

「今度はこちらの端から食べた方が良いのでは？」

「だー！ うっさい！ 黙って差し出しやがれ！」

オレはサンドイツチ支え機、もといデュランに向かつて唸る。

だーかーらー、ほっというて普通に出しといてくれれば十分だって最初に言っただろうが！

……はい、そろそろお気づきですね。

ただ今ナカバ・マサキ（分類：へーへーぼんぼんな一般人、年齢十四歳）は、世界の敵でラスボスな魔王様にご飯を食べさせてもらってます。

あれです。

はい、アーン、の世界です。

……。

……。

……。

一応、一言断っておこう。

不本意じゃーこんにゃろー！

ま、でもオレの手足がまだ上手く動かないんだからしょうがない。ここまでデュランに抱えられてきただけでも充分注目浴びてたのに、椅子に座るのも手が上手くつけないで失敗して、大して多くないお客さん（あ、時間が悪いせいですよ？）と店員さん達の視線を一人占めしちゃったし。コップを持つにも手に力が入らなくて持ちあがらんし。

ぶっちゃけサンドイツチを手を使って食べるとか無理です。無理無理。

その時点で店を変えれば良かったんだろうけど、並んでるサンドイツチがあんまり美味しそうだったのと、そろそろオレの腹と背中がくつつきそうだったんで駄々をこねてここでお昼に決定し、「パンが無いならケーキを食べれば良いじゃない」的なノリで、隣でオレが座れるよう支えてるデュランの手からご飯を貰っております。

何か幼児扱いされてる気がひしひしとするのですがどうでしょう

か？

しかも、軽くオレを見るデュランの目が「餌付け」と語っている気がするのですがどうでしょうか？

おまけに、何か無駄にこういう手際良いし。

まあ、この魔王様は無駄チート満載だから何が出来たって別に不思議じゃないけどね。

丁度「飲みたいなー」と思ったタイミングで、非常に飲みやすい位置にコップを持ってきてくれたデュランを横目で眺めてオレは溜息を吐く。

お前もつ、魔王止めて介護の人になっちゃえよ。勿体ないよこの才能。

「ナカバ」

「何さ」

「デザートにイチジクと胡桃のパイが今焼きあがったと聞いたのだが」

「食べる！」

あ、今度は小さく切り分けて一口ずつフォークでお願いします。

素手から口とか、罰ゲームとしてしか思えんし。

そう伝えるとデュランは罰ゲームのくだりには首を傾げてたけど、素直に頷いていた。

毎度思っただけど、この魔王様って基本的にやらせたい放題だな。前に口の中に手え突っ込んだ時も無抵抗だったし、ああして欲しいって言えば大抵あっさり従うし。

それで良いのか、魔王なのに。

ま、こっちは都合が良いから良いけど……利用してる罪悪感とか、考えるだけ無駄なんだろうなあ。

あ、イチジクうまい。

昼食風景とオレ（後書き）

【作者後記】

食べてるだけで4000文字使い切りました。

……一話にまとめるはずが二話に増量されました。

今晚は。とりあえず美味しそうな食事が書けるようになりたい尋で
ございます。

初めての方、こんな調子のスピードでしか進まない話ですがお気に
召したなら幸いです。

この前も来たよ、というその貴方。

「あ、また進んでないな」と生温く笑って頂ければ幸いです。
ちなみに次回も話は進みません（待て）

次も特に何と言う場面でもありません。遊んでるだけです。
それでも宜しければまたのご来訪をお待ちしております。

作者拝

袖引股引とオレ

その後も何故か周囲から注がれてる居たたまれない感じの視線をスル スキル全開のATフィールド展開で乗り切って、二つ目のオレンジチョコレートパイでお腹もくちくなくなった。

ふいー、何か凄く食べた気分。

「実際にかなり食べているからな……まあ、お前なら問題ないだろう」

「何その断定」

「普段から人一倍食べているのではないか？」

……ま、そうっすけどね。

食欲期ですから。これからぐんぐん成長する時期ですから。……燃費が悪いとも言っう。

いや、今回たっぷり食ってるのはちゃんと理由があってですね、

「あ、動いた」

ゆっくりデュランに床に下ろされたオレは、奴の袖に掴まったまま恐る恐る数歩歩いてみる。

うん、手離しても大丈夫っばいな。

確かめるようにぐるぐる歩いてたら、後ろから「ナカバ」と呼ばれた。

「何ぞ」

「じゃんけん」

「ポンッ！」

「あっち向いて」

「ホイッ！」

おおお！ ちゃんと動くぜオレの体！

ま、つまりこう言う事です。

ぴよんぴよんと小さくジャンプを何回か繰り返して、手を握ったり開いたりして見てからオレはデュランを見上げる。

「おっけー」

「そうか……まあ、元が少ないからこの方法でも何とかなると思っていたが上手くいって何よりだ」

「一言多いんだよ」

デュランが言っていた。

魔族と人間の違いは魔力の補充方法。魔族は直に、そして人間は食べ物から摂取する。

アドルフが一仕事終えた後にオレの大事な源氏イを食いやがったのと同じ理屈です。

消し飛びかけて魔力がほぼゼロ、デュランから充電状態だったオレですが、あんまり本来の方法と違うやり方で魔力を補充するのはよろしくないんだそうな。

それに今のデュランは魔王様バージョンとは違って、持ってる魔力が結構カツカツだから、下手すると共倒れしかねないのですよ。

なので、オレが食事出来る程度に元気に戻るくらいの魔力をデュランから貰って、残りは美味しいご飯で元気回復……と。まあこういうことです。

そんな理屈抜きにおなか減ってたし、旨いもん食えて幸せでしたけどね。

もうポータブル・ナカバの必要は無くなったんで、店を出る時にはちゃんと自分の足で歩いて出ました。

地面、久しぶり！ 会いたかったよ！

にまにましながら足踏みしていたら、生温かい目でデュランに見下ろされました。

さつきより奴の頭が高い位置にある分、ふてぶてしさと腹立たしさは倍増ならぬ二乗です。

ここはひとつ、オレの復活祝いに後ろから膝カツクンをかますべきだと思うのですが、どうでしょうか？

「蹴って良い？」

「そう言いながら蹴るな」

ちっ、かわしやがった。

「蹴らせる」

「分かった」

良し。

最初からこうすれば良かったのか。

大人しく立ってる奴の無駄に長い足をげしげしと数回けって、ついでに爪先を踏んで満足したのでオレはデュランを見上げて、「次何処行く？」と首を傾げる。

「そつだな……服を少し変えるか？」

「あ、お前か」

「お前も」

何でオレ？

さつき庭園を歩きまわった時に泥だらけにしたはずのワンピースは、さつきのデュランの「復元」とやらで新品同然の状態に戻ってますけど。

そう言ったら、デュランは苦笑して、

「本当はその下に一枚、欲しいのではないのか？」

「あー……」

ま、ね。

他の女の子の生足なら喜んで拝みますが、自分のじゃ別に面白くも無いし。

スカートもあの日以来基本履いてないからなあ……足がすかすかして落ちつかない。スパッツ欲しい。

オレはショーウィンドに映る自分の姿を発見して、ごじごじと手櫛で髪を撫でつけてみる。

……あ。

「櫛！」

「櫛が欲しいのか？」

「そうじゃなくて、双神……」

言いかけてオレはここじゃ拙いと思って、デュランの手を掴んでぐいぐいと建物と建物の間の陰に連れ込む。

「何だ急に。どうした」

「えーとね、何て言ったら良いのかな……」

「……ああ。成程」

捕まえっぱなしの手を見下ろし、デュランが頷く。

「昼間から物陰に連れ込むとは、思いがけない大胆な誘いに胸が高鳴るな」

「棒読みでボケんな」

ていつ、とついでに爪先踏んでやるうとしたけどまた逃げられました。

「踏ませろ」

「こつという場所でその発言は誤解されるぞ」

「誰が女王様じゃー！」

鞭でしばくぞコラ。

「じゃ、なくて……えーと、ほら、『クロ』様のことなんだけど」

他人の耳のあるところじゃ双神子様の名前を出すのは拙いだろうと思つて、苦し紛れにデュランの付けた残念なあだ名を言ったオレに、デュランがちょっとだけ紫の目を見開く。

「頼まれてたのに、うつかり出て来ちゃった……」

「頼まれていた？」

「うん。えーと、あの部屋。モービルのあつた部屋の奥にある螺旋階段登つた先の……何だっけ？ データの貯蔵室だっけ。あそこに取りに行つたんだよ」

「何を？」

「櫛。クロ様が無くしたけど、自分じゃ探しに行けないんですーっつーからオレが代わ……」

言いかけてオレは「あれ」と小さく呟く。

デュランはそんなオレに一つ瞬いて、それからゆっくりと首を振つた。

「そうか」

「あの」

「一つ確認するが」

オレから視線を通りの方に、多分時計塔のある方角に向けるデュラン。

「お前の言うモービルの部屋には、入ってこなかったのだな」

オレは答えられなかった。

でも、デュランにとってはそれで充分答えになったらしい。紫色の目がぱちりと瞬く。

「分かった。それは後で俺が片付けておこう」

「あのさ」

「大丈夫だ」

何が大丈夫なんだか。

ようやくさっきのデュランの言葉が身にしみて来る。

でも、デュランが原因であっても、デュランの責任じゃない。そこは分かっている。

オレは魔王モードの目つきになってるデュランの手を握る。怖がっていないと証明するように。

それにデュランはちょっとびっくりした感じでオレを見下ろして、それから小さく苦笑した。

「まあ、後始末ぐらいはこちらでつける」

「オレに任されても困ります」

「その通りだな……ああ、しかし流石に着替えないと気分が悪いな。脱いでしまおうか」

「こんな場所で脱ぐなー！ 変態か貴様ー！」

「冗談に決まってるだろう。まあ、お前がどうしても望むというのであればまあ、仕方なく従うが」

「望んでねえし！ おら、とっととシャツでも何でも買いやがれ！」

ま、つまり「櫛」の話はさておいて、服をどうにかしようってことらしい。

で、うろつろつとデュランを引きずりまわしてさまよった拳句、オレでも買えそうな店をやっとで発見しました。

ただいま全国チエーン展開中。

「うにくろー」とオレが勝手に呼んでる某お店でございます。

ちなみに、その日の気分によっては「はちまんたるうにくろー」と呼んでるけど、デュランにこの話をしたら「気の毒だから止めておけ」と窘められてしまった。

何で？ 肉だから？

とにかく中に入って、デュランはシャツ、オレはスパッツを買うことにした。

「……何故ついてくる」

「え？」

「メンズコーナーでは扱ってないと思うが？」

「あ、そっか」

「それにお前のサイズはどちらかと言えばキッズコー」

「とりゃー！」

袖から手を離して、とりあえず別れのあいさつに一発蹴りをかましておきました。

そのあと暫く、店内をうろつくと歩きまわって、やっとでお目当てのスパッツを発見しました。

……何処のコーナーに居るのかは訊かないでくれ。

まあ、あれです。下着とか靴下のコーナーです。周りが可愛らしいプリント柄のが揃ってる理由は訊かないで下さい。

ちくしょう！ オレの背！

あともう十、十あればオレだって……っ！ くうっ。

「てか、デュランの参考にしたのが昨日の夜のオレってことは、昨日の夜から昼にかけて伸びた分が消えて無くなってるってことだよな……後で水増し請求しちゃう」

ところで、これって本当にスパッツなんだろうか？ 品名が「レギンス」なんだけど。

レギンスってあれだよな？ 赤ちゃんよの靴下一体型毛糸のパンツのことだよな？

……赤ん坊物って、どこの羞恥プレイですか。

いやいや、でも見た目はスパッツなんだよな。

きつとスパッツ。多分スパッツ。もしかしたらスパッツ。

でもうっかり買っちゃって、実は幼児用の毛糸パンツだったらどうしよう。

知らずに履いて出てって、通りすがりのおっさんに「やだー、あの子幼児用の毛糸パンツ履いてる。ちょーしんじらないんですけどー、マジつけるんですけどー」とか言われちゃったら立ち直れない。

何が立ち直れないってそんな言葉づかいのおっさんの存在がまず立ち直れない。

い、いや……でもスパッツだよな？

説明書きの感じからするとスパッツだと思う……うん、ほら、生地だって綿とか毛じゃなくてポリウレタンとポリエステルとポリピ

ルフィレンの混交だし。

……念の為店員探して訊いてみるか？

商品片手にずっと考え込んでいたから気付かなかった。

「マサキさん」

背後からの猫撫で声に、オレの手からスパッツ（仮）が滑り落ちた。

袖引股引とオレ（後書き）

【作者後記】

お腹がくちくなる＝腹いっぱいになる、です。形容詞くちい＋なる、ですね。あまり最近は聞かなくなりました。

どうも、成長期は終わりましたが偶に食欲期は舞い戻って来る尋でございます今晚は。

初めましての方、ようこそいらっしやいました。

当方はけっして肌着類フェチの話ではございませんのでご了承下さい。

また来てみたという方、再びお目にかかれて光栄です。

当方はけっして肌着（略）

さて、次回はやられ役の登場ですかね。

またのお越しをお待ちしております。

作者拝

怨敵再来とオレ（前書き）

ザリザリと書いていった結果、「失禁」の場面が交じりました。あまり濃くは書いていないですが、苦手な方は読まない方が無難かと思います。

「誰だって赤ん坊の時はそうなんだし、平気平気」と言う方はそのままお進みください。

怨敵再来とオレ

気を抜き過ぎてた。

アレが中央ちゅうに居ることは分かってたのに。

昨日、アレがオレもここに居るんだって知ってしまったことも分かってたのに。

カタカタとみっともなく震えだす手を反対の手で掴んで抑える。

あんな程度の奴の前で弱み何か見せて堪るか。

「マサキさん。マサキさん？　ねえ、どうしたの？」

「……いえ」

オレは喉から絞り出すようにして息を吐き、表情を消して振り返る。

「何か御用ですか、先輩」

「御用ですかなんて気を使わなくて良いんだよ」

相変わらず気持ち悪い笑顔を浮かべてる先輩をオレは黙って睨む。てか、気を使ってる訳じゃねえよ。用も無いのに絡んでくるなっつてるんです。

相変わらずうざいくらいにポジティブシンキングですね。

まったくもって見習いたいとも羨ましいとも思いませんが。むしろ去れ。

心の中で教育上不適切な悪態を思いつく限り並べながら、オレは慎重に、なるべくゆっくりと落しちゃった商品を拾う。

うっかりよろけようもんなら触られかねないし、そうでなくても後ろからじつとりとあのねちっこい目で見られるとか絶対嫌だ。そ

うでなくてもさつきからこの変態の視線がこー……うん、言いたくない。

とりあえず今この瞬間は、ワンプイ来てたのは大失敗だったことだ。出来ればこのままさつきと逃げ出して、へまちたわしでございっしとっしと……あれ？へまちだよな？あのキュウリのでっかい奴の名前。いや、ちょっと違う気がしてきた。なんだっけ？キュウリじゃないんだけど。でもへまちじゃないよな。だってへまち、だと「へい、お待ち！」の省略形みたいじゃん。でも何だっけ？

オレがぼけーっと「へまち」の正体について考えてると、先輩の方が動いたのがちらっと見えた。

足がビクツとなる。

逃げたい。

でも動けない。足が動かない。

「マサキさん、今日すごくかわいいよね。そういうの似合うなあ、センス良いよ。そういうの好きだなあ」

「……はあ、そうですね」

あなたの好みはいつでも良いですが。

「僕の為にこういうことしてくれるなんて、マサキさんって本当に可愛いよね」

「……は？」

いや。いやいやいやいや。可笑しいだろ。

そもそもお前に会う気なんかさらさらねえし。会う予定も無かつたし。……てか、何でここに居るんだ。

「違いますけど」

「照れちゃって可愛いなあ。この後何処に行こうか」

「オレが何処に行こうと先輩には関係のないことだと思えますけれど」

「遠慮しなくて良いんだよ」

してませんから！ というオレの叫びは喉からは出てこなくて、逆に奴の手が伸びてきたことでみっともなくひきつった息しか出なかった。

根っこが生えたみたいに動かなかった足がやっとで動いて、でも下がり過ぎて衣装のラックにぶつかってガシャンと音を立てる。

「あ、マサキさん大丈夫？」

「や……」

止めて、触らないで。

「はい、そこまで」

あとちよつとの所まで来ていた先輩の手とオレの体の間に、水色の線が入った。

「な……」

「下がれ」

きらきらした淡い水色の真っ直ぐな剣。それを握ってたのはがちりしたチョコレート色の手。

いちごピンクの眼が先輩の方を冷たく見据えている。

「……ソーダのアイスバーとチョコバーのストロベリー味」

「チョコじゃねえって言うてんだろ……お前この場に及んでそういうこと言うか」

正直な感想にアポロチョコ改めチョコバーのアドルフが目つきを少し緩めて、呆れたようにぼやく。

それに、ぽかーんと馬鹿ツラ晒して停止していた先輩がぱっと顔を赤くした。

はいはい、キモイです。

「お前！」

ちなみに怒るとこの人声が裏返ります。耳触りですし、どうでも良い情報でしたね。

「何をするんだ。馬鹿にしているのか！」

二言目には馬鹿にしているのか、がくるのも定番です。

それをチョコバー改めアドルフが黙って横目で見た。

途端に黙りこむ先輩。^{キモオ}

ぎりぎりと言ざしりして、生白い顔を赤くしているのが更に気持ち悪い。

「店内で武器を抜くなんて……誰か、警備員を呼べ！ 警備員を！」

「残念だったな。DDDの5th以上はたとえ中央の中であっても武器の携帯及び使用の許可が下りて居るんだ。そんなことも知らないのか」

「D……っ?! DDD、だどっ? 何でこんな人殺しの怪物が店内に居るんだ! 警備員は何をやっている、客の命令だぞ! 早く来て僕をこの人殺しから助けるんだ! おい！」

「ちっ……本当に煩いな」

そうですね、とオレが後ろでうんうんと頷くと呆れたような目を

向けられた。

なんだよ。心底同意しただけじゃんか。

四六時中これに付きまとわれてるオレが頷くぐらい良いじゃんか
！。

そう思っただけなら、何か深い溜息を吐かれた。

何がそんなに不満何でしょうか。

「まったく、やる気が削がれた……ま、取り合えず、お前。仕事の邪魔だ、去れ」

「ひっ」

アドルフの一睨みでぺたんとその場にアヒル座りする先輩。
同時にアンモニア臭がして、オレはさっと距離を取った。

「うわ、きつたねー……」

「店員、悪いけどこれ片付けて置いてくれ」

アドルフが冷静に指示を出してる間、先輩はメソメソと上と下を濡らして泣いていた……っばい。

気持ち悪すぎてちゃんと見てませんけど何か？

ところで、この水色のアイスバー気になるな。

何か美味しそうだな。ひんやりした空気も出てるし、やっぱり触つたら冷たいんじゃない……

「うっわ！ 何やってんだお前は！」

あ、取り上げられた。チツ。

「いや、チツじゃなくて。触るな、危ないだろ！ まったく、見たもの全部口に入れようとするとか……幼児かよ」

「別に口に入れる気はねえし……ちょっとおいしそうだったけど」

「武器を食おうとするな！」

「あ、武器なんだ」

「……何だと思ってたんだ」

先輩がさつさかと手際よく店員さんによって運び出されてゆくのを第三の眼で眺めながらオレは「ラムネ味のアイスバーみたいな剣？」と首を傾げる。

アドルフが嫌そうな顔をした。

「どうあっても俺をお菓子シリーズにしたいんだな。そうなんだな」
「お菓子の家に住んでて、いたいけな幼女とかを捕まえてきて美味しく頂いてるんだよな」

「犯罪者にするな！」

え？ ただのお伽噺ですけど？

「もうこいつの相手は嫌だ……」と軽く泣きが入ってるアドルフにオレはニヤツとして、それから表情を改める。

「お手数おかけしました」

「……はー。ま、仕事だからそれは良い。料金のうちだ。それよりも、なんださつさきのは」

「さつさきのって、あの変態ですか？」

「違う」

ピンクの眉を寄せて、アドルフはオレを睨む。って、え？ オレ？

「言っただろう。何かあったらすぐに助けを求めろって。それをいつ呼ぶかと思ってたらいつまでも……俺の言ったことは分かってないのか？ 事態が拡大してから収めるのは大変なんだぞ」

「あ、えつと……」

「何で呼ばなかった。呼ばないまでも、せめて孤立しないように動くぐらいは出来ただろ。何で何もしなかった」

「あの……すみませんでした」

「……あのな」

色々言いかけた言い訳を飲み込んで頭を下げたオレにアドルフが溜息を吐く。

「謝ってくれるのは良い。でも俺は理由を聞いてるんだ。この後も同じようなことが続くようじゃ困るんだ。分かるか？」

「……」

「で、何で何も対応しなかった。考えられないほど馬鹿じゃないと見てるんだけどな」

……。

「は？ いや、待ってくれ。泣くなよ」

「泣いてないし！」

これはちよっぴり目の縁に水分が溜まってるだけで、まだ落っこちてないから泣いてるにカウントしないんです！

「いや、だって……あーもー、何なんだ。これじゃ俺がいじめてるみたいじゃないか」

「いじめられてねえし！」

「分かった……分かったから、ほら、怒って悪かったって」

「悪くないのに簡単に謝るんじゃない！」

「どっしろっつーんだよ……」

困り果てた様子で天井を見上げて、アドルフは「なんなんだかなあ」とぼやく。

「まあ、悪かったよ」

「何がさ」

「客に対する態度じゃなかった」

「……そういうことなら許す」

「偉そうだな……ま、良いけどさ。それで、理由、俺には言えないのか」

「……言えなくはない、けど」

正直あんまり言いたくない。

それでも、アドルフはきちんと対応して、詫びまで入れて来たんだからここでオレがだんまりを貫くつてのは不義理つてもんだらう。オレは渋々口を開いて、ぼそぼそと白状する。

「動かなきゃなんないとか……分かってたけど……」

「けど？」

「足も、声も、出なくて……」

「……」

「行動、出来なくて、すみませんでした……」

「あああ、分かったから泣くなつて」

「泣いてないし」

「分かった。……はあ」

「……人に白状させておいて溜息か、コラア」

「いや、違つて」

ドスの利いた声で唸ったオレに、アドルフは慌てたように手を振って、ポリと頬を掻く。

「まったく、俺もまだまだだな……と、思ってた。」

ん？ 何で今の話でそうなるんだ？

オレが首を捻っていると、アドルフが一步下がって、両膝を床に着くように座った。

そして、腰の鞘にアイスバーもどきを収めて、そのまま両手を床について、

……って、飛んだあつ？！

怨敵再来とオレ（後書き）

【作者後記】

アイルビーバック、と言ったかどうかは知りませんが先輩再び。ちなみに、大分前の伏字の回答をこの辺で。

「だけどこわい。こわいから、こないで」でした。

涙が出ちゃう。だって女の子だもん。

そんな古いネタを振りつつ「女心は永遠の謎」と思っている尋でございませぬ。今晚は。

初見の方初めまして。いきなり下品な内容で申し訳ありません。再会の方、相変わらず微妙にピンチな状況でも真面目になれない主人公ですみません。

まあ、一種の防衛なんですけど。

さて、アポ……アドルフが飛んだあたりで次につづきます。機会があれば次の話でまたお会いしましょう。

作者拝

伝統謝罪とオレ（前書き）

- 1 ・正座する
- 2 ・その場で斜め前方上空へジャンプ
- 3 ・姿勢を崩さず前方空中一回転
- 4 ・姿勢を崩さないまま着地
- 5 ・相手の足元に滑り込みつつ一礼

伝統謝罪とオレ

先程まで某変態イケメンに絡まれてたオレですが、今別のヤローから羞恥プレイを現在進行形でされてます。

只今絶賛針むしろの筈中。

何コレ？ デュランの呪い？

物つつ凄く他人のふりして逃げたいんですけど。

オレは高々とジャンプした拳句足元に滑り込んできたアドルフを虚ろな目で眺める。

うん、てか、逃げようとしたんだ、実際。

ただ失敗して微妙に逃げ遅れたんだけどさ。

そのお陰でオレは現在「お前、悪の枢軸かよ」ってな目でお店の人やお客さんに見られているという、何かの拷問っぽいピンチ的狀況に置かれている。

ここは一つ期待に込めて、目の前の床に這いつくばってるバカ男の、中身までピンクであろう頭を踵でハゲるまでグリグリと踏んづけるべきなんだろうか。

かなり魅力的なアイディアっぽいこの考えはオレの中で圧倒的多数を持って賛成可決されそうだった。が、しかし、じいちゃんからジパング人の心意気、すなわち「ゲイシャ・ハラキリ・サムライ・タカヨージ」を教えられたトマトナデシコのオレにはそんなハシタナイ真似は出来ない。

なんで、オレは取り合えずリュックを漁って、奴の頭に残ったミネラルウォーター全部をジョロジョロとぶっかけるだけに留めといた。

「うむ、お上品だなオレ。」

「ぶふっ！ いきなり何しやがる！」

おじいさん、アドルフが立ったわ！

「や、そりゃこっちのセリフだからアポロチョめ」

「アドルフだ」

「オレの辞書にアドルフの文字は無い」

ついでにこんな変態の知り合いも居ないったら居ない。

「変態、つて……何でそうなるんだ。何処がおかしかったか？」

「頭から墓場まで」

「俺は既に死んでいる?!」

かもね。

てか、またお店の床濡らしちゃったよ……しかも注目度がこころなしにアップした気がするんですけど。

これ以上は拙いかな、と思ったんでオレは立ってる水も滴る良いチヨコになってるアドルフの袖を掴む。

「てかお前の人間としての尊厳の死はほっとくとして、アポロ、こっち」

「アドルフだっていうかなんだよ急に」

「良いから。邪魔だから」

「邪魔っておい……」

何かブツブツ言ってたけど、とにかくオレは一秒でも早くその場を離れようとアドルフの袖を引っ張ってって一番近くにあった更衣

室に奴を無理やり押し込んで、続いてオレも入る。

「で、なんだったんだよ、さっきの珍妙な動きは」

ジャツとカーテンを引つ張つて外からの視線を遮断して、オレはアドルフの方を振り返つて……つてうわデカッ！

そう言えばデュランも大きいんだけど、こいつもかなり背が高いんです。

しかもデュランは白っぽくてわりと優男っぽくひよろつとしてるんだけどこちらは何と言うか、あれです。細マッチョです。

おまけに武器まで持つてるから専有面積パネエです。

ちっ、こいつもかブルータス。縮めば良いのに。

ま、とつさにこいつをあの場合から連れ出したオレの瞬発力と判断力を誰か誉めてください。

……や、もう何か後悔し始めてますけどね。

こんな狭いところに何で連れ込んだんじゃったんだろ。アホじゃなかるうかオレ。数秒前のオレ、ちよつとその辺で首吊つてこい。

とか思いつつ、一応小声でお説教中です。

「いや、何つて……つーか何で俺引つ張りこまれてるんだ。袖離してくれないか？」

「あんな衆人環視のもとで何繰り広げちゃってるんですか。アホですか、そうですか、死ねばいいのに」

「は？ いきなりそこつていうか、いや、俺はただ謝ろうと」

「あんな斬新な謝り方があってたまるかー！」

思わずムクっぱりに叫ぶオレ、ただし小声。

それに何故か驚愕の表情のアドルフ。

「斬新？ いや、あれが伝統的なジパング式の謝罪方法のジャンピ
ングドゲージャーだっていう」

「知るかつ！」

「知らないのかつ？！」

知る訳ねーだろうがー！

「良いか、良く考える。あの姿勢から「なっ？！ 座ったままの姿
勢！ 膝だけであんな跳躍を、何者？」みたいな謝罪方法、普通の
奴が出来ると思つのか？ な？ なあっ？」

「いや、簡単だったけど」

「お前はな！」

一般人の性能舐めんな、と胸倉……は微妙に掴み難いんで、シャ
ツの腹を掴んで揺さぶって居たら、ようやくアドルフが戸惑った顔
で「もしかして、ああ言うのは無いのか」とかほざきやがった。

さつきからそう言ってます。

最初に目の前で、何の心の準備も無くアレを見ちゃったオレの心
臓のドツキリを返せ。

「あいつら……騙しやがったな……」

「あいつらって何だよ……とにかく、やめてください。迷惑です。
奇異の視線集めまくってました」

「ああ……もう二度とやらない」

是非そうして下さい。

「……待てよ、っつーことは何だ？ 俺は店内で客を前に謎の奇行
をする男っていうカテゴリーで見られてたのか？」

「今更？」
「……」

がつくりとうなだれて「俺の今まで築き上げてきた信頼とかネー
ムが」と呻いているアドルフの肩をオレはポム、と手に持ってたス
パッツで叩く。

「ご臨終です」

「それを言うなら御愁傷様、だ」

「いや、恥で死ねるかなーと」

「……。はー」

「まあ頑張りたまえよ少年」

何故か睨まれました。

「……俺の方が年上だよな？」

「あー、だっけか。なら年上らしくしゃんとしろよ。みっともねえ

ぞ、ほら、背筋伸ばす！」

「お、おお……」

バシッとスパッツでしょぼくれてる背中を叩いたら、ビシッとア
ドルフが背中を伸ばした。

よしよし、良く出来ました。

うむうむと胸を張って腕組みして頷いたオレに、何か微妙に複雑
そうな目を向けて来るアドルフ。

「お前……そんなんだからこっちがなあ……」

「ん？」

「あー、いや。すまん。もうちょっと俺は頭冷した方が良いみたい
だ」

「ふーん。冷やすんならも一度かけてやるっか？」

リュックを漁ってみるオレにアドルフは「いやもう良い」とひきつった顔で手を振る。

「お前、この分だと今度はコーラでも取り出しそうだしな」

「おお、その手があったか」

「やめてくれ。トマトジュースと水でもう懲りた」

「ふーん」

何と無く相槌を打ったオレに、アドルフは微妙な顔をして頭を掻いた。

「えーっと……その、何だ。えーっと」

「いや知らんし」

「そう、知らないんだ」

「……はい？」

ああ、頭がおかしくなったのか。

さっきスライディングしてきた時にどっか打ったんだな。きっと。

や、こいつの場合チヨコ頭は元からか。

「何だ、その生温い視線は」

「や、可哀そうだなあ、と……全てが」

「全否定?!」

「で?」

オレはどうにも進まない会話に溜息を吐いて、更衣室の鏡によっかかる。

「アンタ結局何がしたいんだよ」

「その前に、お前の名前を覚えてくれないか？」

「はぁ？ 何で？」

「いや、チビた……待った、待て、怒るな」

無言でヤツの急所めがけて足を繰りだそうとしたオレの前でわたたと手を振って、アドルフが慌てた様子で弁解する。

「だから、そう呼ぶと嫌だろうから名前訊いてるんだよ。確かさっきアカギって呼ばれてたと思ったんだが……」

誰、その妙にザワザワしてそんな名前の奴。

「全然違うし。マサキだよ、マサキ」

「……あぁ、マサキか」

「ジパング風の音だな」と、何か妙に感慨を込めてアドルフがオレの名前を呟く。

「陛下も何度か呼んでたのに、随分間違えて覚えてたんだな……悪い」

いや、デユランはマサキなんて呼んでないから随分違うのは当たり前だけどな。

まあ、アカギってのも相当違うが。

「や、別に。で？」

「その……あのを、マサキ」

「おう」

さっさと終えれ。

そう思って待ち構えるオレの前でアドルフは妙に真剣な顔をして、
勢いよく頭を下げた。

「男だと思ってて悪かった。すまん」

……えっと？

伝統謝罪とオレ（後書き）

【作者後記】

何気なく凄いことをアポロがやっています。

流石DDDの有望株ですね。（棒読み）

ちなみにジャンピング土下座は某岩男の敵役さんが発祥だとかなんだとか。

そんな豆知識を呟きつつ今晚は、膝が痛くて正座が出来ない尋でございます。

初めましての方ようこそ。礼節って大事ですよ。

またお会いできたその方いらっしやいませ。間違ったジャパニーズのイメージを集めてみました。

さて、随分前に拍手で張っておいた話がやっと回収にかかりました。一応きちんと詫びるアポ……アドルフですが、ナカバの反応は如何に。

次回に続く。

……ということ、縁が合えばまた次回でお目にかかりましょう。

作者拝

構え要求とオレ

男だと思つてて悪かった。

つて……何言つてんだこいつ？

良く分からなかったんで、続きを聞こうとオレは待つてみる。

「……」

「……」

「……」

「……」

んー？

「……もしかしてさっきので終わり？」

「へ？」

「あっそつ。ふーん」

終わりですか。

「うん。まあ気にするな。人生そつ言つ事もあるさ。ぼーいずびー
あんちよびー。じゃ、さらばだ」

「いや、待てつて」

手を上げて立ち去ろうとしたら、首根っこ掴まれて引つ張り戻され
れました。

「ぐえええ」

「うわ、しめ」

「げほっ……何だよ。まだ終わりじゃねえのかよ。ならさっさと言えよ」

「いや、その、怒ってないのか？」

「あー、さっきのスライディング土下座だっけ？ 他人事なら大笑いするけどなー。別に怒るほどの事じゃねえし。ま、アンタが馬鹿なのはよく分かってるから。じゃ、さらばだ」

「だから待ってって」

「ぎゃぼ」

手を上げて立ち去ろうとした瞬間にまた襟首ひつつかまれた。

てか一瞬、今オレに某ピアニストが降臨してなかったか？ 気のせい？

「何だよさつきからしつこいな」

「いや、だから……本当に怒ってないのか？」

「アンタが本題を切り出さずにオレの通行の邪魔してる事についてちや、段々プチむかつき始めてますが何か」

「……お前変な奴だな」

今のテメエだけに言われたかねーですよ。

てか、こいつ本当に阿呆だなあ。

オレはハーンと溜息をついて手を下ろす。

「あーのさあ。変な奴だなーとか言ってる前にアンタもうちよっと考えて行動しろよな」

「いや、まあ……あの謝罪方法は……」

「そこじゃねえって。面倒な男だなあ……」

「面倒な男、って……」

何やらショックを受けてるっぽいチョコ男を見上げて、オレは肩

を疎める。

「アンタが何気にしてるんだか、何言われたんだか知らんけど、オレはアンタに頭下げさせる覚えはねえよ」

溜息を吐いて、オレはちよつとアドルフから距離をとる。

この距離はやっぱりちよつと辛いな……でも、どんなに滑稽なポーズだろうが一つの集団の指揮官であるこいつに、あの場でオレに頭を下げた格好をさせる訳にはいかないしさ。

しょうがない。

「客商売にしたって、オレはアンタらに金払う立場じゃないし、アンタらの仕事にとっちゃイレギュラーもいいところでしょ？」

「……ま、雇い主は陛下だけだな」

「そういうオレにまで気い使って、そっちが悪いわけでもないのに頭下げるとかコピ売らんで良いよ」

「参ったな……」

オレの言葉にアドルフが「そこまでうがった考えじゃなかったんだが」と苦笑いする。

「失態を犯したら謝罪するのは当然じゃないか？」

「失態ならね。でも、そっちの失態って言うのは仕事の話でしょう？ それともデュランにオレのメンタル面までのケアをしろって言われてるとか？」

「そうは言われてないけどな」

ふーん、オレがデュランからの依頼に含まれてる要素の一つだってことは否定しないのか。

やっぱりね、と思いつつオレは「とにかく、見た目の件はどうで

も良いんで謝罪不要です」と告げる。

くどいようだが、別にオレ、怒っちゃいけないのだ……てか、怒る理由がそもそも無いしさ。

だって、オレはわざわざ男っぽく思われるように動いてるんだし。

「どうでも良い、って……」

「どうでも良くないなら、間違われた時点で自分で訂正してますよ……プライドの問題ぐらい、自分で片付けるし。譲ったようにみせかけて、相手に頭下げさせるような卑怯な真似は嫌いですから」

「……」

や、何でそこで溜息吐くんですか？

「お前……本当に、本気で男と間違えられても気にしてないんだな」「さっきからそう言ってんじゃん……」
「アンタの記憶は再生後自動的に消滅する、とかいう機能でもついてんのか」

「いや、そう言う訳じゃないけどよ……緊張して損したっけ」

「何で緊張するのかイミフ」

「……」

何？ さっきのスライディング土下座に勇気が必要だったって事？

お前、勇気の無駄遣いしたな。うん。

そんなことに勇気を浪費してる暇があったら、奉仕活動に励むと良いと思うよ。

「中央セントラルの未来に御奉仕するにゃん」とか。

「じゃ、もうオレ行っていい？」

「……今更だけど、お前が連れ込んだんだよね？」

「本当に今更ですね。じゃっ」

くるつとターンして出ようとした瞬間、オレの後ろでカーテンがふわっと動いて、背後から二本の腕が生えた。それは迷わずオレを捉え、

「?!」

更衣室の外に、引きずりだされました。

勢い良すぎたせいですつ飛んだオレの後頭部がゴン、と何かに当たる。ぐえ。

文句を言おうとするより先に、のっしとオレの肩にかかる重み。振り返るより先に感じた匂いに、ソレの正体が判明する。

「……」

「……」

「……」

「……重い」

「そうか」

ふっ、そうか……じゃねえですよ。

オレの「ほっそりした華奢な」……うん、ゴメン嘘ついた。オレの大して広くも無い、骨っぽい肩にずしつかぶさってる無駄にでかくて、無駄にお美しくいらっしやる腕を半眼で睨んでオレは溜息を吐く。

何ってあれですよ。

この流れるにどう考えてもあれですよ。

てか、袖がワイシャツっぽい奴になってるってことはもう購入済みの着替え済みなんですね。

そうですか、良かったですね。

オレはまだ買ってすらいませんよ。

てかさあ、アドルフ。

何かその同情してるみたいな目でオレを頭の上から見下ろすのは止めてください。

オレだって不本意なんですから。

や、何のかんの言って大して体重掛けないように気遣われてるらしいから、重さでその場にベチツとかプチ潰れたりする心配は無いんですけどね。

ただ、暑苦しい。

ベシベシと腕を叩いてみたけど、まあそんなことを気にして離れるような性格してませんよね？

はいはい、分かってますよ。

チツ、面倒な奴め。

さびしんぼうか貴様は。

構わないと死ぬんですか？　じゃあ是非死んでください。

某バニラっぽく「振り向いたら死ぬ」フラグが立ってる気がするので、ひたすら肩の付け根に乗っかってる何か頭っぽい物を見ないようにながら、オレは無言で後ろにくっついてる「ソレ」をゲシゲシとかかたで蹴りあげる。

落ちろー、落ちろー、落ーちーろー！

「……」

ぜいつ、ぜいつ、ぜひゅー。

「……あのー、陛下？　そろそろ離してあげたほうが……彼女が死にそうですけど」

「楽しそうだな」

「は？」

アドルフ、今のお前の反応は正しい。

そうだよなー、そういう反応になるよなー。うんうん。

そんな風に心底同意してオレがふかーく頷いていると、何が不満だったのか乗っかってる腕にぐいっつとさらに引き寄せられました。

「ぐえ……てめえ、どういつつもりだ」

「八つ当たりだ」

「八つ当たりかよっ！」

「俺が居ない間に面白い遊びをしていたようだな」

うによわー！！

「耳元で喋るんじゃないっ！」

もう限界だー！　と手を振りまわして奴の頭を力づくでぐいっつと押しやったら、アドルフが「うわ、勇氣あるな」と何故か青ざめた。いやだって、あのえろボイス耳元で流されたら誰だってこうやって原因を引つpegがすと思いますよ？

生命の危機だし。

人間の尊厳の危機だし。

さっきのジャンピング土下座で尊厳も人生も全部、場外ホームラの勢いで投げ捨てたアドルフには関係ないかも知れんけど。

ちなみに引つpegがされた物体Aこと、全ての魔族の王にして魔界の支配者、重度のコーヒー中毒者で永遠の二十四歳年齢詐称疑惑まった中ことディアヴォロス・デュラン様は、ただいま何処となく無然とした微笑みを浮かべてオレ達の方をご覧になってあらせられございますです。

てか、さっきの登場シーンってまるつきりホラーの定番じゃなかった？

「俺が居ない間に面白そうなことを……」

「あー、はいはい。煩い煩い」

ベシベシとまだ握りしめてたせいでちょっとしわがついちゃってるスパッツで奴のことを叩いたら、何か辺りで息をのむ音がした。だから、何でその反応なんですか。

というか、さ。

オレはじーっとこっちを見てるデュランを見上げる。

うん、見おぼえがあります。あの目。

『おねえちゃんばっかりずるい』

むかーしむかし、良く弟が構って欲しい時とか、拗ねた時に見せてた目だ。

あの頃はオレよりちっちゃかったのに……。

古き良き時代を思い出して溜息をついたら、デュランが怪訝そうに首を傾げた。

お前、今本当の五歳児と比較されてるからな。分かってる？

「別に遊んでないんです。誠意を持つてのお話し合いですよ……」
「いつが人生を暴投してたから」

「え、俺そついう目で見られてたんだ……」

「成程」

「陛下もそこで納得しちゃうんですかっ？」

「？」

「いや……良いっすけどね」

「あ、そつだアポロ」

「アドルフ。何だよ」

「さつき、サンクス」

「へ？ あ、ああ……あいつか」

奇想天外な謝罪方法っぽい物を見せられたお陰で言いそびれてましたが、ちゃんと感謝はしてますよ。

何と言つか、あれはもう理屈抜きでムリなんで……。

「ナカバ、買わないのか？」

「はいはい、買いますよ。買います。自腹切ります」

「切るならば中身がはみ出さない程度にしておけよ」

「表現怖っ!？」

はみ出すほど中身入ってませんけどね。

今時珍しいお財布を取り出しつつ、オレはレジに向かう。

流石セントラルのお店。現金オツケーでした。

「ちょっと、一発履いて来るー」

「お前女ならそういうこと大声で言うな！」

「うっさいなー、チヨコの癖に。何？ 公衆の面前でオレに「下着」って言わせたいの？」

「ばっ……くっそ、信じらんねえ何だこのガキ……」

「ナカバ。アドルフで遊んでないで着替えて来るなら早く行って来い」

「はい」

ちえーと呟いたらアドルフの顔が引きつってた。

ま、八つ当たりさせて貰ってて悪いなーとは思っただけど。お疲れさんと言っ気持ちを入れて、寸止めパンチを奴の腹に打ち込んでおいて、オレはさくっつと着替える為にトイレに向かった。

で、

「装着完了であります」

「御苦労」

「……なんだこのノリ」

お前はノリ悪いなあ。

敬礼ポーズの手を下ろして、オレはとりあえずデュランの横に寄つてく。よし、この位置だ。

「で、この後はどうするんですか陛下」

何か投げやりな感じのアドルフの声に、デュランがわざとらしく片眉を上げる。

「おや、もう隠れないのか？」

「隠れるって何？」

「……一応俺ら護衛なんですけどね」

はー、と溜息を吐くアドルフ。

「一応邪魔にならないように護衛しようとしてたつもりなんですが

……」

「ですが？」

「陛下が面白半分に俺らを撒くんで止めました」

「つい、な」

つい、じゃねえよ。護衛引っぺがしてどうすんだよ……ってお前はそついう奴だったよな。

きらきらした笑顔で「すまん。ああされると悪戯心が」などと

まったく誠意のこもって無い謝罪をしているデュランに、アドルフが頭を抱えている。

「いや、素人に撒かれるっていう俺らが悪いんですけどね……陛下、勘弁して下さい」

「ふふ……」

「本当に勘弁して下さい……」

「良い気晴らしになっただろう？」

お前の気晴らしですね。良く分かります。

オレに憂さ晴らしされ、魔王に気晴らしのネタにされ、もしかしてDDDつてもものすごく可哀そうな人達の集団なんじゃなかるうか？

しかもお客だから文句が言えないというジレンマ。

デュランもまた尾行を撒くとか、向こうが文句を言いつらいようなところをピンポイントで突いてるし。

そりゃ、仮にも世界有数の傭兵部隊の人が一人プラス荷物オレに撒かれちゃダメでしょう。

護衛頼んでおいて、ついてきたら撒くっていうデュランもどうかと思うけど。

後でいたいけな傭兵さん達を弄んだ詫びにっってことで、慰謝料でも足しておくんだろうか。

ちっ、これだからブルジョワは……金で解決できると思ってるのか、チツ。貧乏人の僻みで呪い殺される。

デュランを睨み上げたら、不思議そうな顔で首を傾げられた。

「空腹なのか？」

「ちげえよ」

「そうか、では行こうか」

いや、今の言葉のつなぎの意味が分かりません。

構え要求とオレ（後書き）

【作者後記】

ホラー映画が苦手です。

絶叫マシンも駄目です。むしろブランコのレベルでも嫌です。

お化け屋敷は夏祭りの日に近所の公民館でやってるレベルでも十分すぎると思います。

世の中怖いことがいっぱいですね、とにこやかにほほ笑みつつ今晚は、尋でございます。

初めましての方、いきなりこの文字量で申し訳ない。

また来たよの方、たまにはこんな日もある五千文字弱。

本当は二つに分ける予定だったとか、そんな話は二人だけの秘密にして下さい。

防寒対策とオレ

隠れてついてこられるとつい茶目っ気を発揮して撒いちゃうデユランの逃亡防止の為に、開き直って堂々と付いて来ることにしたらしいアドルフを加えて三人で店を出る。

あれ、何か大分暗くなってる。

「もう夕方だからな」

「え？ 嘘？」

「嘘では無い。時計を見る」

「あ、ホントだ」

ダイバーウォッチを確認してオレは頷く。

ついでにちゃんと動いてるか確認する為に耳にくつつけてみたらアドルフに変な顔をされた。

何だよ。

「ああ……それ、アンティークなのか」

「え？ うん」

じいちゃんの生まれた朝より前からチクタクやってる時計ですよ。今じゃ手入れできる人が殆ど居ないというシロモンですが、まだまだ現役でオレの為に時間を教えてくれる良い子です。

簡単な手入れならオレでも出来るって辺りも好感度アップです。

「そんな高価な物持ち歩いてたら盗まれるぞ」

「しょうがないじゃん。他に時計持ってないし」

「百均でも売ってるだろう」

「あれはダメなんですー」

「ナカバ、爪が刺さっているのだが」
「あ、ごめ」

力いっぱい主張するつもりが、力いっぱい爪を立ててたらしい。

「まるでネコだな」とかぼやいてるデュランの足を横からげしげし蹴りつつ、オレはだんだん夕暮れの色になってきている空を見上げる。

今は五月の初めだから、昼間はあったかくても夕方はまだちょっと寒い。

オレ冷えやすいしなー、しょうがないんだけど。

さむさむ、とか思いつつ掴まったら、デュランがオレを見下ろしてちよっと苦笑した。

「ナカバ」

「何さ」

顔を上げた瞬間、バサツと顔に何か落された。わっぷ！

「なんじゃこりゃー！」

「そこは腹を抑えるべきだろう」

「あ、そっか。なんじゃこ……って違うわー！」

「良いボケ突っ込みだ」

ピシ、ガシ、グツ、グツ。
アイコンタクト

以心伝心アイコンタクトでやったオレとデュランにアドルフが退いていた。楽しいのに。

ついでにデュランが黙って人差し指を出していたので、ご期待に応えて同じように先つちよをチョンと合わせておいた。

デュランってある意味エイリアンだから、これはこれで正解だよ
ね。

てか、

「マフラー？」

「さっき買った」

幅広のマフラーは明らかに季節が間違ってると思うんですけど、
良く売ってたなあ。

デュランサイズに合わせたマフラーはオレがつけるとストールっ
ぽい感じで、冷えた二の腕までふっかり暖かです度良かった。

「サンクス」

お礼を言ったらちよいちよいとずれてたところを修正された。

あ、うん、こっちの方が暖かいや。いい匂い。

「帰るまで借りてて良い？」

「別段お前にやっても良いが？」

「このブルジョワめ……良いよ、借りが増えるから」
「何だ、返す気で居たのか？」

ニヤリと笑う顔が憎たらしいですね、はい。

「今に見てる……」

「見ていると伸びるのか？ どれ」

「くそー！ むしろお前が縮め！ 禿げろ！ ふーとーれー！ そ
して身長よこせー！」

「無茶苦茶だな……」

デュランを挟んで反対側でアドルフが何か呆れてるけど、貴様ら
に分かって堪るか！

この百八十越えーズめ！

良いですか？ オレの今の身長が百さ……百四十……っばい、ですから。約四十差ですが何か文句あるかゴルアツ！

縮めば良いと呪いを込めながら掴まってるデュランの腕をギリギリしてたら、何故か頭を撫でられた。

やめい、縮むと振り払うか、腕ひしぎ続行か迷って、とりあえず続行を選んで渾身の力を振り絞ってギリギリしてみたけど、デュランは可笑しそうに笑っただけだった。

オレの力じゃここが限界か……皆、後は頼んだぞ。メガ テ！
こうですね、しないけど。

大体MP無いオレが唱えても発動しないですよ。……しないよね？

「つて、あれ？ 今どこに向かって歩いてんの？」

「待ち合わせ場所だ」

「誰の？」

「お前と、お前の友人達の」

「え？ そんな約束したっけ？」

「俺がした」

お前かよっ！ とわき腹に肘鉄で突っ込み入れておいた。

流石に腕ガツチリホルドの状態では避けられなかったのか、デュランが喰らって「うっ」とか呻く。ふふん。

「まあ、一応釘を五百程刺されていな」

「こわっ?!」

「喻えだ……余程お前と俺を二人きりにしておくのが心配らしい。

まあ、正解だが」

「……」

正解、つてのはオレが消えかけた話だろう。

気にするなと言いかけて、オレはちよつと考える。
気になつてるものを気にするなとか、気に病むなとか、それは無理だろう。

結局オレの頭に入つてゐる薄っぺらい辞書じゃ大した言葉は見つからなくて「終わりよければすべてよしですよ」とか訳の分からん言葉しか出てこなかった。

当然のようにデュランはきょとんでした。

ああ、視線が痛い。

「だからさー、途中経過で色々あつたけど、楽しいこと多かつたし」
時計塔の中を探検ごっこした時はわくわくした。

モービルの部屋も、あれはあれで楽しかつた。隠しウツサー満載で、あれ探すだけで時間潰せまし。

移動中に、デュランから色々な場所や物の歴史とか由来、理由を聞きながら移動するのも楽しかつた。

一緒に食べた遅めのお昼ごはんはほつぺた落っこちるかと思つた。それに、

「デュラン」

「何だ」

設計者のメモを見て思つたんだ。

やっぱり諦められない。期待して、望みを持って、それが自分の力じゃどうしようもないものに押しつぶされる時のあの気持ちはもう二度と味わいたくないと思つてたけど。

デュランに見せて貰つたあれを見て、もう一度だけ、悪足掻きしようと思えたんだよ。

「あれ」

そう言おうかと思って。ありがとづつて言おうかと思って、見上げて。

そしたらデュランはオレを見下ろして笑っていた。
だから。

「やっぱりいいや」

「そうか」

何かここでぐちゃぐちゃ言ってもデュランはしらばっくれそうだったし、上手く言えない気がしたし。

「デュラン」

「ん？」

「楽しかったね」

「……そうだな」

そう言って笑ったデュランの顔はやっぱり美形以外の何物でもなかったけど、今だけはちょっと好きになれる気がした。

防寒対策とオレ（後書き）

【作者後記】

前作『ひま潰し』から続いてきたナカバとデュランの関係ですが、ある意味ここでようやく「和睦」しました。

彼女たちの関係において、この話が一つの節目になります。

さて、皆様今晚は、尋でございます。

初めての方も、ご再訪の方もようこそいらっしやいました。当方は貴方を心から歓迎いたします。

格闘遊戯とオレ

「ナカチャーン！」

Bダッシュから一気に相手を画面端に追い詰めて、コンボを叩きこむ。こうですね、分かります。

ってことで、恒例のリムりんからのハグ攻撃……や、攻撃じゃないけど、あれですよ。

むっちむちの、たふんたふんのEカップの脅威を思い知るが良い

！ふはははは！って感じなのですよ。

何せオレの頭が大抵乳枕にのめり込むから。むぎゅっ。

「リミュリシエル。ナカ吉の顔が青くなってきていますよ」

「何ですって！どこの誰が私の可愛いナカちゃんにそんな真似をしたの！出て来なさい！」

はい、オレその人知ってまーす……って、いや、マジで酸欠でちよっとくらくらししてきた。

昨日の夜から二度ほど消滅の危機に立たされたオレですが、今が一番のピンチだった気がします。

ちなみに二番目は女装する羽目になった今朝です。

あ、リムりんにはちゃんと離して貰って一命を取り留めましたよ？

「もー、何処行ってたのよー、心配したんだからー」

わーん、と天使のような美少女に抱きつかれるオレ。

ふっ、うらやましかろう。代わってやらないぞ。

多少の生命の危機なんぞ、美少女という世界の正義の前ではちり

アタックも同然なのですよ！

「それを言うならば塵芥だ」
ちりあくた

後ろの方の幻聴は無視して、

「えーとね、天壇とか、うにくるーとか？」

「ケガしなかった？」

「えーと……う、うん」

ケガは……まあ、ちょっとばかり膝小僧すりむいたりもしましたけど今は治ってるし。

ちょっとばかりパーンしましたけどあれは怪我じゃないよね？

セーフですよ？

「きちんと食事は採れたのですか？」

「あ。そりゃあもうばっちり」

お昼どころか三時になったし、ついでに言うと自分で食事出来ない状態だったけど食べたことは食べたし。

「誰か変な男に絡まれなかった？」

「えーと……」

……まあ、某変態先輩には絡まれ、某チョコレートには羞恥プレイもどきの謝罪をされましたが。

ついでに双神子にも何か嫌いな絡まれ方されたけど、あれは男じゃないし。

「まさか脅されて泣かされたりとかしてないでしょうね？」

デュランに怒られてマジ泣きました何が。
そう言えば昨日からカウントして計三回も泣いちゃってるよオレ。
乳幼児ですか。

一生分の涙を先払い、こうですね、分かりません。

てか……やべえ、言えねえ。言えねえよ。

リムリンとヴィーたんと言ったら世界大戦勃発しちゃうよ。

その相手がいきなり魔王とか、幾らリムリンとヴィーたんが綺麗
で可愛くてかつこよくて強くてもムリゲー過ぎる。

デュランって魔改造も良いところだしな！。

「平気です」

「嘘だわ」

「嘘ですね」

「何ではれたっ?!」

「驚くほど分かり易いな……」

「そうっすね」

背後からの二重音声はスルーして、

「敬語でしたしね」

「それに作り笑顔なもの」

「一応、私達はうそを見抜くような訓練も受けてますが……貴方の
場合分かり易過ぎますね」

「おっかしいなあ……」

普段はめつたに気付かれないのにな！。

首を捻っていると、またグキッと首をやられた。ぐえ。

「だから一人で勝手に行動しちゃダメって言ったでしょ。すつごく心配したんだからー」

「ぐえええ」

「しまってますよ、首」

「あらやだ、ごめんなさいね」

「うえ……や、平気……うん、多分」

ちょっとグラグラしながら、オレは「でも一応保護者つきだからと後ろでぼけーっと突っ立ってる野郎を指す。

何故か停止するリムリンとヴィーたん。

何その反応。

「……もしもし？」

「……」

「……」

「ふう」

「はあ」

何で二人揃って溜息吐いてんの？

「そう言えば居ましたね、あんなのが」

「居たわね、あれが」

そう呟いてまたしても同時に溜息を吐くリムリンとヴィーたん。

いや、一応言動あんなだし、ポケポケの五歳児でしかもラスボスだけど、微妙に頼りにならなくもないよ？

得意分野とやり方が大分一般人とずれてるだけで。

「それで、アレには妙なことされなかったでしょうね？」

「うん」

妙なことはされてない。

デュランが妙なのはいつものことだし。

振り返ってみると、相変わらずデュランは距離を取ったまま何かアドルフと話し合っていた。

手元でまたライターをカチカチ弄ってる。

ああ言うところが子供なんだよなあ……。

ところでオレ、煙草とか大っきらいですから。オレの前で吸いやがったら貴様の急所も容赦なく蹴り潰しますんでそのつもりで。

そんなことを考えてたら、何故かアドルフの方がビクッとして周囲を見回していた。

何を察知したんだろう？

とりあえずご期待に応えて、アドルフを見てニタアッと笑ってやった。

あ、マジで退いてる。

それで良いのかDDD。

「ナカちゃん？」

「あ、うん、ごめん。何？」

「もう、すっかりして」

美少女は怒っても可愛いだけです。

でも怒らせたいわけじゃあないし、オレは素直に「そうします」と頷いておく。

「もー……」

「リミュリシエル……その辺に。もう日が暮れます。冷える前にホテルに戻りましょう」

「……そうね。ナカちゃん、晩ご飯何食べたい？」

「え？ うーん」

……そこ、さっき腹膨れるくらい食ったばかりだとか言わないように。

くどいようだけどオレ燃費悪いですから。

それにご飯は大事です。ご飯は人生の楽しみです。

「ご飯系が食べられるのが良いな……昼間はパンだったし」

「じゃあ、キージャ料理はどうかしら？」

「うーん、食べたこと無い」

「じゃあ行かなくっちゃ。何でもチャレンジよ」

「私はあまり辛いのは遠慮したいのですが」

「辛いのも多いから大丈夫よ？ ナカちゃん鶏肉好きだったよね？」

「うん、大好き！」

思わず全力で頷いたら、リムりんがフリーズした。

あ。

「……ヴィーたんヘルプ」

「そんな目で私を見ないで下さい。無理です」

「や、うん……オレが悪いんだけど……」

「大丈夫です。しばらくしたら戻りますよ。最悪喉元にナイフでも突きつければ正気に出来るでしょう」

「偶にヴィーたんって発想が怖いよね」

「合理的だと思いますが」

「うーん……」

戦闘訓練を当たり前のように受けて、当たり前のようにそう思う考えがある彼女たちとオレみたいな非戦闘員の考えっていつか、考えの方向性が違うことは割とよくあるんだけど……。

そう言えばあつちのアドルフも当然戦闘民族だし、デュランに至ってはラスボスだもんな。

なのになんで一番するっと考えが馴染むのが魔王なんだろ。

オレ何かチヨイス間違えてね？

まあ、あそこまで魔族の癖に人間臭い魔王の方がどっかチヨイスが可笑しいって可能性の方が高いけど。

オレがじーっとデュランを睨んでたら、ヴィーたんが少し困ったように笑った。

「気になりますか？」

「え？」

「あの男が」

「気になる……うーん、まあ、そういう言い方もできるけど……」

「親近感を覚えた、と言う感じですか。私から見ても、少し似てますからね……」

癪ですけど、と呟くヴィーたんは俺は首を捻る。

え、全然似てないよ？

奴はチートのハイエンドで、余裕ぶってて、意地が悪くて、子供っぽくて、しかもあの見た目だし。

オレとは全然違うし。

そう考えてたのがバレたのか、ヴィーたんはちよっと苦笑してオレみたいにデュランの方を見る。

「考え方が似ているではありませんか？」

「えー、オレあんな突拍子もないことしねえよ？」

「……。そうですか」

何か今色々と諦められた気がするのはいのせいでしょうか？

「でも、良く似て居ますよ。自分で解決すれば、周囲にも迷惑も心配もかけないベストだと信じている辺りがそっくりです」
「や、別にオレはそうは思っていないし……」

相談した方が良いと思えば相談しますよ？

「あいつはそう思ってるかもしれないけど、実際奴の場合は多分奴一人でやるのが一番効率良いからな」

デュランくらいスペックが他より飛び抜けて、つーか突き抜けちゃえば他に誰かいたって助けどころかむしろ邪魔だろ。
足手まといにしかならない。

「そうかもしれませんね……」

ヴィーたんがデュランを見て呟く。

「本当に必要ないのでしょうか」

「何が？」

「いえ……貴方は、ちゃんと呼んで下さいね？ 今日みたいに一人で動きまわってはいけませんよ」

「あ、はい」

いや、だから一応デュラン付だったからね？ 途中ではくれたけど。

そんなにあいつって信用ないのかなあ。

色々こまごまと注意してくれるヴィーたんの言葉に神妙っぽく頷きながら、オレはちらっと横目でデュランを見た。

デュランはまだライターを弄りながら、話し合ってるみたいだった。

「おい、デュラン」

バタバタ手を振ったら、デュランが顔をあげてこっちを見て首をかしげる。

いや、「え？」じゃなくて。

「置いてくぞー」

「構わん。ホテルに戻って居ろ」

「何故に命令口調……あつそ、じゃあ置いてくからな。またね」

「ああ、じゃあな」

何だよ。本当に置いてくからな。

んべつと舌を出して、オレは両手でヴィーたんとりムりんの腕をグイッと抱きこむ。

「先行こ」

空にはそろそろ、星が見え始めていた。

格闘遊戯とオレ（後書き）

【作者後記】

初めての格ゲーはスト2でした。たしか。

とにかくストリートファイタ だったことは間違いない。

説明書も抜きで、当然のようにコンボも知らず、ルールも分からず、取り敢えず全部のボタンをめちゃくちやに押してました。

当然のようにボロ負けしました。

ちなみに対戦相手は従兄弟です。

そんな子供の頃のささやかな思い出を語りつつ今晚は、尋でござい
ます。

初めての方いらっしやいませ。取り敢えずこの話に格ゲーは関係ご
ざいません。

そうでない方よろこそ。ゲームの内容が古すぎてごめんなさい。

Bダツシユ懐かしいという方、ウェルカム。握手しましょう。

さて、中央二日目の夕方、ナカバは友人たちと合流しました。

穏やかな時間が何時まで続くのでしょうかね。

今回は今話題の迷惑メールについてのお話です。

縁があればまたお会いしましょう。

作者拝

不審着信とオレ

晩ご飯はリムりん推薦のキージャ料理のお店で食べた。

いやー、うん、旨かった。

辛いのか、匂いに癖があるのかは実はあんまり好きって訳じゃないんだけど、これは美味しゅうございました。

お米が食べたいっつーオレのリクエストに応えて、サラダも出して貰いました。

鮭、タコ、イカ、海老、胡瓜、それから松の実、黒いオリーブ、ぶちトマト、パプリカ、セロリ、カッターチーズ、パセリ、オレガノにバジル少々。さらっとバルサミコ酢で和えて、岩塩と荒挽き胡椒で味を調えたサラダは結構食べ応えがあって美味しかった。うまし。

これに、たつぷりソースに付け込んでから焼き上げた鳥胸肉のローストが加わると、いやあ、もう、あれですよ。口の中が幸せだって話デスヨ。

ヨーグルトとカレー粉、それからえーと……何だっけ、にんにくは入ってた気がする。とにかく色んなスパイスで作ったたれにじっくり二晩浸けこんだ鶏肉柔らかくて、大変ジューシーでした。

格子状に程良く焦げ目がついた皮の部分はフォークでつつくだけでも分かるくらいにパリッと焼きあがってて、その下にあるお肉は臭みは当然無くてナイフが要らないくらい柔らかい。そんで、ちっともパサパサして無くて、むしろ噛むとじゅわーっととろけるような脂が口の中に広がって、それからふわーっとスパイスの良い香りが鼻に抜けて、呑みこんでからも舌にいつまでも旨みがじんわり残ってる。そんなお肉でした。

もう次のを食べるのが勿体ない、っつーね。

いや、食べたけどさ。

だって、揚げものとかアツアツの内が美味しいんじゃないか！

じゅわじゅわとまだ泡立ってるくらいのを「さあ召し上がれ」って目の前に香ばしい香りと一緒に出されたらそりゃあ食べるしかないじゃないか！

赤い、トウガラシの利いた辛いソースにちよんちよんと付けて、ハフハフしながら齧った白身魚のフリッターとか、ほんのりピンクがきれいな明太子のフリッター。歯ごたえと香りが楽しい三種類のキノコの混ぜフリッター。厚めに切った濃い緑のズッキーニと鮮やかな赤パプリカとかのフリッターを交互に串に刺して衣を付けた奴も勿論とても美味しゅうございました。ちよつと舌火傷したけど。

マヨネーズベースのソースに付けても美味しかったなあ。隠し味の味噌がまたソースを濃厚にしてて、でもマヨネーズだからまるやかな。唐辛子ソースとは違うタイプの旨さなんだ。あと、さっぱりしたすりおろし大根と柚子皮を入れた淡い琥珀色のつゆソースも良かったよ。

ちなみに、辛い物が駄目なヴィーたんはハーブ入りの塩とレモンで食べてた。

それからね……あ、オレの夕食なんか興味無いですか。そうですか。ですよー。

とりあえず、その後は昨日と同じくリムりん達はエステに、オレは部屋のシャワーへって感じで別れました。

昨日勝手にオレが部屋を抜け出して外に遊びに行ったんで、今日は絶対に同じことするなよーとぶつとい杭をブスブスつと刺されました。いや、比喻だけどね。

そんなもん刺さったら「あ、痛」じゃすまねえし。

とりあえず片手でまだ濡れてる髪をタオルでワシヤワシヤしながら、オレは携帯の電源を入れる。

ギャギャギャギャギャ。

「ひぎやつ?!」

「うおおお、驚いたー……バイブ機能、心臓に悪すぎだろ。死んだらどうしてくれる。」

「てか、何？」

「常にマナーモードにしてるせいで、そろそろ着信音が何だったのか忘れそうになってる携帯の画面を操作して、オレは今の震えの原因を確認する。」

「何だ、新着メールか……」

「音声メール一件、の表示にオレは「びっくりさせんな」と八つ当たり気味に呟く。」

「しかし誰だろう？」

「オレのメアドはリムリンとヴィーたん、それから家族にしか教えてないんだけど。」

「ヴィーたん達は今はエステ中だから、携帯は外してると思うんだけどな。」

「差し出し人はえっと……これはロア、かな？」

「……マジで誰だお前。」

「間違いメールかなあ……」

「スパムや詐欺メール、ウイルスメールの可能性もあるんだけど……」

「……件名も読めないし。」

「迂闊に開けないな。」

「とりあえず着信拒否登録をして、オレは携帯の画面を一端落す。」

「携帯の意味がないと言っつな。」

「オレの携帯は古いんで、充電が必要なんですよ。」

「電気を大切にね! ゴールデンウィークの節電にご協力下さい!」

使わない時はこまめにスイッチを切りましょう！

メール自体は後で帰ってから愚弟に確認して貰おう。あいつこの手のこと詳しいし。

さてと、どうするかなー。先に寝ちゃってるってのもアレだしな
ー。

ギャギャギャギャギャ。

「のわっ?! 何故にっ?!」

今度は何ですか? ってまたメール来てるよ。

「ってまたお前かよ!」

差出人のロアの名前に思わず突っ込みを入れて……オレは首を捻
る。

あれ? さっき着信拒否の設定しなかったっけ?

……設定ミスかな。それともアドレスが違う?

先に届いたメールと比べてみたけど、やっぱりアドレスは同じだ
った。差出人の名前も同じ。

何でこうなった。

そこは続けざまに三件目。

もう驚きませんよ。心の準備はしてましたから。

「二度あることは三度あるって言うしなー……」

ロア、の名前にオレは溜息を吐く。

てか本当にアンタ誰ですか? やっぱりスパムか? ……でもそ
う決めつけるのは早いかもしれない。

オレは三つ並んだメールの件名を見比べる。

『IchBestAutige, ObsieSHIKISIN
』^{『d}
『WerSiNDSie?』
『IchBITTie, MEiNenFreUNdZUR
eTTen』

うーん、さっぱりわからん。

文字化けの可能性もあるけど、それにしちゃあ出ている文字がきれい過ぎるんだよな。

もうちょっと変な記号とかの混交なら分かるんだけど、普段オレ達が使ってる文字の変形版みたいな形をしてる奴なんだよ。知ってる文字も混ざってるし。

ぱっと見た感じ訳分からん文字がざくざく並んでるだけなんだけど、よく見ると似たような「単語」が混ざってる。

文章冒頭の『IchB』とか、他にも『SiND』とか、『Siele』とか。

『TTe』っていう並びも特徴的だ。

「文字化けじゃないとすると……意味のある文章、ってことか?」

暗号、かな。

でもガパゴスなオレの携帯にわざわざ暗号で題名作って送ってくるか? このロアって名前が鍵とか?

ううん……それだけじゃなくて、他にも違和感が残ってる。

何か、これ、どっかで見たような感じなんだけど……。

「ああ、そっか」

本の題名だ。

今時珍しい、紙媒体だったからボヤーっと覚えてる。確かこんな感じの文字が混ざってた。

そうなたら話は早い。

間違いメールなのか、ただのいたずらか、それとも悪意あるウイルスメールなのか、その辺を判断する前にちよつとぐらい試しても問題ないだろう。

メール本体には手を着けず、オレは件名だけをコピーして翻訳ソフトにぶち込む。

オートで……んー、文字に特徴があるから、この文字で絞り込みかけるか。

カチカチツと操作して、オレは溜息を吐く。

何と言うか、嫌な予感しかしないなあ。

なんだか分からないけど、この手の嫌な予感って当たるんだよな。実はものすごく、あはーんでうふーんな件名だとか？ うわー

い、それは止めてください。エロスはほどほどに！

もしくは、死ね系とか？

……や、まあ別にそれは慣れてるから良いけどさ。頑張って解読した結果がそれって何か空しくて嫌だな。

まあ、言語として成立してるんじゃないかってのもオレの勘だから、やってみました、ダメでしたーっていうことも充分あり得るんだけどさ。

でもなんかがひっかかっている。

うっかり飲むのに失敗したカプセルみたいに、喉の所に貼りついてるような。

ピロンと音がした。

あ、ヒットした。

「……古典ゲルト語お？ またマイナーな……」

えーと、でもなんか一部内容が可笑しいな。

最初のメールは、「わたしは質問しますあなたは」 ん？ えーと、これは「SHIKIですか」かな？

これは訳せないな。シキ、ってそのまま読めばいいのか？ てか、シキって何？

とりあえずオレはシキとやらじゃございません。違います。

次はえーと「あなたがだれですかわたしは」。

……何と無く分かるな。

で、三つめ。

「わたしは依頼しますあなたに。そしてあなたとわたしの友人を助けることを」

その時、四つ目の新着メールが届いた。

翻訳ソフトが変換した内容がオレの前に表示される。

「友人は来ていた、あなたと私の時計の塔」

間違いメールじゃ、ない。

不審着信とオレ（後書き）

【作者後記】

不審なメールは気軽に開かないようにしましょう。

アドレスが友人の者であっても、件名がおかしいのは見ないようにしましょう。

悪質なスパムなどは通報受付機関もありますので、そこにチクるのも手ですよ。

今晩は、スパムと聞くとランチョンミートを思い出す尋でございませす。

初めての方もそうでない方もようこそいらっしやいました。

ナカバの元に奇妙なメールが届きましたが、内容はどうやらきな臭いものようです。

『ロア』を名乗る相手から届いたメールにナカバはどう対処するか。

最後までどうぞお付き合い下さい。

作者拝

疾走脱走とオレ

階段を二段跳びで駆け降りる。

こんなことすんの久しぶりだ。

携帯を片手に握りしめて。

背中には必要な物を詰め込んだリュックを背負って。

生乾きの髪がほっぺに貼りついて邪魔だけど、それを払うの時間も惜しい。

頼むから途中で壊れんなよ、オレの足。

正直ひぎにちと不安があるけど、今はそんなこと言ってる場合じゃない。

ビョウ、と耳元で風が唸るのを聞きながら、オレはただリズムに従って体を前へ、前へ、運ぶ。

こういう場合、ためらったり、しっかり足元を見たりする方が危ない。

頭の中の余計なことを追い出して、スピードを落とさないように段を蹴る。

蹴って、跳ぶ。

一つ、二つ、三つ、四つ、五つ……っ！

最後の数段は纏めて飛び降りて、手すりを掴んだ手を軸に踊り場をぐるっとターンする。

遠心力に引っ張られたリュックがぐいっとオレをひっぱるけど、そのまままた最初の段を蹴る。

一つ、二つ、三つ、四つ、五つ……っ！

後、五回。

途中曲がり損ねて、勢い余って踊り場の壁に激突しそうにもなったけど、そこは壁を蹴って回避した。

綺麗なホテルの壁にくつきり俺のズツクの痕が残っただろう。

うん、ごめんなさい。後でデュランに賠償させます。

心の中でホテルの従業員さん達に詫び入れながらオレは最後の踊り場を踏んで、止まる。

ひさつびさの激しい運動に、肺がいっぱいになってぜいぜいと音を立てている。

今になって一気に噴き出してきた汗が頭の方からほつぺたの方に流れ落ちて来るのを、ぐいっと袖で拭う。

ドクドクと耳の方まで心臓がせりあがってきたみたいになるさく騒ぐ胸を片手で抑え、もう一方の手は膝について体を支え、オレは前方を睨む。

オレの考えが正しけりゃ、多分ここにまだDDDの連中が張ってるはずなんだ。

さつきフロントに確認したらデュランはもう部屋には居なかったし。

DDDが基本的に雇われで、デュランがその雇用主だってことを併せて考えると、彼らがここに居ないならロアからの情報はデータラメってことになる。

でも

「……やっぱり居るな」

エレベーター前に、アドルフと何か話してたのを見かけたことのある男女のペアがスタンバってる。

それから出入り口のところにも三人。

あと、お客様用階段の前にも一人。

……ま、妥当な判断ですよね。

この分だと地下駐車場からの経路も抑えられてるんだろうな。外の非常階段も以下同文ってところか。

やっぱりここを選んだのは正解らしい。

荷物用エレベーターの脇にある点検用階段の中で、オレはそつと息を吐く。

ギャギャ、と音を立ててメールが届いた。

『現在の状況を入力してください』

「……やっぱり居たよ、見張り。見える場所だけでもエレベーター前に二人、出口に三人、それから階段前に一人。で、こっから抜けられそうなるルート無い？」

『再検索します……該当するデータがありません』

相変わらず独特の言い回しをするロアにオレは「やっぱりか」と咳く。

ま、でしょうね。

何と云うか、本当に面倒くさい。

オレは息を整えながら、走りすぎて痛いわき腹を抑える。

腹もげそう。

……実はもげてね？

『次の行動を指示して下さい』

「ちよつと待って、今考えてるから」

DDDは信用できるのか？

オレは自分に問いかけて、頷く。

……多分、YESだ。

DDDが囁んでるならオレのことだって時計塔なんて言う条件き

つい場所で狙う必要もない。

それに、今ここにこれ見よがしに戦力を残していくのも変だ。

少なくとも夕方までは隠密護衛が基本で、列車降りるちよつと前以外の時はオレはアドルフ以外のDDDの職員を見て居ない。

ま、そう考えるとこうまであからさまにDDDが見張ってるって
いう今の状況は変なんだけどな。

どうする？

これから先、オレとロアだけじゃ心もとない。協力者が必要だ。

DDDはその点ほとんどベストな選択肢だけど、問題は彼らがボランティアじゃなくて仕事でやってるプロだってことだ。慈善事業とか同情とかでオレに協力してくれる手合いじゃない。協力させるにはそれなりの報酬と、今ある仕事と同時並行で……或いはそれを差し置いてでもやらなきゃならないと納得しないことには動いてくれないだろう。そうじゃなきゃ仕事として失格だ。

こう言う時、自分がマネレスだつてことが悔しい。

どうしようもないことだけど、マネレスだつてだけでオレの証言から信ぴょう性が減る。

付き合いが長い人はそうでもないけど、DDDの人たちはほぼ初対面だ。一から信頼関係を気付いているヒマもないし、かと言ってあの人たちを仕事からひっぺがして動かせるだけの根拠なりインパクトのある嘘をを考えるのも難しい。

オレはギリ、と奥歯を噛んで考え続け 携帯に向かって囁く。

「ロア、アポロの現在地を教えて」

『アポロで検索した結果、該当件数が三千を超えました。条件を絞つて下さい』

「あ、間違えた。えーと、DDD所属のアドルフ。性別男、年齢十
四歳以上、身長百八十くらい、髪と目の色がピンク、アイスソード

所持、それからえーっと……」

『検索の結果一件の該当があります。DDD営業部隊4th所属アドルフ。現在地は4-2c-DDDE8746』

「もつと分かり易く言つてよ」

『このホテルの従業員用出口N03の前に待機中』

「めんどつくせえ所に居やがんな……周囲に他のDDDの人は？」

『検索します……該当するものが見当たりません』

「上等。で、そのN03に一番近い……バックヤードってここから近い？」

『検索します……検索結果を表示します』

オレの携帯にロアから送られたマップが表示される。

『案内に従って行動して下さい。女性従業員の休憩室に出ます』

「オケ。ちょうど良い。サンクス」

『桶……検索に該当するものが』

「いや、んなボケここで要らんから」

さっきの全力疾走で今のオレは都合よく汗まみれの息ハアハアのごつたりモードだ。

目つきの悪さだって、今なら具合の悪さでごまかせる。

痩せてて小さいオレは、マナレスだとバレ無けりゃ同情を引くにはちょうどいいんだ。

自分のプライドだとか、劣等感だとか、そんなことにこだわってる暇は無い。

利用できるものは、利用する。

そうじゃないと、やりたいことだって出来ないし、守りたいものだって守れない。

要は、どちらかを捨てなきゃならない時に、どっちを選ぶかって話だ。

手は二本以上無いんだから。

「……あの人で良いかな」

ロアの指示通りにこそこの通路を通って、オレは従業員さんの控室の前に隠れて様子をうかがってた。

今入った女の方はわりとご年配だったけど、オレの場合あれくらいの年代の方がウケが良いんだよな！。

……じいちゃんっ子だったってオーラとか背中に貼ってあるんだろっか？

「っそっそ。

『何か問題がありましたか、と私は貴方に質問します』

「や、うん……無かった」

多分貼ってなかった。

ところで腰の方から回した手と、肩の方から下ろした手を背中で握りあえますか？

オレは出来ません。

つまり背中に貼ってあっても確認できません。いや、脱げばいいだけどさすがにここではね！。

「じゃ、行きますか」

オレはてくてく歩いてって、そーっと休憩室のドアに寄りあって、小さくノックする。

「……はい？」

「あの、すみません」

もそもそと言うと、暫くして怪訝そうな顔の従業員さんがドアを開けて顔を出した。

そしてオレを見下ろしてちょっと驚いた顔をする。

まあ直ぐに営業スマイルになったあたりプロですね、はい。

「どうしたの？ ボク？」

よし、不本意だけどバッチリ子供扱いですねわーい。

「あの、初めまして。アポロです」

「アポロ君って言うのね。こんな所でどうしたの？ お父さんとお母さんは？」

言っつてペコッと頭を下げたオレに従業員さんが訊ねる。うん、そう聞きますよねー。でも、答えません。

「……………」

「もしかして、はぐれちゃったのかな？」

「……………ロビー居る、って言ったのに、居ないんです」

俯いたまま頷くオレ。慣れてる？ キノセイデスヨ。

「そっか……………一緒に探してあげようか？」

「ほんと？」

「本当よ。お父さんとお母さんの名前、言える？」

「言える！ でも、知らない人に言っちゃダメって言われた……………」

「うーん、そっかー……………じゃあ、お部屋の番号は覚えてるかな？」

「ヴィラ・シリウスの1202室です」

オレの言葉に従業員さんが「えっ？」って顔をする。

そりゃそうだ。だって隣のホテルの名前だもん。ちゃんと1202室が存在することもロアにあらかじめ調べて貰ってるから不自然じゃない。

つまり、この場合のオレは「ホテルを間違えて入ってきた迷子」ってことにしてるって訳で。

「アポロ君のお父さんとお母さんは、ヴィラ・シリウスに泊ってるのかな？」

「うん。でも、お外でご飯食べて……帰る時に、居なくなって……」

「ホテルまで一人で戻ってきたの？」

「うん」

「そっか、偉いね」

……いや、子供っぽくやってますけど何歳だと思われてるんだろう。我ながら不安になってきた。

「お姉さん、僕のお部屋、分かるの？」

「大丈夫よ。ホテルまで一緒に行きましょう」

よっし。って、いや普通にロビー通過されると困るのですよ。オレは従業員さんの袖を掴んで、「そっちやだ」と訴える。

「……どうして？」

「……怖い人居るから」

「怖い人？」

「武器持った人がいっぱい居るの」

「え？ ……ああ。そう、ね。……どうしても嫌？」

「や！」

や！ って何だ、とか自分に突っ込み入れつつ、オレはぐいぐい

袖を引つ張つて「断固拒否ですよ」と主張する。

「困ったわね……うーん、じゃあ、こっちから行くところか」

「怖い人、いない？」

「大丈夫よ。ちよつと暗いけど頑張れるかな？」

「うん、頑張る」

是非、奴らが見張つてないルートをお願いします。

疾走脱走とオレ（後書き）

【作者後記】

ロアとのシーンを挟むかどうか迷って……カットしました。

どうも、尋でございます今晚は。

初めての方よろこそ。そうでない方いらっしやいませ。

若干熱で朦朧としておりますが、皆様は風邪など召されぬようお気を付けてお過ごしくださいませ。

ナカバが動き出してますが……何やら考えるところがありそうです。もう少し、ラストまでお付き合い頂ければ幸いです。

では、いずれまたお会いできることを願って。

作者拝

口頭戦術とオレ

親切な従業員の人に案内されて、オレはまんまと従業員用の裏口から外に出た。

外は今はずっと真つ暗だ。

建物の間からミカンの色したおおいしそうな月が見える。

良い匂いがするのは多分駐車場の植え込みで咲いてるサツキだ。

暗い中で、ホテルの窓から漏れる光に、黒い植え込みの中で咲いてる白い花が光って見える。

その冷たい空気をオレは肺いっぱい吸い込む。

うん、すつげー緊張しましたよ。

仕方ないけどちよつと後ろめたかったしね。

でも多分、同じ状況になったらオレはまた同じことをするだろうな。

時間も多分、あまり余裕がないし。

オレは周囲を見回して、気配を伺う。いや、そんなスキルないから何も分からなかったけどね。

でも、そろそろ出て来るはずだ。

深呼吸、深呼吸。

出だしをとちるとかなり不利になるはずだから、落ちついて、冷静に、交渉するんだ。

「ホテルの入り口まで一緒に行く？」

よつぽどオレが不安そうな顔をしてたんだろう。

従業員さんがオレに視線を合わせて聞いて来る。

お心づかいは大変ありがたいけど、どうするか……先にことが動くなら良いけど、今断ったら明らかに不自然だ。かと言って表に居るDDDの人達に見つかったら元も子もない。

うーんとオレが首を捻って迷っていると、

「信じらんねえ……」

いやそうなうめき声と一緒に、駐車場の暗がりから何か生えてきた。

じゃなくて、アドルフが生えてきた。

いやいや、生えてないってば。出て来たんですよ。

うん、こいつじゃないな。こいつ言う場面はこいつ言うべきでしょう。

いよっ、アドルフ！ イロ（モノ）オトコ！

「流石に無いだろうと思ってたんだが、念の為見に来ておいて正解だったな。ったく、この悪ガキが、何やってんだこんな所で」

「あ、居た！」

丁度都合のいいセリフ。

そう思ったオレは即座に手を上げて、アドルフに向かって大きく手を振る。笑顔で。

え？ 逃げませんよ。そんな意味のない。

でも向こうはオレがしらばっくれるなり、不貞腐れるなり、逃走するだろうと踏んでたんだろう。ポカンとイケメン顔（呪われる）を晒す。

はいはい、あっけにとられてもかつこ良いですね良かったですね。でもまあ、この光景が事情を知らない第三者にどう見えるかって言うことですよ、ポイントは。

「おうちの人が迎えに来てくれたなら、安心ね」
「うん」

オレは頷いて、「ありがとうございます」と従業員さんに頭を下げる。

沢山嘘ついて、仕事中的なにご迷惑をおかけしてすみませんでした。ごめんなさい。

でもこのお礼だけは本物です。

深々と手を揃えて頭を下げたオレに従業員さんは「小さいのちやんとお礼が言えてえらいわねえ」とからからと笑って、オレの手に小さなキャンディの包み紙を一つ落してくれた。

あ、珈琲味。

「じゃあ、お姉さんは帰るわね。もうおうちの人とはぐれちゃだめ

よ

「はい」

……まあ、連れて来ていただいたのだし「お姉さん」のところに突っ込まないでおこう。

女性はいつまでも「おんなのこ」の部分があると言いますし。

「お姉さん」を手を振って見送って、オレはそのままくるつと踵を返してアドルフの所に歩いて行く。それに、オレと「お姉さん」のやりとりをじつと聞きながら、オレが逃げないか見張ってたらしいアドルフが器用に片っ方の眉だけを上げる。

そんなに逃げ出さないのが意外なんだろうか。

オレはずかすかと歩み寄って、アドルフまで五歩くらいの距離を開けて立ち止まる。

アドルフがオレを見下ろす。

「お前、本当にあのガキか？」

「そうですねが何か」

作っていた笑顔を消して聞き返したオレに、アドルフは何か疲れ
た顔をして肩を落とす。

「ああ、確かにお前だな。間違いない」

「何かすげえ納得いかない感じの納得をされた気がします」

「俺だつて納得いつてねえよ……何だつてこんな夜遅くに、こんな
変則的な場所から外に出て来るんだ。中央の治安がいくら良いとい
つても夜中の一人歩きは危険だぞ。ほら、ホテルに戻れ。子供は寝
る時間だ」

「戻らねえよ」

面倒くさそうに頬を掻いて言ったアドルフにオレはきっぱり宣言
する。

「はあ？」

「行って、やることがやつたら帰る。でも今は戻らない」

「あのなあ……そりゃ今夜じゃなきゃ駄目なのか？ 明日の朝にな
つてからでも良いだろう」

「デュランからの命令が変更されたのは分かってる」

アドルフの質問を意図的に無視して、オレは一つ目の言葉を打ち
込む。

でも流石にアドルフは表情を変えるようなことはしなかった。た
だ、明後日の方向を面倒くさそうに見ていた目をオレに向けた。

それで十分。

オレはつい時計に向けそうになる視線を抑えて、アドルフのピン
クの眼を見上げる。

「でも契約にはオレ達を護衛しろとは書かれてても、ホテルから出すなどは命令されてない。なら、オレがここに居てもお前がオレの無事を確認している現状はなんら仕事として不備は無いはずだよな」
「……何を根拠にそんなことを言っているんだ？」

呆れた風を装いながら探りをかけて来るアドルフにオレは後じさりたくなる。

DDDの4thだったっけか。

それがただけすごいものは分からないけど、探られてるだけだつてのに痛いくらいにプレッシャーを感じる。こんな状況じゃなきやさつさと尻尾巻いて逃げてるかもしれない。

オレこんな相手に急所蹴りよくかませたな……。

でも退けないもんを今のオレは握ってる。

そうじゃなきゃ、わざわざこんなことしてない訳ですし。退けない。

「根拠はお前がここに居るってことで充分だと思っけどな。DDDの4thのアドルフさん」

「……」
「デュランとの交渉の窓口にずっと立ち続けてきた、他のメンバーに班長って呼ばれているお前が、デュランの傍を離れてここで来るかも分からないオレ達を見張ってた。つまり、今はデュランはフリーになって……護衛対象はオレ達にシフトしてるってことだろ」
「……」

「それに、今まで隠密で護衛してたのがいきなりあからさますぎる状態になってた。ホテルの従業員さんもこれを承知してた。変わった点ならいくつもあつたし、ちょっととした垂れこみもあつたし」

「……」
「ついでに、最大戦力のハズのお前が裏方に居たのはデュランへの一種の抗議、とか……明らかに的はデュランだったもんな。今まで

は。押し切られたのは襲撃が急に止んだから、とかね」

ちよつと伺うように見上げて、オレはそこですぐさま「まあ、何だつてかまわねえけど」と即座に掌を返す。

それにアドルフがちよつと困惑したような顔をした。勿論ありとあらゆる「仕事」のプロなアドルフが表に出す顔なんて「出して良い」か「出すべきだ」と計算された表情なんだろうけど。

ピザ屋の軽い兄ちゃんみたいな奴だけど、中身はそうじゃないんだから。

じんわり握った手の内側が汗ばんできているのを感じながら、オレは表面上は無表情を保ったまま肩を竦める。

「当たってるかどうかは問題じゃねえし、大体聞かれても仕事上のシユヒギムって奴があるだろ？そこを破ってまでお前がオレにあつてる外れてる言うはずねえもんよ」

「……ま、それは正解だ」

「ならどうしてこんな所でこんな内容のことを立ち話してるのか、つてのが次の質問？」

「分かつてるなら答えようって気にならないのか？」

「なるよ」

即座にそう切り返す。

アドルフの眼がここで少し面白そうな色を浮かべて瞬いた。

「一つはお前にオレがどれだけ現状を把握してるか端的に理解してもらおう為」

「成程」

「もう一つは、それを通じてオレに興味をもってもらおう為」

「へえ……生憎俺はお前みたいなお前は対象外なんだがな」

「オレもお前みたいな顔は嫌いです。ついでに言つとそのポーズもナルっぽくて嫌」

「……ヲイ」

「でも、お前が今来てる人達の中で一番傭兵といして優秀らしいってことは分かつてる」

「分かつててお前アイスたかつたのかよ」

「小さいこといつまでも根に持つてんなよ。それとこれとは別です。食べ物への恨み舐めん……って話がずれたから、サクサク進めます」

「ん？」

「お前の見た目とか性格とか生まれとか育ちとか、どうでも良いです。ただオレはお前の能力が欲しい」

強い力が必要だ。

オレに出来ることはあまりに小さくて、オレの力はあんまり知っただけで、腕の届く範囲は狭すぎて。

「どうしてもやり遂げなきゃいけないことがある」

それに届くにはオレ一人じゃ足りなさすぎるから。

「だからお前の力が欲しい。一番強いお前じゃなくちゃ駄目なんだ」

オレは、一歩踏み出して、アドルフを見上げる。

「デュランを助けに行くから、オレに雇われてくれよ」

口頭戦術とオレ（後書き）

【作者後記】

遅くなりましたが、最新話UPです。
書き下ろしたてですので、誤字指摘お待ちしております……一応ぞつとチェックはしてますが。

初めましての方もそうでない方もようこそおいで下さいました。

当方の物書きもどきこと尋でございます。

読んで下さっている貴方に感謝を。

お待ちいただいた貴方に謝意を。

日曜日のはこれから書き直してきます。

最後までお付き合い頂ければ望外の幸い。

それではまた、ご縁があれば会いましょう。

作者拝

愚者盲進とオレ（前書き）

愚直なまでに突き進め

愚者盲進とオレ

オレが言い終えた後、アドルフは予想に反して失笑もせず、呆れた様子も見せず、ただ何か妙なものをうつかり口に入れてしまったとか、空飛ぶ紅色の豚を見てしまったみたいなの、何とも言えない表情でオレをじーっと暫く見ているばかりで。

オレが良い加減諦めようかなーと思ったその時になってようやく、なんだかものすごく嫌そうな顔をして溜息を吐いた。

「……あー。まあ、なんつーか……」

そう呻いて、アドルフはそれから深い深い溜息をついてしゃがみこんだ。

「あー、くそつ。しょうがねえなあ」

「諦めついた？」

「諦めた訳じゃねえよ……いや、まあそうかもしれないが。あーくそ、信じらんねえ」

何なんだと口の中で往生際悪く繰り返して、急にガバツと立ちあがるアドルフ。

うわっ、びっくりした。

「しょうがねえ。腹括って聞くぞ」

「おう、何でも聞け」

「何でまたそう……あー、とりあえず、だ。お前の話には乗れない。理由は分かるな」

「一、オレの依頼内容に具体性が無い。二、オレには金が無い。三、お前は今仕事中。四、デュランが危険なら、そんな場所にオレを連

れてくわけにはいかない」

「……分かってるじゃねえか」

「その辺はクリアできるけどね」

「一つだけを除けば。」

オレは拳を握りしめて更に一步前が出る。

アドルフがほんの少し、退いた。

「一、具体的にはオレをアンタの手である場所まで運んでくれればそれで良い」

「ある場所？」

アドルフが警戒を込めて聞いてくるけれどここではまだ教えない。さらにもう一步前へ。

「二、金は後でデュランが払う。デュランを助けに行くんだから当然だろう。逆に言えば、デュランが死んでたらこの契約は成り立たない」

「つまり即座に動けってことか」

「そういうこと。三、オレを護衛するのが仕事ならむしろオレの依頼を受けたほうが良い。何故なら、アンタが受けても受けなくてもオレはそこに行くから」

「はあ？」

「当たり前だろ。オレは行くだけならアンタの力を必要としない。ただ、デュランを助けるにはオレ一人じゃ足りないだけ。具体的には足が無い」

「あー……」

マナレスは運転免許をとることができない。

愛用のチャリもここには無い。

走るのだから人並み以下のオレが悠長に歩いている時間は無い。妨害を受ける可能性だって低くは無い。

だからこそそのアドルフだ。

権限があつて、足になるものも恐らく持つていて、妨害を跳ね返すだけの力があり、なおかつDDDという信頼がある。

そして、現状に恐らく疑問を持つている。その勘の良さ。思考の回転の速さ。それが欲しい。

「オレは行くよ」

更にもう一步前に踏み込んで、アドルフの眼をじつと見ながらオレは言う。

相手の感情の揺れ一つ見逃さないように、オレの意志の強さを思い知らせるように、視線をそらさずに言う。

「アンタらの裏を掻いて、ありとあらゆる手段を選ばずに、節操無しに、何でもできることは手当たり次第に利用して、見境なく騙して、とことん掻きまわしてでも行く。言っておくけどオレ、こういうことさせたら相当タチ悪いよ？」

「……だろうな」

苦い表情のアドルフ。

「それなら、オレと契約して首に縄つけた状態にしておいた方がアンタらにとっては楽だし、ついでにオレからの依頼も同時並行でやって料金二倍。手間は十分の一。悪い話じゃないと思うけどな」

「……とんでもない女だな、お前」

「必要だからな」

肩を竦めたオレに、アドルフが何故か更に微妙な顔になって溜息

を吐く。

あんまり溜息ばかり吐いてるとハゲるぞ？

「……最後の質問の答えは残ってるんだろっな」

「うん」

「仮に」

間に溜息をまた挟んで、アドルフは大分近くなったオレを見下ろす。

「お前の仮定が当たっていたとして、だ。陛下を助けに行くって辺りがどうにも腑に落ちねえんだよ」

「デュランがやばいことやってるのはそっちも想像ついてるんじゃないの？ オレ達の護衛、なんて都合の良い理由を着けてDDDを身の周りから外して、一人で何かしようとしている」

一人で。

「依頼が無いから監視は着けて無い……や、違うな。一応念の為に名目で付けたけど、撒かれたってところか。今までは一度見失っても見つけてた。でも今回は見つからなかった。そんなところか」

「……随分確信ありげだな」

「デュランが面白半分撒いてたなんて、多分あれ嘘だからな。大方、独りで行動する時の為の布石だろ」

オレの言葉にアドルフが小さく舌打ちした所を見ると多分当たらずとも遠からずの現状ってところか……。

本当に、あの、馬鹿。

勝手に一人で、独りぼっちで行きやがって。自分だけで済ませればそれで良いと思ってるのか。

「あいつは今、DDDにオレ達の……オレの行動を封じさせて、DDの行動はオレ達で封じさせて、フリーになった隙に動いて今回の件に片をつけようとしている」

一人で。

「だけど、それをさせる気はオレには無い。デュランがどう考えてようが、それはオレの考えじゃない。アンタ達は仕事だからデュランの指示には従わなきゃならないかもしれないけれど、オレにはそんなの関係無い」

「危険でもか？」

「危険でも」

「死ぬかもしれないぞ」

「それでも」

「お前が行くことでかえって陛下が危険になるとしてもか？」

「なっても」

「足手まといだと分かってるんだな」

「分かってる」

「行っても何もできないかもしれないぞ」

「それでも行く」

「……何でだ」

アドルフの眼が揺らぐ。

オレは一步前が出る。

もうこれ以上は近づけない。ギリギリの距離。

「そんなの、知り合いが独りで危険背負いこんでるって分かってる時に、そこに行かない理由にはならねえよ」

一人で。

あいつは一人で行った。

独りつきりで。

独りぼっちで。

そう分かってしまったから、オレは行かなくちゃならない。

「行くなんて正気じゃねえ。ただの馬鹿だ、って……そうかもしない。でも知ってる奴が独りつきりで、そいつ見殺しにして、自分の中のモン曲げて、それで得られる安全だとか賢さならオレは要らない」

そんならオレは馬鹿で良い。

役立たずの、迷惑な奴で良い。

たとえそれで、デュランがこんな馬鹿なこととしてまで守ろうとしたこと全部を台無しにするとしても。

そんなの、クソくらえ。

「独りつきりにするより、ずっとマシだ」

「お前……」

「オレは行くよ」

絶句したアドルフに、オレは繰り返す。

「オレはデュランを助けるんじゃない。助けに行くんだ」

お前を独りになんか、させてやんねえよ。絶対にだ。

愚者盲進とオレ（後書き）

【作者後記】

格好良く生きたいです。無様に生きたくは無いです。

生きているなら誰かに認められたいし、その為に誰かの邪魔にはなりたくない。

痛い思いはしたくないし、役立たずにもなりたくない。

それでも、それを曲げてでも貫きたいと思う意地がナカバのようにあるかと言われれば……どうなのでしょう。

今晩は、尋でございます。

続きはまた明日と言うか……今夜帰ってから書きます。

読んで下さった貴方への感謝をいつも文末に。

作者拝

発進準備とオレ（前書き）

GRIFFON 2100。

メタルブラックの巨大な車体を前に、オレはぐっとつばを飲み込む。

「行くぞ」

アドルフが手を差し出す。

オレはそれにすがらずに、座席に手をかけてよじ登った。

発進準備とオレ

依頼を受けることを了承して、それからこの馬鹿みたいにデカイ黒いバイクを持ちだしてきた時にアドルフはオレに三つの選択肢を提案した。

一つ目はこれを使わないで目的地まで行く。

ただしこのバイク以上に早く目的地に着く手段は無い。そして、他の手段を用意すれば確実に十分以上のロスが生じる。

二つ目、これを使うけれど速度は調節する。

目的地に着く時間は遅れるが、後部座席にオレが単独で乗っても構わない。むしろこの場合は、オレが一人で座席に座っていても振り落とされ無い速度で走るかどうか、という質問だった。風はシルド展開で防いでも加速度という目に見えない力までは打ち消せない。その見えない力が問題だった。

通常運転でギアを入れれば、その瞬間オレはシートから飛び出して路面にたたきつけられるだろうとアドルフは淡々と説明してくれた。きつとその通りだとオレも思う。

落下済みナカバの潰れたトマト風味の完成だ。ぞつとしねえよ。幾らアドルフが凄いつつても、後部座席に座ってるオレが落ちないように、或いは落ちたら路面と熱烈なハグを交わす前にキャッチアンド・リリースしつつ、絶対にその辺のコンシキより重たいバイクを運転するとか、それは傭兵じゃ無くて曲芸のカテゴリーだろ。つまり、平たく言えば無理。

ならばオレが後ろに乗るなら必然的に振り落とさないように運転するしかない訳で、バイクに感情があるなら「こんなんじゃ実力が出せないよ、ノ」とか言い出すんだらう。モラド。

でも二つ目の話を聞いた時にオレはもう結論を出していた。

「全力で」

「……その場合後ろに乗せてやることはできないぞ」

「全力で。急いでますから」

「なら前のシートに乗れ。俺が後ろから抱えて落ちないようにする」

「……ま、それしかないだろ。」

オレが黙って頷くと、アドルフがちょっと困った顔をした。

「良いのか？ 全力じゃ無くてもそれなりに早いぞ」

「何でそこで気遣ってますオーラが出てんのさ」

「いや、そりゃ……」

言い淀んで、アドルフは迷うように視線をふらふらさせる。

意外と珍しい物見た気がするけどちっとも嬉しく無い。当たり前か。

「はつきり言うが、お前、男が苦手だろ」

「……」

「どうも何か可笑しいとは思ってたんだが、そうだよな。陛下には面白いぐらい懐きまくってたから自信無かったんだが、今日のことを見ていて分かった。本当は俺とこの距離に居るのも駄目なんだろ」

アドルフの言葉に、オレは黙って眼を閉じて、三数える。
よし。

「全力で」

「いや、あのな……依頼主のケアっていうのは結構重要なんだ。だから」

「今はオレのケアとか言ってる場合じゃないから。てゆうか、お前はさ、オレからの依頼を同情とか優しさで受けて、同情とか哀れみで実行すんの？」

「……」

「それなら、それは止めてくれ。オレは真剣だし、こつ言つ時に優先するべきものは分かっているつもりだから」

それは早さだ。

一秒が惜しい。

「全力で」
ベスト

「……了解、マスター」

オレの言葉にアドルフは何を悟ったのかそれ以上言わずに、さつさとバイクにまたがる。

そしてオレの方に手を差し伸べてきた。

「行くぞ」

セーフガードを着けて、上からぐるっとマフラーを巻く。

端っこは当然走行の邪魔にならないように輪っかの中にひっかけて抑えておく。

それからリュックは腹の側に抱える。

バイクの音だけ聞いて、余計なことは考えない。

そう思ってるのに、背後に硬い別の体の感覚がした途端にヒュッと喉が鳴った。

息、上げちゃだめだ。過呼吸になってどうする。落ちついて、吐いて、吐かなくちゃ。吐いて。

「……抑えるぞ」

アドルフがちょっと間をおいてから、オレの腹に腕をまわしてぐいっと引きこむ。

強く押さえつけられることで逆にパニックが少し収まった。事務的だな、って分かるだけの頭が残ってたのが良かったんだろう。

おーけい。オレは冷静になれるはずだ。

「あ、あの……あの、電池」

「あ？」

「電池、ボックスの電池。電池が」

「……ボックス型電池か？ 欲しいのか？」

ああもう、ちゃんと言語しゃべれ。とにかく頷くオレに、アドルフは「ちよっと待ってる」とボタンを操作した。プシューと空気が抜けるような音がして、バイクの左側についた物体が開く。

あ、武器入れだったんだ。

「使用済み、良いから」

「あ？ あー……逆にそういうのが無い気がするんだが。何で使用済み……ほら、これで良いか」

差し出して、アドルフは何かを理解したのかオレの手を取って、開かせて、それからしっかりと電池を掌の上に置いて、オレが握ったのを確かめてから手を離した。

オレは視線を手元に落として、そこに見慣れた四角い電池があるのを確認する。白銀色の、小指ほどの長さの直方体にラベルが巻いてある奴だ。

オレはラベルの端に爪をひっかけてみて、はがせそうだなと思う。

「ありがとう」

「おう。……じゃ、しっかり構えておけ。発車するぞ」
「分かった」

地鳴りみたいだったエンジンの音が急に高さが変わる。

「行くぞ」

「行くぞ」

行くぞ。

予想していたよりも滑らかに、バイクは走り出した。

発進準備とオレ（後書き）

【作者後記】

バイクって良いですね。

スズキのバイクは名前もカッコイイ。カタナとか、ハヤブサとか、イナズマとか。

ホンダのCBRとかVFRも好きです。ワルキューレールンも良い。

…… またこんぽ、も良いよね？

ご来訪の皆様、ありがとうございます。

既に物語は終盤の、佳境へと入りました。

一気にラストまで行こうと足掻きつつやって行こうと思います。

お付き合い頂いた貴方へ、しめの言葉に感謝をこめて。

作者拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4396/>

魔王陛下の観光旅行

2011年10月29日13時46分発行